

傭兵幻想体験記

pokotan

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

各地の戦場で傭兵として渡り歩いてきた片倉仁は不覚にも戦場の真つ只中で孤立する。

手榴弾を投げ込まれ彼は死んだと確信したのだが、何故か幻想郷へと幻想入りしてしまふ。

その幻想郷で数々の異変や争いに巻き込まれながらも次第に自分の中にある才能を開花させていく。

そして幻想郷を揺るがす異変を乗り越えた彼は驚愕の事実を目の当たりにする。果たして彼は幻想郷で何を見たのか。

初めての作品なんでそのところはご了承

ココココと書き方とか変わってます。お気をつけください。

小説の内容で、分からない事や不思議だと思ったことなどは、どうぞコメントして下さい。自分でも希に、設定を忘れちゃう時があるので……。

目次

プロローグ

傭兵の幻想入り

1

幻想入り編

幻想入り 第1話

5

幻想入り 第2話

15

幻想入り 第3話

25

幻想入り 第4話

37

幻想入り 第5話

51

幻想入り 第6話

64

紅魔館編

72 そうだ紅魔館に行こう 第1話

81 そうだ紅魔館に行こう 第2話

81

94 そうだ紅魔館に行こう 第3話

94

105 そうだ紅魔館に行こう 第4話

105

119 そうだ紅魔館に行こう 第5話

119

129 そうだ紅魔館に行こう 第6話

129

142 そうだ紅魔館に行こう 第7話

142

72 そうだ紅魔館に行こう 第8話

閑話 其の一

アリス宅にて | 168

貧乏巫女と魔法使い | 180

人里のフラワーマスター | 191

剣術の達人に弟子入り | 212

白玉楼編

終わらぬ冬と来ない春 第1話

221

終わらぬ冬と来ない春 第2話

233

終わらぬ冬と来ない春 第3話

244

終わらぬ冬と来ない春 第4話

258

終わらぬ冬と来ない春 第5話

273

終わらぬ冬と来ない春 第6話

288

終わらぬ冬と来ない春 第7話

303

閑話 其の二

お値段以上の発明品 | 319

白玉楼の半人半霊 | 334

お花畑へ連れてって | 361

花と命は散りゆくもの | 376

道場破りのフラワーマスター in 紅魔

館 | 388

永遠亭編

偽りの月と永遠の夜 第1話 | 411

偽りの月と永遠の夜 第2話 | 422

偽りの月と永遠の夜 第3話 | 434

偽りの月と永遠の夜 第4話 | 450

偽りの月と永遠の夜 第5話 | 462

偽りの月と永遠の夜 第6話 | 472

偽りの月と永遠の夜 第7話 | 485

偽りの月と永遠の夜 第8話 | 496

偽りの月と永遠の夜 第9話 | 509

偽りの月と永遠の夜 第10話

518

偽りの月と永遠の夜 第11話

533

閑話 其の三

永遠を生きる者 | 547

禍福はあざなえる縄のごとし | 557

色の世の中、苦の世界 | 571

沐猴にして冠す | 586

最終之章

悪魔邂逅 | 595

プロローグ

傭兵の幻想入り

この物語はとある男が幻想入りを果たし、その行く末を辿る物語である

クソっ！まずい、非常にまずいぞ……。

冷や汗が額からポタポタと流れ落ちる。だが、今はそんなことに構っている暇はない。
い。

なぜなら油断したら最後、額から汗ではなく生暖かい血が吹き出る状況だからだ。

「おいそっちは！」

「こっちはクリアー！」

「探せ！」

三人の兵士が状況をお互いに声で伝え合う。

兵士の手には世界で最もポピュラーなアサルトライフル、カラシニコフ小銃が握られており、その銃の銃口はある一人の男を探している。

その男は、僕のことだ。

僕の名前は片倉 仁（かたくら じん）

どこにでもいる、平凡な傭兵さ。

そんな一般ピーポーな傭兵である僕は、なぜ見知らぬ敵兵に追われているような状況に陥ってしまったのかを、改めて再確認してみた。

まず、味方の前線部隊は壊滅、部隊は全部隊撤退、しかし、無線が壊れていたらしく、僕だけ部隊撤退の命令が届いておらず、気がついたら孤立していた。

……なんで俺だけこんな目に……。許すまじ、CP（本部）。

まあ、幸運なことはまだ敵はこちらに気づいてない。なんとかなるから大丈夫だよな。

その考えが甘かった。例えるなら、おばあちゃんの作るカルピス並に甘かった。

（そろそろ逃げる手立てを考えようかな……。んっ？）

危機的状况から抜け出そうと思った矢先、後ろから「カラン」と硬いものを転がした音が聞こえた。

とつさに後ろを振り向く。——そりゃあそうだろ、後ろから物音したら振り向い

ちやうさ、人間だもの。

後方のドア近くを確認したら、そこにあつたのはみんな大好きパイナップル、もといテレビでよく見る手榴弾だった。

とうとう見つかつてしまったようだ。ちよつともたもたしすぎたかなあ……。——
——つてピンチじゃん！どうしよう！

そんなことよりパイナップルって美味しいよね！僕、大好物なんだよ。——いやいや、関係ないから。

なんて事を考えていたら、そのパイナップルは爆発と共に大量の破片を全方位に吐き出した。

ああ……。これで僕の人生は終わりか。短くて儂い人生だった。

じつと目をつぶって爆発の衝撃と吐き出された破片と共にくる死の瞬間を覚悟した。

——それからどれくらいたっただろうか。

実際は5秒くらいだろうが、感覚的には一分くらいたった気がした。

一体何事かと思いい目を開いた。——えっ!?

間抜けな声が辺りに響いた。しかし、響いたのはどこかの部屋の中ではなく、見知らぬ森の中であつた。

目の前に知らない森が広がっていた。……ここどこだ？

あれ？もしかして僕死んじやった？

死んだら普通はお花畑に行くもんだと思ってたのに、まさか森が広がっていたとは、驚きだ。

でも手元の銃とバックパックはあるしなあ……。

手に持っていたAKを点検する。

セーフティ、マガジン、薬室内などその他もろもろ、色々確認したけどどれも異常は無い。

とりあえず、進んでみるか。

ここがどこかわからないけど、もしかしたらまだ周りに敵がいるかもしれない。もうパイナップルはゴメンだね。

この出来事が、これから僕が体験する摩訶不思議な物語の始まりでもあったとは、今は知る由も無かった。

幻想入り編

幻想入り 第1話

「はあ……はあ……疲れた」

やあ僕は片倉。絶賛迷子中の傭兵さ！

そんなことより、この森広くないですか？2時間以上は歩いてるのに木しかないぞ。

「もうダメだ………休憩しよう……」

足が動かない。まるで棒のようだ。——とりあえず水を飲もう……。

とは言っても水は貴重だからあまり飲みたくない。

しかし飲まないと、このまま干からびる自信があるから飲むことにしよう、そうしよう。

この先のことを考えて、クビグビとは飲まず控えめに水を飲み、喉の渴きを潤した僕はこれからの事を模索しました。

「これからどうしようかな。水もあんまり無いし、とりあえず水が補給出来れば……」

そう考えていたらありました。前方に大きな湖がありました。

足の疲れなんて忘れ、急いで湖の元へと駆け寄る。

よく見ると、水がとても澄んでいる。とてもラツキーなのだが、そのラツキーはここまでだったらしい。

なんとその湖は凍っていた。これじゃ、水が水筒に汲めない。

いつそ叩き割ってやろうかと悩んでいたら、ふと前方に人の気配を感じた。

とつさに物陰に隠れそのまま簡単に装備のチェックをし、じつと警戒した。

もしかしたら、あの時の敵兵!?!いや、でもこんな訳わからないところに居るのか？

だが、そんな不安はすぐに打ち消された。前方から来たのは、人ではなかった。

何故かと言うと、氷の羽を生やしたのが年端もいかない可愛らしい女の子、俗に言う妖精だったからだ。

「っーなんだ……あれは……」

驚いた。普通に考えて、こんな森の中に少女がいるはずかない。ましてやその子は空を飛んでいる。

生まれてこのかた妖精なんかを信じたことは無かった。そんなものは存在しないと考えていたからだ。

だけど、目の前にいる少女は、どう見ても妖精としか言いようがない。

いったいこの森はなんなんだ？もしかしたら本当に僕は死んでしまって、この世ではない何処かへと来てしまったのか？

……しかし、少し肌寒いな。さつきまでは暑かったはずなんだが。

とりあえずあの少女に近づいてみるか。比較的、大丈夫だろう。と言うか、そう信じるしか無い。

「あのくちよつといいかな？」

「あー！外から来たニンゲンだ！」

「外？ここは何処か教えてくれないかい？」

「ここが何処かわからないの？それなら、教えてあげるわ！ここは幻想郷よ！あたい達みたいな妖怪や妖精とかが住んでるところよ！」

「幻想郷？妖怪？と言うことは、君は妖怪なのか？」

「違うわよ、あたいは妖精。氷の妖精よ！」

「名前は？」

「あたいは、チルノ！あんたは？」

「僕は、片倉。宜しくね」

どうやらこのチルノと言う少女いわく、この場所は幻想郷と言うらしい。

そういうえば、日本にいた時ゲームの舞台にそんな世界があるとか無いとか友人が言っていた気がする。詳しくは知らんが。

とにかく、このチルノと言う少女に近くに何か無いかを聞いてみるか。

「チルノちゃん。この近くに何か建物とかない？」

「カタクリ！あたいと弾幕ごっこで勝負よ！」

えええええ！?!この子、人の話聞いてない!?

というか弾幕ごっこって何？聞いたことないから。よし、聞いてみるか。

「弾幕ごっこってどういう遊び？」

「弾幕ごっこってというのはね、お互いに弾幕を撃つたり、スペルカードを使って戦うものよー。」

「知らないなあ」

「そんなことも知らないなんて、ダメな人間ね、カタクリは」

いやいやいやいや、名前間違ってる。カタクリじゃないから、片倉だから。いつ誰がそんなかたくり粉みたいな名前を名乗ったんだよ。

と、とりあえず気を取直して、スペルカードについて聞いてみよう。

「片倉だよ……それより、スペルカードとは？」

「それは、戦ってみたら分かるわ！いくわよカタクリ！」

そう意気揚々と叫ぶと、チルノは空高く飛び上がり、唐突に尖った氷らしきものを僕に飛ばしてきた。

てか名前違う……。

「っー」

とつきの判断で木の陰に隠れたはいいけど、どうしたものか。幸いあの氷は、遅いかなんとか——バキバキバキッ！

そう思った途端、隣の木が氷の弾幕によって粉々になった。

「……………ハハ……………ハ……………笑えねえ」

このままだと次はこの木が粉々になって、おまけに僕も粉々になってしまう。

そうはなりたくない僕は、すこし気が引けるが銃をチルノに向けた。

バキバキッ、バキッ

骨が折れるような痛々しい音を響かせながら、周りの木が氷の弾幕によって折れていき、粉々にされていく。そのさなか、セミオートでAKを射撃した。

セミオートにしたのには理由がある。弾の消費を抑えるためだ。

僕のAKは7・62mm弾を使うタイプのAK。つまり反動が強い。フルオートではなかなか当たらず、無駄撃ちする可能性がおおいにある。

バンツバンツバンツ！と、乾いた火薬の音と共に弾丸が銃口から発射された。

しかし、いち早く状況を察したチルノは射線から身を引いて躲した。

だが、弾丸の速さにとっても驚いていたご様子。

「嘘！あの弾幕早い！」

それもそのはず。弾丸は基本的に音速を超えてるからね。——しかし外したか。とりあえず、移動しないとこの木が持たないな。

刹那、チルノが一枚のカードを天高く掲げ、大きな声で叫んだ。

〈氷符 アイシクルフォール〉

その叫びと共に、チルノから何処からともなく大量の氷の弾幕が出現した思えば、その次の瞬間、こちらに向かって飛んできた。

なんだか嫌な予感が全身をかけ巡った僕は、すばやく後ろに下がり倒木の影に隠れた。

その刹那に、さつきまで隠れていた木が氷の弾幕によつて一瞬にしてミンチのようになつた。

少しでも判断が遅れていたら僕は無事では済まなかつただろう。

もしや、これがあの少女の言っていたスペルカードと言うものなのだろうか。

カードらしきものを手に持ってたな……。それよりもこの状況を何とかしなくてはならない。

こうなつたら、あれを使うか。

実は僕には隠された力がある！のではなく、人間による科学の力を使うことにした—

——よし！まだ残ってたぞ！

バックパックからあるものを取り出した。

それは、特殊部隊が突入などを行う際に使うグレネード、そのグレネードの名前は、M84フラッシュバングレネード。

このグレネードは普通のグレネードとは違い、殺傷能力は無い。がその代わり眩しい光と爆音を放ち、相手の視力と聴力を奪うことが出来る万能な非殺傷グレネードだ。

「フラッシュバン！」

いつもの癖で、大声で叫びながらピンを外し、少女に向かってフラッシュグレネードを投げた。

最初、少女は何が飛んできたのか分からず注意深く投げられた謎の形をした不思議な物体を見つめていた。

だがすぐ後に、それは膨大な光と爆音を放出しながら爆発した。

「きゃっー！」

今だ、倒木から身を乗り出して少女の肩や足に弾丸を撃ち込もうとする。この部位に命中すれば、殺さずに無力化できるはずだ。——でも幼い少女には意味ないか。……仕方ない、生き延びるためだ。後免!!

だがどこにも少女の姿は無かった。——あれ？

「どこかに消えたんだ？」

どこかに隠れたか？でもフラツシユグレネードは効いたはずなんだけどなあ。

辺りを探すと少女を見つけた。どうやら先ほどのフラツシユグレネードで気絶したようだ。くるくると頭にお星様が回っているのが目に見えるようだ。

意外と妖精にも効くんだなあ、と感心していたら寒さが消えていた。ついでに湖の氷が溶けた。——なるほど、あの少女が凍らせていたわけか。

そういう事かと納得しながら、僕は少女を倒木の陰に寝かせてあげるために、抱き抱えて運んだ。

少女を寝かせた後、水筒に湖の水を汲んだ。これだけ綺麗な水なら、ろ過せずとも飲むだろう。

さてと、水も汲んだし、また先に進みますか。きついけど……。

でもどこに進めばいいんだろう。というかさっきの少女に、建物とか無いか聞きそびれた。

心の中で後悔しながらまた僕はひたすら歩きだした。

30分くらい歩いた頃だろうか、またしても何かの気配がした。この気配は、人ではない。——また妖精か？もう勘弁してくれ。

そう思っていると、二つの影が勢いよく飛び出してきた。

「ニンゲン、タベテヤル！」

「グルルルル」

どうやら、今度は妖精ではなく妖怪が出てきたらしい。しかもご丁寧に僕を食べると言っている。日本語喋るのか。

英語で喋る妖怪……はちよつとシニール過ぎるか。

一人は人型の妖怪だが、人とは違い頭がワニのような頭になっている。……キモイ。もう一人のほうの妖怪は、狼の妖怪のようだ。……犬がよかった。

日本語は喋るようだが、残念ながら会話は通じなさそうだと判断した僕は、ワニ頭の妖怪に向かってAKを撃った。

「グワァー！」

「すまん、可愛い女の子なら躊躇するけど、お前らみたいなのは躊躇出来ないんだ」

妖怪にも弾丸が効いたようで、撃たれた肩を抑えながら、森の奥にワニ頭の妖怪は逃げていった。もう二度と出てくるなよ、次会ったら眉間に撃ち込むからな。

さて、このままサクツと狼の妖怪も倒すか。そう思った瞬間、狼の妖怪は目にも止まらぬ素早い動きで僕の足に噛み付いた。

グサリと歯が僕の太ももに深々と突き刺さっている。

「ぐあつーん、こいつ！」

激痛に絶えながらも、妖怪の頭にAKを至近距離で叩き込む。

弾丸を叩き込んだと同時に狼の妖怪は息が途絶えた。

傷口を確認すると、どうやら狼の妖怪の歯はかなり深く刺さったらしく、血が止まらない。このままでは命に関わるだろう。

「くそっ！誰か……いないのか。」

まずい、意識が遠のいてきた。よりによつて、こんな訳のわからない森で死ぬことになるなんて。

「誰か………たす……け……」

もう駄目だ。諦めかけたその時、誰かが駆け寄って来た。

「ちよつと、そのあなた！しっかりしなさい！」

女の人の声だ。しかし、もはやここまで。

うつすらと聞こえる、女性の声を聞きながら、僕は意識を手放した。

幻想入り 第2話

今日は本当についてない日だった。

アリスは深い深いふかい溜め息をついた。

お気に入りのお店の系がほつれて腕がとれたり、魔理沙が私の本を盗ったり、人里に行ったら行きつけのお店が閉まっていたり、とにかくついていなかった。

挙句の果てには、人里から帰宅途中に見知らぬ外来人が血だらけの状態で倒れていた。

別にそのまま素通りだって出来たはず、だけど何故か、つい……助けてしまった。

とりあえずその外来人を家まで運んだ私は、回復魔法をかけて傷を治した。

しかしなぜ、助けてしまったのだろうか。今になってアリスは深く後悔していた。本当に全くもってついてない。

「はあ……早く目を覚ましてどっかに行ってくれないかしらね。ん？」

アリスは外来人の持っていた緑色のバックバックに目をつけた。

「これは何かしら？」

とりあえず中身を確認してみることにする。命を助けたのだからそれくらいは許さ

れるはずだ。

中を見てみると、その中にはアリスが見たことない物がたくさん入っていた。どうやら外の世界のものらしい。

それら謎の品物を一つ一つ取り出すと、注意深く観察し始めた。——もしかしたら、魔法の研究に役立つかもしれない。

そう思ったアリスは、丁寧に外の世界の品物を分析し始めた。

その中の一つに、爆弾と言う危険物があるとは知らずに。

「うーん……」

目を開けたらそこは、森の木々ではなく見知らぬ天井でした。どうやらここはどこかの家の中らしい。

確か二匹の妖怪に襲われて、狼の妖怪に噛み付かれたんだっけ。そういうえばあの時、女の人が助けにきたな。

起き上がって噛まれた太ももを見てみると、痛みはおろか傷口さえも見当たらず無かった。

いったいなぜだろう？と考えていたら、部屋の奥から誰かがやって来た。

「あら、目覚めたの。意外に早いわね」

奥から来たのは女性。おそらくこの人が僕を助けてくれた人だろう。あの時にうっすらと聞いた声と今の声もどことなく一致する。とりあえず礼を言っておかなければ。

「助けてくれたんですね。ありがとうございます……え？」

「ん？どうしたのよ？」

僕は彼女の手を持っていてる物に目を向けた。もしかしてとは思いますが、あれはどう見ても僕のバックパックに入っていた物だ。

「ああ、ごめんなさいね。あなたの物を勝手に分析していたわ。ここでは珍しいものだから。」

そう言うのと彼女はその手に持っている物を、バックパックに戻そうとした。

刹那、バツ！と素早く起き上がり、彼女が手に持っていた物をすかさず奪い取る。

「きゃっ！何をやるのよまったく！」

「バカ野郎！この家を吹き飛ばしたいのかあんた！」

あちらからすると急に突き飛ばされたようなものだからたまったものでは無いだろう。しかし彼女の手を持っていた物は、C4爆弾だった。

C4爆弾はプラスチック爆弾とも言われている。爆発威力は計り知れない。

本来、そのままであればなんの変哲もない粘土なのだが、信管を付けるなど正しい処

理を施せば、凶悪な爆弾に変貌する。あの女性の持っていたC4爆弾は、まさにその信管とやらを付けた状態だった。

「これは、爆弾だぞ！ああ……死ぬかと思った」

「そうなの……知らなかったわ、そんなのが爆弾だったなんて。ていうかあなた、さつきまで死にかけてたのよ？そんなに動いて平気？」

「あつ……そうだった」

そういえばそうだったな。

とりあえずお礼が言いかけたから、ちゃんと言っておこうかな。

「森で倒れていた僕を助けたのはあなたですよね？」

「そうよ。運が良かったわあなた。もう少し遅れてたら、魔法でも助からなかったわ」

「そうなんですか……って魔法？」

「ええ。私はあなたの怪我を魔法で治したわ。どう？違和感はないかしら」

なるほど……。妖精、妖怪ときて、次は魔法とききましたか。ということは彼女は魔女ということかな？

「違和感は特に。というか先程、あなたは魔法と言いましたが、もしかして魔女ですか？」

「ええ、まあそんなところよ。とりあえず自己紹介しましょうか。私はアリス・マーガ

トロイド、魔法使いよ」

「僕は、片倉と言います。あつちの世界では傭兵してました」

「ヨーヘイ？まあいいわ。というかやっぱりあなた、外人だったのね」

「ええ。ここはいつたいどういう所ですか？妖怪とか妖精がいましたけど」

「ここは、幻想郷。本来ならばあなたみたいな人間はここには来れないはずなんですけど、いつたい何があつたのかしら？詳しく教えてもらえない？」

「いいですよ。実はですね、この世界に来る前、僕はカクカクシカジカ」

「そうだったの……。というか、あなた弾幕を使えるの？氷の妖精を倒したんでしょ？」

「いえいえ、弾幕なんて撃てませんよ。あの時は道具を使って気絶させただけです」

「そうなの。しかしあなた、外人人の割には結構強いわね」

「まあ、あつちの世界ではこんなこと日常茶飯事でしたから」

僕はあれから1時間程度彼女と話していた。どうやら外の世界から来た客人はなか

なか珍しいようだ。話が弾む。

だが、こう長く居るのもお邪魔になりそうなので、そろそろ出ていこうかな。

そう思い、バックパックの中身を整理し外に出ようとす。

「すいません。そろそろお暇しますね。助けてくれてありがとうございます」

「待ちなさい。もうそろそろ夜になるわ。このまま外に出てもまた妖怪に襲われて、今度こそ死ぬわよ」

窓から外を見るともうすぐ夜になりそうだった。赤い夕日の光が差し込んでいる。確かにこれでは危険だ。

さっきの二の舞になること間違いなしだろう。どうしよう……。

悩んでいる僕に、アリスが声をかけた。

「せっかく命を助けられたのに死にたくないでしょう？今日は泊まっていきなさい」

どうやら今晚は泊めてくれるようだ。よくわからない人物の家に泊まるのはちよつとまずいかと思つたが、命を助けてくれた恩人だ。

それに夜の森は、幻想郷関係なくいつでも何処でも彼女の言うとおり危険だ。とりあえず今日はここに泊まろう。

「それではお言葉に甘えて、今日はここに泊まることにします」

「ええ、ただし条件があるわ」

「……なんででしょう?」

「そのバッグの中身をどれか頂けないかしら。研究に役立つかもしれないから」

まあタダで泊めて貰うわけにもいかないし、どれか彼女にあげるのも悪くないかな。

バックバックの中身は基本的に危険物ばかりだ。そこらへんの素人が扱ったら危険極まりない。どれをやったものか。

なんかいいものはないかなあ、そう思いつつバックバックを漁っていたら、あるものを見つけた。……これなら問題ないだろう。

「これをどうぞ。研究の役に立てばいいですが……」

そう言いながら僕はゴーグルのような物を彼女に渡した。

「これは何かしら?」

「それは、暗視ゴーグルです。これをこうやって着けると、暗くてもちゃんと物が見える便利な道具です」

「へえ、ちよつと貸してもらえないかしら」

彼女に、暗視ゴーグルを手渡す。すると早速、彼女はその暗視ゴーグルを着けてその機能確かめだした。

「本当だわ。確かに暗くても見えるわね。外の世界ではこんなものが……」

どうやら、暗視ゴーグルの機能に驚いているようだ。

「これでいいですか？」

「ええ。他の物も気になるけど、これでいいわ。ありがとう」

良かった。気に入ってくれたようだ。実際この暗視ゴーグル以外は危なくて渡せないから、断られたらどうしようかと思ってた。

安心して一夜を過ごせるようになったから急に眠くなってきたなあ……寝ようかな。

……あつ、でもお腹すいた。

「とりあえず、ご飯つくろうかしらね」

おおお、アリスさんナイススタイミングだ！是非ともいただきます。

「ああ、貴方の分はないわよ」

うん……だと思いましたよ。そりゃあ見ず知らずの奴にご飯なんかあげるわけ無いですよ。

「冗談よ。だからそんな顔しないでちようだい」

あつ……まじですかアリスさん。この人ジョーク言うタイプなんだ。なんかちよつと意外だ。

「ちよつと時間かかるけどいいわよね？」

「はい！喜んで！」

いやあ、まともなご飯とかいつぶりだろう。

居酒屋の店員のような返事を返しながら、心の中でそう呟くのだった。

「はい、どうぞ。」

テーブルの上に並んだ、アリスさんの料理。どうやら今日はシチューのようだ。

「いただきますー！」

それではいただくこう。

なるほど、これはキノコシチューか。家庭のシチューのようなシンプルな味だが、久々にまともなものを食べたからとても美味しく感じる。

「味は大丈夫かしら？」

「はい！とても美味しいです」

「そう。良かったわ」

、どうやら料理を褒められたのが嬉しかったようだ。

あの人笑うんだ。ずっと笑わないから、嫌われてるかと思ったよ。

「ご馳走様でした」

「さて、寝床はどうしようかしら」

あく、寝床のこと考えてなかった。まあ、雑魚寝でいいや。戦場でもそうだったし。

「あつ、僕は床で寝るので大丈夫です」

「そう。わかったわ」

あつ…そのまますんなりいくんですね。いやいや、別にロマンス展開とか求めて無いですよ。ええ。

いやでも、そこには男のロマンというのがですね、

「おやすみなさい」

寝るんですか。そうですか。

「おやすみなさいませ」

うん。僕も寝よう。疲れたし。

明日のことは…明日考えようかな。

オヤスミナサーイ

こうして、幻想郷1日目は終わった。

幻想入り 第3話

早朝五時。

まな板と包丁とが奏でる家庭的な音が聞こえ、うつすらと目を覚ました。

「朝よ。起きなさい」

「おはようございませす」

アリスって意外に朝が早いなだね。僕はまだ眠いですよ。

窓から差し込む明るい光を浴びながら、だらだらと起き上がった。うーん、体が重い。

「朝ご飯はいるかしら?」

アリスって、無愛想に見えて実は優しい人なんじゃないかなあ、と思ってるんだけど。

まあ本人に言ったら間違いなく否定されるだろう。

普通知らない男を泊めてご飯までご馳走してくれるんだよ?素っ気なくしてるけど、

絶対いい人だわ。

「そうですね。ありがたくいただきます」

ズドオオオオオオン!!と表現するのが正しいだろうか。

とにかく大きな物同士が思いつきりぶつかったような音が辺りに響いた。

その音の大きさは、家が振動するくらいに大きかった。

「いったい何の音よ!？」

突然大きな音が近くから聞こえたことで、アリスはとても動揺していた。

いったい何事だろう。それよりもお腹すいた。アリスさん、朝ごはんはまだですか？

「あなた……こんなことじゃあんまり動じないのね」

「ええまあ。慣れてるんで」

いやでも結構焦りましたよ。正直今すぐにも完全武装して何があったか確認したいですし。

「と、とりあえず確認してくるわ!」

「僕も行きますよ?」

「いいわよ。もしかしたら危ないし」

「いえいえ。大丈夫です。僕も何があったか確認したいですから」

そう言いながら僕は装備一式を身に付ける。バックパックは……持っているのかな。何かあったら大変だしな。

「それじゃ行くわよ」

あれほどの音が聞こえるのは何事だろうか。そう思いながら、僕たちは音の聞こえた方向へ向かった。

「何よこれ……」

「これは……なんですかねえ……」

どうやらここがさつき音の発生した場所らしい。周りの木々が、なぎ倒されている。

おそらくこれは妖怪の仕業だろう。こんなこと、人間ができる訳が無い。ていうか、こんなことできる人間こそ妖怪と呼ぶべきだろう。

果たして、どういう妖怪がこんな事をしてかしたのやら。

「凄い状態ですね」

「え、ええ」

なぎ倒された木々の他にも、ところどころ地面が抉れている。まるで、巨大な何かが暴れたような状態だ。

その時、後ろから殺気を感じて振り向いた。どうやらアリスもその殺気に気づいたようだ。

「なにか来るわ……」

「そのようですね」

もう一度装備の確認をする。ああバックバック持つてきて正解だったな。
ベキツベキツバキツ

奥の方から恐ろしい殺気を放ちながら、何か木々をへし折り近づいて来る。

グワアアアアア!! 恐ろしい叫び声と共に現れたのは、熊の妖怪だった。えっ……熊の妖怪なんかいるの? ここ。

しかし、それほど大きくはない。

これくらいの大きさの妖怪が、木々をこんな状態にしたとは到底考えられないが、まあいいだろう。

殺意に満ちた鋭い歯をこちらに見せつけながら、その妖怪は僕ら目掛けて突っ込んできた。

どうやら戦闘は避けられない……仕方がない。熊の妖怪に向けてAKを撃ちまくる。

「凄いわね……その道具。弾幕の速度が速いわ」

いやいや、アリスさん。冷静にこのAKの分析する前にこの熊の妖怪を倒すの手伝ってくださいよ。——あの妖怪、熊のくせに素早い動きでAKの弾をよけていきやがる。凄いな……クマさん……。

刹那、熊の妖怪は素早く僕の懐に飛び込んで、顔面に蹴りをかましてきた。

「熊が蹴りかましてきたあああ!？」

ギリギリAKでガードしたから何とかなかった。あれくらったら、絶対やばいよな……。良くて、骨が碎ける。悪くて……死ぬ。

すんでの所でガードしたのは良かったが、AKの銃身が曲がって使い物にならなくなってしまった。これは予想外、どうしたものか。

「大丈夫? 片倉」

「ええ、まあなんとか」

困った。AKがないと火力が心もとない。……ん? でも待てよ。

そういえば、アリスさんは魔法使いだったな。呪文とか唱えて倒してくれないのかな。

「な、何よ」

「いやあ、アリスさんって魔法使いでしたよね?」

「ええ。そ、そうよ」

「呪文使って倒してくださいよ」

「無理よ。魔導書が無いから」

「嘘でしょ……」

「本当よ。魔導書がないと大抵の呪文は唱えられないわ」

ええええ!?!まさかの呪文使えないです発言!?!それでも一応あなたは魔法使いでしたよね!?!

そんなことしてらうちに、またしても熊の妖怪がつつこんできました。

「ちくしょう、こうなったら最後の手段だコノヤロー!」

こうなれば最後の手段を使おう。

奴が突進してくるのに合わせて、僕も突っ込んでいく。

熊の妖怪は脇腹に蹴りをかましてきた。また蹴りかよ……。熊は蹴るよりも、爪で切り裂くのが普通じゃ無いか?

僕はその蹴りを紙一重でかわし……。無理だった。

ミシミシ、と肋骨から嫌な音がする。これはひびが入ったな。でも奴の動きを捉えた。ここで決める。

レッグホルスターから、M93Rを取り出す。

これが最後の手段【肉を切らせて骨を断つ作戦】だ。骨も断たれそうだけど……。ズドドン、ズドドン、ズドドン!!

3点バーストで間髪入れず、妖怪の胴体に弾丸を叩き込む。作戦通りだ。ホネイタイ。

胴体に大量の弾丸を叩き込むと、熊の妖怪は絶命した。

何とか勝てたか……よかったよかった。イテテ……。

「肋骨やられたようね」

「ええ。まあ死ぬよりかマシですよ」

「あなたのその根性にびっくりするわ」

お褒めの言葉、ありがとうございます。ですけど、魔法があれば、こんな事にはならなかったんですがね。

心の中で皮肉を言いつつ、アリスの元へと戻ろうとしたその時、彼女の後ろに忍び寄る巨大な熊の妖怪を見つけた。——なるほど、さつき倒した奴はこの巨大な熊の子供か。

その妖怪は、鋭い爪で彼女を切り裂こうとその腕を振りおろした。このままでは、彼女は殺されてしまうだろう。

僕は無意識のうちに駆け出した。そのまま、彼女の体を横に突き飛ばす。

「きゃっ！いきなり何よ!？」

アリスは最初、何をされたかよく分からない様子だったがすぐに状況を理解した。

「あなた……腕が!？」

驚くのも無理はない。

僕の左腕は、無くなっていたからだ。

とてつもない激痛が走る。肉が引き裂かれる程度と思っていたのだが、まさか腕がちぎれるのは予想外だった。流石は森のクマさんだ。

アリスは無事そうだ。

腕をやられたが、僕だってタダで腕をくれてやるわけにはいかない。ちゃんとお返ししてやる。

腕を引き裂かれる直前、あの妖怪の腕にC4を張り付けておいた。

カチツ、起爆ボタンを押す。

轟音と爆風が妖怪を包み込む。その爆風により、結構な距離まで僕の体は吹き飛ばされた。

幸い、無傷だ。何ともない。あるとしたら、無くなった左腕くらいか。

だが、この程度の威力ではあの妖怪を殺すには至らなかつたようだ。せいぜい腕を吹き飛ばす程度だ。

「これで引き分けだな」

とは言ったものの、圧倒的に不利だ。とにかくアリスだけでも逃がさないと。

「早く逃げろー!」

しかし、彼女は逃げようとしないう。こうしてる間にも、あの妖怪は殺そうと近づいている。

ああ、まずい。彼女に向かって妖怪が爪で切り裂こうと腕を振り上げた。

この距離じゃ助けられない。M93Rは……さっきの爆発の衝撃で遠くに飛んで
いってしまった。ナンテコツタイ。

妖怪が、腕を振りおろした。もうダメだ！

腕が振り下ろされる刹那、妖怪の胴体が真つ二つに切られた。——えっ？

最初、何が起こったのか分からなかった。どうやらあの妖怪も同じ感想のようだが、妖怪はなぜ自分が殺られたのかを理解する前に。

ふと見ると、彼女の周りには小さな何かが浮いていた。

「大丈夫、片倉？とりあえず家に戻りましょう」

「え、ええ。ところで、さっきの妖怪はどうしたんですか？」

「ああ、斬ってやったわ。この子で」

そう言つてアリスは、刃物を持った小さな妖精のようなものを見せた。

「シャンハーイ」

「これは、妖精ですか？」

「いいえ違うわ。人形よ」

どうやら人形のようなのだ。しかしこの人形は動いてるんだけど、生きてるのか？

「生きてないわ。ただ私が、操ってるだけよ」

あつそうですか。てか、今心の中読まれた？まだ声に出してないはずだよな。

「とにかく、家に帰ったらその腕の治療しないとね」

「あの、肋骨のひびのほうは……？」

「気合で治しなさい。いちいち魔法を使うのも面倒だし」

ひええ、この人ヒドイや治してくれてもいいでしょ。

心の中でぼやきながら、僕たちは帰宅した。あつヤバイ、血がめっちゃ出てきてる。

「これで大丈夫よ。どう？」

「はい。おかげで痛みも無くなりました。でも……腕は戻らないんですね」

「魔法は万能じゃ無いのよ」

てつきり治ると思ってたのに、魔法って案外凄くないんだね。ちなみに、肋骨の方は治してもらいました。なんだかんだで、治すんだね。やっぱり優しいや。

「腕が無いと困ったなあどうしたものか」

「あなた、この先の生活のあてとか何も無いの？」

「ええ。いかんせん、急に幻想郷とやらに来てしまいましたから。これっぽっちもあては(は)ない(ま)せん」

「それもそうね」

このままじゃ生活はおろか、生き残ることも出来ない。何処かに安全な場所は無いものか。

まあその前に、腕のことをどうにかしないと……でもどうしろってんだ。もう、どうしようもないぞ。

「もしかしたら、腕のことなら何とかなるかもしれないわよ」

「えっ！本当ですか！」

これは驚いた。失った腕を治せるなんてさすが幻想郷だ。なんでもありだ。

「妖怪の山のふもとに技術屋のカツパがいるから、もしかしたら何とかなるわよ」

「技術屋のカツパ？」

カツパが技術屋ってどういうことだろう。というか技術屋ってことは、もしかして腕のことって……義手？

「ええ。義手よ。それしか方法は無いわ」

ほら見ろ、また心読まれた。この人、読心術でも会得してるのか？

というか、義手かあ。てつきり腕が治るのかと思っちゃったや。

「とりあえず、明日そのカツパの所へ行こうかしらね」

「そうですね」

技術屋のカツパかあ。一体どんな感じ何だろうか。もしかしたら、いかつい感じのおっさんカツパだったりして。それはそれで、面白いな。

そんなことを考えながら、明日に向けて僕は準備をして、寝るのだった。

あれ？さりげなく僕、この家に居候してるみたいだな。

幻想入り 第4話

「紫様。なぜあのような者を、この幻想郷に入れたのですか？」

何処にも存在しない真つ暗な空間。いわゆる「隙間」と言われる場所に二人の女性が居た。

女性の一人である、狐のような尻尾を持つ女性の疑問にもう一人の、扇子で口元を隠した女性が答えた。

「彼は、この幻想郷に必要なだからよ藍」

「そうですか。しかし、紫様が招き入れるほどの者とは、いったいどのような力を持っているのです？」

「今はまだ分からないわ。でもいつか、この幻想郷に何かをもたらしてくれるはずよ」
そう言うとその女性は不敵に笑った。

「準備できたかしら？」

「はい。いつでも出発できますよ」

僕はもう一度装備の確認をする。とはいっても、まともに銃なんか扱えるような状態じゃないけど。

失った左腕を見つめる。はたしてどうなることやら。アリスさん曰く河童の技術士の義手でどうにかなるようだが、やはり心配だ。

「妖怪の山までは遠いから、飛んで行くわよ」

「えっ!?僕は飛べないですよ」

「知ってる。だからあなたを人形達で運びながら飛ぶわ」

アリスさんも飛べたんだ。

もしかしたら、僕も飛べるかも。

「無理よ。あなたは能力の無い人間だから飛べないわ」

そうですよね。どうせ無理だってわかってましたよ。別に悔しくありませんよ、ただ涙が止まらないだけです……。

「グズグズしないで早く行くわよ。」

はいはい。行きますよ。

可愛らしい人形達に掴まれ、僕は大空を飛んだ。

この世界で初めてのの大空はとても……。

「ああ……死ぬかと思った……」

「まったく……ヒヤヒヤしたわよ」

「いやいや、あんな不安定なのに速度出すほうがおかしいですよ」

「何よ。文句があるなら、帰りは一人で帰りなさいよ」

「すみませんでしたア！それだけは、勘弁してください」

「わかればよろしい」

とりあえず、妖怪の山のふもとに着きました。途中、命の危険があつたけど。流石にあの高さで落下するのだけは、嫌だ。絶対死ねる。ビルで言うところ8階くらいはあるんだよ？信じらんない。

「あの家よ」

あれが河童の家かあ。おお！とても……民家だ。もつと作業場みたいなものかと思つてた。

見た感じ、普通の民家だよな。あれ。

あつ、でも川が流れてる。河童の要素が少なからずあるじゃん。

「にとりー！居るー？」

どうやら河童の名前は「にとり」と言うらしい。

「返事が無いわね。留守かしら？」

「どうやら留守のようだ。残念、出直すしかないか。」

ふと、すぐそばを流れる川の小さな異変に気がつく。誰かに見られているのだ。心配を探る。そこには目に見えない何かがあった。

「誰だ！」

M93Rを向けながら叫んだ。

「どうしたのよ片倉」

「その浅瀬に何かがあります。気をつけて！」

アリスも戦闘態勢に入る。また妖怪かよ……嫌だなあ。

一触即発の空気の中、視線を送っていた何者かが正体を現した。

「ターイム！ストップ！攻撃はやめて！」

そこにいたのは、青髪の緑のリュックを背負った小さな少女だった。

「あらにとり、ここにいたのね」

えっ……この人がにとり？河童だよ？頭にお皿ないよ？

「いやー開発したばかりの、ステルス迷彩の実験してたんだよ」

「あら、そうなの。ごめんなさいね」

「いいよ、別に。ところで、そこにいる人間さんは？」

「僕は片倉と言います。ところで、にとりさんは河童ですよね？」

「そうだよ。私はれっきとした河童だよ」

「頭の上にお皿が乗ってないんですが……」

「ああ皿のことね。皿なんかなくなつて、河童は河童だよ。細かいこと気にしてたら負けだよ？」

そうなんですか。河童は皿なんかなくなつて大丈夫なんですね。

「ありや？あんた、左腕はどうしたんだい？」

「ああ、先日失いました……」

「そうかい。そりや大変だったねえ」

「今日はその左腕のことで頼みたいことがあるから来たのよ」

「なるほどなるほど、仕事の依頼なら喜んで引き受けるよ。とりあえず家の中に入ろうか」

にとりの家の中は、見た目とは裏腹にとても作業場感溢れる空間が広がっていた。

「さて、どんな物を作ればいいんだい？」

「彼の左腕、つまり義手作って欲しいのよ」

「義手ね分かった。しかし、アリスが他人のためにそこまでするなんてねえ……。珍しいなあ」

「彼が腕を失ったのは私のせいなのよ。彼が私をかばってくれて……」

「へえ〜」

「な、なによ？」

「べつに、惚れたのかな？とか思っていないよクスクス」

「なっ!?そ、そんなわけないじゃない!」

なにやらあつちでなんか盛り上がってますね。ガールズトークとかいうやつですな。

僕なんかそっちのけで楽しそうだなあ。それより、早く仕事に取り掛かって欲しいんですけど。

「さてと、そろそろ仕事に取り掛かろうかね」

ようやく仕事を始めるようだ。ガールズトーク長かったなあ……。

「まずは腕を測ってみようかな」

こうして、僕の義手作りが始まった。

「それじゃ、大体の設計図も決まったことだし、作っていくけど、完成は明日になるから

予定だからまた明日来てね」

僕は河童を舐めていた。たった30分程度で外の世界の義手よりも、遥かに高性能な義手の設計図を一人で作ってしまったとは……。河童、悔ることなかれ。

「そうそう、片倉の銃もついでに貸してくれないかな?」

「いいですけど、どうするんですか?」

「それは明日のお楽しみ♪」

「でもこれ結構危険ですよ?」

「ああ大丈夫。こういうのは扱えるから」

嘘ん、河童スゲエ。何でも出来るじゃん。河童の力を舐めてました。河童、悔ること

(ry

「さあ帰るわよ。それじゃまた明日来るわ、にとり」

「じゃあね。片倉、アリスのこと宜しくね〜」

「ちよつ!にとり、あんたねえ!」

宜しくねって何をだよ。そしてなぜアリスさんは、にとりさんにお怒りなんですかね。

「帰るわよ!片倉!」

はいはい、帰りますからそんなに引つ張らないでください。というか帰りもあれです

よね、あの人形ですよね？でもこの感じだとバランスが、あつ、ちよつ、まって飛ばないでー！

「ギャアアアアア、イヤアアアア！」

その後無事帰宅した。別に落下したとかは断じてない。

「おはよう片倉。怪我は大丈夫？」

「ええ、魔法でなんとか……ああ……もう嫌だ……アリスのせいだ」

「うっ……昨日謝ったじゃない、だからいい加減立ち直つてよ」

「はい、立ち直りました。タブン」

「それは良かった、さあ行くわよ」

「嫌だアア、死にたくない！」

「もう！早く行くわよ！」

「逝きたくない！嫌だアアア！」

しかし抵抗虚しく、無理やり連れて行かれました。もつと他の方法を考えるべきだな……。例えば——思いつかない。

……諦めて空で行くか。

「おつ、来たね」

「義手できたかしら？」

「もちろん出来たよ。さっそく付けてみようか」

そう言うのと、にとりは義手を取り出した。えっ？僕はもう立ち直りましたよ。気合で。

「おおこれは……すごい」

「どんな感じかな？」

付けてみると、まるで自分の腕のような違和感のないフィット感。すごいな河童の技術力。

ところで指とか、思い通りに動くんですがなぜですか？特に何の変哲もない義手なのに。

「なんで思い通りに指が動くんですか？」

「……河童の技術力だよ」

ああこれは良く分からないタイプですな。まあいいや、気にしたら負けだよ。うん。

「ちなみにその義手には、魔力や霊力等を義手に纏わせれる機能がついてるよ」

えつ、何その機能。凄いかっこいい。

でも、霊力って何ですか？ 私聞いたことないよ？

「それと、この銃も返すよ。魔力や霊力とかを撃ち出すことができるようにしておいたから」

oh…… 男のロマンをにとりは分かかっていらつしやる。

でも、霊力って（ry

「とりあえず、外で試しに使ってみようか」

「そうですね」

とにかくどんな機能が確かめてみることにした。ちよつとワクワクしてきた。

オラ、ワクワクすつぞ!!

僕たち3人は近くの岩場に移動した。

「とりあえず、この岩に向かって、その銃を撃ってみな」

にとりに言われて、岩に向かって銃を撃ってみた。

本来なら聞こえるであろう、火薬の乾いた音は無く、かわりに岩が碎ける音が響いた。

「おお、凄いですねこれ」

見てみると、派手な音の割にはたいして威力は無さそうだ。

「それは弾幕ごっこ用に調整してあるから、殺傷力よりも、衝撃力が強いよ」

どうやら、弾幕ごっこ用らしい。

では、弾幕ごっこ以外の時はどのようなようにして、相手と戦えばいいのだろうか？凶暴な妖怪には到底役に立たなさそうだが。

「それじゃ、次は義手だね。ちよつと腕に魔力を纏わせてみて」

グツと左腕に力を込める。すると義手がほのかに光だした。なるほどこれが魔力か。

ちなみにこの魔力は、アリスの魔力だ。どうやら、他人の魔力を借りて使う前提らしい。

「いい感じだね。じゃあそのまま、岩を殴って」

渾身の力で、岩を殴った。その瞬間、凄まじい轟音と共に岩が砕けた。

なるほど。弾幕ごっこ以外では、この力を使えばいい訳だな。すごいな河童の技術力。

「ちよつと、強いかな。まあこれくらいがいいかもね」

「そうね。妖怪に襲われてもこれなら安心ね」

でもさこれ……人死ねますよね？よくよく考えたら。

だがこれなら、妖怪に襲われてもなんとかなるだろう。よかったよかった。

「最後に片倉にプレゼントだよ。左腕の義手の完成祝いに」
「プレゼント?」

いや、完成祝いもなにも、作ったのあなたですよ?というかプレゼントってなんだ?
?

するととりは、なにやら靴のような物を持ってきた。

「これは何ですか?」

「これはね、魔力を使って高速移動を可能とする靴だよ。ちなみに私の新作。実験台になつて?」

どうやら、実験台として僕にこの靴をくれるらしい。

とても貰いたくなかったが、何かの役に立つかもしれないから、とりあえず貰っておくことにしよう。

……何かあつたら絶対に文句言つてやる。

「じゃあ、帰るわよ。いろいろとありがとうね、にとり」

「義手とかいろいろありがとうございました」

「うん。まあ片倉も気をつけてね。もし義手とかが壊れたらいつでも修理に来なよ」

「分かりました」

別れの挨拶も程々に、僕達は、空を飛んで帰った。

ちなみに、帰る途中、落下したことは言うまでもない。

「その靴、使ってみました？」

「ええ。この靴すごいですよ。ありえないくらい速度で走れました。まあ木にぶつかって怪我しましたけど……」

あの後、家に帰って、にとりから貰った靴を使ってみました。

使ってみると、にとりの説明通り魔力で高速移動出来た。とても便利だなあ。木にぶつかるのは……仕方ないか。

「それはそうと、明日は魔法の実験するから、あなたは明日、人里で暇を潰してきなさい」「えつ、家に居ちゃ駄目なんですか？」

「魔法の実験は危険よ。あなた、右腕も義手にする覚悟ある？」

大人しく人里に行こう。腕を失うのはもう嫌だ……。

「ところで人里って何処にあるんです？」

「地図に書いておくから、明日それを見ながら行きなさい」

そう言うと、アリスさんは自分の部屋に戻って行った。

ああ空を飛べたらなあ。あつ、人形達はお帰りください。もうあれは懲り懲りです。

とにかく、明日は人里に行くから寝ようかな。

人里ってどんな感じなんだろうか。そんなことを考えながら、僕は明日に備えて寝るのであった。

ところで、魔法の実験って何するの？あとで、聞いてみるか……。

——教えてくれませんかとき。

幻想入り 第5話

く人里への道く

朝にも関わず、僕はものすごい速度で人里に続く道を駆け抜けていた。

アリスさんに手渡された地図を見ながら。

しかし、この靴は凄いな。ボルトもびつくりの速さで走れるよ。おっとこの道は右だ。

本当は歩いてゆつくり行きたかった。

だけど、道中黒い服を着た妖怪らしき女の子が

襲ってきたので、こうして走っている。

だって、

「あなたは食べていい人間？」

とか見知らぬ女の子に言われて襲われたら、そりや逃げますって。戦う気力なんて、これっぽっちも起きなかつたです。

そんなことを考えていたら、人里に到着した。

く人里く

人里に着いた。雰囲気としては、江戸時代の町並みと言ったほうがいいだろう。道行く人々は僕のことを物珍しそうに見ている。

それもそのはず、人々が来ている服は着物、僕が着ているのは戦闘服。

目立つのも当たり前だ。別にどうでもいいが。

とりあえず、この人里をまわってみるとしよう。

「おっ！そこの兄ちゃん、よってかない？」

人里をまわっていると、気前の良さそうな親父に声をかけられた。どうやら、お茶屋のようだ。せっかくだから寄ってみることにした。

「それじゃあ、お団子一つとお茶をください。」

「あいよ！毎度あり！」

しかし、これからどうしようか。一通り回ったけど特に何もすることがない。あつ、このお団子美味しい。

その時、一人の女性が店の中に入ってきた。

「おっ！いらつしやい幽香さん。」

その女性は、周りの人々が着ている着物ではなく、花柄のワンピースを着ていた。

「お茶を頂戴。」

「あいよ！毎度あり！」

そろそろどこかへ行くこうかと思っていた時、その女性が話しかけてきた。

「こんにちは。」

「どうも、こんにちは。」

「あなた、外から来た人間よね。」

「ええ。やつぱりわかりますか？」

「当たり前よ。あなた目立ってるもの。」

やつぱり目立っていたようだ。おかげで、外来人ということもバレた。

しかし、この人は何と言うか、周りとはなんか違う雰囲気を持っている。まるで、人

ではないような……

いや、それはないか。ここは人里だ。多分気のせいだろう。

「とりあえず、自己紹介しましょうか。私は風見幽香、宜しくね。」

「僕は、片倉と言います。こちらこそ宜しく。」

どうやら、彼女の名前は、風見幽香と言うようだ。

ふと、彼女が僕の左腕の義手を見つめていた。

「その腕はどうしたのかしら？」

「これは、ここにきて間もない頃に、妖怪にやられまして……」

「あなた、よく生きてこれたわね。」

「まあ、アリスさんの家に泊まらせて貰ってましたから。」

「あの魔法使いにね……なるほど、あなた面白いわクスクス」

「どうやら、アリスさんのことは知っているようだ。」

「というかこの話のどこが面白いんだろう？」

「この人は何を考えているのかさっぱり分からない。」

「あなた、この後は暇かしら？」

「ええ、この後どうしようか悩んでいたところです。」

「それなら、私の家でお茶しないかしら？」

「なんと、家に招待してくれるらしい。どうせ暇だし、ただただこうかな。」

「それでは、いただきます。」

「それじゃあ、私の家に行こうかしらね。」

「ところで、この人の家って何処にあるんだろう？」

「そんなことを考えながら、彼女の家に向かった。」

〈風見幽香の家〉

今、僕は幽香さんの家で紅茶を飲んでいる。

家の窓からは、広大な向日葵が広がっている。

その他にも、外の庭には、沢山の綺麗な花が植えてあった。

「綺麗な花たちですね。好きなんですか？」

「ええ。毎日私が世話しているのよ。」

「どうやら、この規模を一人で世話しているようだ。」

「どうやってるのだろうか。さっぱり見当がつかない。」

「さて突然だけど片倉、私と戦いなさい。」

「えっ、なんですって？戦えって言ったかな？聞き間違いかな？」

「突然、戦えと言われても、意味がわからない。」

「言い方が悪かったわね。別にあなたを怪我させたいとかじゃなくて、あなたの力を確かめたいのよ。」

「全力でお断りさせていただきます。」

「高速で土下座をしながらお断りした。プライド？そんなもん捨ててるわ、とつくの昔に。」

「あら、見た目の割に結構度胸が無いのね。」

「グサツ、心に何か刺さった。」

「どうせ、女性にも勝てない実力しかないのよね、きつと。」

グサツグサツ、二本目の追加入りました。

「まだだ、こんなことじゃ僕はめげないぞ！」

「あーあ、期待はずれよ、あなた。」

グサツグサツグサツ、心が折れました。

「ここまで言われると、戦うしかない。」

「分かりました、そこまで言うのなら受けてたちます。ただし手加減はしません。僕を本気にさせた事を後悔させてあげますよ。」

「うふふ、いいわよ。本気でかかってきなさい。」

僕らは外に出た。

義手を使つての実戦はこれが初めてだな。全力で倒してみせる。

「先行はそつちに譲るわ。」

「ご丁寧に先行を譲ってくれるようだ。」

「それはどうも。それじゃいきますよ！」

僕は靴に魔力を纏わせ大きく蹴り出した。

靴の力により、目にも止まらぬ速さで駆け出すことが出来た。河童の技術万々歳。

彼女の顔を右腕で殴ろうと振りかぶる。まずは挨拶替わりに右腕だ。義手のパン

チはこのあとだ。

速すぎて捉えられないのか、彼女はガードをすることでどこか、動こうとする素振りも見せない。

なんだ、結構弱いじゃん。

しかし、僕の繰り出した右腕の拳は、彼女の顔面に当たることは無かった。そこに彼女の姿が無いからだ。消えた？いや、違う。

「んなつ!?!飛んだ!?!」

彼女は、真上に飛んだのだ。高さにして5m程度。

空を飛ぶことが出来るということとは、人ではないのか。

「人間にしては速い動きだわ。能力かしら?」

「この靴の力です。」

靴に魔力を纏わせ次は真上に飛ぶ。

本当にこの靴便利だな。河童の（ry

「でも、まだまだだね。」

飛ぶ瞬間、僕は彼女の傘に殴られ地面に叩きつけられた。

背中を叩きつけられたせいで、息が苦しい。

しかし、傘だけでこの威力とは……

僕は、呼吸を整えながらよろよろと立ち上がる。

「ほら、早くかかってきなさい。」

依然として彼女は涼しい顔をしながら、挑発してくる。

僕はもう一度、彼女に向かって駆け出す。

次は左だ。義手に魔力を纏わせ、拳を突き出す。

大きな岩さえも砕くパンチを、彼女は堂々と体で受け止めた。

死んでもおかしくない威力だった。

だが、彼女は死ななかった。ましてや、傷を負うこともなかった。

僕は確信する。こいつは人間じゃない、妖怪だ。しかも、妖怪の中でも強い部類の妖怪だと。

「今の拳は効いたわ。さすがだね。」

嘘をつけ、僕は心の中で悪態をつく。

最高の威力を誇る、義手で拳が効かないとなると、勝ち目はほとんどないといってもいいだろう。

こうなれば策は一つ、弾幕で牽制しつつ逃げるのが得策。

M93Rを構える。牽制が目的ならば狙いは正確じゃなくていい。とにかく逃げる
ことが大事だ。

トリガーを引く。M93Rから、弾幕が大量に発射された。

「弾幕も扱えるのね。面白いわ。」

彼女も対抗して弾幕を放った。僕が放った弾幕の倍の量を逃げるのが最優先だ。しかし、逃げられない。

いや、逃げられないんじゃない。逃げる余裕がないのだ。

彼女から放たれる弾幕のほとんどが、僕を狙っている。

その弾幕を打ち落とすのに僕は精一杯だ。

彼女の弾幕の一つが僕の体に当たった。その弾幕の威力は、体を吹き飛ばすほど強烈だった。

あまりの苦痛にもがいた。だが、今すぐにも起き上がらなくてはならない。

そう思い、起き上がったとき、勝負は決した。

僕の目の前で彼女が傘の先端を突き出していた。

「私の勝ちね。」

ニヤリ、と満足したように笑っていた。

「あなた、一体何者なんです？人間じゃないのは確かだ。」

「そうよ。私は妖怪。周りからは、花の妖怪と言われてるわ。」

やっぱりか、こんな妖怪に勝てる訳が無い。

彼女は、傘を引つ込めるところ言った。

「あなたは、強くなれる素質があるわ。」

強くなれる素質がある、彼女はそういった。

「だから、私があなたを鍛えてあげるわ。」

「何故ですか？ 僕のような普通の人間を鍛えるんですか？」

「簡単よ。強くなったあなたと戦いたいからよ。」

やばいよこの人、見た目とは裏腹に危ない人だよ。もうただの戦闘狂だよ。

断ろう。全力で断ろう。

「あなたは私に勝負で負けてるのよ？ 拒否権はないわ。」

うぐっ……痛いところを突かれた。何も反論できない。

「分かりました。従います。」

「素直でよろしい。それじゃあ早速だけど、あなたの義手について聞きたいことがあるわ。」

義手について聞きたいことがあるようだ。

「あなた、その義手はどういう力があるのかしら？」

「この義手は魔力や霊力をまとわせることができます。」

「本当かしら？」

「ええ。これを作ったにとりさんが言っていましたけど。」

「そうなの。でも、その義手はただ単に魔力や霊力を纏わせるだけじゃないのよ。」
「どうということなのだろう。」

この義手は魔力とかを纏わせるだけじゃないのか。

「その義手はね、魔力や霊力を自在に操ることをできるものよ。」

「でも、にとりさんは魔力や霊力を纏わせるだけだと言いましたが……」

「それはあくまで、普通の人間でも出来ることよ。でも、あなたには普通の人間よりも魔力や霊力を扱う才能があるわ。」

驚いた。僕には、魔力や霊力を扱う才能があるようだ。

でも、一体どうしてそんなことが分かるのだろうか？

「どうしてそんなことが分かるんですか？」

「長いこと生きてると、そういうことが分かるようになるのよ。」

長いこと生きてると、と言ったがどの位彼女は生きてるのだろうか。

妖怪は長生きするのだろう。だとしたら幽香さんは、ばB……

あつ今、睨まれた。スゲエ怖い。

「でも、あなたはまだその才能を開花させてはいないわ。」

「では、どうすれば？」

「簡単よ。魔力や霊力の扱いに慣れればいいのよ。」

魔力や霊力を扱うのに慣れればよいようだが、そんなことしたことないからよく分からない。

「とりあえず、その義手の魔力を操って、武器を作ってみなさい。」

とにかく言われた通りにやってみるとしよう。

義手に魔力を纏わせる。そのまま、頭の中にイメージした武器を作る。

ちなみに、イメージした武器は刀だ。日本人が使うならこの武器でしょ！

しかし、長いことイメージしているが、いつこうに出来る気配がない。

「できないわね。」

「そうですね。でももう少しでできるかも……」

ついに魔力で武器を作ることが出来た。

できたのは、日本人の魂である刀

ではなく、小さいナイフだった。

あれえ？おかしいなあ、こんなナイフじゃなくて、刀をイメージしたのに。

「まだまだだね。とりあえず、イメージ通りになるまで練習しなさい。もし、晩ご飯までに出来なかつたら、ないと思いなさい。」

ええええ、この人鬼畜すぎるでしょ!?

でも逆らえないのが現状。うん、諦めよう。

それから、ずっと練習していたが結局、晩ご飯は抜きでした。

幻想入り 第6話

土の匂いと花の優雅な匂いがする。
うつすらと目を開ける。

明るい、朝になったようだ。

どうやらずっと練習して疲れたせいか外で眠ってしまったようだ。

こわばった体をほぐしながら起き上がる。

そういえば晩ご飯を食べていないことを思い出す。急に胃袋が空腹を訴えだした。

よろよろと幽香さんの家に向かっていると、美味しそうな匂いが漂ってきた。どうやら朝食のようだ。

家に入ってみると幽香さんが朝食を食べていた。

「おはようございます……」

「あなたの分もあるわよ。早く食べなさい。昨日食べてない分、沢山食べなさい。」

ああ幽香さんが神様に見える。昨日の晩ご飯、抜かしたのはあなたですけどね。

朝食を済ませ元気が出たところで、僕は練習を再開させる。

昨日の練習である程度のコツは掴んでいる。あとは努力しただろう。

僕は気合を入れなおし左腕に魔力を纏わせた。

〈幽香 side〉

一目見たときから彼には才能があるのは分かっていた。

実際に戦ってみると才能があることに確信がもてた。

だが、彼にその才能を開花させることができるかは私には分からない。

魔力を好きな形にすることをさせているが、正直な話でできるか分からない。早くできて一週間はかかるだろう。

もちろんそれは才能があればの話だ。普通の人間じゃ人生の大半はかけないと無理だ。

朝食を済ませ、練習に行ってから3時間はたっただろうか。

様子でも見に行こうか。

私は愛用の傘を持ち、彼の元へ向かった。

〈移動中〉

驚いた。私は彼のことを見くびっていたかもしれない。

様子を見に来ると彼は既に魔力を操り、刀を作っていた。

早くても一週間はかかると思っていたが、まさかたったの2日程度でやってのけるとは。

もしかしたら彼は、私が思っていた以上の力を秘めているのかもしれない。

〈片倉side〉

魔力を扱うのは意外と簡単だった。

ちよつとコツを掴んだらあとは気合でどうにかなるもんだね。

もしかしたら僕って才能あるかもドヤ!

あつ今のドヤ顔幽香さんに見られた。そんな変な目で見ないでください。

「幽香さん! どうですか?」

「まだまだね。これからもつと精進しなさい。」

oh... 意外と厳しい評価がとんできた。

ちよつと悲しいシヨボン

「ところであなた、スペルカードは持つてるかしら?」

「あー……そんなものありましたね。持ってないです。」

まずスペルカードの存在自体忘れていた。

でもあれってどうやって手に入れるんだろう？

「幽香さんは持つてるんですよね？」

「ええ。持つてるわよ。」

「どうやって手に入れたんですか？」

「手に入れる？違うわよ。自分で創るのよ。」

どうやらスペルカードは自分で創れるようだ。

早速創ってみようと思ったが、創り方が分からない。

「どうやったら創れるんですか？」

「そうねえ……イメージしたら出来るわ多分。」

多分!? 投げやりな答えが返ってきた。

とにかくやってみるしかない。

僕はイメージする。

大まかな構成、弾幕の形や大きさ、速度、その他色々……

うーん……なかなかイメージがまとまらない。意外と難しいなこれ。

まず、大まかな構成からイメージ出来ない。

「魔力を操れるんだから、それを活用したらいいんじゃないかしら。」

おおそれだ。幽香さんナイス！

とりあえず大まかな構成は、魔力を操って出来たものを相手に飛ばしてみよう。次は形と大きさか……。

基本的に飛ばしやすそうなのナイフがいいかもしれないな。大きさは小さめにしよう。速度は速いタイプにしようかな。

おおだんだんとイメージ出来てきたぞ！

そして最後の調整をイメージした時、僕の手元には一枚のカードが握られていた。

「出来たようね。それがスペルカードよ。」

どうやらこのカードがスペルカードらしい。

このカードの名前を叫べば使えるはずだ。前にチルノがやっていたから。

「早速どんなものか見せてみなさい。」

幽香さんも気になるようだ。

それでは、やってみよう。

僕は出来たばかりのスペルカードを発動させる。

〈飛刃 スキップ・ザ・リップパー〉

宣言した瞬間、周りから大量の魔力で出来たナイフが現れ次々に飛んでいった。

そのナイフは瞬く間に標的にしていた木をズタズタに切り裂いた。

イメージ通りに出来た。

けどこのスペルカードは魔力の消費が激しすぎる。一回使っただけで魔力がそこを尽きてしまった。

今度にとりに、容量について相談しようかな。

それにしても、この消費量は予想外だ。

「うーん…魔力が無くなったか。」

「それなら私の霊力を使いなさい。その義手、霊力も使えるはずよね。」

なるほど、幽香さんの霊力があるじゃないか。

幽香さんから霊力をもらいもう一度スペルカードを使ってみる。

問題なく出来た。これなら大丈夫だろう。

「もう一枚スペルカードを創ってみなさい。」

「そうですね。やってみます。」

僕はもう一枚新しいスペルカードの制作を始めた。

〈紅魔館〉

紅魔館の玉座に一人の少女が座り不敵な笑みを浮かべていた。

すると一人のメイドが少女のそばに現れた。

「そろそろ始めるか、咲夜。」

メイドの名前は咲夜。

時を操る能力を持ち、紅魔館唯一の人間である。

「かしこまりました、お嬢様。」

そしてこのお嬢様と呼ばれた少女の名前はレミリア。

この紅魔館の主であり吸血鬼である。

「さあ、今こそ幻想郷を我らが統べる時。」

レミリアが空に紅い霧を放つ。

その霧は紅魔館を中心に幻想郷の空を覆っていく。

そして幻想郷は紅い霧に閉ざされた。

く風見幽香の家く

突然空が紅く染まった。

「何ですかこの空は？」

「どうやら異変のようね。」

どうやらこの紅い霧のせいで植物たちに悪影響を及ぼしているようで、幽香さんのご機嫌はかなり悪い。

「あの湖の方から来てるみたいね。片倉、面倒だからこの霧を出してる奴を倒してきな

さい。」

あーきたよ、とぼっちりが。

どうやら幽香さんは僕にこれを止めろと言いたいようだが……正直な所行きたくない。というか無理だと思う。

「行っても無理だと……」

「行かないとどうなっても知らないわよ?」

よし!喜んで行こうか。

だからその傘はおろしてください幽香さん。

「霧は湖の方から来てるわ。早く行きなさい。あと解決させるまで帰って来ちゃだめよ。」

湖か……思い当たるのはチルノと出会ったあそこしかないな。

というか幽香さん、解決させるまで帰って来ちゃ駄目なんですか?厳しくないですか?それ。

まあ反論しても痛い目見るだけなんでさっさと行くことにした。

しかし、これほどのことをする人物って何者なのだろうか。

紅魔館編

そうだ紅魔館に行こう 第1話

僕は湖ではなく、アリスの家に向かっていた。

人里に出掛けた以来帰って来ていないからだ。

別に解決させた後でもいいかなとは思ったが、もしかしたらアリスがこの異変解決に手を貸してくれるかもしれないと思い、湖に向かう前にアリスの家に行くことにしたのだ。

アリスの家に着いた。

ドアをノックする。

ガチャリとドアが開かれ、アリスが出てきた。

「どうもアリスさん。」

「あんた……今まで何してたのよ。まあ立ち話もあれだから家に入りなさい。」

僕は家に入り、人里での出来事を話した。

人里での出来事を全て話終えると、アリスさんは唾然としていた。

「あなたあの風見幽香の所にいたの!？」

「ええ、どうしてそんな驚いてるんですか?」

「どうしたもこうしたも、あの妖怪は幻想郷の中でもかなりの実力者よ。あなたなんてその気になれば、すぐに殺されるわ。」

ひええ、あの人そんなに強かったんだ。

戦った時からかなりの実力者だとは思ってたけど、まさかそこまで強いとは。

「それであの妖怪にこの異変を解決させると言われたわけね。」

「そうなんですよ。アリスさんならこの異変の犯人とか知ってるかなと思ってですね……」

「そうねえ…思い当たるのは湖に出来た館かしら。」

「湖から館? 本当ですか?」

「そう聞いたわよ、魔理沙から。」

魔理沙? 誰だそれ。

まあそれはよしとして、その湖にある館が怪しいな。

早速行ってみるとするか。

「ちよつと待ちなさい。」

行こうとした矢先、アリスに止められた。

「その館に行く前にまず香霖堂に行きなさい。あなたの役に立つものがあるはずよ。」

どうやらアリスいわく香霖堂に行くべきだそう。

役に立つものがあるそうだが……果たして本当だろうか。

とりあえず行くことにした。

僕はアリスの家をあとにし、香霖堂へ向かった。

く香霖堂く

アリスに言われた道に進んでいくと、森のなかにひっそりと建っている店を見つけた。

どうやらこれが香霖堂らしい。

店の中に入ると、カウンターに一人の男が座っていた。

「いらつしやい。ふむ……外から来た人は久々だねえ。」

「すいません、この店は何のお店なんですか？」

「この店はね、外の世界のいろんなものがある店だよ。」

外の世界のものがある店のようだ。

ということ、銃とかもあるかもしれない。

なるほど、アリスさんはこういうことを考えてこの店に行かせたのかもしれない。とりあえず使えそうなものを探すことにした。

この店の中には使えそうなものが沢山あった。

銃や弾薬があるのは特にありがたかった。

沢山ある銃の中で僕はショットガンのレミントンM870を買うことにした。

「これください。お代は……」

「ああ……いいよお代は、どうせ売れなかったものだったし。」

この店主かなり太っ腹な人だな。

「また来ておくれよ。」

「ええ、また来ます。」

店主の優しさに感動しながら、僕は店を出た。

目指すは湖にあるという館だ。

僕は走り出した。

く紅魔館前く

いったいどんな館なのかと思っていたが、まさかこんなに大きな館だったとは。そびえ立つ館を前に僕は空を見る。

紅い霧はこの館から広がっていた。

間違いないここが異変の原因だ、僕は確信する。

館の前には大きな門があり、そこに一人の門番がいた。

ゆつくりと近づく。

すると門番が警告した。

「ここは紅魔館、人間は立ち去ったほうがいいですよ。」

どうやらこの館には紅魔館という名前があるらしい。

「今すぐ立ち去ってください。じゃないとただの人間でも容赦しません。」

ただの人間でも容赦ないとは…

でもこのまま立ち去るわけにもいかない。

こうなったら強硬手段にでるか。

「残念ながらこのまま立ち去るわけにはいかない。」

「そうですか、仕方ありませんね。この紅美鈴、全力であなたを倒します。」

門番もとい美鈴が距離を一気に縮め殴りかかってきた。

その拳を僕は後ろに飛んで下がることで回避する。

そして回避しながらショットガンを2発撃ち込む。

「人間の割になかなかやりますね。しかし！」

しかしショットガンの弾丸は全て回避された。いや、弾丸は手のひらの中にあつた。

「こんなものでは私を倒すことは出来ません。」

この門番、かなりの強さだ。

スピードが段違いすぎる。

弾幕ははつても駄目ならば接近戦に持ち込むしかない。

僕は靈力で刀を創り出す。

「靈力を操るとは……あなた人間ではありませんね。」

「いいえ、ただの人間ですよ！」

魔力の力を靴に纏わせ高速で美鈴の懐に飛び込む。

そして刀を横に一振り。

だが美鈴の素早い動きにより避けられ、そのまま繰り出された蹴りをもろに受ける。

「最初の動きは速かったんですが、その後はまだまだ遅いですよ。」

やはり接近戦でもきついか。だが僕はまだ諦めない。

僕はバックパックの中からスモークグレネードを取り出す。

そしてそれをそのまま、ピンを抜き目の前に投げる。

その瞬間、あたり一面が白い煙に覆われた。

「むっ……視界が悪いですね。」

あちらもこちらの姿が見えないようだ。

だが僕は美鈴の位置と距離を把握している。

シヨットガンを構える。

トリガーに指をかけ、引き金を引こうとしたその時、

白い煙がどこからともなく現れた衝撃波により、吹き飛ばされた。

「こういうことも出来るんですよ。」

どうやら美鈴が気の力で衝撃波を起こしたようだ。

「そろそろ終わりにします！」

〈華符 芳華絢爛〉

美鈴がスペルカードを宣言した途端、大量の弾幕が僕の方に迫ってきた。

これら全てを捌くのは無理だと判断し、僕もスペルカードを宣言する。

〈飛刃 スキップ・ザ・リップパー〉

大量のナイフが出現して飛んでいく。

美鈴の弾幕を僕のナイフが一つ一つ相殺していく。

だが美鈴の弾幕の量がナイフよりも圧倒的に多い。

全てのナイフが無くなりスペルブレイクされると、今まで押しとどめていた弾幕が再び迫ってきた。

僕はもう一枚スペルを取り出し宣言した。

〈光符 メテオールスパーク〉

左手の手のひらを前にかざし、巨大な光線を放つ。

その光線はまるで流星のように弾幕を打ち消しながら美鈴へと、一直線に飛んでいく。

このスペルカードは僕が創ったものではなく、幽香さんから貰ったスペルカードを自分で用いてアレンジしたものだ。

ちなみにこのスペルは、かなり昔にとある魔法使いにばくられたとかなんとかと幽香さんが言っていた。まさかアリスじゃないよな……まさかあ。

急に飛んできた光線を美鈴は避けることが出来ず、その場で防御の構えを取った。

拮抗する美鈴と光線、しかし美鈴は耐えられず光線に飲まれていった。

土煙が晴れるとそこには、ボロボロになった美鈴が横たわっていた。

わあ、幽香さんのスペルカードめちやくちや強いやん。

横たわっている美鈴に近寄る。

どうやら気絶しているだけのようだ。

僕は美鈴を近くの木陰に運んで、紅魔館の中へと足を進めた。

そうだ紅魔館に行こう 第2話

〔紅魔館〕

紅魔館の中は赤がメインの装飾ばかりだった。正直な話、目に悪いでしょこれ。目がチカチカしてきた……。

さてさて、どう進もうかな……っとうん？

入ってすぐの中央階段にメイドらしき誰かが立っていた。

見つかってはまずいと思い、近くの壁に張り付き隠れつつ様子を見る。

しかし、そつと覗いてみたが先ほどの人はいなかった。

それならば堂々と覗いたらどうだろうか——見つかるだろ。馬鹿か僕は。

「何か御用でしょうか？」

「ふえっ!？」

急に目の前に居なかつたはずの人が現れた。

見た目はメイドの格好をしていた。恐らくさつきの人だろう。

びっくりしたわ。心臓に悪いわ。

「一つ聞きたいんですけど、この空の異変の犯人はあなた達ですか？」

「はい、そのとおりです。」

やはりこの紅魔館が異変の原因だったか。

「なんでこんなことを起こしたんだ？」

「我が主人がこの幻想郷を支配下に置いたためです。」

「それは大層なことを考えたもんで。でも、その事とこの空は何か関係があるのか？」

「我が主人は吸血鬼です。故に太陽を遮るために、空を紅い霧で覆ったのです。」

なるほどそう言う事か。

つまり吸血鬼の主人が幻想郷を征服するためには太陽が邪魔だった。だからこの紅い霧で太陽を遮った、というわけだ。

なんと迷惑な話だ。

「お分かり頂けたようですね。我々は別に幻想郷を支配したからといって、あなた達人間を取って食うわけではありません。ですからこのままお引き取り願います。」

「それはできないな。吸血鬼よりも恐ろしい人から解決して来いと言われたんでね。」
「そうですか。では仕方ありませんね。あなたをここで排除致します。」

そう言ううとメイドはナイフを構えた。

やれやれ、ここの人達は血気盛んだな。

僕もショットガンを構える。

両者の緊張が高まっていた時、中央階段から声が聞こえた。

「待ちなさい咲夜。」

声の主は小さな女の子だった。だが背中に羽らしきものがある。

「お嬢様どうしたのですか。」

お嬢様？あの人が紅魔館の主人ということなのか？幼女……幼い子供じゃん。

まあ確かに背中に羽があるから吸血鬼っぽいけど、まさかこんな少女だったとは。

「ほう……お前が片倉か……」

なぜ名前を知っているのだろうか、名乗った記憶はないのだが。

「別にそんな警戒しなくともよい。私の能力は運命を操る程度の能力。お前の名前くら

い名乗らなくとも分かるさ。」

運命を操る程度の能力？

何を言っているのか僕にはさっぱり分からない。

「紹介が遅れたな、私の名はレミリア・スカーレット。そしてそのメイドは十六夜咲夜

だ。」

「僕の名前は片倉、外の世界から来ました。」

「いちいち言わなくとも私の能力で分かるぞ。」

「いえ、一応礼儀ですから。」

「フツハハハ、面白い奴だ。気に入ったぞ。」

レミリアは大きな声で笑っていた。

それを見ていたメイドである咲夜は何故か両手で鼻を抑えて小言で何かを呟いていた。

（カリスマっぽく見せるお嬢様、なんと可愛らしいのかしら）

あー今のは聞こえなかったことにしよう。

「よし片倉よ、私と戦うぞ。」

んっ？なんで急に戦うくだりになったの？僕には分からないよ。

「この私を倒して、異変を解決させるのだろうか？」

あっそうだとすっかり忘れてた。結局戦うしかないのかトホホ…

レミリアは階段を降りてきた。その姿は圧倒的なカリスマ性を出しており、僕は思わず後ずさりしてしまう。

刹那、レミリアが階段からずっこけた。

すると、さつきまで鼻を抑えていた咲夜が何故か気絶した。気絶する瞬間、お嬢様がナントカ、と言っていたが気にしないでおう。

「フッフッフ…さあ戦いの用意はいいな片倉。」

レミリアはさつきの出来事を無かったかのように見事に振舞っていた。ここまですく

ると凄いやなあの人。

「それじゃあ気は乗らないけどいきますか。」

刀を形成しレミリアとの距離を詰める。

吸血鬼がどれほど強いかわからないがやるだけやってみるとしよう。

レミリアは大きな槍のようなものを創り待ち構えていた。

槍と刀では相性が悪すぎる。一旦後ろに下がりショットガンで攻撃しようとしたその時、レミリアがありえない速さで距離を詰めてきた。

頭を的確に狙う突きをなんとか凌ぐ。

吸血鬼の力を甘く見すぎていた。まさかここまで身体能力が高いとは。

一撃目の突きを凌いだが、まだまだレミリアの攻撃は終わらない。その攻撃をギリギリで凌ぎ続ける。

このままではジリ貧だ、いずれこちらが力尽きるだろう。

僕は後ろに下がりスペルカードを宣言した。

〈飛刃 スキップ・ザ・リッパ〉

大量のナイフをレミリアに向けて飛ばす。

だがそのナイフ全てをレミリアは槍で弾き返した。

「どうした、その程度か？」

「圧倒的すぎる力の差があった。そもそもスペルカードを完全に捌かれた時点で諦めるべきだ。だがそんなことはしない。」

なぜなら、この戦いを僕は何故か楽しんでるからだ。

まるでもう一人の自分が心の中にいるかのように、僕は、この状況を楽しんでいる。いつもなら決してそんなことはない筈なのだが、何故か楽しんでる。

シヨットガンを連射しながら、新しいスペルカードを創る。

今なら自分の限界を超えられそうな気がする。そんな気がした。

そして形成された新たなスペルカードを即座に宣言した。

〈閃刀 神速之風刃〉

緑色に輝く刀を創り出す。しかしいつも創っている刀とは力の大きさが違う。

本当は今の自分の力ではこの刀を創ることは出来ないはずだ。だが、自分の限界を超え創った。

なぜ出来たのかは分からないが、出来たものは仕方がない。今は考えるのはよそう。

「ほう……自らの限界を超えるとは。面白い、さあ来い。」

僕はレミアアに近づくと事はせず風刃を横に振った。

刀とは本来近づいて相手を切るものだ。近づかず刀を振ったところで相手を切ることは出来ない。

だが、レミリアの腕は刀で切られた。実際には切られていない。しかし切られた跡は、どう見ても刀で切られたような跡になっていた。

レミリアは何が起こったかわかっていない。

次はレミリアの足が切られた。

続けざまに脇腹のあたりも切られる。

「なるほど分かったぞ、その刀の原理が。」

この風刃は魔力や霊力を使い、遠くからでも斬撃を可能とする刀だ。しかしその斬撃は目で見るとはほぼ不可能。

だが、この風刃の本当の力はそれだけではない。本当の力は、『使用者の機動力を格段にあげる』だ。

斬撃を受け、なくなった腕をレミリアは治す。

その隙を見逃さず、レミリアの後ろに回り風刃を振り下ろす。

「なん…だと…!?!」

あまりの速さに追いつけないレミリアは、ギリギリで避けるのが精一杯だった。

だが次第にレミリアはこの速さに追いついてきた。

「フツ…この私に本気を出させる程の力があつたとはな。やはり貴様は私が見込んだとおりだ。」

〈神槍 スピア・ザ・グングニル〉

レミリアがスペルカードを宣言した。

空に手をかざしグングニルを創る。形は先ほどの槍と変わりないが、大きさは先ほどの槍より5倍近くの大きさになっている。

「さあ、受けてみる片倉アアア！」

レミリアはグングニルを投げた。

僕も残った靈力を風刃に注ぎ、グングニルに向かって突撃する。

拮抗する風刃とグングニル。

二つの大きな力が衝突したことで周りの壁や床にはひびが入る。

次第に風刃が押されていく。僕は最後の力を振り絞り、力を込める。

風刃が打ち消される。

力を全て使い切った僕はその場に倒れ込む。

最後に僕が見たのは、迫り来るグングニルだった。

目を覚ますと赤い天井が広がっていた。

確かグングニルが迫ってきて……それから……どうなったんだろう。

コン、コン、とドアをノックする音。

「どうぞ。」

「失礼します。」

入ってきたのはメイドの咲夜だった。

「具合はよろしいですか？」

「ええ。ところで僕が意識を失った後はどうなりましたか？」

「驚きましたよ。お嬢様があなたを助けるためにご自身を盾にしてグングニルを受けたのですよ。」

僕が意識を失った後にそんなことがあったとは。

ていうかレミリアは大丈夫なのだろうか。吸血鬼といえども流石に危険なのではないのだろうか。

「それじゃアレミリアさんはどうなりましたか？」

「実はグングニルは手加減してあったようで、すぐに元気になりました。」

え……あのグングニル手加減してあったんだ……。

もしも本気だったら僕は死んでただろう。

「そういえば、お嬢様が片倉様を呼んでおられました。」

いったいどうしたのだろうか。不思議に思いながら、ベッドから降りてレミリアが居

る大広間に向かった。

「そういうえば、傷とか全部治ってるんですけど、なんでだろう？」

「大広間」

「来たか、片倉よ。」

大広間にやつて来ると、レミリアは大きな椅子に座っていた。

「咲夜さんから聞きました。なんでも助けて頂いたとか。」

「そうだ。まあ客人を殺すようなことがあつてはならんからな。」

「あつ、僕は一応客人扱いなんだ。知らなかった。」

「しかし片倉よ、助けて貰った恩義を返そうとは思わんか？」

「ええ、命を助けて貰ったんでそれ相応の恩を返したいとは思いますが。」

「それならば、今から私が言う事を聞いてくれるな？」

「何だろう、凄く嫌な予感がする。僕の第六感が危険だぞと警鐘を鳴らしてるんだが」

「……。」

「この紅魔館で使用人として仕えてはくれないだろうか。」

「……え？嘘でしょ。僕一応あなたたちを倒そうとした人ですよ？現に門番の美鈴とか倒しちゃったし。」

「どうして使用人を？」

「私はとある運命を見たのだ。その運命によると、この紅魔館がいずれ直面する問題をお前が解決するという運命だ。だからお前を使用人にしようと思ったのだ。」

「いずれ直面する問題？もう嫌な予感しかない。でも断れないよなあ、命を助けて貰ったし。」

「なに、別に不自由な思いはさせぬ。衣食住はこちらに任せておけ。使用人と言えどお前はただここに住めば良いだけだ。」

「それ、使用人とは言わないような……。まあ悪い条件でも無さそうだし受け容れるか。」

「分かりました、この使用人として仕えさせて頂きます。」

「ふむ、感謝するぞ片倉よ。」

「ただし一つだけお願いがあります。」

「何だ？」

「せめてお世話になった幽香さんとかに挨拶してきてもいいですか？」

「やっぱり優香さんとかアリスには挨拶しとかなないと失礼かなと思った。」

「でも許してくれるかなあ。」

「そうか、なら明日から使用人として仕わせることにする。これなら挨拶も出来るだろう？」

軽いな、しかも一日の猶予くれたよ。

「ありがとうございます。それでは早速行ってきます。」

「うむ、行ってこい。明日には必ず帰ってくるのだぞ。」

僕は大広間を出て正門に向かう。

正門には門番の美鈴がいた。傷治るの早いな。

「どうも片倉さん。先日は失礼しました!」

僕を見た美鈴はこちらに駆け寄り、何故か謝ってきた。

「いえいえ美鈴さん、そんな謝らないで下さいよ。」

「いいえ、せっかくの客人に対し攻撃するなど……私、門番失格です。」

そう言って凹む美鈴。図で表すならまさにorzこの状態だ。

「いやいや美鈴さんは、門番としての仕事をしたまでじゃ無いですか。ほら、元気出して下さい。」

「うう……ありがとうございます。それと私のことは呼び捨てで構いませんよ。」

「そうですか、なら僕のことと呼び捨てで、」

「それは出来ません!」

うおう、急に元気になったなあ。この人結構喜怒哀楽激しいな。

「分かりました。とりあえず僕はこれからお世話になった人へ挨拶しに行くので、失礼

しますね。多分また明日には戻って来ますけど。」

「ああ！使用人になられたのですよね！これから宜しくお願ひします。それでは気をつけて下さいね。」

美鈴は手を振りながら見送ってくれた。てか、情報伝わるの早すぎでしょ。もう使用人になったの知ってるのかよ。

正門を後にし、僕はまず一番お世話になっただろうアリスの家に向かうことにした。

そうだ紅魔館に行こう 第3話

「アリスの家」

僕はアリスの家でまったりと紅茶を飲んでた。

「あの館に住むことになったのねあなた。」

「ええそうですよ。いやあ短い間でしたがお世話になりました。」

「たまにはこつちにも来なさいよ。」

「そうですね、暇があれば遊びにでも来ます。」

そう言いながら僕は紅茶のおかわりをする。注いでくれるのはもちろん人形だ。アリス? そんなわけないだろう。

「それで? 次は何処に行く予定なの?」

「うーん正直、お世話になったのアリスさんと幽香さんくらいしか居ないですし……。」

「そう……気をつけなさいよ。」

何故か不機嫌になるアリス。もしかして幽香さんと過去に何かあったのだろうか。

アリスに八つ当たりされるのも嫌なので、僕は紅茶を飲み終わると玄関へ向かった。

「あら、もう行くのかしら?」

「ええ、人里にも寄りたいたいですし。」

「気をつけて行きなさいよ。」

見送られながら僕は人里へと歩いていった。

急に前方から何かがやってきた。

黒い服を着ている女の子……この前僕を食べようと襲ってきた妖怪だろう。

しかしその子はフラフラとおぼつかない足取りで歩いており、しまいにはその場に倒れ込んでしまった。

「おーい、大丈夫かい？」

近づくと、その妖怪はこう言った。

「お腹……空いた……。」

どうやらお腹が空いたらしい。

なにか食べ物はないものかとバックバックを漁る。すると先ほどのアリスの家で食べたクッキーが入っていた。恐らくアリスが人形を使ってさり気なく入れておいたのだろう。

僕はそのクッキーを妖怪にあげる。するとその妖怪は美味しそうにムシヤムシヤと

クッキーを頬張っていた。

「美味しかった！ありがとー。」

「それは良かった。ところで君の名前は？」

「私はルーミア！お兄さんは？」

「僕は片倉、元傭兵さ（キリツ）」

僕は決め顔でそう言った。別に断じて小さい子が好みとかそんなんじゃない。断じてだ。

「そーなのかー。それじゃ私は行くね。またねーお兄さん。」

「うん、またね。」

そう言うのとルーミアは元気に飛んでいった。飛べるのって本当に便利そうだな。

僕は気を取直して、人里へと進んでいった。

く人里く

今はお昼を少し過ぎた辺りの時間、そろそろお昼でも食べたいところだ。

とりあえず、前に来たお店に行ってみることにする。

しかし相変わらず僕の格好は目立つなあ。

「おつーまた来てくれたのかい、いらつしやいー！」

相変わらずこの親父は元氣そうだ。

メニュー見て気づいたがこのお店、定食とかもあるようだ。

とりあえずお腹が空いていたので、定食を食べようかな。おつこの煮魚定食とかいいな。

「すみません、この煮魚定食を下さい。」

「あいよ！毎度あり！」

そういえば、幽香さんに初めてあつたのもこの店の中だったな。もしかしたら来るかも。

そう思った時、入口から誰かが入ってきた。

一瞬、幽香さんかと思ったが、全然違う人だった。

「はいよ、煮魚定食お待ちー！」

テーブルの上に大きな煮魚やご飯が置かれる。おお美味しそうだ。

何と言つてもこの煮魚の絶妙な味付けがいいね。甘すぎず辛すぎず、しかも身がホロホロしていて美味しい。

ご飯もつやつやで硬さもちょうどいい。この店気に入っちゃったな。

煮魚定食を美味しく頂いた後はデザートを頼むことにした。

「すいません、あんみつ一つ。」

「おつ！毎度あり！」

あんみつとか久々食べるなく。あつちの世界では甘いものとか、なかなか食べれなかったし。

「あいよ！あんみつお待ち！」

さてさて、こここのあんみつはどうか。

おおこれはまた素晴らしい。色のバランスがいい感じに整えてある。食欲がそそられるなあ。

僕はぺろりとあんみつを食べ終わると、会計をして、店を出る。

店を出る時、さきほど店に入ってきた女の人から声をかけられた。

「あなた、この店は気に入ったかしら？」

「ええそれはもちろん。」

「それは良かったわ。私はこここの常連なのよねえ。」

やつぱりこの店は人気なのかな。今度アリスにも教えてあげようかな。

「それじゃ失礼しますね。またお会いできたらいいですね。」

「ええ、そうね。それと異変の解決、流石だったわよ。」

扉を閉める間際、女の人が最後にそう言った。

その時は何も思っていなかったが、歩きながらその言葉の不可解な部分に気づいた。何故あの人は異変を解決したのが僕だと知っているのか。

不思議に思った。最初は紅魔館の人かと思っていたが、あんな人はいなかった。だが今更そんなことを気にしても遅いので気にしないことにした。

「紫 side」

紅魔異変を解決したのがまさかあの男だったとは、思いもよらなかった。

幻想郷に何かをもたらすと思っていたが、早くもこんな事をするとは。

「紫様、またあの店に行つていらしたんですか。」

「ええ、あの店の料理は美味しいわよ。藍。あなたも一度行つてみなさい。」

「そうですね。」

「ただ彼はまだまだ幻想郷に様々なことをもたらすことだろう。私は隙間を見ながらそう思った。」

「片倉 side」

幽香さんの家に着いたが中には幽香さんは居なかった。恐らく花の水やりにも行っているのだろう。

「あら？帰ってきたのかしら。」

「どうやら戻ってきたようだ。後ろを振り向くと案の定、じょうろを持った幽香さんが

居た。

「どうやら生きて帰って来たようね。」

「そうですね、〃何とか〃生きて帰って来ました。」

それは良かったわ、そう言いながら唐突に僕に弾幕を放つ幽香さん。

驚きつつも僕は瞬時にその弾幕を刀で弾いた。

「ちよっ！何してんデイスカ幽香さん。オンドウルギツタンデイスカ！」

あまりに焦りすぎて、最後の方は言葉がおかしくなってしまった。オンドウル語？知らないね。

「少しは成長したようね。」

どうやら、成長したかの確認のようだ。それにしても暴力的な確認の仕方だな。

「それで？何しに来たのかしら。」

「ああ、ここに来た理由はですねカクカクシカジカ」

「やっぱり負けたのね。」

やっぱりって何ですか幽香さん。もしかして負けるの知ってて解決させようとしたの？もしそうだったら全力で泣きますよ。

「それで、あの館に住むことになったのね。」

「そうです。幽香さんには一応お世話になったんで挨拶に行こうかなと。」

「ウフフ、律儀な男よねあなたって。」

「そうですか？レミアアさんにもおんなじ事言われたけど、そんなことは無いような気が……。」

「しかし、すっかり暗くなりましたね。」

「あら、そうね。」

色々と話しているうちに、外はすっかり夕方になっていた。

「これじゃあ人里に戻っても、夜になるし危険だな。でもスペルカードとかあるし何とかなるかな。」

「今日は人里に行かないで泊まりなさい。」

「どうやら泊めてくれるようだ。いやあありがたいなあ。」

「でも何か裏がありそうな気がするの僕だけかな？」

「それじゃ泊まっていきます。」

「なんだかんだで幽香さんの家で寝るのは初めてだなあ。あの時は気絶して、地面で寝てたわけだし。」

「なら早速、外に行きましようか。」

「ん？泊めてくれる筈なのに、どうして外に出るんだらう。何か嫌な予感がしてきたぞ。」

「泊める代わりに、私と軽く戦いなさい。暇で仕方ないのよ。」

はい、的中しました。この戦闘狂を信用した僕が馬鹿だった。

てか、暇だから戦うとかおかしくないですか？

「いやあ、どうせこの前と同じですよ？だから止めときませんか？」

むしろこの前よりも恐ろしい目にあいそうな感じがするんだけど……。

「あら、私に隠そうとしても無駄よ？あなた、かなり成長してるわよ。あと義手の力が妖力から魔力に変わってるのわよね？」

うぐつ、バレていたか。何故分かったのだろう。

「さあ、早くしないと本気でいくわよ。」

「分かりました、だから本気だけは勘弁してください。」

魔力で形成した刀を創り出し、僕は構える。

「なかなか質の高い魔力ね。」

「それじゃ、いきますよ！」

刀にありつたけの魔力を注ぎ込み突撃する僕。

その後は、幽香さんにボコボコにされたのは言うまでもない。

てか、幽香さん強すぎ。

朝の眩しい日差しが窓から差し込む。

いやあ天気がいいと気持ちがいいね。身体中痛いけど。

結局、風刃を使っても幽香さんには全く歯が立たなかった。もしかしたら幽香さんは、幻想郷最強かもしれないな。

「あら、おはよう。」

「おはようございませす。」

幽香さんは優雅に朝食を食べていた。ちよつとは僕の体の心配とかしないんですか？今の僕は身体中打撲だらけですよ。

「朝食はいるかしら？」

「いえ、そろそろ紅魔館に戻らないと怒られそうなので、大丈夫です。」

多分怒られないだろうけど。レミリアさん、意外に優しいし。

「そう、それは残念ね。」

「そんな残念がらないで下さいよ。たまにはここに来ますから。」

「また来る時はもつと強くなってから来なさいよ。じゃないと承知しないわ。」

「分かりました、それではお世話になりました。」

うん、来るのは遠慮しておこう。

僕はお礼を言いながら固く決意するのだった。
それじゃ、紅魔館に急いで戻ろうかな。

そうだ紅魔館に行こう 第4話

〈紅魔館正門〉

正門に行くくと、門番の美鈴がナイフで刺されまくっていました。

「ちよ!? 美鈴どうしたの!」

「あつ、片倉さんお帰りなさい」

「いやいや、何でそんな呑気にしてるんだよ。ナイフが沢山刺さってるんだけど……」

「ああ、これはいつものことですよ。だから気にしないで下さい」

この光景がいつもとか、恐ろしすぎじゃない? 紅魔館。

やばい、超怖くなってきた。これなら幽香さんの方が……いや、あれもあれで怖いわ。

「そうそう、咲夜さんが中央階段で待つてるそうです」

どうやら、咲夜さんが待っているらしい。

美鈴のことが心配だが「大丈夫だ問題ない」とのことなんで、咲夜さんが待っている

中央階段へ行くことにした。

中央階段に行くのと、咲夜さんとレミリアさんが居た。

「帰ってきたか、片倉。帰ってきて早々悪いが、お前にはこれからの事について咲夜に教わってもらおう」

「分かりました」

「それでは、私について来てください」

言われたとおり咲夜さんについて行く。

少し歩いていくと、とある部屋の前に着いた。

「この部屋があなたの部屋になります。中に着替えがあるので着替えてください」

部屋の中には赤いベッドがあり、その上に着替えが置いてあった。

「次は、仕事内容についての話をします」

次は仕事の話のようだ。いったいどんな仕事があるのか。

いやあ、こういう仕事は初めてするから、ちよつとワクワクするなあ。

「基本的にありません」

「……ええ？」

「ありません」

えええ本当にないのかよ。返せよ！僕のワクワク返せよ！

「強いて上げるなら、お嬢様のわがままに付き合うことくらいです。それ以外は自由で

す」

「は、はあ……分かりました」

もはや使用人というか、ここに住人と同じな気がする。

というか、わがままに付き合うとか、それ仕事じゃないでしょ。

「それでは私は仕事に戻ります。何か分からないことがあったら、いつでもお尋ねください」

そう言うとき夜さんは、目の前から消えた。

多分あの人の能力なのだろう。いったいどういう能力なのか。

それよりもこれからどうしたものか。まだまだ紅魔館の事はあまり分からないしなあ……。

あくあ暇だなあ、面白いこととかなないかなあ……

そうだ！あの人がいるじゃないか！

僕は正門で美鈴と一緒に門番の仕事をしていた。

暇だったら美鈴のところに行くのが一番だと思っただけ……

「ねえねえ美鈴」

「何ですか片倉さん」

「暇」

「ですね」

何か面白いこととしてくれるかなと思っただけで、結果的に暇だった。

お話ししようと美鈴を見たら居眠りしてるし。

「おい美鈴、起きろよ。それでも門番かよー」

それでも起きない美鈴。この人どんだけだよ……。

嫌がらせに何かしてやろうかなと模索していると、突然美鈴の頭にナイフが刺さった。

「ウギヤアアアアア！」

あつ起きた。今度からナイフを使うのもありだな。

しかし、このナイフは何処から飛んできたのだろうか。不思議に思っていると、咲夜さんが現れた。

「はあ……あなたはまた居眠りして……」

「ゲッ……咲夜さん……」

なるほど、このナイフは咲夜さんが投げたのか。

ということは、あの時見たナイフだらけのあれも、咲夜さんがしたのか。

うん、今度から咲夜さんには逆らわないでおこう。

「片倉様、お嬢様がお呼びです」

「あつはい、分かりました」

すまん美鈴、僕の力では君を助けることはできないよ。たけど君の勇姿は忘れない。心の中で美鈴に敬礼を捧げながら、僕はレミリアさんの居る大広間へ向かった。

「レミリアさん、どうしたんですか」

「おお片倉、呼び出してすまないな。実は一つお願いがあるのだ」

お願い？どうしたんだろ。

まさか、何処かの戦闘狂みたいに暇だから私と戦えとか言うんじゃないだろうな。もしそうだったら逃げるしかない。

「大図書館に行つて、この本を返しに行つてはくれないか？」

何だ、ただ本を返すだけじゃないか。心配して損したわー。

本を受け取る。本の題名は、*悪魔の恋空*。

吸血鬼なのに悪魔の恋空というのはこれはいかに。というかレミリアさんって恋愛小説読むんですね。やつぱり、見た目はカリスマでも心は乙女なんですネ。

「分かりました。大図書館は何処にありますか？」

「大図書館の場所ならその廊下を真つ直ぐ行ってカクカクシカジカ」

場所をレミリアさんに聞いた僕は、この恋愛小説を返すために大図書館に向かった。思つただけで、レミリアさん自身が行つたほうが早くね？

大図書館は名前の通り大きな図書館だった。いや、図書館よりも巨大な本棚という方が正しいか。

とりあえず誰かいないか探してみる。

すると、かなりの高さに積み上げられた本の隣に、紫髪の人が椅子に座り本を読んでいた。

「すいませーん。この図書館の管理人の方ですか？」

「……………」

無視されたー！本に集中するのわかるけど、人の話を無視するのはいけないよ。僕の心はかなり凹んだよ？

「すいませーん！聞こえますかー！」

「うるさい奴ね。聞こえてるわよ」

ようやく返事したよ。でも初対面にうるさい奴はないと思うんだが……。ああまた余計に心が凹んだ。

「何の用？」

「この本をレミアリアさんに返してこいと言われたので、返しに来ました」

「ああその本ね。小悪魔ー」

「どうなされたんですか？パチュリー様」

そう言いながら出てきたのは、悪魔だった。名前の通りだなー。

それで、この人がパチュリーさんか。覚えところ。

「この本、あなたのよね。返すそうよ」

「ああ、私がレミアリア様に貸した本ですわー」

そう言うと、小悪魔さんは何処かへ飛んで行った。

「ところであなた、新しく使用人になった子よね。レミイから聞いたわ」

「ええ。でも使用人というか……ほとんどこの住人と同じですが……」

「そう……まああなたが使用人であろうが、そうでなからうが、どうでもいいのよ。とにかく私の邪魔さえしなければそれでいいわ」

何と言うかパチュリーさん冷たいなあ……。もしかしたら嫌われてるのかな？

するとパチュリーさんは、本を閉じて立ち上がった。

「あなた、ちよつと私の実験台になりなさい」

よし逃げよう。絶対に逃げよう。死んでも逃げよう。

「ちよつ！待ちなさい！」

いやいや、絶対に逃げますよ？門番がナイフで刺されるのが日常のようなこの館で、実験台になれなんて嫌な予感しかないでしょ。

逃げようと走っていると、突然大きな壁にぶつかったような勢いで体が弾かれた。

よく見ると、ぶつかった所から波紋が広がっているのが見える。何だこれは？

「はあ……はあ……これで逃げられないわ」

「何ですかこの透明な壁は？」

「魔法結界よ、いい加減観念しなさい」

魔法結界？つまりパチュリーさんもアリスと同じ魔法使いなのか。

結界は壊せそうな感じではなかったので、観念することにした。

「言い方が悪かったわ、少し私と戦うだけでいいのよ」

ちくしょう、言い方の問題じゃねーよ、この紫根暗女……あつ睨まれた、ごめんなさい

い許してください。

ああもうこうなつたら戦うしかないか。

「戦うと言っても、私の新しい魔法をあなたには受けてもらうだけだから」

それくらいなら余裕……じゃないよな、下手したら死にそうな予感が……

「さあいくわよ、準備はいいかしら？」

ああ駄目だ、回避できたはずのトラブルにまた巻き込まれたよ。

パチユリーさん、まだ心の準備が出来てないのでもう少し待つてくれないですか？

出来るなら、今すぐにでもやめて欲しいですが……。

「それじゃいくわよ、せいぜい死なないように頑張るなさい」

〈水符 プリンセスウンディネ〉

ちよおおお、あの紫根暗もやし女、準備出来てないのに急に宣言しやがった。

パチユリーの中心に水が流れていく。しかしよく見るとこの流水は、小さな水色の弾

幕が集まっていることが分かる。

ちよつと待てよ、この小さい弾幕一つ一つが飛んでくるとかじゃないよな……

案の定、川のように流れる弾幕が僕めがけて全部飛んできた。

もういやアアア、はっ！でも待てよ、あの弾幕は小さいから威力低そうだし何とか

なるかも。よし！いけるぞ、これなら余裕じゃないか。

隣にあった本棚が粉碎されました。うん、余裕じゃねえ。

うわアアア、もうダメだ、おしまいだあ。

こうなったらあれを使おう、そうしよう。

「言っておくけど、スペルカードを使うのは無しよ。実験にならないじゃない。」
嘘おとおおん、スペルカード無しとかただの拷問じゃん、もう嫌だア。助けて誰

かアアア。

しかし誰も助けに来ないのが現実。

悲しいけどこれって、実験なのよね。

結局、実験（拷問）が終わったのは、ボコボコにされて、動かなくなるまで続きましたとさ。

「め、めいりん……たすけて……」

「あらあ、片倉さん大丈夫ですか？」

どうして君はそんな涼しい顔で、大丈夫？とか言えるんだよ。

僕を見てみろよ、全身血だらけだぞ？これ下手したらマジで死ぬぞ？

「あ、あの紫根暗もやしが……もやしが……」

「ああ！パチュリーさまのことですね！」

だから何で君はそんな涼しい（ry

とにかく、この傷を早く癒して欲しい。

「私もよく魔法の実験台にされてましたね〜懐かしいなあ〜」

「そんなこと……どうでも……いいから、何とかしてくれ……」

「ああ、そのくらいの傷でしたら、私の気の力で治せますよ」

美鈴が僕の身体に触れると、見る見るうちに傷が治っていく。おお気の力凄いな。

「はい、これで大丈夫ですよ」

「助かったよ美鈴」

いやあ、美鈴は凄いなあ。まさに実家のような安心感がそこにあるような感じだよ。

「そうそう、片倉さんからお手紙来てましたよ」

手紙？誰からだ。

手紙の差出人は……アリスからだ。

どれどれ……どうやら、にとりが近いうちに作業場に来いとこの事らしい。

これまた、にとりとは珍しいな。また新しいものでも造ったのか。

どうせまた新しい道具の実験台にするんだらうな。んっ？実験台？うっ……頭が

……

「大丈夫ですか片倉さん？頭痛いなら治しましょうか？」

「いや、大丈夫だよ」

でもにとりの作業場は遠いから歩きだと無理だしなあ。

アリスは飛べるけど、命の危険があるし……

誰か飛べる人はいないものか。

んっ？待てよ……一人居るなここに。

「ん？どうしたんですか、片倉さん？」

「美鈴つてさあ……空飛べる？」

「ええ、飛べますけど、どうしたんですか？」

よしきた！ここに飛べるやつがいるじゃないか。明日にでもにとりの所に行くとしてよう。

「明日、にとりの作業場に行きたいんだけど、遠くて大変だから、美鈴が僕を背負うなり何なりして一緒に飛んで連れてつてくれない？」

「別に構いませんよ？ですが…門番の仕事がですね……」

ああ門番の仕事があつたな……って待てよ！いつも居眠りしてるくせして、門番の仕事が……とかよく言えるな。ナイフで刺すぞ？刺しちゃうぞ？

「それなら問題ありません」

その時、咲夜さんが急に現れた。神出鬼没だなあこの人は。能力なんだろう、あつてレポートとかかな？

「げっ……咲夜さん、私は居眠りしてないですよ！ちよつと居眠りしたとか断じてない

ですよ！」

ああ自ら居眠りを自白したよ。馬鹿な美鈴、もうどうなっても知らんぞ。

「それで、どうして大丈夫なんですか？」

なぜ大丈夫なのだろうか、もしかして美鈴はいらない子扱いにされてるのかな？ いやいや、そんなことは無いか。

「お嬢様から、明日の門番は美鈴ではなく咲夜がしろ、とおっしゃられたので」

ほう、これまたナイスタイミングですな。

ああそうか、レミリアさん運命見えるからそれくらい分かるか。便利だなああの能力。

でもやっぱりあの能力の意味分からないや。だいたい運命を操るってどういう事なんだろうか。うー……

「えっ!? 明日門番の仕事無しですか!! やったー!」

ちよつ美鈴、咲夜さんの目の前でそんなこと言ったら……

ああ、咲夜さんがナイフを取り出したぞ、あつ投げた。

「ギャアアアアア」

「勘違いしないでください、あなたの為の休みではありません。片倉様の休みですよ」

えっ? 僕の休みですか。レミリアさん優しいなあ。おもわず涙が出てきそうだよ。

出ないけど。

「それでは失礼します。美鈴、あなたは後でお話があるので覚悟するように」

そう言うのと咲夜さんは消えた。やっぱりあの能力はテレポートだよ。絶対そうだよ。

美鈴は……あつ顔が真っ青になってる。

「じゃあ美鈴、明日は宜しくね〜」

「嫌だ死にたくない、嫌だ死にたくない、嫌だ死にたくない、イヤダシニタクナイ」

そろそろ自分の部屋に戻って明日の準備しようかな。

美鈴がなんか言ってるが気にしないことにする。

てか咲夜さん、美鈴に何をやる気だろう。気になるなあ。

いや、よそう。絶対に巻き込まれること間違いなしだ。

さらばだ美鈴、明日元気で会えたらいいな……

この後、正門から大きな叫び声のようなものが聞こえたけど、あれは何だったのだろうか。僕には分からないなあ……

そうだ紅魔館に行こう 第5話

飛ぶと言われて、皆さんはどんな事を想像しますか？

「鳥のように空を飛ぶ」や「その場でジャンプする」などといった事を考えますよね。

私だってそうです。しかし、この二つの想像の「中間に位置する意味を持った飛ぶ」というのを行えばどうなるのか、皆さんは想像できますか？

難しいですか？なら教えてあげましょう。

こうなります。

「いやああアア！止まってええええええ！」

僕は美鈴の背中に背負われながら、飛んでいた。

ただ飛ぶだけなら慣れているから、こんなに叫ぶことは無い。じゃあ何故叫ぶかって？

飛び方に問題があるんだよなあ〜これが。

美鈴は一步一步、力強く地面を蹴って飛んでいた。

その瞬間、とてつもないGが僕の身体にかかる。

このとてつもないGが、僕を叫ばせている原因だ。

恐らく常人なら気絶間違いなしだろう。僕だって、ギリギリ意識を保っているが、そろそろ限界に近い。

美鈴の方はというと、

「いやあ、幻想郷つてなかなか広いんですね。今度、散歩でもしようかなあ」

この余裕っぷりである。ちくしよう、美鈴なんか任せるんじゃないか……

こんな事になるくらいなら、人形の方が……いや、やっぱりあれも嫌だ。

ていうか何が散歩だよ、こんな妖怪だらけの中を優雅に散歩出来るわけないだろ。

あつ駄目だ……意識が……遠のく……

「あれ？片倉さん、大丈夫ですか？」

うるさいよ……美鈴……、後で……覚え……と……チーン

幻想郷に来て何回目かも分からない気絶をまたしても体験した。

いやあ、ようやくにとりの作業場に着いた。

かれこれ30分くらい気絶してたけど、なんとか到着致しました！

「うわあ、こんなところがあるんですね〜」

この呑気な奴は後で咲夜さんにでもやられてしまえ！

なんてことを心の中でそう叫びながら、作業場の扉をノックする。

しかし、反応はない。もしかして留守か？

すると美鈴が叫んだ。

「片倉さん、後ろに何かが居ます！」

あくなんかこの光景見たことあるなあ。なんでだろう、不思議だなあ。たしかこの後にとりが出てくるよなあ。

「あやや、見つかりましたか……」

そうそう、こんな感じであややって言つて……ん？あやや？

「えっ誰!？」

現れたのはにとりではなく、背中に黒い翼を持ち烏帽子を被った人だった。

鼻は天狗のような感じではないが、烏帽子を被るその姿はまさに天狗のようだった。

「もしや天狗の妖怪ですか？見た目天狗っぽいし……」

「いえ、天狗は天狗でも、私は鴉天狗という種族です」

ほう、鴉天狗とは……聞いたことないな。まあでも天狗つちや天狗だからよしとしますか、いや何をだよ。

「それで、その鴉天狗とやらがなんのようですか」

戦闘態勢に入りながら美鈴が警戒しながら聞く。こらこら美鈴、初対面にそんな怖く

したらダメですよ。あつ僕もおんなじ事してたな、にとりに。ごめんよにとり、特に罪悪感とか無いけど。

「いや、それがですね？ここに住んでる河童を訪ねようとしていたら、偶然あなた達が現れてびっくりして隠れたんですよ。あつ、ちなみにその河童とは友達ですよ。それで、よく見ると外来人の人間と最近出現した館の門番の方だったので、つい記者魂でカメラで撮ろうとしていたんですよ。そしたら見つかつちやつてこんな事になったわけです。どうです、お分かりいただけましたか？それと、取材してもいいですか？凄い気になるので」

うん、マシンガンみたいに喋る人だなあこの人。しかも、最後の方とか取材許可取ろうとしてるし。

もう途中から美鈴なんか欠伸して寝ようかしてたよ。こんなところでも君は寝ようとするんだね。むしろ僕、そっちに驚いちゃったよ。かくいう僕も大半は聞いてなかったけど。

まあ簡単に言うと、にとりを訪ねようとしたら、僕たちが来てびっくりしたから隠れた、つまりそういう事か。

すると突然、にとりの家の扉が開かれ、にとりが出てきた。留守じゃないんかい。

「何だか外が騒がしいなと思ったら……片倉と文が来てたのか。それと……誰？」

「私は紅魔館の門番の美鈴と言います」

眠そうな顔から急にシリアスな顔に戻り自己紹介する美鈴。

その切り替えの早さに僕びっくり。普段からそんなシリアスにしてあげば、門番としてももつと格好いいのになあ……

でも美鈴がずっとシリアスだったならそれもそれで嫌だな、なんとなく。

「あ……あの異変を起こした館か、よろしくねー」

「それよりも外来人の方！取材しても宜しいでしょうか！あつ申し遅れました、私は新聞記者の射命丸文と申します。以後お見知りおきを。」

「僕は片倉です、宜しく射命丸さん。」

「それじゃあ早速取材を！」

僕の両手を取り目を輝かせながら取材をしようとする射命丸さん。どんだけ取材したいんだよ、さすが新聞記者。

でも、その前ににとりの用事から済ませたいんだが……

「あーその前に、私の用から済ませてもいいかな文？」

おお流石にとり、ちゃんと僕の気持ちをつかっている。

「えー！嫌ですよ。取材は1分1秒を争うんです！」

「それじゃあ、私の用事が済んだら好きなだけ片倉の取材していいから」

「本当ですか!」

おい待てその河童。なにあっさりと僕を売ろうとしてるんだ。別に取材は良いけど、好きなだけとは言っていないぞ。

そしてその新聞記者も、なに嬉しそうに了承してるんだ。

「今日は片倉に渡したいものがあるんだよ」

「渡したいもの? 何それ、凄いい気になる」

「新しい義手だよ、はいこれ付けてみな」

そう言つて渡されたのは、今付けているものと何ら変わらない義手だった。スピアか?
?

しかし、1つだけ変わっているところがある。義手にボタンが何故か1つ付いているのだが…何だこれ?

「その義手は、今の義手よりも多くの魔力とか霊力を蓄えることが出来るよ」

「へえ〜そりや便利だ。ところでこのボタンは一体なんですか?」

「フツフツ、とりあえず押してみな」

うわあ、すげえ嫌な予感するなあ。このボタンを押したら大爆発するとかないよなあ。あつたら結構洒落にならないぞ、というか死ぬぞ。

ビビりながらボタンを押す。ポチつとな。

すると、どうだろう。身体全体が光る鎧のようなものに覆われたではないか。その鎧は、鉄のような物質ではなく、パチユリーさんの使っていた魔法結界にどことなく似ているもので出来ていた。そしてとても軽い、というか重さが増した感覚が無い。

「おおー！」

「あややー！」

2人も驚いている様子だ。にとりは満足したような顔でウンウンと頷いている。

やっぱり河童の技術は凄いなあ、河童の技術は世界一イイ、とか言ってみたい。いや、恥ずかしいから止めとこう。

「この鎧は一体……」

「その鎧はね、魔力で構成されたものだよ。原理とかは詳しく知らないけどアリスと一緒に作ったから、性能は凄いやー！」

えっアリス!?アリスったら未だに僕の事を気にかけてくれるのか……はっ!もしやアリス、僕の事が……いや、それは無いな、絶対にありえない。天地が逆さになってもありえない。

アリスはまあよしとして、この鎧の防御力ってどんな感じなんだろうか。

「この鎧の防御力ってどれくらいある?」

「そうだねえ……魔力の量と質にもよるけど、人が粉微塵になるくらいの爆発に晒され

たとしても、平然と立って居られるくらいの防御力はあるね」

えっ、何それ怖い、チートじゃん。

でもこれがあれば、あの幽香さんに勝てるのでは——いや、無理だわ。あの人のことだ、多分無理やり鎧をぶっ壊してくるに違いない。

「でも気をつけてね。鎧が破壊されたら、また精製するのに3時間はかかるから」

たった3時間で、チート機能搭載の鎧が直るなら凄い早いような気がするが、まあ良いだらう。流石だよ河童の技術力！

「それじゃ、私の用事は終わりだね。後は文に任せるよ」

そう言い残すと作業場に戻っていくにとり。

そして目を輝かせながら、メモ帳とペンを取り出す射命丸さん。

「じゃあ早速取材を始めますか！」

ああ……こりやかなり時間かかるタイプだわ。目で見て分かるよ。

仕方ない、だったらこつちもとことん付き合っつてやろうじゃないか！

「以上で取材を終わります。ご協力ありがとうございました」

「は……はい……どうもです……」

——甘かった。まさかこれほどまでとは。

あれからかれこれ5時間は話していた気がする。おかげで死にそうだ。

どうせ1時間程度とたかをくくっていたが、5時間も質問攻めにあうとは考えていなかった。クソおあの新聞記者め……覚えてろよ。

ちなみに美鈴はというと、あまりにも長すぎたせいか、途中で寝てしまった。うん、帰ったら絶対ナイフで眉間刺すわ。

「それじゃあ、この取材内容はありがたく新聞の話題として使わせていただきます。それでは！」

そう言い残すと射命丸さんは空高く飛んで去っていった。

空を見上げると、射命丸さんは小さな点くらいまで飛んで行っていた。——速くない？

「う、うーん。あっ終わりましたか？」

コノヤロー……なにスッキリした顔で起きてるんだ。——何だか咲夜さんの気持ちが分かってきたぞ……

美鈴にナイフを刺すのは後にして僕たちも帰ることにした。

分かっていると思うが帰りもあれだ。——そうあれだ。

「ギヤアアアアアアア！」

とにかく、鎧よりも空を飛ぶ機能を追加させるべきだ。
そう思った1日だった。

そうだ紅魔館に行こう 第6話

今はお昼時、紅魔館の正門付近で僕と美鈴は戦っていた。

「うおおおおお！」

突進の勢いを利用し、美鈴に飛び蹴りを繰り出す。

だが美鈴はこれを冷静に受け流し、裏拳を放つ。

それを予測していた僕は、右手でガードし着地した後、左腕に力を纏い力強くボディブロー。これも冷静に受け止められたが構わず右手でボディブロー2発目を放つ。

少し美鈴が体制を崩す。その隙を逃さず、すかさず膝蹴りをくらわし、左のストレートを叩き込み吹き飛ばす。

為すすべもなく吹き飛んだ美鈴だったが、これといって大きなダメージを与えた感じでは無かった。恐らく『気を操る程度の能力』のおかげだろう。

美鈴は立ち上がり、次は弾幕を放ち出した。

弾幕を避けながら美鈴に近づく。

すると、美鈴がスペルカードを宣言した。

〈華符 破山砲〉

美鈴が繰り出した拳から光線が放たれる。急に放たれた為には避ける態勢に入れない。

山を砕くほどの威力を持つと言われているこの技を喰らえば、恐らく大ダメージ間違いないだろう。

そこで義手に新しく搭載された、あの機能を使う。

『魔力鎧展開！』

淡く光る魔法の鎧に身体が覆われる。

美鈴の放った光線に飲み込まれていく。

しかし鎧の力により光線のダメージはほとんど無かった。

「んなっ!?効いてない!」

美鈴の顔が驚愕の色に染まる。

次はこちらの番だ。

〈流刃 コリエンテコルタール〉

慌ただしい金属音を奏でながら大量のナイフが周辺を埋め尽くす。

そのナイフは次第に流水のような形へと変えていった。

ちなみにこのスペルカードは新しく創ったものだ。イメージ元は、パチユリーさんの

〈プリンセスウンディネ〉を参考にしている。

いやあ、パチユリーさんの実験が役に立ったな——いや、役に立ってねえよ！普通に死にかけたわっ！

全てのナイフが一齐に美鈴を襲った。

美鈴はそのやばさに気づいたようで、2枚目のスペルカードを宣言した。

〈華符 芳華絢爛〉

色鮮やかな弾幕がナイフを打ち消していく。

だがあくまでもこのスペルカードは囷だ。

両者のスペルカードによる弾幕で視界が埋め尽くされることこそが、僕の本当の狙いだ。——よしいくぞ！

〈閃刀 神速之風刃〉

緑に輝く風刃を手に、目にも止まらぬ速さで美鈴の後ろに回り込む。

さあこれで決着だ！

刀を美鈴に対して切り込む。ちなみに峰打ちだ、死んでしまうと駄目だからな。

美鈴の脳天目掛けて風刃を振り下ろす。ふっ、決まったな。——あれ？

確かに僕は美鈴の脳天に風刃を振りおろした。振りおろした筈なのだが、そこに美鈴の姿はなかった。——なんでだ？はっ、もしや……

「しまったああアア残像かああアアア！」

「その通りです！惜しかったですね！」

いつの間にか横に回り込んでいた美鈴が、僕の顔面に飛び蹴りをくらわせる。

は、計ったなあアア美鈴！——そのまま凄い勢いで吹き飛ばされ、正門の外壁にぶち当たる。

いやあ、現役プロレスラーのような力強い蹴りだったよ。

でも一言だけ言わせてくれ美鈴、顔面に蹴りは無いだろ。せめて鎧に守られてる所に蹴って欲しかった。——僕はこうみえても普通の人間なんだぞ？

結局、美鈴に負けた。

でも普通に考えてくれみんな、普通の人間とナイフに眉間を刺されても平気な妖怪、どっちが勝つかなんて戦う前からはつきりしてるよな？

そんな言い訳をブツブツと呟きながら、美鈴と一緒に壊してしまつた正門の外壁を修理していた。

「しかし、片倉さんもすっかり強くなりましたよね」

「えっ、そうかな？」

「そうですよ。3週間前は格闘においては私に全くついて来れなかったのに今となって

は、かなりついて来れるじゃないですか。」

にとりから新しい義手を貰ってからの3週間、美鈴の格闘指導を交えた弾幕ごっこを毎日行っていた。

もちろん弾幕ごっこの他にも、レミリアさんのお使いで図書館に行つて本を返したり、パチュリーさんの実験台になったり、実験台になったり、実験台になったり。――

――もしかしたら僕死ぬかもな。

まあそんなこんなで、僕が驚くほど強くなれたのも、美鈴の上手な指導があったからこそだ。

格闘技初心者の僕でも、たった3週間でこんなに強くなりましたア!

まさに、美鈴ブートキャンプだな! 外の世界でも人気がでるぞ。――いや、人気でないだろ。こんな危険なブートキャンプ。

「ふう〜やつと終わったな」

1時間かけ、ようやく外壁の修理が完了した。まあ主に僕がしたんだけどな。

「ふわあく、あつ終わりました?」

この門番……手伝いちつともしやがらなかつたな。――後で咲夜さんにチクつと

いっつ。

「それじゃ、壁も直ったから自分の部屋に戻るとするよ」

弾幕ごつこと壁の修繕で結構汗かいたなあ、とりあえず着替えるとするか。

自室に向かっていると、廊下の向こうから咲夜さんがやって来た。

……こう考えると、咲夜さんがまともに現れたのはこれが初めてな気がする。

「こんにちは、咲夜さん」

「こんにちはは片倉様」

相変わらず礼儀正しい人だね。流石メイド長だ。——レミアアさん関連になる

とちよつとあれだけど。

「そうそう咲夜さん、美鈴がまた門番サボってましたよ」

去り際に美鈴のことをチクっておいた。

僕はこうみえても結構根に持つタイプなんだよ。……ドンマイ美鈴。

「そうですか、後できつく言っておきます。」

そう言うのと、咲夜さんは去っていった。

恐らく後で美鈴の叫び声が聞こえる事だろう。

美鈴の恨みは晴れ、僕は上機嫌で部屋に戻って行った。

暇だ。

着替えを済ませ、僕は至福のひと時を過ごしていた。

暇というのは、本当の贅沢だと僕は思う。

しかしこんなならだらだと過ごしていて良いのだろうか。——ちよつと部屋から出てみるか。

部屋から出てみたものの、どこに行こうか悩む。

美鈴の所は……止めておこう。恐らく美鈴から何か言われそうだ。

そうなると、大図書館くらいしか行くとこないな。でもあそこはちよつと……。

結局悩んだ末に、宛もなく紅魔館を散策する事にした。

いま僕は、とてつもなく焦っている。

暗闇、暗闇、暗闇。何処を見渡しても暗闇が広がっている。

どうしてこうなった……考えるんだ。

暇だったから紅魔館を散策してた。……ここまでは問題ないな。

それで、見たこともない扉があったから開けてみた。……これもまあ問題ないだろ。

扉の先は地下へと繋がっている感じだったから、入ってみる事に——あーこれだわ。いま地下で迷ってるわ。

なんてこった……よりもよって、こんな人気のなさそうな地下で迷うとは。

僕は頭を抱える。……ああ自分の間抜けさに驚いたよ。

とりあえず先に進むしかないか。もしかしたら誰かいるかもしれないし。

手当たり次第に歩いていると、大きな扉が見えた。もしかしたら誰か居るのかもしれない。

そんな淡い期待を胸に扉を開ける。

そこには、見た事も無い少女がぬいぐるみを抱いて座っていた。——可愛い。

おいおいそこじゃないだろ僕。第一声がそんなだったら、周りからロリコンと言われても仕方が無いぞ。

「あなた、誰？」

ほら見てみる、めっちゃ警戒されてるじゃないか。

よく見ると少女の背中には、宝石のような羽が生えていた。……もしかして吸血鬼？まさかな。

よし、ここは格好いい所をこの少女に見せて、仲良くなろうではないか！——別にロリコンじゃないからな。

しかしどうすれば……ああ、そうだ！抱え込み3回宙返り2ひねりを決めれば最高に格好いいはずだ！

少女から距離を急いで取る。ふう、落ち着け自分。深呼吸をする。

ダダダツと走り助走をつけ、勢いをつける。よし、この勢いならいける！

このまま、抱え込み3回宙返り2ひね——グキツ。

ぎやアアアア！足首がああアア痛あああ！見事に失敗した。

だいたい、プロがしそうな技をするからこうなるんだ。僕は深く反省した。

ちらりと少女に目を向ける。

肩が震えている、ああ怖がつてるよなこれ。

「アハハハハハハ、面白い人だねお兄ちゃん！」

少女は大きな声で笑い出した。どうやらツボにはまったらしい。

僕は両手で思わず顔を隠す。——よくよく考えたら恥ずかしくなったのだ。

「お兄ちゃん、名前なに？」

「僕は片倉だよ。ここの使用人かな。君の名前は？」

「私は、フランドール・スカーレット！」

「フランドール……スカーレット？んっ、スカーレット？——もしかして、あのスカーレット？」

「もしかしてだけど、レミリアさんとなんか関係ある？」

「レミリアさん？ああ私のお姉さまよ！」

やはり、予想が当たったようだ。しかしまさか、レミリアさんの妹とは……でもなんでこんな所に居るんだろう？

てかそんなことよりも、ここから出る方法を探さねば。

「ねえフランちゃん、ここから出る方法知らない？」

「知ってるよ！」

おお知っていると。これでようやく自室でゴロゴロ出来るぞ。

「それじゃあ早速教えてくれないかな？」

「えー遊ぼうよ〜お兄ちゃん〜」

フランちゃんがキラキラした目で下から見つめてくる。

おおう、その上目遣いは反則じゃないかな〜フランちゃん。

「で、でも、忙しいし……」

「う〜〜〜」

「そ、そんな目で見られても……」

「う〜〜〜〜〜」

——よし遊ぼう。べ、別にロリコンじゃ無いんだからね！

「よし！遊ぼうか！」

「わーい！やったー！」

「何して遊ぼうか」

「弾幕ごっこ！」

——へっ？弾幕ごっこ？

いやいや、こんな少女が弾幕ごっこしよう！なんかいう筈ないだろ。

もう1度聞いてみよう。もしかしたら、聞き間違いかもしれない。

気を取り直し、もう1度フランちゃんに聞いてみる。

「何して遊びたい？」

「弾幕ごっこ！」

……冗談だろ。

僕は頭を抱え込んだ。

どうしてこの館には血に飢えた住人しかいないんだよっ！

考えろ、考えるんだ僕。この場合は、何か違う遊びを提案してだな——

「おままごととかしない？」

「弾幕ごっこしたい！」

「鬼ごっことか」

「弾幕ごっこ！」

「かくれんぼ！」

「弾幕ごっこ！」

ぐおおおおお……。駄目だ、この子には弾幕ごっこ以外の遊びは存在していないよう
だ。

まだだ、まだ策はあるはずだ。

——小考……長考

——無理……無駄

駄目だ——！諦めるしか方法が思いつかねえ！

ちらりとフランちゃんを見てみる。

……ああ、キラキラと目を輝かせながら、弾幕ごっここの準備を始めようとしている。

「私と遊ぶの……嫌？」

とうとうフランちゃんが耐えきれず、今にも泣き出しそうになる。

いかん、少女を泣かせるなんて、僕の仁義に反してしまう！——別にロリコ（ry
ええええええい！こうなれば、弾幕ごっこだ！

「よし！弾幕ごっこしようか！」

「わ—————い！」

さっきの涙目が嘘のよう。フランちゃんはご機嫌にはしやぎだす。

まあ、でもあのくらいの少女なのだから、そんなに危ない弾幕ごっこになる筈ないよな。

しかし僕は忘れていた。彼女の名前は「フレンドール・「スカーレット」と言う事を。

そうだ紅魔館に行こう 第7話

「ところでフランちゃん、弾幕ごっこって具体的に何するの?」

「えーと、相手をキュツとしてドカーンとさせるの!」

フランちゃんの「キュツとしてドカーン」が何を意味するのかは考えたく無いが、とりあえずは死なない程度で頑張ろう。

しかし、あんなに可愛らしい少女がする弾幕ごっこは、それほど危険じゃ無いはずだ。「それじゃあいくよお兄ちゃん!」

そう叫ぶと、フランちゃんは見かけによらず大量の弾幕を放ってきた。

さてさて、どの程度の威力かな。

ベキベキッ、弾幕が当たったベッドや椅子が跡形もなく粉碎される。——は?

何だその威力はあああ!?

はっ!忘れていた。こんなにも可愛らしい少女だが、実際はあのレミリアさんの妹なのだ。これくらいあって当然だろう。

しまった……っというっかりその大事な事を見逃していた。

自分の愚かさに落ち込んでいると、目の前にあの恐ろしい弾幕が迫っていた。

「うおっ、あぶねー！」

ギリギリ横に飛ぶことで回避する。

「アハハハ楽しいなあ！」

こっちは楽しくねえよ！命懸けだよ！

しかしこのままだと、いずれやられてしまう。

とりあえず反撃に出てみる。

弾幕の間をギリギリで避けながら、フランちゃんに近づいて行く。

もちろんあの『魔力鎧』の展開は忘れない。当たったら重症確定だからな。

なんとかフランちゃんやんの元へと近付いた僕は、力を纏った左腕で思いつきり胴体を殴る。……少女を殴るのはどうかと思うが、今は気にしないでおう。気にしたらこっちがやられてしまう。

だがその渾身の拳は、片腕で止められてしまった。

につこりとフランちゃんが満面の笑みを浮かべる。

——ニコツ、笑顔を返す。

瞬間、視界がぶれ物凄い勢いで体が吹き飛び壁に叩きつけられた。肺の中にある空気を全て吐き出す。

一瞬何が起こったか分からなかった。どうやらぶん投げられたようだ。……どんだ

け力強いんだよ。流石は吸血鬼様だ。

ええええええい！こうなつたら、出し惜しみは無しだ！スペルカード使つてやる！

〈飛刃 スキップ・ザ・リップパー〉

毎度の如く大量のナイフがフランちゃんへと飛んでいく。——この技も見飽きたな……今度改良しようかな。

「アハハ凄いいい！」

笑いながらナイフを避けたりたたき落としたりするフランちゃん。

こちらにも負けじとナイフを飛ばすのだが、ことごとく弾かれてしまう。

……改良するか。この戦いから生きて帰れたら。

「次は私の番だよ！」

手元に1枚のカードがある。どうやらスペルカードを宣言するようだ。

凄いい楽しそうにしてるけど、僕はもう満身創痕だよ……。

〈禁忌 クランベリートラップ〉

突如周りが弾幕によって囲まれた。

その弾幕は、僕を目掛けて飛んでくる。

飛んできた弾幕を拳で弾く、弾く、弾く——くらう、くらう、くらう、吹き飛ばす。

ふう……鎧が無ければ即死だった。もう嫌だ！逃げよう！ヘタレでも構わない！

その時、フランちゃんの変化に気づいた。

「私……ずっとこの地下に閉じ込められてたの」

閉じ込められてた？ どういう事だ……？

「だからずっと退屈だったの……」

気のせいか周りの空気が重くなっっていく気がする。

……いつたいフランちゃんはどうしたのだろうか。

「ずっとずっとずっとズットズットズットズット！」

その声は次第に少女の声から悪魔のような声へと変貌していく。

「だからワタシ……遊ぶ……」

俯きながら悲しい声を出す。

逃げたいけど、こんな悲しそうだと思げれないよな。

不意に顔を上げるフランちゃん。その顔は——

「カタクラトズットアソブ！」

狂気の笑みを浮かべていた。

遊ぶことは遊ぶけど、ずっと遊ぶのはちよつと……。

——やっぱり逃げてもいいすかね？

〈禁忌 カゴメカゴメ〉

唐突のスペルカード宣言。

まるで檻のような弾幕に囲まれる。

しかしそれは一瞬だけ。

檻が崩れた瞬間、大量の弾幕が現れ襲いかかる。

さっきのスペルカード並——いやそれ以上の弾幕が飛んでくる。

避ける、弾く、弾く——くらう、くらう、吹き飛ばされる。

……さっきよりも攻略しづらい。

とうとう鎧が砕けてしまった。こんな大切な時に……困ったな。

まだまだ弾幕は止む気配がない。大量の弾幕が迫ってくる。

あれを使うか。

〈光符 メテオールスパーク〉

流星のような光線が弾幕を打ち消しながら、フランちゃんめがけて一直線に流れていく。

美鈴を一撃でノックアウトするスペルカードだ。簡単には弾かれないはず——

〈禁忌 レーヴァテイン〉

大きな炎が剣のような形へと姿を変える。

大きく振りかぶり、迫り来る光線に対して振り下ろす。

炎と光が拮抗する。

最初は互角かと思われたが、次第に光は炎に押されていき、最後には飲まれて消えた。冗談だろ……？あの技を力押しで跳ね除けるとは。

そんなことをする人は、幽香さんくらいかと思つてたよ。……世界は広いな。

ケタケタと笑うフランちゃん。その姿はもはや最初の可愛らしい少女の面影は無かつた。

例えるとしたら、まさに悪魔と呼ぶのが相応しいだろう。

——もしかしてフランちゃんも、戦闘狂だったりする？

突然フランちゃんがレーヴァティンを持つて切り込みにかかつて来た。

弾幕を放つが、全て弾かれてゆく。剣が相手ならこちらも剣で応戦だ。

〈閃刀 神速之風刃〉

振り下ろされるレーヴァティンを風刃で受け止める。

一瞬の睨み合い。その時見た目は——悪魔だった。

横に振り払う攻撃、後方に飛ぶことで回避する。

後方に下がりがつつ、高速の遠距離斬撃を飛ばす。

肩の辺りをえぐつた。しかしその傷はすぐに治つてしまう。……治癒力が高すぎるだろ。

急に後方へ下がりがりだすフランちゃん。その手にはスペルカード。——また来るのか。そろそろ限界なんだが……。

〈禁忌 フォーオプアカインド〉

フランちゃんの姿がぶれ始める。2人……4人と分身する。——はっ？目の錯覚か？

こんな戦闘力が高いのが、4人に増えるとは……ああ死んだわこれ。

2人がこちらへ向かってくる。もちろん右手にレーヴァテインを持って。……せめてその剣は無しにしては貰えませんか？

1人は肩を、もう1人は足を狙って斬りかかる。ちよ危なっ！

当たれば即死確定コースだなこれ。

後ろに待機している2人は弾幕を放ってくる。——何と言うか、とてもウザイ連携攻撃だ。

扉を蹴破りさらに後ろへと下がる。追いかけてくるフランちゃん4人組。鬼ごっこみたいだな、まあ鬼ではなくて吸血鬼なのだが……。

とうとう行き止まりに当たってしまった。もう下がる事は出来ない。強行突破しかない。だが弾幕は全て弾かれる。どうしたものか……。

「アハハハハ、ツカマエター！」

もうすぐそこまで近付いてきた。

こうなったら使いたくなかったが、最後の手段を使う事にする。

最後の手段は簡単に言うのと、道がないなら作ればいいじゃない、ということだ。

へ光符 メテオールスパーク

光線をフランちゃんに向けて、ではなく真上に向けて放った。

ズドオン、と大きな音を立て天井に大きな穴があく。その穴からは光がさしていた。

紅魔館の天井に穴をあけたのだ。——後でレミアさんに怒られるよな。

脚に力を纏い、空へ向けて飛ぶ。どうやら外は曇りのようだ。

チラリと下を見る。フランちゃんも飛んで追いかけてきていた。

紅魔館の屋根の上で、4人の吸血鬼と睨み対峙し合う。ここまでくると、もはや逃げ場などはない。大きく深呼吸をし、覚悟を決める。——よし、行くぞ！

一気に駆け寄ろうと駆け出したと同時に、分身2人もこちらへ向かって来た。どうやら先ほど同様、弾幕2人と接近戦2人で分ける戦法でいくのだろう。

足を狙った的確な斬撃を回避しつつ飛んできた弾幕を弾く。後ろに回り込んできた、もう1人の分身を蹴りとばす。

こうした一進一退の攻防が続いていたが、次第に押され始める。鎧が使えない今、少しのミスが命取りだ。改めて気合を入れ直し集中する。

「!?」

しかし足場が不安定だったせいで、足を滑らせバランスを崩してしまった。

その隙を逃すまいと、分身1人がレーヴァテインを振り下ろす。それを何とか風刃で凌ぐ。だが不意に飛んできた弾幕をもろにくらってしまふ。

「グハッ」と血反吐を吐きながら吹き飛び転がる。物凄い苦痛が身体を支配する。立ち上がろうとするが、体がそれを拒否する。

早く起き上がらなければ、殺されてしまう。今のフランちゃんは容赦を知らない。それでも体が動かない。

「アハハハハ」と悪魔のような笑いをしながら、レーヴァテインを振り上げる。

まずい……早く避けないと……死ぬ! 死の予感が体を巡る。

レーヴァテインが振り下ろされる。死を確信し諦めたように目をつむる。炎の熱さが皮膚を焦がす。そしてそのまま――

〈神槍 スピア・ザ・グングニル〉

神々しく輝く槍が、レーヴァテインを振り下ろそうとした分身の身体を貫く。

貫かれた瞬間、分身が霧のようになってが消滅した。このスペルカードは間違いない、あの人だ。

「大丈夫か」

「レミリアさん！」

この紅魔館の主であり圧倒的カリスマの持ち主、レミリア・スカーレットだ。

「片倉よ、お前を用人にした時、なぜ用人にしたのかを覚えているか？」

「ええ……たしか、紅魔館がいずれ直面する問題を僕が解決するからでしたよね」

「そうだ、その問題を解決する時が今だ」

「今？もしかしてフランちゃんの事ですか？」

「そうだ」

「でもどうして……」

「詳しいことは後々話す。今はフランを何とかするぞ。分身は私に任せろ」

大きな翼を羽ばたかせ、レミリアさんは分身の方へと突っ込んでいった。入れ違いに分身ではなく本物であろうフランちゃんがやって来た。相変わらず正気を失っているのか、悪魔のような狂気に満ちている。

お互いに相手に向かって走り出す。脳天めがけて振り下ろされるレーヴァティンを凌ぎ、回し蹴り。くらってはいるものの、はたしてダメージがあるのかは分からないくらい平然としている。

体術は効果が薄いと判断し、弾幕を飛ばす。ついでに風刃の斬撃も飛ばす。だが全て弾かれてゆく。

するとレミリアさんの方から、分身が1人こちらに突撃してきた。急に来られたもんだから反応が遅れてしまった。だが時すでに遅し、既に攻撃体制に分身は入っている。

今度こそ死ぬのか……諦めたその時、またしても奇跡が起こった。

分身が蹴り飛ばされ、とてつもない勢いで正門方面の壁まで吹き飛ばされる。そしてそのままぶつかり、修理したばかりの壁がまたしても壊れた。——ああなんてことを。僕の努力が……

こんなに吹き飛ばす蹴りをするのは、吸血鬼とあの人くらいだろう。

「美鈴！」

「片倉さん！大丈夫ですか！」

紅魔館の門番、美鈴だ。この時ばかりは、居眠りばかりしている美鈴がとても頼もしく見えた。

「あの分身は私に任せてください！」

「すまん、助かる！」

さて、この一騎打ちの状況をどうやって打破したものか。改めてフランちゃんの方を向きなおす。

どうにかして、フランちゃんを気絶させるなり何なりしなければ……。

ふと1つの考えが頭の中に閃く——だがいけるのか？失敗は許されないぞ。

だが考える時間はそう長くない。この作戦に全てをかけることにする。

「さあフランちゃん、本気でかかつて来い！」

前にレミリアさんから聞いたことがある。吸血鬼は傷を瞬時に治すことができるが、体力をかなり削られると。

つまりここを狙えば、フランちゃんはいずれスタミナ切れでこの弾幕ごっこが終わるはず。しかし自分が先にやられる可能性だつてある。これはある意味で賭けだ。

フランちゃんが距離を詰めて、レーヴァテインで斬りかかる。それを凌ぎつつ膝蹴りをくらわせる。

ふらりとバランスを崩す、その隙を逃さず風刃で右腕を切り落とす。だが切り落とし右腕はすぐに再生する。

後ろに下がり斬撃を飛ばす。かなり防がれはしたものの、脇腹を切り裂くことはできなかった。間違いない、やはり再生には体力を消費しているようだ。

弾幕を放たれる。しかしそれらを全て回避し懐に潜り込む。そのまま力を纏い拳を叩き込むが――

ドゴオ、と腹部に強烈な膝蹴りをくらう。どうやら読まれていたようだ。膝蹴りから右フックを繰り出される。

何とか右腕でガードするが、ミシミシと骨が嫌な音をたて悲鳴をあげる。そのまま吹

き飛ばされるが、どうにか受身を取って体制を立て直す。

まだだ、まだ終わるわけにはいかない。苦痛に苛む体に一喝し再び駆け出した。

そんな戦いをどれほど続けただろうか。

体はもうボロボロだ。右腕は上手く動かず、身体全体にレーヴァテインによる火傷をおっている。こんな体でよく戦えるなあと思うよ。

フランちゃんは目立った怪我こそは無いものの、息は絶え絶えで辛そうな表情を浮かべている。

お互いに手に持つ武器を構える。恐らくこれが最後の打ち合いになるだろう。言葉に表さずとも、それは周りの人達にも分かっているようだ。既に分身を倒した2人は固唾をのんで見守っている。——助けてくれても良くない？こつちもうボロボロだよ？

レーヴァテインの炎が唸りをあげる。僕も風刃に残った力を注ぎ込む。

お互いが同時に駆け出す。そして炎と風が一閃する。

ドサリ、とフランちゃんが倒れ込む。その顔に悪魔の表情は無く、元の純粋な少女の

表情を取り戻していた。

フランちゃんの元へ近づいてみると、とても満足気な表情で笑っていた。

「フラン疲れちゃった。でも凄く楽しかったよ！また遊ぼうねお兄ちゃん！」

あくもう弾幕ごっこは2度と遊ばないかなあ……。苦笑いしながらお互い笑い合う。

——ようやく終わったな。正直、死ぬかと思ったよ。

ふと脇腹辺りに違和感を感じた。左腕で脇腹辺りを触れ、手のひらを見る。

血だ。血がついていた。脇腹を見ると、火傷と深い切り傷を負っており、ゾツとする

程の血が流れ始めていた。——くらってたのか。

意識が朦朧となり、その場に倒れ込む。

「お兄ちゃん？」

フランちゃんの一言で、何かを察したのか2人が駆け寄ってきた。2人の顔は焦ったような表情だった。

美鈴が何か大声で叫んでいるが、意識がはつきりとせず聞き取れなかった。フランちゃんは大声で泣いているようだった。

落ち着かせようと腕を伸ばそうとするが、もはや腕を動かすほどの力は残されていないかかった。

美鈴が呼んだのかパチュリーさんが来た。いつにもまして焦っている様子だった。

——珍しいな。あのパチユリーさんが。

声を出そうとするが、うめき声しか出ない。

「喋らないで」と美鈴に言われる。

意識が遠のいてきた。皆の声が頭の中で木霊する。ああ死ぬのかなあここで。

すると、一言も喋らなかつたレミリアさんが言葉を発した。

「大丈夫だ、片倉は死なない。運命がそう言っている」

何処か力強いその言葉を最後に、僕は意識を失った。

そうだ紅魔館に行こう 第8話

目の前に母が倒れている。向こうには父も。2人とも血まみれで一目で死んでいると分かる。

傷口は鋭利な何かで切られている感じだった。誰がこんな事を……。

視線を先のほうへ向ける。そこには何か居た。その何かはゆっくりとこちらを振り向き、鋭い刃物をこちらへ向ける。

恐怖が身体を支配し、硬直して動けなくなる。

何かが素早い動きで近づいてくる。刃物は鎌の様な形をしていた。

来るな……来るんじゃない……。心の中で必死に叫ぶ。だがその何かは目の前にやって来た。目は鋭く、人の形をしている。一体何なんだ、こいつは。

刃物がキラリと輝き、次の瞬間には僕の体は――

「うわあああ！」

目を開く。そこには刃物を持った何かではなく、見慣れた紅い天井だけが広がっている。

た。どうやら先程のあれは夢だったようだ。

体に嫌な汗がベツタリとまとわりつく。——昔の夢なんて久しぶりに見たな。気分が悪い。

部屋を見渡す。どうやら自分の部屋のようだ。何も変わった様子は無い、いつもの自分に与えられた部屋だ。——1つだけ除いて。

「あつ！目が覚めたんだね！」

はて何故ここにフランちゃんがいるのだろうか？てか抱きつくの止めて！怪我してるから！……ん？

ふと体が包帯でぐるぐる巻にされている事に気付く。適切な処置で全て施されてある。恐らく咲夜さんがしてくれたのだろう。あの人も出来る万能型メイドだもん。

コンコン、急にドアがノックされる。「どうぞ」と言うが入ってきたのは、さつきまでの心の中の話題の人物、咲夜さんだった。まさに噂をすれば何とやらだな。

「お目覚めになられたのですね」

「ええ、ところでどうしてフランちゃんがここに？」

さつきからずつと抱きついてくるフランちゃんのことについて質問する。——僕は抱き枕とかじゃないから、そろそろ離してくれ……。

「一週間前に意識を失って以来、妹様はずつとあなたの傍におられたのですよ」

「へえ……つて一週間!？」

「はい、ですが本来ならこの程度の怪我なら一週間以上は意識が回復しないと思っていました……」

驚いた、まさかそんなにも寝ていたとは。

「それでは私は失礼致します。何かお困りでしたら、近くのメイドにお申し付けください」

そう言うのと、咲夜さんは仕事へと戻っていった。あの人も大変だなあ。

すると次はパチュリーさんがやって来た。珍しいな、普段から図書館に引き籠ってるのに……あつ睨まれた。

「結構早いお目覚めね」

「そうですか?」

するとパチュリーさんは、やれやれといった表情をした。

「はあ……。あなたね、自分の体をよく見て見なさいよ」

「包帯だらけですが」

「そうよ。今のあなたは重傷患者と同じよ。怪我してない部位が殆ど無いくらい怪我してたわよ」

「そんなに酷かったんですね……」

「全く……いったいどんな無茶をしたのやら。私が魔法を使わなかったら、あなたとつくに死んでたわね」

うわあ……なんかこの感じ、何処かの人形使いの魔法使いさんの時にもあったな。もしかしてパチュリーさんもアリスと同じタイプかな？

「とにかく、これからその怪我が完治するまでは無茶はしない事ね」

「分かりました」

忠告したあと、パチュリーさんは部屋から出ようとする。だが去り際に何故かこちらを振り向いた。

「それと、あなた結構フランに懐かれてるわね。レミィに嫉妬されない様子を気をつけなさいね」

意味の分からない言葉を残し、図書館へと戻って行ったパチュリーさん。

フランちゃんを見ている。フランちゃんは何か面白い物があったのか、楽しそうに窓の外の景色を眺めていた。僕には特に興味は無さそうだ。——これは懐いたと言えるのだろうか……。てかレミリアさんが嫉妬して……。？

「フランちゃんって、ずっと地下に居たんだよね？」

1つの疑問を投げかける。何故あんな地下に居たのだろうか気になるところである。

「うん、そうだよ……」

相変わらず窓を眺めているものの、心なしかその声には元気がなくなっていた。何か嫌なことでもあったのだろうか。

「どうして地下に？」

「……………」

急に黙り込んでしまった。やはり嫌なことがあったのだろう。これ以上聞くのは酷だ。

フランちゃんの眺めている窓を僕も眺める。外では美鈴がナイフまみれになっていた。

……………パチユリーさん呼ぶか。

夕方、レミアアさんの急な呼び出しにより、レミアアさん、パチユリーさん、咲夜さん、美鈴、僕、そしてフランちゃんの6人が集まった。どうやらレミアアさん曰く、皆に伝えたいことがあるそうだ。——美鈴、包帯まみれだけど大丈夫か？まあ僕も包帯まみれだけどき……………。

「皆集まったな」

「急にどうしたのよレミィ。メンバー全員揃えて」

「ふむ、それでは早速本題に入ろう」

紅魔館の主が話をしようとしているのに、興味がないのか本を読み出したパチュリーさん。フランちゃんと美鈴は眠そうに欠伸をしている。——あつ美鈴の頭にナイフ刺さった。

果たしてこれでいいのだろうか、一応あなた達の主人ですよね？

ほら見てよ、皆あまりにも興味無さそうだからレミリアさん、涙目になってるよ……。咲夜さんはそれを見て、鼻血出してるけど。

「とりあえずレミリアさん、本題に入ってください」

「グスツ、そ、そうだな」

すぐさま立ち直り、カリスマ全開で話始めるレミリアさん。ホントこの人の切り替え力凄いわあ。

「今日はフランと片倉の事について話がある」

「僕とフランちゃんですか？」

「そうだ」

どうやら、フランちゃんと僕の事についてらしいが、いったいどうしたのだろうか。……もしかして天井壊したとか？

「皆も知っているとおり、私の妹であるフランは、長年地下に居たため常識的な事をあまり

知らない」

「そうね。でもそれがどうしたのレミィ」

「つまりフランには、世間の常識とやらを教育する者が必要だと私は思ったのだ」

ん？なんだろう、凄いい嫌な予感がしてきたぞ。このままだと、取り返しのない大変な事になる気がする。

「そこでだ、フランに懐かれています者にその教育係を任せよう、と考えたのだ」

「なるほどね。でもそんな係りをいつたい誰がするのよ」

「もう決めているさパチエ。片倉よ、お前は今日からフランの教育係に任命する！」

ほうほう、僕がフランちゃんの教育係ですか、なるほどなるほど……って

「ええええええええ!!」

「……………」

「わ〜い〜」

ちなみに驚いているのは、僕と美鈴で、黙っているのは、咲夜さんとパチユリーさん、最後に喜んでいるのは、フランちゃんだ。

いやいやそれはさておき、どうして僕になるんだろうか。僕はフツ〜の人間ですよっ。

「どうして僕なんですか？僕は至って普通の人間ですよ？」

「大丈夫だ。問題無い」

何処そのフラグ臭漂うセリフを放つレミアアさん。いったい何が大丈夫だというのか……。

「話はそれだけ？それなら私は図書館に戻るわ」

「それでは私も仕事に戻ります」

パチュリーさんと咲夜さんは、自分の場所へと戻っていき、美鈴も門番の仕事に戻った。

いや、正確に言うなら咲夜さんに引きずられながら、正門に連れていかれたと言った方が正しいな。——咲夜さんって、美鈴の扱いだけやたらと雑だよな……。

こうして残された僕は、どうしたものかと考えていた。

このまま自室に戻るのがいいんだろうけど、如何せんレミアアさんが……またしても涙目になっていて、とつても戻りづらい。てか誰か相手してあげようよ、一応あなた達の主だよ!?

余りにも重い空気が、場を包み込む。息苦しさを感じる。

「あのレミアアさん？」

「グスツ、何だ？」

「それじゃあ、僕も自分の部屋に戻りますね……」

まるで泥棒のように、足音をたてずに立ち去ろうとする。そのまま廊下に出ようとした時「ちよつと待て」とレミリアさんに止められた。

「な、何ですか……」

ぎこちない動きで振り向く。

「まさかと思うが、私を一人にする気か？」

半泣き状態で、こちらにジリジリと近づいてくるレミリアさん。その姿はさながら高潔な吸血鬼の欠片が微塵も無かった。——いつものカリスマ性は何処にいった!?

「し、失礼しまーす!」

「あつ!待て!」

大広間の扉を蹴破り、廊下へと逃げ出す。

後ろからはレミリアさんが、必死に追いかけてくる。——ちよつ、ついて来るのかよ!?!いつものカリス（ry

しかし、やはり人間と吸血鬼の身体能力は雲泥の差があったようで、あつという間に追いつかれた。

「いいから待たんか!片倉!」

ええええええい、こうなればこれだ!

〈閃刀 神速之風刃〉

風刃の能力による圧倒的な機動力で、一気に距離を引き離し、正門へと逃げる。――
――意外に便利だよな、このスペル。

なんとかレミアさんを撒いた僕は、ホツとしながら正門へと歩く。今のあの人に捕まったら、多分1日中お話が続くだろうな。嫌だなあそれ……。

正門では相変わらず、美鈴が居眠りをしていた。

ナイフで刺そうかと思っただけど、包帯まみれで可哀想だったから止めておいた。

うーん……、唯一の話し相手が寝てるとなるとどうしたものか。図書館は紅魔館にまた戻らないといけないしなあ。そうなると絶対にあの人……レミアさんに捕まるし……。

「暇なら、外へお出かけしようよお兄ちゃん!」

お出かけかあ……。それはいい考えかも。となると人里かアリスの家に行くことになるな……、あれ?なんか後ろから、美鈴じゃない声が……。

「アイエエエエエ!?! フランちゃんがいるうううう!?!」

振り向くと何故かフランちゃんがいきました。――まさか付いてきたの!?!あの速さを!?!

「なんでフランちゃんが居るの!?!」

「お姉さまに、片倉について行け! って言われたの!」

あのカリスマ吸血鬼め……。まるで妹をファンネルのように扱いやがって……。

「そうそう、お姉さまから伝言があるよ！」

「伝言？どんな？」

「フランの教育係として、フランを外の色んな場所へ連れていけ！だって。あと片倉のバカー！だって。お兄ちゃんなんかしたの？」

「んっ……？な、何もしてないよ……ハハ、ハ」

レミリアさんの暴言は置いといて、色んな場所へ連れていけは困ったなあ……。でも連れていかないと、レミリアさんにどんな目に遭わされるかは、目に見えている。

仕方ない……。失礼がられるかもだけど、アリスの家に行くか。

「それじゃあ行こうか」

「わーい！」

吸血鬼は太陽の日が苦手な為、フランちゃんは傘をさしている。

傍から見ると、なんだか幼女の誘拐犯みたいだなこれ……。

この世界にも警察がいませんように、と思いながら僕達は、アリスの家に向かう事にした。

閑話 其の一

アリス宅にて

アリスの家に着いた。

道中に妖怪に襲われたけど、フランちゃんが弾幕ごっこ（一方的な暴力）によって、何事もなくあつさり撃退（殺害）した。

何と言うか、こんなことじゃあんまり動じなくなってきたあたり、ちよつと自分でもどうかと思った。——あの妖怪、スゲエ喚きながら逃げてたもんな……。逃げ切れなかったけど。

コンコン、とドアをノックする。……反応がない。もしや留守か？

もう一度ノックする。……反応無し。

……ドンドンドンドンドンドンドンドン、ガチャリ。

「もうーうるさいわね！つて……片倉じゃない。」

いやあ、粘り強くノックして正解だったなあ。この人、忙しい時はよく居留守使うからな。全くけしからん。

「どうも、アリスさん！突然ですが、家に上がらせて下さい！」

「嫌よ。私は忙しいの。だから帰りなさい」

ぐおおおお、人がせつかくお願い（土下座）してるのに、即答でNOと言いつた。だが僕はめげない。

まだ僕のバトルフェイズは終了してないぜ！

「はい！フランちゃん、この人に挨拶しましょうね〜」

「こ、こんにちは。フランドール・スカーレットです」

恥ずかしながらも自己紹介をするフランちゃん。

「スカーレット……。なるほど、あの館の主の妹かしら？まあいいわ。私はアリス・マーガトロイドよ、宜しくね」

これでフランちゃんにも、新しい友達が出来た……。多分。

そんなことよりも、早く家に上がりたいんですけど。

「自己紹介はもういいから、早く帰りなさい」

「そこをなんとかお願いしますよ〜」

「駄目」

クソおおお！だがまだだ……まだ終わらんよ！

「ちよつといいかなフランちゃん。あのね……ゴニョゴニョ」

「うん！分かったー！」

「よし！さあフランちゃん頼んだ！」

この作戦ならば、あの憎きアリスを一発で倒せる（精神的に）はずだ。

「ねえねえアリス！」

「なに？早く帰ってくれないと私困るんだけど……」

「お願い！家にながらせて！」

まるで、何処ぞの錬金術師のようにパンツ、と音を立てながら両手を合わせてお願いするフランちゃん。

「駄目よ。私は忙しいの」

しかし、あっさりと断られる。

「どうしても……？」

泣きそうな目でアリスに訴えかけるフランちゃん。これには、さすがのアリスも断るのが辛そうだ。

「だ、駄目なものは駄目なの！」

「ウー」

「そ、そんな上目遣いで見ても、だ…駄目よ！」

「ウー」

「だ、だから……」

「ウーーーーー！」

「はあ……、分かったわ……。上がっていいわよ」

「わーーーーい！」

フランちゃん必殺の上目遣いが効いたようだ。この技を受け流すのはかなりの至難の技だろう。アリスにとっては。いやまあ、僕もなんですけどねアハハ……。

「あなた、外道よね」

はいはい、聞こえない聞こえない。

アリスの言葉は無視しつつ、僕とフランちゃんはアリスの家にお邪魔した。

アリスの家にお邪魔した後、僕は紅茶を飲みながらアリスと話していた。フランちゃんは、そこら辺にある人形をまじまじと見ている。

一通り最近の出来事を話終え、ゆっくりとクツキーを頬張りながら紅茶を味わっていると、急にアリスが僕がこの世界に来る前の話を聞きたいと言ってきた。

「あなた、この世界に来る前、いったいどんな事をしてたのかしら？」

「傭兵で各地の戦場で戦ってました」

「傭兵？」

「傭兵と言うのは、戦ってお金を稼ぐような仕事のことです」

「ふーん、それでどうして傭兵にあなたは、なったのかしら？」

「僕が昔、両親を亡くした時に、僕を拾ってくれた人がいたんですよ。その人、僕が20歳になった時に失踪したんです。一通の手紙を残して」

「手紙？内容とか覚えてるかしら？」

「ええ、今でもはつきり覚えてますよ。ていうか、この手紙が僕が傭兵になった大きな原因なんですけどね」

「そうなの……。それで内容は？」

「内容は、『あなたはもう立派に成長したわ。だから私はあなたの知らない所へ旅に出ます。もしもまた、私に会いたいのなら、探しなさい。この世界中を。PS そのこのテーブルの上にパスポートと結構なお金があるわよ。上手に使ってねキラツ☆あなたのお母さんより』と書いてありました。それで、傭兵として世界中を巡っていた訳です」

「なるほどね。なかなか茶目っ気のある人じゃない。その人の名前は？」

「名前は確か……えっと……、あれ？」

「どうしたの？ 忘れたのかしら？ 実の親よりも長いこと暮らしてたのに、思い出せないの？」

「……はい。何故か、名前が思い出せなくて……。ていうか、この世界に来てから、その

人の顔さえも思い出せないんですよ」

この世界に来る前は、当たり前のように思い出せたのだが……。どうして忘れてしまったのだろうか。

「そう……。ならないわ」

「すいません……」

なんとなく場の雰囲気居た堪れない空気になってしまった。どうにかせねば。

どうにか話題を振らねば、と模索していた時、急に1人の来訪者が現れた。

「オイーース、アリス元気かー？つて、ん？」

やって来たのは、いかにも魔女らしい格好をした、白黒帽子をかぶった金髪の女の子。

——アリスの友達か？

ふとアリスを見てみると、とても嫌そうな顔で、その来訪者を見ていた。

「なんで来るのよ魔理沙」

どうやら、この魔女っぽい人は魔理沙と言うようだ。

その魔理沙と言う人は、嫌がられているのを全く気にも止めず、ゲラゲラと笑っていた。

「いいじゃないか別に、どうせ暇だろ？ところでそこにいる義手の奴と、小さい羽の生えた女の子はどちら様だ？」

「僕は片倉と言います。あなたは……?」

「私は霧雨魔理沙だぜ。よろしくな片倉!」

「私はフランドール・スカーレット!」

「おう! 宜しくなフラン!」

何と言うか、この人の印象は活発的な人だと感じる。そして何よりも、人と馴染むのが早い。とてもいい性格をしている人ようだ。なのに何故アリスはこの人を嫌がるのだろうか?

「ところで魔理沙、この前盗んだ本を返しなさいよ」

ん? 本を盗んだ? どゆこと?

「……あの、魔理沙さん? 本を盗んだって本当ですか?」

聞き間違いかもしれないし、一応聞いてみた。

「あー、私の事は魔理沙でいいぜ。あと本は盗んでないぜ!」

だよなー。こんな性格良さそうな人が、人の本を盗むなんてありえないよな。

「あれは盗んだんじゃないかと、死ぬまで借りただけなんだぜ☆」

……前言撤回。この人、見た目に反して意外と手癖が悪いわ。

てか、死ぬまで借りるも盗むもどちらも同じだろ。意味合い的に。——まあどうでもいいや。僕が被害にあつては訳じゃないし。

しかし、盗まれた当の本人は相当お怒りのようで、見たこともないくらいに顔を真っ赤っかにして怒っていた。……うわあ、超怖い。

だが、盗んだ本人は、あっけらかんな態度でアリスを無視していた。

そんな魔理沙を見て、アリスは怒るのが馬鹿馬鹿しくなったのか、はたまた諦めたのか分からないが、とりあえず怒りを抑え引つ込めた。

「ところでよー、片倉って外の世界の人間だよな?」

魔理沙が急に僕が外の世界の人間だと見破ってきた。

「そうですが、どうして分かったんですか?」

「だって、そんな義手はめた奴なんか、この幻想郷で見たことねえからかなるほど義手か。」

最近、自分が義手着けることよく忘れちゃうな。

「1つ聞いていいか?」

「何ですか? 外の世界についての質問ですか?」

「いや、外の世界はあんまり興味はないぜ」

あつ、興味無いんですか。じゃあ他に何が聞きたいのだろうか。

「お前、外の世界に戻ろうとは思わないのか?」

「えっ……、戻れるんですか?」

「うん」

「まじで?」

「まじだぜ」

えええええ……それは知らなかった。てか聞いたこともなかった。まさかこの世界から出られるとは。

出られるなら今すぐでも出ていきたいものだ。正直、この世界は危険度が高すぎる。今でも服の下は包帯だらけな訳だし……。

でもなんか大事な事を忘れてる気がするんだよなあ……。気のせいかなあ……。えっ、お兄ちゃん……。この世界から出ていくの……。?」

あー、気のせいじゃ無かったわあ……。ここに居ましたわ、大事な事が。フランちゃんが涙目でこちらを見つめている。

「出ていくの……。?」

とうとう、泣きだした。……これはきつい、精神的な意味で。

「出ていかないから!ね?だから、泣くのは止めようね?」

ああ……我ながら情けない。小さい子にあっさりと負けるなんて。

「あなた、ロリコンよね」

グハッ!アリスの鋭い言葉が僕の心を貫く。

返す言葉が見つからないよ……。

まあでも、外の世界には戻らないとしてもだ、一応どうやって外の世界に戻るのかくらいは聞いておこう。

「外の世界に戻りはしませんが、一応どうやったたら戻れるかだけ教えて貰えませんか？」
「外の世界に戻るときは、霊夢に頼めばいいぜ」

「霊夢？」

「博麗神社に居る巫女の事よ」

「どうやらアリスもその霊夢と言う人を知っているらしい。

というか、この世界にも神社あったんだ。知らなかった。

「そういうえば私、霊夢の所に行く予定だった事、すっかり忘れてたぜ」

「霊夢の所に行く予定だったのに、どうして私の家に来たのよ、あんたは」

「いやあ、なんとなくだぜ」

「次来たら吹き飛ばすわよあなた」

「ひー、怖い怖い。それじゃ、このくらいでお暇することにするぜ」

扉の近くに立て掛けてあった箒を手に取り、外に出ようとする魔理沙。——もしか

して、箒で飛ぶのか？

「そうだ、折角だから僕も博麗神社に行こうかな。一度、その霊夢と言う人に会いたい

し。

「ちよつと待つて魔理沙！」

「ん？どうした片倉？」

「僕もついてつていいかな？」

「いいぜ。でもここから神社まで結構距離あるぜ？」

「えっ……遠いの？」

「そうかー、片倉は普通の人間だから飛べないもんな。仕方ない、私の箒に乗って行くか」

「ありがとう魔理沙」

「ちなみに、結構速く飛ぶから気をつけろよ？」

「ああ大丈夫大丈夫。多分」

「はいはい、玄関で話されると迷惑だから早く行ってよね、全く……」

まるで邪魔者扱いのように追い出そうとするアリス。

見た感じちよつと不機嫌なのだが……。早く神社に行ったほうがいいなこれ。

「それじゃ、またなアリス」

「お邪魔しました」

「バイバイ！アリス！」

「はいはい、またね」

何だかんだ言つて、ちゃんとお見送りするアリス。本当、あの人ツンデレだよ……、あつ睨まれたゴメンナサイ。

「それじゃ行くぜ。落ちるなよ」

「うん、フランちゃんは大丈夫？」

「大丈夫！私は飛ぶから！」

いや、日光が大丈夫かということなのだが……。でもまあ幸い、天氣が曇つて太陽の光がないから大丈夫だろう。

「んじゃ行くぜ」

はつきり言うところからの記憶は無い。

発進の合図と共に、僕と魔理沙を乗せた箒は急加速した。その速さは鍛えられた人間の体でさえも、意識をブラックアウトさせる程だ。——いや、速いと言われたけどさ、その速さは普通ありえないでしょ……。

意識を失う際、今度にとりに空を飛べれるようになる機械を作ってもらおう、と思つたのと言うまでもない。

貧乏巫女と魔法使い

「おい、着いたぞおー！起きろー！」

「う……うーん……」

魔理沙に頬をペチペチと叩かれて起きる。

「ここは何処だ？……ああそうか。博麗神社か。——ちよつ、もう起きたから、叩くのやめて！意外と痛い！」

「ここが博麗神社か。想像してたよりもでかいなあ」

「そうか？私はいつも見てるからよく分からないぜ。とりあえず霊夢呼んでくるから、待つてろ」

そう言うのと、魔理沙は神社の裏へ行つた。

しかし、小さな神社かと思つたんだけど、意外と大きかつたなあ。——とりあえず、お賽銭入れとこう。

チャリン、百円をお賽銭箱にいれ、鈴を鳴らそうとする。……参拝の作法、忘れてるな僕……。

すると後ろから、「ちよつとあなた！」と大きな声をあげて、誰かがこちらから近付い

て来た。

「あなた……今、お賽銭を入れたわよね……」

声を掛けてきたのは、赤と白をメインとする服を着た、巫女さんだった。なるほど、この人が魔理沙の言っていた、霊夢と言う人か。

「え、ええ。入れましたけど、どうしたんですか」

「あなた……」

「あなた？」

「とても、い……」

「い……？」

「いい人!!」

「はい!?!」

「この神社にお賽銭入れる人なんて、あなたとてもいい人よね!最近はお賽銭が無くて私困ってたのよ。お賽銭はいくら入れたの!?!」

グイグイと詰め寄られて、さっき入れたお賽銭の金額を聞いてくる巫女もとい霊夢さん。

「ひゃ、百円ですけど……」

「百円!?!」

「え、少なかったですか？」

「そんなに入れてくれたの!?!なんて心優しい人なのかしら!今日はどうしたのかしら!?
お願い事があるの?だったら何でも叶えてあげるわよ!」

いや別に、お願い事とか無かったんだけどなあ……。

「お〜お〜、貧乏巫女さんが、何か騒いでまっせ(笑)」

神社の裏から、大声で笑いながら魔理沙が戻ってきた。

「ああ?貧乏巫女で悪かったわね。あんた後でぶん殴るわよ」

「ひえ〜怖い怖い。博麗の巫女は本当おっかないぜ」

魔理沙がきた途端、巫女さんの態度が一変した。

てか、さっきまで優しくかったのに、魔理沙の時はやけに怖いな。

「この人は、魔理沙、あんたが連れてきたの?」

「そうだけ」

「そう。あなた、名前は?」

「僕は片倉です。あなたは……霊夢さんですよね?」

「ええ、博麗霊夢よ。あと呼び捨てでいいわよ。お賽銭入れた、大事な人だから」

お賽銭入れたから呼び捨てOKというのも、どうかと思うがまあいいだろう。

「片倉、霊夢に聞きたいことあるんだろ?聞いとけよ」

「そうだね。霊夢に聞きたいことがあるんですが」

「あく、外の世界に戻るの、今は無理よ」

え……？先に聞きたいことの答え言われたんですが……。もしかして心の中読める？

「どうしてだ？お前だったら、片倉を外の世界に戻すなんて簡単だろ？」

「私が原因じゃないのよ」

「じゃあ、何が原因なんだ？」

「紫が原因なのよ」

「あいつが？」

ほう、これまた知らない人の名前が挙がりましたな。

でも、紫って何処かで聞いたことがあるよーな……気のせいか……。

「幻想郷の者が、外の世界に行く時は必ず、紫の許可がいるのよね。でもその紫が最近姿を現さないの。式神に聞いたら、紫のやつ急に用事が出来たとか何とかで、姿を現さないって言ってたわ」

「そうかですか……。まあ別にすぐ戻りたい訳でもないんで大丈夫です」

「しかし、あの紫が姿を見せないのは珍しいな。なんか大変な用事でもあったのか？」

「さあね、私には分かんないわよ。あの胡散臭い妖怪の考える事なんか」

紫とか言う人、とても胡散臭い妖怪なんだ……。

「ところでひとつ聞いていいかしら？」

「なんですか？」

「あなた、どうやってこの世界に来たのかしら？」

「気がついたら、この世界に迷い込んでました」

「チツ、また紫の仕業ね。まつたく……」

「どうやら、この世界に迷い込んだ原因は、その紫と言う人が原因のようだ。」

しかし、どうして僕をこの世界に入れたのだろうか。」

「何で僕をこの世界に入れたんでしょうか？」

「知らないわ。本人に直接聞いて見なさいよ。まあ、その当の本人は、行方知らずだけど

も」

うーん……、一体紫と言う人は何者なのだろうか。すごい気になるなあ。

こうなれば、自力で探してみるか。

「そろそろ腹も減ったし、アリスの家に戻ろうぞく片倉」

姿を現さない……つまり神出鬼没な人か？胡散臭い……嘘つきとかか？外の世界に出るには許可がある……偉い人か？

だあアアア、一体何者なんだ！さっぱりわからん。せめて写真とかあれば探せれるの

にー……でもこの世界に写真とかあるのか？

「おおおおい！片倉アアア！」

「うおっ!?びつくりしたア！人の耳元で急に叫ぶなよ」

「さつきからずつと話しかけてるのに、無視するからだろ」

「ごめんごめん、考え事してたんだ」

「そうか。それじゃアリスの家に戻ろうぜ」

「分かった」

「じゃあな霊夢、また来るぜ」

「次来るときは、お賽銭持っつてから来なさいよ」

霊夢ってやたらとお賽銭に固執するなあ。お金が大好きなのか？それは巫女として、どうかと思うが……。

「そうそう魔理沙、帰りはゆっくり飛んでくれよ。また気絶するから」

「あく……嫌だぜ☆」

本日2回目のこの感覚。箒が一気に加速する感覚だ。

「イイイイイアアアア！とまっつてえええええ！」

この女……、許さん……。いずれ絶対に仕返ししてやる……チーン。

思ったんだけど、魔力鎧を展開したら意外と耐えられるんじゃないかと思ったんだけ

ど。……まあ手遅れだが。

「……どうせまだそこに居るんでしょ紫」

「あらら、バレちゃったわ〜」

ぐにやりと空中が歪み隙間が生まれる。そしてその隙間から一人の女性が現れた。

「本当にこれでよかったの？」

「ええそうよ。流星の演技力ね、霊夢」

「何である普通の人間にこだわるのよ」

「うふふ、あの子は普通の人間じゃないわよ」

「じゃあ何者なのよあの人間」

「それは教えてあげない」

「はあ!?!あんたふざけてんの？」

「え〜、そんなに気になるの〜？」

「あつたり前じゃない。そんな言い方されると、誰でも気になるわよ」

「そうね、きたる時が来たら教えてあげるわよ☆」

「あーそうですか。でも一つだけ聞かせて頂戴」

「ん？何かしら？私のスリーサイズは教えないわよ」

「違うわよ。あんた、あの人間の記憶操ったわね」

先程まで、優雅に笑ってた紫は、その霊夢の一言によつて真剣な顔になった。

「あら？どうして分かったのかしら？」

「勘よ」

「相変わらず、あなたの勘は怖いわねえ」

「記憶を操るなんて、あんた一体何を隠してんの？」

「仕方ないわね、一つだけ教えてあげるわよ。あの子はね実は……………」

「ん?! あんた!?!」

「うふふ、驚いた？これは皆には秘密よ。じゃあね霊夢、またね」

隙間が閉じ、紫は跡形もなく消えた。

残された霊夢は、空を見上げて紫に問いかけた。

「紫……、あんた一体、何を考えてるの……」

その言葉は、風と共に虚空へと消えていった。

「ほーい、到着したぜ！」

「し、死ぬかと思つた……」

箒から降りると、すぐさまその場に倒れ込んだ。もう二度とあんな箒には乗らん……。

「あら、あんた達戻ってきたの？」

「おう！腹へったから戻ってきたぜ！」

「何で私の家に戻ってくるのよ！自分の家に帰りなさいよ！」

魔理沙とアリスの喧嘩している側で、かなり不機嫌そうな少女が一人、僕を見ていた。

——フランちゃんだ。

あく……：そういえば、博麗神社にフランちゃんの姿がなかったなあ。もしかして、置いてかれちゃったから怒ってる？

「どうしたのフランちゃん？」

プイツ、無視された。まさかの拒絶!?!

「あんた達がその子をおいてけぼりにしたから、ずっと不機嫌のままよ。何とかしなさい

いよ」

えくく、おいてけぼりにしたのは僕のせいじゃなくて、そこにいる魔理沙のせいなんだけどなあ……。

まあとりあえず謝つとこう。

「ごめんよフランちゃん」

プイツ、またしても拒絶される。

「そうだ！明日人里に行つて美味しいもの食べよ？」

「本当？」

おつ、ようやく食いついた。

「うん！本当だよ。だから、機嫌なおして？ね？」

「分かった——約束だよ！」

おおう、さつきまで無視してたのに、急に態度が変わつたなあ。

でも何か嫌な予感があるんだよなあ。明日人里に行ったら大変な事になるような気がするんだが……。まあいいや。

「あなた、本当ロリコンよね」

「返す言葉もございません」

自覚はないんだけどなあ……。やっぱり傍から見るとロリコンなのかな僕って。

「ねえねえお兄ちゃん？」

「ん？どうしたの」

「お腹すいた〜」

空を見てみるともう夕方だった。確かに僕もお腹空いたな。

「だったらここで晩御飯食べようぜ！」

魔理沙が提案をする。いやいや、あんたここの住人じゃないでしょ。

「あなた達……私の家を何だと思ってるのよ……」

「いいじゃんかよ〜。皆もお腹空かせてるんだぜ？」

「分かったわよ。そこのテーブルで待ってなさい。すぐ作らから」

「やったー！！」

大はしやぎのフランちゃん。そっか、こうやって他人とご飯を食べることなんて初めてだもんね。

その日はアリスの家で美味しくご飯を頂いた。だけど余りに僕と魔理沙が騒ぎすぎて、アリスに家から蹴り飛ばされたことは伏せておく。

人里のフラワーマスター

片倉が元の世界で失踪して程なくして、行方不明者の捜索としてジャックは駆り出された。

「おい、見つかったか！」

「駄目だ。何処にもいない。」

「そうか……。んっ?」

とある部屋で何かが落ちているのをジャックは見つけた。

それは戦友である、片倉のドックタグだった。しかしそのドックタグは、手榴弾の爆発によりボロボロになっていた。

「………………。まさかな」

「何か見つけたのか」

「ああ。あいつのドックタグだ。見た感じだと、おそらく……爆発なんかで死んだと思う。だけど死体がない」

「そうか……。本部、こちら捜索隊、行方不明となっていた隊員、暗号名《片倉》のドックタグを発見。ドックタグの状態からして、恐らく死亡していると思われる。だが死体

がない」

へ了解。もうすぐ日が落ちる。とりあえず帰還しろ」

「聞いたな。本部に戻るぞ」

「ああ……分かった」

片倉……いや、仁、お前はいつたい何処に消えたんだ？

「ねえねえお兄ちゃん、人里ってどんなところ？」

いつも人里に向かう道を歩いていると、急にフランちゃんから質問された。

「おっ？なんだ、フランは人里に行ったこと無いのか？人里はな、賑やかで楽しいぞ」
質問に答えたのは一緒についてきた魔理沙だった。——なんで君までついてきて

るんだ……。

「えっ!?! そうなの!?!」

「そうだぞ〜！でも気をつけろよ、人里には怪物がいるかな」

「怪物居るの!?!」

おいその奴、何いけしやあしやあと嘘を教えてやがる。

「ああ。名前はフラワーマスターと言うんだぜ！」

「フラワーマスター？怪物の割には怖くない名前だね」

しかし、この二人本当に仲良いな。つい昨日までは知らない奴同士だったのに。――

――そういえば、元の世界にいた戦友のジャックは元気かなあ。今頃、僕を探してたりして……。

「おつ人里が見えたぞ」

考え事をしていたら人里に着いた。

「とりあえず昼飯食べに行こーぜ」

「そうだね。とりあえずご飯食べようか」

「わーい！」

魔理沙の提案に賛成し、とりあえずいつも行くあの店に行く事にした。――今日は何を食べようかな。

いつもの店は相変わらず繁盛しているようで、人が沢山いた。
「おついらつしやい！」

相変わらずこの店主は元気がいい。もしかしたらこの人気っぷりは、この店主の活気あふれる声のおかげかもしれないな。

「さて、どれを頼む？」

「私はハンバーグ食べる！」

洋風のものなんかここにあるのか？ いやいやまさかな……。ペラリ、ページをめくる。……。あつた。まじかよ。

「んじゃ私は、パスタを食べようかな」

イタリアンまであるのかここ……。ペラリ、イタリアンあつたよ。

パラパラく、一応全部のページを見てみる。……。中華にアメリカンフードもあるのか。いったいこの店は何だよ……。店の外見は昔の食堂みたいな外見なのに？ 訳わからん……。

「片倉は何頼む？ あつ、ちなみにお前持ちだからな」

はいはい、初めからそんな気はしてたよ。

しかし何頼もうかなあ。ピザとかいいなあ……。でもラーメンもいい。うーん……。
「まだか？ 早くしてくれよ」

おっこれいいな、これ頼もう。

「月見うどんでお願ひします」

「お前うどんかよ〜」

それはないだろ、みたいな目で見られる。

うるせえ、うどんなんか最近食べてなかったから食べたくなつたんだよ！うどんなめるなよ！香川は凄いいんだぞ！

「すいませーん！ハンバーグとミートパスタと月見うどん下さいー！」

「あいよ！毎度あり！」

もしかしてだけど、全部この店主の親父が作るのか？そうだったとしたらかなり時間かかるぞ……。大丈夫か？

「へいお待ちー！」

ダンダンダン！ときつき頼んだ物がものの10分でテーブルに並んだ。作るのはやっ！あの人、プロの料理人か？

味も勿論のこと美味しい。……あの親父、只者じゃないな絶対。

「おいしー！」

フランちゃんも大喜び。やっぱりこここの店の料理は最高だな。

「ところで魔理沙、ここに怪物居るとか言つてたけど、本当にいるの〜？私見てみたい

「！」

「勿論居るぜ！その怪物は花が大好きだから、花に囲まれた家に住んでるんだぜ！」

「えー本当？」

「本当だって。信じてくれよ〜」

花が大好きか……。僕の中では、花と言ったら幽香さんかなあ。

ところで幽香さん元気にしてるかなあ……。いや、別に会いたくはないけど。会ったら間違いなく殺される気がする。———そういや、幽香さんに初めて会ったのはこの店だったな。

ガラガラと店の扉が開く。

「へい、いらつしやい！」

そうそう、まさにこんな感じだった。いやあ、何だか幽香さんが来そうだなあ。まあそれは有り得ないと思うけどさ。

ズズズと美味しくうどんをすする。

「おつ幽香さん！久しぶりだねえ！」

「あら？そうかしら？」

ブフツ！すすっていたうどんを豪快に吐き出す。

「お兄ちゃん!？」

「どうした片倉!？」

「い、いや……、ただ、むせただけだ……大丈夫……」

「いやいやいや、嘘だろ。なんでよりによって、あの人が来ちゃうんだよ！」

でも待てよ、まだあつちは僕に気づいてない。席が隣にならない限りは大丈夫なはずだ。

「席は空いてるかしら？」

「ギリギリ一つだけ空いてます」

ギリギリ一つだけ？でも隣の席空いてるけど……。

周りを見してみる。………空いてる席って、この隣の席のことかああああああ!

「お兄ちゃん顔が真っ青だよ!？」

「どうした片倉!？」

「いや、大丈夫……。この顔は生まれつきだよ……」

「ガタン、とうとう隣の席に幽香さんが座った。」

大丈夫だ、まだ気づかれてない。

「久しぶりね、片倉」

「うわああああ!バレてましたアアア!

「お、お久しぶりです、幽香さん」

カタカタと震えながら幽香さんに挨拶を返す。

「今日はどうかやら一人で来た訳じやなさそうね。白黒の魔法使いに、可愛い吸血鬼と一緒とはね。なかなか面白い組み合わせじやないクスクス」

クスクスと笑う幽香さんに、ただひたすら愛想笑いをするしかない。というか、それしか出来ない。怖すぎて。

「おい、どうした片倉。さつきから様子が変だぞつて、うわっ！風見幽香！」

「あら？誰かと思えば、白黒魔法使いさんじゃない」

あれ？魔理沙つて幽香さんと知り合いなもの？

「おいつ！フラン、あれがこの人里に居る怪物、フラワーマスターだぜ！」

「えー、なんか想像と違う」

幽香さんが怪物ねえ……、なんか納得できる。確かにあの人は怪物だよ。

「心外ね。人を怪物呼ばわりするなんて」

笑つてそんなことを言う幽香さん。あれ？怒らない。

「後で血祭りにしてあげるわ。感謝しなさい」

あ……やっぱり怒つてた。

「えっ!?血祭り!?何だか楽しそう」

「いやいや、フランちゃん。全然楽しくないから。怖いから」

白黒から赤一色に染まるところなんて誰も見たくないから!？」

「片倉。この後、私の家でお茶しましょうか。勿論行くわよね?」

唐突の幽香さんの提案。

ああ……、お茶と言う名の手合わせ（デスマッチ）が待つてるパターンだこれ。しかも断つたら、即殺られる奴だ。

「はい!喜んで!」

情けない?ああ、自分も情けないって思ってるさ。でも仕方ないだろ?だって怖いもん。

「あなた達もどう?」

「はあ?行くわけ無いだろ」

「お菓子も沢山あるわよ」

「よっしゃ!フラン行こうぜ!」

ああ……、あっちにも情けない奴が居たわ……。

ご飯を食べた後、僕たちは幽香さんの家で紅茶を飲んでいた。相変わらず、この家の周りには沢山の花が咲いてるなあ。——フラワーマスターと
言うのも納得だ。

ふと急に、幽香さんが立ち上がった。

「さてと。さあ片倉、いつも通りやるわよ」

「ほえ？やるって何を？」

「早くしないと本気でやるわよ」

「分かった！分かりました！いきまますから。だから本気は勘弁してください！」

ああ……、やっぱりやるのね。正直したくなかったんだけど。

「んっ？二人してどうしたんだ？」

「ちよつと表に出てくるだけさ」

「何するのー？」

「えーと……、下手したら血祭りかも……」

「えっ!?本当!?!」

いや、あくまでも下手したら何ですけどね。てかそんなにはしゃがないでフランちゃん。普通ははしゃぐ事じゃないから。

「ほら早く表に出なさい」

「はい……」

果たして僕は生きて紅魔館に帰れるのだろうか。少し心配になってきた……。

「先手は譲るわ」

「それはどうも」

「言っておくけど、全力で来なさい。一応あなたの実力を確かめる為にやってるんだから」

「そうですか。こちらとしては、正直いらないお世話ですけどね。」

「それじゃ行きます！」

左腕の義手に力を纏わせる。——久しぶりだな、この感覚。

「またあのパンチかしら？あの時とは違うんでしょうね」

「ええ勿論」

でも果たしていけるかなあ……。昨日考えた技だし。まあやってみるか。

「ホローポイント——ハイドラシヨック」

ズドン！と幽香さんの胴体に拳を叩き込む。

だが見た感じは、いつものパンチとなんら変わりない。だが、ここからがこの「ハイドラシヨック」の凄いとこらだ。

余裕そうな顔をしていた幽香さんが、急に少し辛そうな顔をする。

「ぐっ……なかなかやるわね」

「どうも」

「まさか、体内に力を注がせて、ダメージを与えるなんてね」

この「ハイドラシヨック」は、幽香さんの言った通り相手の体内に力を注ぎ衝撃を与えるという技だ。単純に言えば、2回もパンチを喰らったのと同じというわけだ。

しかも厄介なことに、どんなに外側がが硬くて防御力が高かったとしても、それ相応のダメージを与える事が出来る。まさに、防御力が怪物級の幽香さんに対抗できる技ということだ。

しかしさつきまでの苦痛な顔は既になく、幽香さんは微笑んでいた。

「だけど」

「だけどっ？」

「まだまだね」

ガシッと頭を鷲掴みされる。

嘘だろ？かなりダメージ入ってる筈なんだが……。回復力高すぎない？

その瞬間、視界が大きくぶれる。

頭を鷲掴みにされたあと、思いつきり上空に投げられたのだ。

やばい、このまま行くと地面に衝突して死ぬって。ちよつ、なんとかしないと。

「魔力鎧展開！」

地面に衝突するすんでのところ、魔力鎧を展開する。だがあまりの衝撃に息がつかなくなる。——もはや殺しにかかっているとしか言い様がないだろ……。

「あら？なかなかいいわねその鎧」

「ゲホッ、ど、どうも」

「ほら、寝てないでさっさと起きなさい。じやないと死ぬわよ？」

起き上がった瞬間、緑色の弾幕が飛んできた。「うおっ！」と情けない声をあげながらその弾幕を弾く。

だが弾幕はそれだけではないようで、次々に容赦無く飛んでくる。

でも以前は避ける事すら出来なかったその弾幕も、今となつては結構避けられるようになっていた。

とは言うものの、ちよくちよく避けられなかつたりする弾幕もあるのだが、そこは鎧の防御で何とか凌ぐ。

そして、ようやく弾幕の第一波を攻略する事ができた。これには幽香さんも少し驚いていた。

「意外ね……かなり成長してるわ」

「ありがとうございます」

「でも、まだ見せてない力があるわよね」

うぐつ……バレてましたか。まだ風刃の出番は先にしようと思ってたのに、見抜かれていたとは……。

「——早く見せなさい」

幽香さんの凄みのある声に押されずぐすぐと風刃を出そうとする僕。——凄みでずぐすぐ、なんつつて。

「変なこと考えてないで早くしなさい」

はいはい、分かりましたよ。出せばいいんですよ。

〈閃刀 神速之風刃〉

左手に緑色に輝く魔力で出来た刀を形成する。

「おくんか片倉がやってるぜフラン」

「ほんとだ〜」

気がついたらあの二人も表に来た。——呑気だなあの二人組。

「それがあなたの新しい力ね……」

幽香さんは風刃を見ながら何かを考えている。あれ？もしかして期待はずれだった？

まあいいや。とりあえず攻撃だ。

風刃の機動力上昇の能力付与を利用し、圧倒的速度で幽香さんに斬りかかる。

ガキン！だがその斬撃は幽香さんには届かず、花柄の可愛い傘に受け止められる。——あれ？傘ってこんなに耐久度高かったかな？

「動きもなかなか悪くないわ。だけどまだ遅いわね」

この速度で遅いとか、幽香さんの動体視力はどうかしてるんじゃないかと思う。いやだって、自分でもこの速さについていくのに必死なのに。

「ほらほら、早く次の手を打たないと死ぬわよ」

あなたの頭の中は僕を殺すことで頭がいっぱいなんですか？

まあ、死にたくないから必死で次の手を打つわけなんですけどね……。

距離を取り、次は斬撃を飛ばす。流星にこれは避けるのは無理だろ。だって速すぎて見えないし。

と思っていた時期が僕にもありました。全ての斬撃を余裕の表情で避けていく幽香さん。——もうここまでできたら笑うしかないよ……。

「あら？今のが攻撃です何て言うんじやないわよね？」

もう何ていうかこの人、悪魔だよ。人の姿をした悪魔だよ。……いや、妖怪か。いや、そんなことは今はどうでもいい。

あつそうだ、いいこと考えた。多分無理だろうけどやってみよう。

「——いや、片倉って意外と強いんだな」

欠伸をしながら、魔理沙がのんびりとぼやく。

「そうだよ！お兄ちゃんは見かけによらず強いんだよ！」

そのぼやきに対し、フランはまるで自分の事のように魔理沙に自慢する。

「でも、あの風見幽香にはかすり傷は負わせられないだろうな。あいつまだ全力の二割くらいしか出してないし」

手元にあるお菓子を食べながら、魔理沙は言う。

ふとフランは魔理沙に質問する。

「魔理沙とお兄ちゃん、どっちが強い？」

「そりゃあ勿論私だけ！魔法使いは凄いなだぜ！」

その時、魔理沙はふとある事に気づく。

「あいつ本当に普通の人間か？」

「なんで？」

「いや、何だか気のせいかもしれないが、あいつの力の扱い方って魔法使いにそっくりだなって思ってたな」

「気のせいだよ。お兄ちゃんの外から来た普通の人だって言ってるし」

「そうだよなく、気のせいだよな。外の世界に魔法使いなんているわけないよなく」

そう言いながら、魔理沙はケーキを頬張った。フランとお菓子を巡る喧嘩をしながら。

……あの二人組は何をやってるのだろうか。お菓子くらいちゃんと分け合えよ……。

「よそ見してる場合かしら？」

ブンツ！と空気を切り裂きながら、傘が脳天めがけて振り下ろされる。

勿論その攻撃は風刃で凌ぐ。やっぱりあれは傘じゃないよな絶対。

「そろそろ終わりにしましょうか」

止めを刺すときによく聞きそうな台詞を言う幽香さん。

傘の先端を僕に向け、一度だけ見たことのあるあの光線を放つ。

見たことはあるけど、実際に撃たれたのは初めてだ。おそらく凌ぐの無理だろう。なら僕も何かしらの手を打つしかないだろう。

迫り来る光線に向かい僕はスペルカードを宣言する。

〈他符 破山砲〉

力を溜めた拳から、山をも破壊する威力をもつ光線を放つ。名前から分かると思うが、このスペルカードは美鈴直伝のスペルカードだ。習得したことすっかり忘れてたよ。

凄まじい衝撃と爆音と共にマスターズパークを破山砲が打ち消していく。

完全にマスターズパークを打ち消し、自信満々の顔で幽香さんの方を見る。そりやあ自信満々にもなるさ。あの光線を打ち消したんだからさ。

しかし、幽香さんの姿はなかった。……あれ？どこに行った？

その時バキボキ、と言うような音と共にはるか上空に飛ばされた。——鎧が粉々になってるんですが……。

きりもみ回転しながら上空に飛ばされているため、まったく体勢が整うことができず、ただ呆然と落ちるのを待つしかなかった。

ふと地上を見てみると、幽香さんが満面の笑みを浮かべながら、僕が飛んでいるのを見ていた。

恐らく姿をくりました時に僕の背後か何かに回り込んで、思いつきり上空に僕を蹴り上げたのだろう。鎧を粉々にするほどの勢いで。——さすが幽香さん。もはや人間業いや、怪物業とは思えない。

そこで重要な事を僕は思い出す。

“この距離で落下したら確実に死ぬよな”

うおおあああいつ!!まじかよ!?!死ぬって!

どうする?もう地上は間近だぞ!でもきりもみ回転してるから何もできない!

そして僕はそのまま、物凄い勢いで地面に落下した……と思っていたら、空中で何者かにキヤツチされた。

「無事か片倉?」

助けてくれたのは、白黒の魔法使いこと魔理沙だった。

いやあ、助かった!生きてるって素晴らしいよな!

無事安全に地上へと降り立つ。——魔理沙にお礼しないとな。

それよりも幽香さんの事が先だ。幽香さんの方を向き身構えるが……あれ？

「あのく幽香さん？」

「ん？どうしたのかしら？」

「なんで、優雅に紅茶飲んでるんですか……？」

「あら？見てわからないのかしら？もう飽きたのよ」

「そうですか……」

「そうですか、僕が落下死しそうだった事なんて興味無いんですね。」

「まあ、特に怪我もしなかったし気にしないどころ。そうしよう。」

「そろそろ帰ろうかな……紅魔館に……」

「なんかここにいと悲しくなってくる。なんでだろうね、不思議だね。」

「そうだな。帰るか」

「お菓子をたらふく食べて満足した表情で箸を手取る魔理沙とフランちゃん。……」

「いいよね君達は。僕は全然お菓子食べれなかったんだよ？」

「また来る時はもつと強くなつてから来なさいよ」

「そしてこの人もこの人で、どうしてこんなに戦いしか脳が無いんでしょうね？」

「そんじゃ私は家に帰るぜ。またなフラン、片倉」

「バイバイ！」

あつという間に箒にまたがり空高く飛んでいく魔理沙。——箒といい傘といい、どうしてこの世界の住民は、道具を正しく使わないんだろうな。まああの二人だけかもしれないが。

「お兄ちゃん、みんなにお土産買って帰ろうよ」

「そうだね」

紅魔館に帰る前に人里で僕達二人はお土産を買って帰った。

ちなみにフランちゃんのお土産はみんなに大好評だったのだが、僕のお土産はまったく駄目だった。——やっぱりうどんを選んだのが間違이었다か。

その日は僕だけうどんづくしの料理だった。

剣術の達人に弟子入り

「うーむ寒い……」

季節はもう冬。僕は暖かいコーヒーが飲みたいなど心の中で呟きながら、人里を歩いていた。

というのも、咲夜さんが今日は忙しいようで、今日の晩御飯のお使いを僕が頼まれたのだ。

(頼まれた食材も一通り買ったし帰るか)

紅魔館に帰る前に、いつものあの食堂にでも行こうと思ったのだが、道草食って咲夜さんにお仕置き(ナイフ)されるのが嫌だったのでやめた。

人里の門を抜け、冬に入って人通りがすっかり少なくなってしまった道を歩いていた時、茂みから急に小さい変な妖怪が5匹も現れた。——もしや某ポケオンか!?そんなわけないか。

現れたのは……何だこいつら?

なんか良く分からない言葉を喋っているが、恐らく僕を襲うのは間違いないらしい。

あゝ……そう言えば咲夜さんが

『最近では低級妖怪がよく出現するそうなので気をつけてくださいね』

とか言ってたな。信じてなかったけどまさか本当だったとは。

「仕方ない。倒すか」

こいつらを倒す手段を考えていた時、とてつもなく大事な事を思い出した。

「あつ……両手塞がってた」

両手に買ったばかりの今日の晩御飯の食材がある事を思い出す。——やばくね？

これ。

一匹が僕めがけて飛びかかる。ちよつ！僕に攻撃するのはいいけど、食材を攻撃するだけはやめてー！咲夜さんに怒られるからー！

命の危険（咲夜さんから怒られる）が迫るその瞬間、一人の老人がふらりとどこからか現れ、飛びかかってきた妖怪を目にも止まらぬ速さで一刀両断した。——えっ？何事？

「やれやれ、しつこい奴らじやのう」

老人に向かって、妖怪が二匹飛びかかる。しかし、刀を横一閃してぶった斬った。

だがそれだけにとどまらず、残りの二匹も老人は斬り伏せた。——強すぎでしょ。

あのお爺さん。

「大丈夫ですかな？」

「ああはい。ありがとうございます」

「最近は妖怪どもが悪さをしておるから、大変じゃよまったく」

「あの……あなたの名前は？」

「んっ？わしか？わしの名前は魂魄……いや、とうかけんさん桃花劍山と呼んでくれ」

「僕は片倉です。助けて下さりありがとうございます桃花さん」

正直に言おう。僕はこの老人に惚れた。……いやホモ的な意味合いじゃなくてだな、つまり弟子入りしたいのだ。

だってあれだよ？ふらりと現れて、あつという間に妖怪倒しちゃうんだよ？これで惚れないのなら、そいつは男じゃないね。いや知らないけど。

「それでは失礼する」

「待ってください！」

「ん？どうした」

「僕を……弟子にしてください！」

「ふむ……、わしは弟子をとらんのじゃが……」

「そこを何とかお願いします！」

高速土下座による圧倒的懇願でお願いする僕。傍からみたらただの情けない奴であるが気にしない。気にしたら負けだ。

「分かった。では明日、ここで落ち合うことにしようぞ」
「はい！分かりました！」

次の日、僕は桃花師匠と滝壺に来ていた。

「まずはお主の実力を見せてもらおうかの」

「分かりました！」

自信満々で風刃を出す。すると師匠は感嘆の声をあげた。

「ほう……これは素晴らしい」

えっ？なんかそんなに褒められると嬉しいな。

「こんな刀は久しぶりじゃ。……納めてよいぞ」

風刃を納めたあと、桃花師匠が自分の刀抜いた。

「まずはお主に、剣術の基本を教えてやろう」

「本当ですか！」

「うむ。わしに向かって、弾幕を撃つてみる。斬って見せよう」

……えっ？そんなことしたら、師匠怪我しますよ？だいたい、普通の刀で弾幕なんか斬れないでしょ……。

「本気で撃つてこい」

「分かりました」

どうやら結構本気で斬る気のようなのだ。

なら僕も本気で弾幕を撃つしかないな。

〈光符 メテオールスパーク〉

あっ……っというっかかりスペルカード使っちゃった。しかもよりよってこの技かよ。

このままじゃ師匠危ないよな……大丈夫か？

だがそんな心配など不要だった。

師匠は迫り来る光線を、たった一太刀で真つ二つに斬ってしまったのだ。さすがにこ

れには僕も唾然とするしかなかった。

「ふむ、まあこんなもんじゃろ」

「……嘘でしょ。本当に斬った……」

「これが我が剣術の基本であり極意だ」

「基本であり極意？」

「そうじゃ。お主、さっきまで普通の刀では斬れぬと思っておったろ？」

うぐつ……バレた。

「しかし実際にわしは斬った。何故だと思う？」

「さ、さあ？わかりません」

「信じる心があつたからじゃよ」

「信じる心……」

「そう。自分の刀には出来ないことはない、斬れぬものなど無い、と信じるのじゃ。その気持ちで刀へと通ずり、さっきのようにお主の弾幕を斬ることが出来たのじゃ」

信じる心こそがこの流派の極意……なるほどよく分らん。

「僕にも出来ませうかね？」

「それはお主次第じゃ。そうじゃ、お主に秘伝の技を教えてやろう」

「えっ？本当ですか！」

「うぬ。一度しか見せぬゆえ、よく見ておくのじゃぞ」

うわぐどんな技なのかな。凄いワクワクするなあ。

師匠はそこに生えていた木に向かって刀を中段で構え、目をつむり集中する。そしてカッと目を開き、上から下へと刀を振る。

するとどうだろう。木がバラバラに斬られているではないか。たった一振りだったはずだが……何故だ？

「これが我が流派の秘技、幻想永劫斬じゃ」

「幻想永劫斬……」

なんか格好いい名前だな、幻想永劫斬。ちよつと気に入ったかも。

「どうやったらこの技を会得できますか？」

「簡単じゃ。とにかく己の刀を信じることじゃ。さすればいずれ出来るようになる」

いや……なんかもつとこう……的確なアドバイスが欲しいのだが。

「ではそろそろ行くかの。1日だけじゃったが楽しかったぞ」

「えっ？1日だけってどういう……」

「んー？ハツハツハ、もうお主に教えることは何もないということじゃ」

「えー!?僕まだ極意しか教わってないですよー!?」

「それでいいのじゃ。剣の道は己で切り開いてこそじゃぞ。それではまた何処かで会お

うぞ」

そう行つて急に何処かへと文字通り透明となつて消えた師匠。……えっ、消えた？ま

さかあの幽霊？まさかあ……ハハハ……。

ふと、師匠のいた所に一枚の紙が落ちていた。——スペルカードだ。名前は……

あつ、〈幻想永劫斬〉って書いてある。

結局あの人は何者だったんだろうか。剣術の達人で幽霊のような存在。そしてこの

残されたスペルカード。

まあ今となつては考えても無駄なことか……。

そうだ！試しにこのスペルカード使ってみよう。

先ほど拾った師匠が残したスペルカードを発動させるが……あれ？なんでならないんだ？

何度も試してみたのだが、まったく発動しない。

うーんなんで……。まさか、まだ僕は剣術の極意を極めていないというのか。多分そうだよな。

「ハックシヨン！うー寒い……」

風邪ひいたかな？ここは結構寒いし、とりあえず今日は帰ろうかな……。

もう一度、師匠の残したスペルカードをもう一度発動させようと試みる。——時間
の無駄か、大人しく帰ろう。

ひとり寂しく紅魔館に僕は帰った。

「ねくねく妖夢く」

「何ですか？ご飯はまだ先ですよ」

居間でゆつたりとくつろぐ女性は、一本の大きな木を見ながら従者に話しかける。

「あの桜の花を咲かせたいんだけど」

「は、はあ……。しかし私にどうしろと」

「んーと……。そう、幻想郷の春をここに持ってきたらいいはずよ。だからお願い妖夢、集めてきてく」

だらだらと居間でくつろぎながら、忙しい自分をさらに忙しくさせる主人に若干の怒りを露にする従者。

しかし、純粋で素直なその従者は、主人の言うことには逆らえず引き受ける。

「はあ……。分かりました。じゃあ、幻想郷から春を集めてきますね……」

「うん、行つてらっしゃーい」

終わらない冬が、異変と共にこの幻想郷にやって来た。

白玉楼編

終わらぬ冬と来ない春 第1話

「寒い……寒すぎる」

「風邪を引きますよお嬢様」

「うー……」

咲夜に手渡された毛布にくるまり、紅魔館の主ことレミリアは寒さに文句をたれていった。

「なんでこんなに冬が長いのよ！馬鹿じゃないの！早く春になってポカポカとした気分
で私は毎日を過ごしたいのに……」

そこでレミリアはある名案を思いつく。

「そうよ！咲夜、片倉を呼んできなさい」

「承知しました」

「ねー美鈴」

「どうしたんですか？」

「その格好で寒くないの？」

「うーん、どうでしょう……。寒いと言われれば寒いです」

「凄いな美鈴。僕なんか厚着しないと耐えられないよ」

そんな薄着で風邪は引かないのだろうか。まあナイフに刺されても平気なんだから大丈夫だよな。

その時、咲夜さんが目の前に急に現れた。

「うおっ！ 咲夜さん」

「げっ！ 寝てないですよ咲夜さん！ 昨日は寝ちやいましたけど、今日はまだ寝てないですよ！」

ああ馬鹿な美鈴。そんなことを言ったら……。

サクツ。案の定、美鈴の頭にナイフが刺さった。

「ぎゃああああアア！ 目が目がああああアア！」

いやいや、お前はどこの大佐だよ。てか刺さってるのは目じゃなくて頭だから。――

いや、どっちにしても危険には変わらないか。

「ぐっ……、最近パッドを変えたからって、そんなのはあんまり……」

サクツ。ナイフの追加入りまーす。今度は的確に目を狙っている。てか咲夜さんってパッドしてるの？

ザクツ。目の前にナイフが現れて地面に刺さる。——今の話題は聞かなかったことにしよう。僕はまだ死にたくない。

「それより片倉様、お嬢様がお呼びです。すぐに来てください」
「は、はい……。分かりました」

地面にうずくまる美鈴に心の中で敬礼して、レミリアさんの元へと向かった。——美鈴大丈夫かな。まあ大丈夫だろ多分……。

「お嬢様、片倉様を連れてまいりました」

「どうしたんですかレミリアさん」

「来たか片倉」

レミリアさんの姿は何と言うか、カリスマの欠片も無かった。——布団にくるまっ

てるんだが……これはいかに。

「片倉よ。最近おかしいと思わないか？」

「はて？ おかしいとは？」

「いったい何がおかしいのだろうか。」

まあ確かに寒いけどさ別に寒さが問題ではないだろ。僕は暖かい部屋で、ぬくぬくと寛ぐの結構好きだし。

「最近、春が来ないのよ！ おかしいわよね？ ね？」

バンバンとテーブルを叩くレミリアさん。ちよつ、コーヒーこぼれるって。

「ま、まあ確かに、おかしいといえはおかしいですが……」

「そうでしょう」

「でもそんなに気にならないですよね？」

「はあ……？」

あれえ？ もしかして自ら望まずに地雷を踏んだかな？ いやでも、寒さとか厚着しとけばそんなに気にはならないでしょ。

「なんであんたもそんなに呑気なのよ！」

またしてもテーブルを叩く。ああ……コーヒーこぼれちゃったよ。あつ、布巾ありがとう咲夜さん。

「あなたといい、パチエや咲夜といい、どうしてそう呑気なのよ！私は春がいいのよ！」
いや、そんなこと言われても……。

すると「クシユン！」と急にレミリアさんがくしゃみをした。——咲夜さんが鼻から鼻血を出してるのは多分気のせいだろう。

「……何よ」

「いや別に。ただ、可愛らしくしゃみだなあと」

「は、はあ?」

ああ、またしても望まずして地雷を踏んでしまった……。

顔を真っ赤にして怒り出すレミリアさん。なんていうか残念ながら怖くない。本当に残念ながら……。

「うー……、こんなことになったのも全部片倉のせいよ！この寒さを何とかしなさい！」

「えー……、僕は関係ない……」

「う、うるさい！とにかくこれは異変よ！異変！だから早くこの異変を解決してきなさい！じゃないと、グングニル投げるわよ」

そう言つてグングニルを投げてくるレミリアさん。——ちよつ、危な！てかもう投げてるから！

「分かりましたから、とにかく投げるのやめて下さい！」

「分かったなら早く行きなさい」

「はいはい、分かりました」

まつたく。あのカリスマは何処へやら。——ちよつ、グングニル納めて！謝るから！

何か幽香さんと同じ感じな気が……。いや、気にしないでおこう。

これ以上グングニルを投げられたらたまらないので、そそくさと紅魔館から出ていく。

正門で、ミイラみたいな人が居たけど気にしない気にしない。どうせすぐ治るだろうし。

うーん……解決しろって言われてもなあ……どうすりやいいのか。

そうだ！困ったときはアリスの家に行こう。そうしよう。

「アリスー！」

ドンドンドン、とドアをノックするが反応がない。——また居留守か？

もう一度ノックしようとした時、家の裏手の方から何かがやって来た。——アリスの人形だ。名前は……なんだっけ？

「シャンハイ！」

ん、何だつて？上海？それは中国の都市の名前。

「シャンハイ！シャンハイ！」

うーん……シャンハイだけじゃ分からないのだが。てかこの人形つてシャンハイしか喋らないのか？

するとその人形は会話で伝えることは無理だと諦めたようで、次はコミュニケーションで伝えようとしてきた。

ふむふむ、両手で大きくクロス……バツつてことか。それで、何かモノマネしてるけどこれは……アリスか？

アリスでバツ……はっ！まさか！

「アリスが死んだ？」

「シャンハイ！」

ベシツ！と顔を殴られる。人形の割には結構重いパンチだな。死んだじゃないとなると……留守か？現に家から反応ないし。

「アリスは留守なの？」

「シャンハイ」

両手で大きくマル。どうやら正解のようだ。……まじかあ。アリス居ないのかあ。仕方ない出直すか。

「じゃあね人形ちゃん」

「シャンハイ」

シャンハイしか喋らないけど、あの人形欲しくなってきたな。いや、アリスに怒られそうだしやめとこう。

次はどこ行こうかな……。久々に香霖堂でも行くか。

久々に香霖堂に来了。扉を開けるとカウンターに居たのは魔理沙。えっなんで？

「おー片倉じゃんか！」

「なんで魔理沙が居るんだよ」

「えっ？別にいいだろ」

いやいや、居るのは別に構わないんだ。だけど何故魔理沙がカウンターに居るのが

僕には分からないんだ。お前、ここで働いてるのか？

「いらつしやい」

店の奥から、あの店主がやって来た。

「おー香霖。ご飯できたのか？」

「出来たよ。まさかと思うが、食べる気かい？」

「当たり前だぜ！」

「はあ……。じゃあ食べてきなよ。僕はこの人の相手しないとイケないようだし」

食べてきなよ、と言われた瞬間、魔理沙が素早い動きで店の奥の方へ行った。――

「まさか、ご飯当てて来てたのか？なんて奴だ。まあ、今に始まったことじゃないが。

「そうそう、君に見せたいものがあるんだよ」

「何ですか？」

カウンターの後ろの棚から、店主が何やら持ってきた。

「これだよ。君なら何か分かるはずだ」

出てきたのは、自動狙撃銃PSG―1だった。これまた凄いのが出てきたな。

「どうだい？」

「なかなかいい状態ですね。バレルの状態もいいし、傷もあまりない。これいくらですか？」

この世界で果たして使う日があるのかは分からないが、欲しいから買っておく。もちろん弾薬も忘れずに。

「そうだね……10000円でいいよ」

10000円!?安っ!?向こうの世界だとかなりの値段するのに……。

「それじゃまた来ておくれよ」

買ったばかりのPSG—1を肩に掛け店を出る。

買い物ですっかり忘れていたが、この異変を何とかしないと。とりあえず……どこに行けばいいんだ？

店の前で悩んでいたら魔理沙がやって来た。

「あれ?魔理沙、ご飯食べてたんじゃないの?」

「ああ。もう食べ終わったぜ」

「食べるの早いな。早食い選手権のチャンピオンかよ……」

「まあーな。それよりもお前、店の前で何悩んでんだ?」

「ああ……、レミリアさんにこの春が来ない異変を解決しろと言われたんだけど、どうすればいいのかわからなくてね」

「へえ、そりゃ大変だな。異変解決は私と霊夢に任せりゃいいのによ」

「えっ?魔理沙と霊夢って異変解決する人なの?」

「そうだけ。でも紅魔館の異変の時はお前が解決しちやっただけだな」

あつ、あの紅魔館の異変つて、元々は魔理沙達が解決する予定だったんだ。——
えっ?じゃあ僕がわざわざ解決しなくてもよかったじゃん。幽香さん……謀った
なアアアア!

「ぐおおおおお……」

「どうした片倉、頭なんか抱えて!頭痛いのか!」

「いや、ただ昔の己の愚かさを呪ってるだけだ……」

「??」

「まあとりあえず、あれだ。これから魔理沙はどうするんだ?この異変を解決するのか
?」

もし解決しに行くなら、僕もついて行こう。ほら、あれだよ、一人よりも二人、三人
寄ればなんとやらだ。

「んーそうだなあ……。とりあえず情報収集からするとするか」

「なるほど。どこで情報収集するんだ?」

「アリスの家に行くか。アリスならなんか知ってそうだし」

「あく、アリスなら留守だよ」

「えっ?そうなのか?」

「うん」

てかアリスって何処に居るんだろうね。

「じゃあ人里にでも行くか」

「そうだね。もちろん歩きだよな？」

もうあの筈はゴメンだ。次乗ったら確実に死ぬ自信がある。

「えゝ嫌だぜ。歩くのめんどいぜゝ」

「食ったあとに運動しないと太るぞ」

「……。よしっ！歩こうか片倉！」

案外単純だな!? やっぱり体重気にするあたり乙女だなく。ちなみに年齢っていくつ
なんだろう?!

バシユン、あぶねえ！鼻先数センチ先で、弾幕が飛んできた。

「ごめんなさい許してください」

「まったく。乙女に年齢を聞くなんて、失礼だぜ」

へいへい、分かってますよ。

気を取直して、僕と魔理沙は情報収集の為に人里へと向かった。

終わらぬ冬と来ない春 第2話

人里で情報収集をしていた僕達だったが、まったく異変の情報は集まらなかった。

「だあああああ！情報集まらねーなー」

まるで、何処ぞの猪木ボンバイエな叫び声をあげながら歩く魔理沙。とりあえず急に叫ぶのは止めようか。周りの人の目線痛いから。

「あーあー、もう異変なんてどうでもいいぜ」

「いやいや、それ言ったら駄目だろ。それでも異変の解決人か」

「でもよく、情報も何もないととなるとよく、どうにもならないんだよく」

「おいおい、やる気出してくれよ。それでも異変の（ry」

だが、だれるのも分からなくはない。こうも成果無しだと、やはり気分はだれてしま
うものだ。

「とりあえず休憩しないか？」

「おつ、それ賛成だぜ」

近くにあったお茶屋に入り休憩する。甘いもの食べたいなあ。あつ、このお団子食べ
よ。

お団子とお茶を注文する。

すると、近くで人の叫び声と怒鳴り声が聞こえた。いったい何事!?

バツ!と立ち上がり道に出てみると、どうやら暴漢が数人暴れていた。——三人か

……。

その暴漢達は、道行く人に暴力を振るつては、お金を巻き上げていくという何とも酷いことをしていた。

「おーおー、今の時代でもあんな奴はいたんだなー」

いやいや、呑気にしてる場合かよ。とりあえず警察を……いや、幻想郷に警察なんているわけないよな。

仕方ない、止めるか。幸い人数は三人と少ない。余裕だ。軍隊仕込みの近接格闘術を見せてやるぜキリッ。

止めにかかろうと、その暴漢達に近づこうとした時、一人の少女が立ちはだかった。その腰と背中には二本の刀。もしか、侍?

「ああん? 何だお前」

暴漢の一人がその少女の胸ぐらを掴む。

「おいおい、止めないか」

僕は咄嗟に止めにかかる。しかしその時、その男は少女によって地面に叩きつけられ

た。——あの動きは……古武術か？

投げ飛ばす動作には完全に無駄な動きは無かった。恐らく達人級とはいかなくとも、その動きは洗練されている。多分、剣術のおまけで会得したのだろう。

残りの二人が一斉に少女に飛びかかる。だがその二人組もあつという間に倒される。

——強いな。

暴れる三人の暴漢を倒した少女は、もう用はないと言わんばかりの態度で踵を返す。

だが、最初に倒された暴漢の男がフラフラと立ち上がる。その手には小刀が握られていた。そのまま男は、その少女の背中目掛けて小刀を突き刺そうとする。

はっ！と後ろを振り向いた少女だったがもう遅い。もう対応が間に合わない距離だった。そしてそのまま——

「うぎやアー！」

——つてさせるかよ。何とか間に合った僕は、その男の小刀を持った手首を掴み、そのままその男の手首を無理やり曲げ、小刀を奪い取り捨てる。

そして痛みで怯んだ所にすかさず腕を捻り地面に伏させる。そこにとどめの一撃として、顔面に一発パンチを入れ気絶させる。——弱いなあ……。これなら美鈴の方がまだ強いぞ。

すると、先ほど少女に倒された二人の男も立ち上がり、こちらに殴りかかってきた。

……しつこいなこいつら。少しお灸を据えてやらないとな。

殴ってきた一人の男の右腕を半身でよけつつ左腕で掴む。そして、右の手の平をその男の顎にあて、足掛けを絡めつつそのまま押す。するとどうだろう。あっさりど地面に倒れたではないか。——もちろんとどめの一撃は欠かさない。とりあえず腹部に蹴りを入れて気絶させる。

もう一人の男は、どうやら怖くなったのか棒立ちで身動きがとれていないようだ。フツフツフツ……もちろん見逃さないよ。

棒立ちになっている男の胸ぐらを掴み、少しこちら側に引く。するとその男は反射で後ろに戻ろうと力みつつ後ろへと下がる。その瞬間、右足を前に出し、足を掛けつつ前へと押し倒す。そして倒れた男の首を締めあげ、意識を落とす。——ちよつとやりすぎかな？いや、これくらいがちょうどいいだろ。こいつらには。

「よしっ、終わりっ」と

周りを見てみると、唐突の事で何が何だか分かっていないようで、周りにいた人々は口をポカンと開けていた。——あれ？やっぱりやり過ぎた？

しかし、我に帰って状況を理解すると、その人々は暴漢を止めたことによる拍手と賞賛を僕と少女に送った。

「すいません。助けてもらいましたね」

先ほどの少女がお礼を言いに来た。

「いいっていいって。君もなかなか強かったねえ。古武術？だっけ？」

「はい。我が剣術の師匠に教えてもらいましたが、まだまだ半人前のように……」

落ち込む少女。あれで半人前か……、確かに詰めは甘いつちや甘いのが、なかなかの腕前な気がするが。

「それでは失礼します。ちょっと用事があるもので」

「ああ、うん」

そう言う足早に去って行った少女。——てか名前聞いてなかったな。まあいいや。多分もう会うことは無いだろうしね……多分。

そうそう、お茶屋に戻ろう。

お茶屋に戻ったら、ちょうどお団子とお茶が来ていた。

「おつ、片倉。お疲れさん」

「ああ、ありがとう。まああんなのは朝飯前だけだな」

「まじか。片倉って強いな」

「いや、今回のあいつらは弱かったからな」

さてさて、お楽しみのお団子でも食べましょうかね。

一仕事終えた後の一杯、もといお団子とお茶は美味しかった。

「霊夢——来てやったぞ——！居るか——！」

お茶屋で休憩したあと、僕と魔理沙は博麗神社に来ていた。ああ、お賽銭はもちろん入れましたよ。魔理沙は入れなかったけど。

「ああ？何よ？」

神社の裏手にある襖を開けると、炬燵で温もっている博麗神社の巫女さん、霊夢がいた。——いいなあ。僕も入りたいなあ。

「いや、異変を解決したいんだけどな、さっぱり情報とか無くてな」

「それで？ここに来たわけ？」

「そうだけ！」

「はあ……。面倒な奴……」

溜息をつきながらミカンを食べる霊夢。

すると、何かを思い出したようで、魔理沙にこう言った。

「そう言えば、アリスが何か動いてるのは聞いたわね」

「アリスが? 何でだ?」

「さあね。そこまでは知らないわよ。家にでも行つて自分で探つてらっしゃい」

「でも、アリスは留守だったつて片倉が言つてたぜ」

「知らないわよそんなの。どうせもう帰つてきてるんじゃない?」

「なんで?」

「勘よ」

勘かよ……。適當過ぎやしないですか?

「なるほどな。分かつたぜ」

いやいや、納得するのかよ!?

「じゃあ行くとするか」

「頑張つてきなさいよ」

「あれ? 霊夢も異変の解決人でしょ。解決しようとしなの?」

「寒いから動きたくないのよね」

なんで幻想郷の異変解決人は、こんなにやる気を出さない人ばかりなんだろうか

……。こんなので大丈夫か幻想郷。

「おーいアリスー！居るかー？」

ドンドンドン、と扉をノックすると、ガチャツ、と音がしてアリスが出てきた。――
―霊夢の勘が当たってる……。凄いな霊夢。

「あら？魔理沙と片倉じゃない。どうしたのよ」

「単刀直入に言うが、お前、今回の異変と何か関係あんのか？」

まさに単刀直入に魔理沙がアリスに質問する。アリスは少し考えた後、こう言った。
「春度を集めてたのよ」

「春度？」

春度と言う聞きなれない単語がアリスの口から出てきた。春度って春となんか関係あるのかな？

「これよ」

見せられたのは、まるで桜の花びらのようなものだった。いや、桜の花びらかもしれない。とにかくそんな感じのものを見せられた。

「これが春度か？」

「ええ、そうよ。私はこれを集めてたのよ」

ああ、だから留守だったのか。納得した。

「これを集める事と異変に何の関係が？」

「この春度はね、春を訪れさせるために必要なものなのよ。でも、この異変が始まる少し前から、誰かがこの春度を集めていたの」

「それで、春が来ないというわけか」

「そう。だから私も春を訪れさせるために集めてたんだけど、全然無理だったわ。量がね……」

ふむふむ、つまり春の訪れに必要なこの春度を誰かが集めているというわけか。でも何の為に？ さっぱり分からん。

「でもいったい誰がそんなことをしてるんだ？」

「さあね。分からないわ。でも偶然、集められた春度が何処に行くのかは分かったわ」

「それは何処なんだ？」

「上よ」

「上？」

僕と魔理沙は思わず首を傾げる。

「上とはどういうことですかアリスさん」

「冥界って事よ。恐らく集められた春度はあそこに集められているわ」

冥界か……、聞いただけでも幽霊とかを想像しちゃうなあ。——ん？幽霊？そういうや、師匠は幽霊だったとしたらそこに居るのかな。いや、それはないか。

「冥界か……分かったぜ！ありがとなアリス！」

「行くのはいいけど気をつけなさいよ。冥界の主は恐ろしい力を持つてるって聞いたから」

「大丈夫だぜ！私に勝てない奴なんて居ないんだぜ！……霊夢以外（ボソツ）」

「おー、最後の言葉がなければ、とても頼もしく見えたんだけどなあ……。」

とにかく目指すは冥界か。いざ行かん！

僕と魔理沙は冥界に向かった。この異変を止めるために。

「只今戻りました幽々子様」

「あら、おかえりなさい妖夢」

「西行妖の様子はどうですか」

「そうね……」

幽々子は、目の前にそびえ立つ巨大な桜の木、西行妖を見つめてこう答える。

「あと少しって感じかしらね」

この西行妖が花を咲かせなくなつてどれだけの時が経つたのだろうか。だが、今の幽々子はまったくもつて覚えていない。

だが、そんな幽々子には、この西行妖について一つだけ分かる事がある。

「あの西行妖の下には、いったい誰が眠つてるのかしらね。早く花を咲かせて知りたいわ」

一つだけ分かる事、それは、西行妖の下には誰かが眠つているという事である。

「さああと少しよ。春度集め頑張つてね妖夢」

「——はい。お任せ下さい」

妖夢は、また春度集めに戻つた。

西行妖の開花は近い。

終わらぬ冬と来ない春 第3話

冥界は、思ったよりも明るかった。しかし何よりも目に付いたのは、道に沿って植えられた桜が全て満開だったということだ。——うん、これ絶対異変の犯人いるよね……。

「しかし、冥界っていう割には、下の方と何ら変わりねーな。桜も綺麗だし」

異変の犯人が居るかもしれないのに、呑気に桜を眺める魔理沙。何と言うか、もう少し緊張感をだな……。

でも桜が綺麗だなあ……。ここで花見とかしたら楽しいかも。いやいや、そんなことより緊張感を……。

ふと、前方から人の気配を感じた。

「んっ? どうした片倉」

「いや……、前の方から誰かが来る」

カツン……カツン……、前方から誰かが近づいて来る。——とうとう来たか。異変の犯人が。

僕と魔理沙は身構える。どうやらコチラに近づいて来るのは二人のようだ。

姿を現したのは、師匠と人里に居た少女だった。

「……………えっ?」

「ほう、二人来ていると聞いたが、お主がおるとはな……………」

「あの方は、人里の……………」

「どうして、師匠が居るんですか!?!」

「えっ? 何? 片倉こいつらと知り合いなのか」

「いや、知り合いというか、あの老人は僕の師匠で、あの少女は人里にいた子だ。でもなんでこんな所に……………」

「そんなことを聞いてどうする。わしとお主は敵どうし、今はそれ以外の何者でもない」
「片倉、どうやらお話をする気は無さそうだけ。行くぞ……………」

——戦うしかないのか。

「——片倉」

「分かった。魔理沙はあの少女を頼む。僕は……………師匠を倒す」

「分かったぜ」

気乗りはしないが、やるしかないなら仕方ない。師匠には悪いが、全力で倒す。

「どうやら、すんなり帰ってくれる様子では無さそうじゃな。妖夢よ、行くぞ」

「はい。魂魄妖夢、行きます!」

えっ、あの子の師匠って師匠の事なのか!?あと、名前は魂魄妖夢って言うんだ……。
いやいやそんなことより、とにかく師匠を倒す事に集中しよう。

バツ！と僕と魔理沙は各々の相手に向かって駆け出す。

ガキンツ！魔力で形成した刀と師匠の刀が火花を散らしながら金属的な音を奏でる。

「お主が相手か。たとえ弟子とはいえども、手加減はせぬぞ」

少しくらい手加減して欲しいものだよ、まったく。

とにかく、相手は剣術の達人だ。ここはとりあえず離れて戦おう。

ナイフの弾幕を飛ばしながら後ろへと下がる。だが流星は剣術の達人。飛んできたナイフを弾きながらすぐに距離を詰めてくる。

鋭い師匠の攻撃を何とか凌ぐ。攻撃に転じた所だが、まったく隙が無い。

そこで僕は一枚のスペルカードを使う。

〈光符 メテオールスパーク〉

光線を師匠に向けて放つ。

「無駄じゃ。その光線は前にも斬った」

光線が真つ二つに斬られ消える。

だが、光線を斬る事に集中していた師匠の裏を取ることは出来た。そしてそのまま後ろから、攻撃しようと拳を繰り出した時、僕の体は地面に叩きつけられていた。あつと

いう間だった。

——古武術か……。忘れていた。あの少女に古武術を教えたのは師匠だったな。

刹那、僕の顔面に刀が迫る。

あぶねえ！何とか横へ転がり避ける。

「今のは殺す気でやったんじゃがの……流石じゃ、我が愛弟子よ」

「愛弟子なら殺す気でやらないで下さい！」

そんな狂愛は勘弁してください本気で。

さつと立ち上がり、腰を低く落としCQCの構えに入る。

師匠に向かって強烈な上段蹴り、だが少し身を引く事でかわされる。しかし、蹴った勢いで回し蹴りを繰り返す。その回し蹴りは見事に決まり、師匠の腹部にヒットする。

回し蹴りで怯んだ隙を逃さず、すかさず師匠の右腕を掴み、足を掛けながら投げ飛ばす。

だが、投げ飛ばそうとした時、その力を逆手に取られ逆に投げられてしまう。

「武術もなかなか強いではないかお主」

「まだまだこれからですよ、師匠」

起き上がりつつ素早く足払い。だが避けられる。

胸ぐらを掴み、投げ飛ばそうと試みるも、やはり投げ飛ばされる。

ぐっ……勝てない。剣術でも格闘でも、何をやっても勝てない。チラリと魔理沙の方を見る。どちらも互角のようだ。

「余所見しとる場合かの」

拳が顔に向けて振り下ろされる。それを転がり避ける。

地面を見てみると、拳が当たったところに結構深めの窪みが出来ていた。——おいおい、幽香さん並のパンチじゃねえか。喰らったら死ぬぞあれ。

「遅い」

ボゴオ！と腹を思いっきり蹴られて吹き飛ぶ。もはや人間離れしていると云っても過言ではない。

いったいどうやったら師匠に勝てるんだ……。

フラフラと立ち上がりながら、勝つ術を考える。だが、考えても考えても思いつかない。

（集中しろ、集中するんだ）

僕は全神経を鋭く尖らせて、師匠に向かって駆け出した。

緑や赤の色とりどりの弾幕が飛ぶ。だがその弾幕は、二本の刀によって叩き落とされる。

「おい！お前らは春度を集めて何がしたいんだぜ？」

「それを教えたなら引き下がってくださいませか？」

「いや、それはないぜ。お前らを退治してこの異変なんかすぐに終わらせてやるぜ！」

「そうですか……。ならこちらは、力づくで返り討ちするのみです」

どちらもお互いの間合いを意識しながら弾幕を放つ。

しかし、弾幕の威力や量ともに魔理沙の方が上回っており、次第に妖夢は押さされていった。

「ぐっ……。ならば！」

〈獄炎剣 業風閃影陣〉

妖夢の持つ二本の刀が炎を纏う。その刀を横へと一薙ぎ。すると炎の旋風と共に赤い火の弾幕が魔理沙目掛けて飛んでいく。

「なかなか凄い弾幕だけど、パワーは私の方が上だぜ！」

〈魔符 スターダストレヴァリエ〉

星の形をした色鮮やかな弾幕が、妖夢の放った炎の旋風と弾幕を飲み込んでいく。

しかしそれだけには留まらず、星の弾幕は旋風と弾幕を巻き込みながら妖夢の方へと飛んでいく。

「っ!？」

避ける暇もなく、一気に弾幕の波が妖夢を呑み込んでいく。だが、咄嗟の判断で防御をしたおかげで、なんとか耐えきった。

しかし、防御をしたとはいうものの、相当のダメージを喰らい、妖夢は立ち上がるのも必死の状態になっていた。

「私は……負けるわけには……行かない……」

残った力を振り絞り、もう一枚のスペルカードを宣言する。

〈天神剣 三魂七魄〉

巨大な三色の弾幕と七色の色鮮やかな弾幕が辺りを埋め尽くす。弾幕の量は先ほどのスペルカードを、圧倒的に超えていた。

だが、その弾幕を目の前にしても魔理沙は怖気付く事無く、不敵の笑みを浮かべていた。

「なかなかのスペルだけど、この勝負、私が貰ったぜ!」

〈恋符 マスタースパーク〉

大きな光線が眩しい光を放ちながら妖夢の元へと一直線に飛んでいく。

三色の弾幕達はその光線を迎え撃つが、圧倒的パワーの差により、次々と打ち消されていった。

そしてボロボロの妖夢を光線が呑み込んだ。

地面に落ちた帽子を叩きながら、倒れている妖夢の元へと近寄る。——気絶していた。

「悪いな。本気出しすぎたぜ」

妖夢を倒した魔理沙は、片倉を助けに行く。

片倉はかなりボロボロだった。魔力で出来た刀を杖のようにして息を切らしている。対してあの老人は、余裕とはいかなくとも、まだまだ余力を残している様子だった。

「10分か……。普通の人間としては随分もったではないか。流石じやの」

「はあ……。はあ……。師匠って、人間ですか……。？」

「わしは人間ではない」

「やっぱり……」

「だが、人間でもある」

「ん？それじゃ矛盾してるような……」

「半人半霊というものじゃ。半分が人で半分が幽霊。わしの一番弟子も同じ感じじやの」

「そうだったんですか。どうりで人間離れしてるわけです」

バツ、と駆け出し、老人に斬りかかる片倉。だが、一瞬にして吹き飛ばされる。

慌てて魔理沙が駆け寄ろうとする。

「片倉！」

「来るなっ！」

今まで聞いたこともないような怒声で、思わず立ち止まる。

「今はサシで戦わせてくれないか」

「……。分かったぜ」

「ありがとう」

「二人組で戦わなくても良いのか？このままじゃ勝てぬぞ」

「ええ……構わないです」

またしても駆け出して斬りかかる。だが、ことごとく塞がれて、カウンターを喰らい、

また同じように吹き飛ばされた。

——勝てない。

この言葉が片倉の脳内を支配する。だが、諦めない。絶対に諦めない。

「すまぬが、この戦いも終わりじゃ。楽しかったぞ我が弟子よ」

〈幻想永劫斬〉

ただの上段斬りにしか見えないが、直感的に喰らったら大変な事になるのが分かる。

だが、そんな斬撃を片倉は避けようともせず、受けようとする。

物凄い衝撃と土煙。それに片倉は飲み込まれた。

「片倉！」

魔理沙の叫びは、その土煙に飲み込まれていった。

（勝てない。まったく歯がたたない）

なんせ相手は剣術と古武術の達人だ。しかも、半人半霊のおまけ付き。

（じゃあ、離れて戦えばいいじゃないか）

駄目だ。それじゃ決定的な一撃は決められない。

（じゃあ、刀で斬ればいいじゃないか）

剣術の達人に剣術で挑んでも無理なんだよ。

『我が剣術の極意は信じる心にある』

ああ……、師匠が言ってたなそんなこと。

『これが、幻想永劫斬じゃ』

あの技か……。多分あれなら師匠に勝てるかもしれないけどなあ……。使えないもんな。

『己の刀を信じてみる。そうすれば出来る』

そうか……。そう言う事か。

あのカードが使えなかったのは、そう言う事だったのか

土煙がうつすらと晴れていく。そこに僕は、凜とした姿で立っていた。

「ほう……。耐えたか」

「片倉……」

ホッと安心する魔理沙。

僕は懐からあるスペルカードを取り出す。

そのカードは、ずっと使えなかったスペルカードへ幻想永劫斬だった。

カードは、ほんのりと光をおびている気がした。——なんだろう、今ならこれを使えそうな気がする。

「どうやら、会得したようじゃな」

「はい。おかげさまで、ようやく会得しましたよ」

「かつかつか、並の人間なら会得は出来ぬのに、よく会得したものじゃ」

えつ、そうなの？

「さて、無駄話はこれくらいで、そろそろ決着をつけねばならぬな。お主の刀とわしの刀、どちらが勝つか」

「望むところです」

お互い刀を構える。

そして、一気に斬りかかる。

〈幻想永劫斬〉

〈一閃 幻想永劫斬〉

上段で斬りかかる師匠。それに対して、居合の構えの状態から一気に刀を振り抜く。ぶつかる刀と刀。そのあまりの凄まじい衝撃で、僕と師匠は後ろに吹き飛ばされた。

「片倉！」

魔理沙が慌てて駆け寄ってきた。

「大丈夫、ゴホツ！ゴホツ！」

あの技結構スタミナの消費が激しいな。余りの辛さに、咳き込んでしまう。よろよろと師匠の方へと歩いていく。

師匠はボロボロの姿で倒れていた。——まさか……死んじやった？

「馬鹿者。生きておるわい」

あつそうですか。

「まさか、最後の最後でお主に負けるとは。流石じやったぞ。……その技はお主に譲ろう。これからは幻想永劫斬はお主だけの技じや」

「ありがとうございますございます師匠。ところでどうして師匠がこの異変に絡んでるんですか？」

「わしの名前を覚えておるか？」

「桃花剣山ですよね？」

「そうじや。だが、わしの本当の名は、魂魄妖忌じや」

「そうだったのか。あの名前は偽名だったのか。でもどうして偽名なんか使ったんだろ？」

「その方が格好いいじやろ。」

「そうですか……。僕にはその格好良さが分からないです。」

「それで、どうしてこの異変に関係してたんですか？」

「わしは元々はここの使用人じゃった。だから、今回の異変に手を貸したのじゃよ」

「ふうん。お前らは春度を集めてたようだが、どうしてなんだぜ？」

「それは幽々子様が直接お話になるじやろう」

「幽々子？ 誰だそいつは」

「白玉楼の主と言ったところじゃの。幽々子様はこの先の白玉楼におられる」

白玉楼……。そこに異変の元凶が居るのか。

僕と魔理沙は、この先にあるという白玉楼に向かって進み出した。

終わらぬ冬と来ない春 第4話

片倉と魔理沙が冥界に居る頃、博麗霊夢は炬燵に入つてみかんを食べていた。

「はあ……。まったくもって寒いわね」

「それなら解決しに行けばいいじゃない」

空中に突如隙間が開き、紫が現れた。

「面倒。てか帰れ」

「はあ……。博麗の巫女としてどうかと思うわよ。ゆかりん悲しい」

「嘘つきなさい。てかそのゆかりん止めなさいよ。気持ち悪い」

「あら？ なかなか冷たいわねえ。とにかく異変の解決しに行かないと、あの子達死んじゃうわよ」

「私の知った事じゃ無いわよ」

「白黒の魔法使いはどうでも良いんだけどねえ……。あの子だけは死なれたら困るのよ。だから、早く解決してきて頂戴」

「またあいつの事？」

霊夢は軽い怒り口調で紫に言う。だが、紫はそんなことは気にも止めずに笑う。

「あんた……」

「まあそういう事だから、宜しくね〜」

閉じる隙間と共に紫は消えた。

紫が居なくなり、霊夢だけになった部屋は少しばかり寂しく感じる。

「はあ……」

季節外れの雪を眺めながら、深くため息をつく。

「面倒くさい奴……」

霊夢はそう呟くと、炬燵から出て、外へ出る準備をするのであった。

「おーい魔理沙、おいてくぞー!」

「ちよつ、ちよつと待つてくれだぜ……」

大きな階段を息を切らしながら登る魔理沙。——箒で飛ばばいいのにね……。

まあ、これはこれで面白い光景だから言わないけど。

てか最近、魔理沙太った?これを上りきれば痩せるかもよ。

ビュン！緑色の弾幕が顔面目掛けて飛んできた。あぶねえ！

「失礼な事を考えるからだぜ」

「す、すいません」

なぜバレたのか。もしかして顔に出てる？

そんなこんなで、やたらとでかい階段を登りきった。

階段を登りきった先には、巨大な和風の屋敷があった。——あれが白玉楼か。……

む？

バツ！とその場から飛び退く。その次の瞬間、弾幕が元いた地面を扶った。

弾幕が飛んできた方向を見ると、一人の女性が浮いていた。

その女性は口元を扇子で隠しており表情は読み取れないが、おそらく笑っている事が分かる。

「ウフフ……。ようこそ、白玉楼へ」

「お前が異変の犯人だな！」

「そのとおり。私は西行寺幽々子。この異変の犯人よ」

とうとう現れたか。先程の師匠や妖夢とは比べ物にならないくらいの妖気が感じ取られる。

「お前は春度を集めて何がしたいんだぜ」

「西行妖を開花させ、その下に眠る者の封印を解くためよ」

「西行妖？」

「あの大きな桜の木のことよ」

幽々子が指をさした方を見ると、そこには大きな桜の木が生えていた。しかし、その木は開花しておらず、まだ蕾の状態だった。

「とにかく、さっさと春度を返せ」

「それは困るわ。あと少しであの西行妖は開花するのだから」

「そうかい。ならお前を退治して、春度を奪い返すだけだぜ！」

そう叫ぶと、先手必勝、緑や紫、赤等の色とりどりの弾幕を飛ばしながら魔理沙は箒に跨って幽々子の方へと突撃していった。——あれ？僕飛ばないけど、どうすれば……。

飛んでくる色鮮やかな弾幕を、紙一重で華麗によけていく幽々子。その姿は、さながら蝶のよう。

負けじと弾幕を飛ばし続ける魔理沙だったが、まったく幽々子にはかすりもしない。

——もう、僕居なくてもよくないですか？これ。

「ぐぬぬ……、だつたらこれだぜ！」

〈天儀 オーレリーズソーラーシステム〉

魔理沙の周りに無数の青色の球体が現れ、ぐるぐると周りを回り出す。するとその球体は、幽々子に向かって大量のレーザー弾を放ち出した。

さすがにレーザー弾をよけるのは辛かったようで、幽々子も弾幕を放ち出した。幽々子の弾幕により、魔理沙のレーザー弾はことごとく打ち消されていった。

レーザー弾の弾幕は無駄だと悟った魔理沙は、次なるスペルカードを宣言した。

〈魔空 アステロイドベルト〉

星のような形をした弾幕が魔理沙から幽々子に向かって放たれる。その弾幕は、正面と左右の三方向に別れて幽々子に襲いかかる。

迫り来る星型の弾幕を前に幽々子は余裕の表情を崩さず、初めてスペルカードを宣言した。

〈亡郷 亡我郷 ―宿罪―〉

色鮮やかで華麗な弾幕が、魔理沙の放った星の弾幕を打ち消しながら、波のように魔理沙に迫る。その弾幕を箒で飛んでいるとは思えない動きで、紙一重で全てかわしていく。刹那、魔理沙の右方向から、レーザーが薙ぎ払われた。

「うわっ！」

ギリギリのところでレーザーを回避する。だが、レーザーを避けたとはいえ、まだまだ弾幕が収まる気配はない。

「ちよつ、片倉！助けてくれ！」

いやいや、飛べないのにどうしろと言うんだよ。——でも流石にあの状態だとやられるのも時間の問題だな。

「早く！」

相変わらず箒で素早くよけているものの、次第に弾幕がかすりでした。……ヤバナ。

何か、何か無いのか!?

ふと、肩に掛かっていたある物の存在に気がつく。——自動狙撃銃PSG—1があるじゃないか。

マガジンをセットし、初弾を装填。6倍率のスコープを覗き、引き金に指をかける。そうそう、安全装置の解除も忘れない。

その時、箒に弾幕が当たり、魔理沙が大きく体勢を崩した。そのせいで、目の前に迫った弾幕に対し、対応が間に合わなくなる。

まずい、ギョツと目をつぶり、来るべき衝撃を待つ魔理沙。だが、その弾幕は、僕の狙撃によって打ち消された。

「片倉！」

「大丈夫か？魔理沙」

最初の一発から間髪入れずに、次々と弾幕を打ち消していく。いやあ、この銃買ってきて正解だったな。

狙撃による援護により、魔理沙がだんだんと幽々子を押し始めた。だが、まったく幽々子の余裕の表情は崩れない。

その時突然、幽々子がスペルカードを宣言した。

「ウフフ、そろそろお開きの時間ね」

〈亡郷 亡我郷 ―さまよえる魂―〉

幽々子を基点に全方向にとんでもない量の弾幕が飛ばされる。流石にあの量はちよつと反則だろ……。

魔理沙も攻撃する余裕がなく、よけるのに必死になっていた。

僕も急いで狙撃で援護するが、いかんせん弾幕の量が多すぎて捌ききれない。そして何より……弾が足りない。

「魔理沙！すまん！弾切れだっ！」

「んなっ!?まじか!!」

援護が無くなり、だんだんと弾幕がかすり出す。

もはやこれまでか。諦めかけたその時。

〈夢境 二重大結界〉

すべての弾幕が止まった。——いや、止まったと言うより、結界により打ち消されていた。これは……?」

後ろを見てみると、赤と白の巫女服を身にまとった博麗の巫女、霊夢が居た。

「フッフ、ようやく来たわね。博麗の巫女」

「つたく、面倒くさいわまつたく……。あんたを速攻でぶつ倒して、さつさと異変なんか解決してやるから、覚悟しなさいよ」

「ウッフ……。望むところよ」

「ビシッ!と幽々子に指をさして格好いいセリフを言う霊夢。うーん、格好いいなあ……。まさに真打ち登場!みたいな感じで。」

その時、霊夢がこちらを向いた。

「あら?片倉じゃない。あなたは、なんで戦ってないのかしら?」

「お前も戦えよ、と言わんばかりの口調。でも、僕にも戦えない理由があるのだ。それは——」

「えっ?だって僕飛べないじゃん。飛んでる奴を相手には戦えないですわ」

「……そうだったわね。とりあえず、片倉はそこでじっとしときなさい」

「はーい。分かりました」

「飛べないなら仕方がない。うん、仕方がない。ここは大人しくじっとしておこうしよう。」

「魔理沙はちゃんと私の援護しなさいよ」

「おう！任せとけ！」

「そろそろいいかしら？」

「いつでも来なさい。速攻でぶっ倒すから」

もう霊夢が喋る言葉が、女の子が喋る言葉じゃ無くなってきてるんだが、これはいかに……。まあ、普段からだらだらしてるオッサンみたいな感じだし、問題無いか。

ビュン！すごい速度で御札が飛んできて、足元に突き刺さった。……あれ？あの御札って紙で出来た御札ですよね？

「次は無いわよ」

ニツコリと微笑む霊夢。——あれ？体の震えが止まらないぞ。あと冷や汗も出てきた……。

「それじゃ、まずは私からの攻撃ね——」

幽々子がスペルカードを宣言しようとしたその時。

〈神霊 夢想封印 瞬〉

霊夢が二重結界の力により幽々子の目の前に瞬間移動。

あまりの速さに対応が一步遅れた幽々子に容赦無く回し蹴りを顔面に……。うわあ、容赦ねえ。てか弾幕じゃなくて蹴りって、幽香さんと同じ事やってるよ霊夢……。

顔面に猛烈な蹴りがジャストミートした幽々子は、思いつきりぶつ飛ばされて、白玉楼の壁に激突した。その光景はさながら、某サイヤ人を題材としたアニメの戦闘シーンのようだった。凄いな。痛そうだけど。

崩れた瓦礫の中から幽々子が出てきた。……無傷だ。あの人やつぱり某サイヤ人……なわけ無いか。

瓦礫の中から這い出てきた幽々子は、表情こそは笑顔だが完璧に怒っていた。――
笑いながら怒る人って始めてみたわあ……。

「ふ、ふふ、なかなか荒いのね、博麗の巫女の戦い方って」
「あら？ 私、最初に言ったじゃない。速攻でぶつ倒すって」

「フッフ……、面白いわ博麗の巫女。なら、このスペルカードを攻略してみなさいな」
幽々子の周りに、美しい蝶が集まってくる。その蝶は本物ではなく、半透明の鮮やかな色をしている蝶だった。

幽々子の周りを無数の蝶が舞い踊る光景は、まるで幻想的だった。

〈亡舞 生者必滅の理 ―死蝶―〉

周りを舞い踊っていた無数の蝶が急に全方向へと飛び出す。その光景に目を奪われていると、無数の蝶達の隙間から、半端じゃない量の美しい弾幕達が姿を現した。

「綺麗……」

魔理沙がポツリと呟く。確かに、ここまで綺麗な弾幕は今までに見たことない。このスペルカードはもはや芸術と言えるであろう。

しかし、今は見とれている暇は無い。刻一刻と弾幕が近づいてくる。——まあ、僕は遠くで眺めてるんで関係無いんですけどね。ハハハ。

「魔理沙！見とれてないで行くわよ」

「ハッ！お、おう！」

霊夢の一声で我に帰った魔理沙は、一気に動き出した。

霊夢と魔理沙は、あの弾幕と蝶の群れにあらう事か突っ込んでいった。……えつ、あれよける気なの？

「スゲエ弾幕だけど、これなら一網打尽だぜ！」

〈恋符 マスタースパーク〉

膨大な光を放ちながら、迫り来る弾幕に向かって一直線に光線が飛んでいく。いくばかの弾幕を打ち消し進んでいった光線だったが、濃密な量の弾幕の前には屈した。

「あれ？……えつ？」

スペルカードが予想以上の効果を発揮せず、慌てて弾幕を回避する魔理沙。しかし、隣の霊夢は涼しそうな顔で、神業のように弾幕をすんでの所でかわす。——あの人って本当に人間？

その時、大事なことを僕は思い出した。

幽々子のスペルカードは全方向に容赦ない量の弾幕を飛ばす。その弾幕の射程距離はパターンにもよるが、今回はかなり長いようで、500mは飛んでいる。僕が居るのは、幽々子から約300m離れた地点。——そう。つまり、そう言う事だ。

……こつちまで流れ弾が飛んでくるじゃねえか！

とう！はつ！やつ！あの手この手で飛んできた流れ弾、もとい流れ弾幕を回避または弾き返す。——ちくしょう、誰だよここでじつとしろって言った奴！

「ああ、鬱陶しいわ」

「ウフフ……、相当苦しんでるようね」

「つたく。魔理沙！」

「うわつとと。どうした霊夢！」

「ちよつと私のために道を開けなさい」

「任せろだぜ！」

〈魔砲 ファイナルスパーク〉

魔理沙の手元の道具が力を溜める。そして次の瞬間、耳をつんぎくような爆音と共に、5mはゆうに越えるほどの大きすぎる光線が放たれた。

その光線は、向かってくる弾幕をことごとく打ち消していき、遂に濃密な弾幕の壁を

貫通した。

「今だぜ霊夢！」

「ナイスよ魔理沙」

迫り来る弾幕の壁に先ほどのスペルカードによりポツリと開けられた隙間。それに向かつて、高速で突っ込んでいく霊夢。その速さは、弾幕の壁に空いた隙間が閉じるよりも先に、幽々子の目の前まで到達するほどだった。

余裕の顔から一変、驚愕の顔に変わった幽々子の顔に、霊夢は一枚のスペルカードを突きつける。

「終わりよ」

〈霊符 夢想封印〉

幽々子周りを囲む大きな光の玉。それらは一気に幽々子へと迫る。

「フフ……流石ね。博麗の巫女」

幽々子が、フツと微笑みその後、眩しい光が辺りを包み込む。光が収まった後、地面に横たわる幽々子の姿があった。その顔は、負けたはずなのに晴れ晴れとしていた。

「ほら、負けたんだからさっさと春度返しなさい」

「勿論返すわ」

ようやく終わったか。緊張感が解けたのか、疲れが一気にどつと来た。帰ったらまず

はシャワー浴びたい気分だな。

しかし、異変が解決したというのに魔理沙の顔は険しい。どうしたんだ？

「おい！魔理沙どうしたよ、そんな険しい顔なんかして」

「か、片倉……あれ、見てくれだぜ」

「??」

魔理沙の指さした方向を見てみる。指さした先には、開花した西行妖があった。

「お〜綺麗だな〜」

「そうじゃない！もつとよく見ろって！」

ん？どういふこと？

開花した西行妖をよく見てみる。すると、西行妖の真上に誰かが浮いていた。……

あれは、もしや幽々子？

その誰かは、幽々子と同じ人にしか見えなかった。

だが、それだけではない。西行妖は、何故か、動いていた。——あれ？桜の木って

動くっけ？

「おいおい魔理沙、あの木……」

「あ、ああ……。動いてるぜ」

何か嫌な予感がする。……とりあえず霊夢に報告するか。

霊夢に西行妖の事を言おうとしたその時、僕の体は、木の枝により思いつきりぶつ飛ばされた。

「がはっ!」

唐突の不意打ちにより反応が出来なかった為、受け身も取れずに無残に地面へと転がった。

何かの異変を察知してか霊夢が振り返る。

「んなっ!?!何よあれ!」

霊夢が見たものそれは、木の枝を触手のように動かしていた西行妖の姿だった。――

―何か、気持ち悪いなあ……。うねうねしてさ。

その時、西行妖の木の枝が僕の身体を貫こうと、無残に横たわる僕目掛けて一本の木の枝を動かした。

よけようにも先ほどの衝撃で体が動かない。そしてそのまま、木の枝が体を貫いた。

終わらぬ冬と来ない春 第5話

ザシュツ、と枝が突き刺さる音、飛び散る鮮血。

「ぐ……あ……」

だが、貫かれたのは僕ではなく、魔理沙だった。

僕を庇ったせいで、肩が貫かれている。

ボタボタと、地面に血が滴り落ちたその瞬間、魔理沙が壁へと叩きつけられた。

何とか立ち上がり、魔理沙の元へと駆け寄る。駆け寄ってみたものの、魔理沙はピクリとも動かない。

「おい！魔理沙！」

急いで状態を確認する。——息をしていない。

胸に耳を当ててみるが、心臓の鼓動は感じられない。恐らく、先ほどの衝撃でショックを受けて心肺停止になったのだろう。見たところ骨も折れている。……まずいぞ。このままじゃ……。

急いで心肺蘇生を行おうとした時、枝がすぐ側に突き刺さった。

ちくしょう！邪魔すんなよ！そう叫ぼうとした時、霊夢が西行妖の前に立ちはだかつ

た。

霊夢に向かう無数の枝の攻撃、しかしその攻撃は結界によって止められていた。

「片倉！早く魔理沙をなんとかしなさい！」

「わ、分かった」

急いで心肺蘇生を始める。

何度も何度も心臓マッサージをするが、心臓が動かない。

死ぬな！心の中で強く叫びながら蘇生を続ける。

「魔理沙あああ！」

諦めかけたその時。

「はあ！ゲホッゲホッ！」

魔理沙が息を吹き返した。——ふう……よかった……。冷や汗がどつと出たよ。

「大丈夫か魔理沙？」

「あ、ああ。だ、大丈夫、だぜ」

本人は大丈夫だと言っているが、肩に刺し傷を受け、骨も軽く二箇所は折れている重症だ。とにかく安全な場所に避難させよう。

魔理沙を担ぎ、急いで西行妖からかなり離れた木陰へと運ぶ。

「……なら大丈夫だ」

「助かるぜ……」

とりあえず肩の出血を止めるために、バックパックから包帯とガーゼを取り出し、止血しておく。

骨折箇所は、固定したかったが、あいにく固定するための物がなかったので、そのままにしておく事にした。

「これで何とかなるはずだ。絶対に動くなよ」

そう言うのと、僕は霊夢と西行妖の元へと戻ろうとする。

「ま、まさか戻る気か？」

「ああ。霊夢がまだ戦ってるしな」

「そうか。気をつけろよ」

「ああ、分かった」

僕は西行妖へと駆け出した。

霊夢の结界はもう破られる寸前だった。

僕も急いで加勢に入る。その時、幽々子が指を指した。

「西行妖の真上にいる子を見て見なさい」

さつきも見たが、西行妖の真上に浮いている人物、あれはどう見ても幽々子にしか見えなかった。

「あれは……、あなたですよ」

「ええ。昔の私ね。どっからどうみても」

「昔の私？」

「ようやく思い出したのよ。あの西行妖の下には私の死体が封印されてる事をね」

死体が封印されてた？はて、どういう事なの？ちよつと詳しく聞かせてもらいたいところだが、今は呑気にお話をしていない場合ではない。

「そんなのどうでもいいわ。とにかくあの木を何とかしないと、まずい事になるわよ」

霊夢の言う通り、あの西行妖を止めないと、この場にいる全員が死ぬ事になるだろう。

だが、どうすれば……。

「そうね。多分だけど、西行妖の上にいる昔の私を封印したら、収まるはずよ」

どうやら幽々子曰く、あの西行妖上にいる、昔の幽々子をもう一度封印すればいいらしい……多分。

「封印すれば戻るのよね？」

「確証は無いわ。でも、やってみる価値はあるはずよ」

「……わかったわ。片倉、行くわよ」

「ええ、まじすか……」

「いやいや、行きたくないから。あの触手みたいな木の枝が無数に乱舞してる場所に突撃とか自殺行為だから。」

「一応これでも、僕は普通の人間ですよ？」

「ああ？」

「ああー！神社の巫女さんからヤクザのような声がー！巫女としてその声はどうかと思えますよ霊夢さん。」

「冗談です。喜んで行かせてもらいますよ！」

「これはもう仕方ないよね。うん、仕方ない。怖いもん、霊夢さんの目が。」

「ああ、だからそんなに睨まないで！失神しちゃうから怖すぎて。」

「宜しい。さあ、行くわよ！」

「ここまで来たら腹を括ろう。」

「境界がとうとう破れた。それに伴い、大量の枝がムチのように暴れだし、周りのもの全てを破壊しだす。」

「何とかして近づこうとするものの、枝が多くて全く近づけない。……無理じゃね？こ

れ。

とりあえず、地道に枝を一本一本ずつ切り倒して近づく作戦でいこう。

風刃を構え、近づいてきた枝を一本を斬る。しかし、枝は斬れない。ましてや、そんなに切り込みも入っていない。……硬すぎるだろこの枝!?

「ちよつ、霊夢!これ斬れない!」

「はあ?枝が斬れない?嘘つかないでよ!」

「いや、本当だつて。マジで斬れないから!」

まったく枝が斬れない僕とは違い、霊夢の方は迫り来る枝をバシバシと弾幕で粉碎していく。

試しにもう一回斬ってみるが、やはり斬れない。——何でだよ!?

「なんで斬れないんだ!」

「単純に力不足なのよ」

……、それだ。力不足だ。

霊夢さん、僕はやっぱり後ろに引つ込んで、見学しておきますね。

「違うわよ。単にその刀が力不足だつて事よ」

風刃が力不足?でもこれ、僕のスペルカードの中でもかなりの高性能スペルカードだよ?ちなみに一番強いのは、幻想永劫斬。

おおそうだ、幻想永劫斬ならあの枝斬れるかも。……体力の消費が激しいけど。

その時、一本の枝が目の前に。よけることは無理だろう。

「ええい、ままよー！」

〈一閃 幻想永劫斬〉

居合斬りで枝を斬る。しかし、少し大きめな切り込みが入るだけで、完全に斬る事は出来なかった。——嘘でしょ……。硬すぎるにも程があるだろ。

そこでなんとなく、枝に向かつてへハイドラショックを喰らわせてみる。すると、切り込みの所から綺麗にポキッと折れた。

やった！折れたぞ！だが……体力がかなり削られた。

正直、この枝一本折るだけでどれだけの体力が必要なのか分かったもんじやない。てか分かりたくない。

「ほら、何休んでるの。まだまだ枝が飛んでくるわよ」

「ハア……、ハア……。まじかよ……」

霊夢はいいよね。スイスイよけて、弾幕当てる簡単なお仕事だから。羨ましいよ。

そんなことを考えていたら、不意にきた枝に当たり吹き飛ばされた。——魔力鎧を展開して正解だった。じゃないと今のは死んでたな。

即座に起き上がり、先ほど僕を吹き飛ばしてくれた忌々しい枝に向かつて、幻想永劫

斬とハイドラシヨックを喰らわせ、へし折る。

その後も、周りの枝を見つけては、折る、折る、ひたすらへし折る。

しかし、体力お構いなしにひたすらそんな事をしていくと、必ずつげが回って来るよ
うで、体力切れで体が動かなくなつた。

力なく地面に大の字に倒れる。動かないといけないことは分かっているが、いかにせ
ん体が本当に動かない。

匍匐前進で急いで戦線離脱しようとしたが、枝に捕まってしまった。——ああ、や
ばい。

霊夢に助けを頼もうとしたが、霊夢に僕を助けるほどの余裕が無さそうだった。恐ら
く、あの霊夢でも体力の限界というものがあるのだろう。

「ちよつ、片倉！早く抜け出しなさい！」

「いやー無理だ。もう抜け出す程の体力は残ってない」

「嘘でしょー！」

いやいや、本当ですぜ霊夢さん。

ガツ、と枝が首に絡みつき締めあげようとする。意外と器用なんだな。

「片倉！」

霊夢が助けに入ろうとするものの、他の枝達に阻まれる。

意識が遠のいてきた。息ができない。辛い。苦しい。

そんな感情が一気に押し寄せてくる。

ああ、こんな所では死ぬのか。せめて最後は格好いい死に方で死にたかったなあ。

そして、僕は意識を失った。

「う、うーん……」

目を覚ました。辺りを見回すとそこは暗闇。——確か、僕はその時……。ああそう

か、死んだのか僕。

でも天国ってこんなに暗いっけ？となるとここは地獄？

『どっちでもねーよ』

「ん？」

ふと、後ろから誰かの声が聞こえた。

「誰だ！」

すぐさま戦闘態勢に入る。

「姿を現せ！」

『おいおい、そんな警戒することはないだろ』

声の主が姿を表した。その姿は……ええ？

「……僕？」

その姿はまさに僕自身。——ちよつと意味がわからない。頭が混乱してるんだが。

『そうだ。俺はお前だ。そして、お前は俺だ』

『どういふこと……？てか、ここはどこ？』

『まだわからないか？ここはお前の精神の中だよ。簡単に言えば、心の中みたいな感じだな』

「心の中？どうしてそんなところに僕はいるんだ。僕はあの時死んだはずだろ」

そうだ。僕はあの時に首を絞められて死んだはずだ。

『いやいや、まだ死んでないぞ』

「死んでない？」

『ああ、まだお前は死んでない。死ぬ一歩手前でお前をここに呼び込んだ。なかなか苦労したぜまったく』

「ここに呼び込んだ？お前いったい……」

『だーかーらー、俺はお前の心の中に居る奴なんだよ』

「何故僕の心の中に居るんだ？」

『俺がここに居るのは他でもない、お前が二重人格だからだ。まあ、その様子だと自覚は無いらしいがな』

「僕が、二重人格……？」

『ちなみに俺はお前の心の黒い部分の人格。まあさしずめ、お前の影みたいなものだ』

「二重人格、そして僕の心の影……。理解し難い事ばかりで頭がますます混乱してきた。」

「いつからお前は生み出されたんだ？」

『幼少期……いや、お前が産まれた時に俺も生まれたな。まあお前には自覚がないから分からんか。だが、一度だけお前に干渉した時があったぞ。心当たりはないか？ ヒントは紅魔館の異変の時だ』

紅魔館の異変の時？ うーん……あつ！ もしかしてあの時か。

僕がレミアさんとの戦いの時に風刃を生み出した時か！

『そうだ、お前が風刃を生み出す時に俺が力を貸したのさ。だからあの時、お前の力を大きく上回るあのスペルカードが出来たって訳だ。感謝しろよ』

「そうだったのか……。ところで、僕はこの空間からいつになつたら出られるんだ？」

『出られる事は出られるぞ。けどな、分かっているとと思うが、お前死ぬぞ？』

うぐつ……確かにそうだ。

「じゃあどうするんだよ。このままずっとここに居るのか？」

『まあ落ち着け。焦ってちゃ冷静な判断なんか出来やしないぞ』

そうだ。あいつの言う通りだ。

落ち着け……餅つけ……。いや、それはおかしいだろ。なんだよ餅つけて。

『落ち着くの早いな』

「そうか？それより、これからどうすればいいんだ？このままじゃ、らちがあかないぞ」

『そこでだ、俺に1つ提案がある』

「提案？」

『お前の体を俺に貸せ。そうしたら、あの木を何とか出来るぞ』

「本当か？」

『本当だって。信じてくれよ』

「……分かった」

まあ、このまま何もしないよりはマシかな。もしも駄目だったら……諦めて天国なり地獄なり行こう。

『それじゃ、少しの間お前の体を借りるぜ』

真つ暗闇の空間が急に明るくなり、次の瞬間、現実の世界へと意識が戻っていった。

だらんと力なくぶら下がる片倉。その姿を見た霊夢と魔理沙は、片倉は死んだと思っ
た。

だが、死んだと思ったその時、片倉は自分の首を絞める枝を右腕の手刀で切り捨てた。
「素手で……切った。嘘でしょ……」

霊夢が驚くのも無理はない。

枝を一本切るだけでもあんなに苦労したはずが、たったの手刀一振りで切り落とすの
だから。

無論、魔理沙も驚いている。だが、霊夢が驚いた理由と同じ理由で驚いた訳ではない。
魔理沙が驚いたその理由は——

（あいつ、魔力を右腕に纏わせて切ったよな。まさか、義手を使わずとも魔力を操れるよ
うになったのか!?!）

枝の拘束から開放され、地面に着地した片倉は伸び伸びと腕を上には伸ばした。

「あく、初めての外の空気は最高だな〜」

(伸び伸びしてる場合じゃないだろ！)

ほら見る。急にそんな事を言い出すもんだから、霊夢と魔理沙が変な目で見てるじゃないか。

あつ、ちなみに体はあいつに貸してるんで、僕はこうして心の中で会話することしか出来ないよ。

そういえば、あいつの名前って何だろう。あいつだけってのも可哀想だよな。

(俺の名前か？ そうだな……、お前が勝手に決めていいぞ)

勝手に決めていいのかよ……。それじゃあ、黒の人格だから……クロとかどうだろうか。

(犬の名前みたいじゃねえかよ。もつと他にましな名前は無いのか)

そんなこと言われてもですね、僕にはネーミングセンスの欠片はこれっぽっちも無いんですよ。

というかそんなに余裕かましてて大丈夫なのか？

刹那、西行妖が攻撃をしてきた。

ちよつ、危ない！ よけてー！

しかし、いつこうに避ける素振りを見せないクロ。——今度ましな名前を考えるか……。

もう駄目だと思ったその時、寸前で枝を片腕でだけで止めた。そしてそのまま、握りつぶした。……えっ？握力強すぎない？

「よっしゃ、暴れるぜー、止めてみな！」

おいおい、お前は何処のキョウリユウジャーだよ。

(えっ？じゃあ、100m世界チャンピオン？)

いや、それはスパイダーマッドだから……。てかそんなことはどうでもいいから、早くあの西行妖を何とかしてくれ。

(へいへい了解)

果たして、僕のもう一つの人格はあの西行妖を止めることは出来るのか。

終わらぬ冬と来ない春 第6話

「でやあああああー！」

迫り来る攻撃の嵐を難なく掻い潜り、隙あらば枝をへし折っていく。

だが、どんなに折っても枝が触手のように生えてくる。——気持ち悪っ！

一方、霊夢の方は前線から下がり、今は魔理沙の隣にいる。何故下がっているのかというと、さつき僕……ではなくクロが、

『おい！その巫女！えーと名前は……、そう！霊夢だ霊夢。お前は下がってろ！邪魔だから』

なんて言い出すもんだから、怒った霊夢が「勝手にしなさいよ！」とか言つて下がっていったのだ。

ちなみに、この後の霊夢の怒りはクロじゃなくて僕が受けるんですよね、これは……。とほほ……。

そんなこんなで、今は絶賛大ピンチなわけなのだが、これが意外、クロはめっちゃくちゃ強かった。もはや自分の体とは思えないくらい、俊敏な動きで戦ってる。凄いねクロ。

(どーよ。もっと褒めてもいいんじゃない?)

……今の発言で何か褒める気失せましたわー。

(うわっ！ひどい！泣きそう！)

はいはい、今はそんな事よりも戦いに集中してください。

(へいへい、了解です)

何か腹立つなあこいつ。こんな奴が僕の心に居たとか、ちよつとシヨック。

西行妖から少し離れた木の陰で、霊夢と魔理沙は片倉の戦いを眺めていた。

「なあ……霊夢」

「何よ」

「なんでそんなにむすくれてるんだ？」

「むすくれて無いわよ！」

「はいはい、そうですか。それよりもどう思う？」

「何が？」

「片倉のことだ」

霊夢はちらりと魔理沙を見たあと、片倉と西行妖の方を向き直し、魔理沙の問いに答えた。

「そうね……。明らかに別人ね」

「やっぱりか。私もそう思ったぜ」

「見た感じ、何かに乗っ取られた感じがするわ。勘だけど。あんたはどう？何か変わった所はない？」

「そうだな……。あの瞬間から、片倉の持つ魔力が倍に膨れあがった気がするぜ。あと何よりも、あいつの身体を纏ってる魔力で出来た鎧が、黒く染まってるな」

「そう……。いったい何をしたのかしら、片倉は」

霊夢の言葉に、魔理沙は首をふって答える。

「さあな。だが、何かしらの事があったのは確かだな、あれは」

そう言つて、二人は片倉の体に起こった出来事について考えるのであった。

あれから10分は経っただろうか。

さつきから枝を折りまくっているのだが、一向に減らない。てか、さつきよりも増えた気がする。

(つたく、しつこい木だな)

だんだんとクロに疲労が見え始めた。

「お手伝いするわよ」

するとそこに幽々子が助けに入ろうとする。

やった！援軍が来たぞ！

「うるせえ！引つ込んでろ！」

さつきの疲労感を感じさせない素早い動きで、クロが幽々子の足を掴み、後ろの方へと吹っ飛ばす。その姿はさながらハンマー投げのよう。——いやいやいやいや。

テメエ何やってんだー！せっかくあの人が助けようとしてくれたのに、ハンマー投げする奴がいるかよ馬鹿っ！

(うるせえ！馬鹿っていった方が馬鹿なんだぞ！大体あいつが居ても邪魔なだけなんだよ！)

お前だからって……、ハンマー投げは無いだろ〜ハンマー投げは。

ああほら見ろ、あの人気絶してんぞ。この後怒られるのは僕なんだぞ？

(……ドンマイ☆)

この野郎……。いずれ仕返ししてやるからな……。

だが、今はそんな喧嘩をしている場合ではない。西行妖を何とかしないと……。どうやってあの西行妖の上に居る、幽々子の亡霊？を封印すればいいんだ。全く近付けないぞ。

「仕方ねえ、あれ出すか。風刃！」

左手に、緑色の輝きを放つ刀を創り出す。だが、風刃の力では、西行妖は斬れないはずでは……。

（大丈夫だって。俺に任せとけ）

気のせいか、風刃の輝きがいつも僕が使う風刃の輝きよりも倍に輝いている。

（風刃つてのは元々俺のだからな。これなら斬れるぜ……多分）

今、多分つて言つたよね？絶対言つたよね？うわあ……凄い不安になってきた。

バツ、と一気に駆け出し枝を斬る。——おつ、意外といい感触じゃないか？これなら斬れる……かも……つて。

（おりよ？……全然斬れませんでしたー☆）

駄目じゃねえかよ！もう諦めて霊夢呼び戻せよ！

（まあまあ落ち着け）

いやいや、落ち着いていられるかよ。風刃でも駄目なんだぜ？もう打つ手なしだよ。

(一つお前に教えて無かった事があった)

ん？教えて無いこと？はて、それは何だろう。

このごに及んで、「勝てませーん」とかほざいたら、容赦なくはつ倒すからな。

(そんな事は言わねーよ)

じゃあなんだよ。

(実は俺、能力持つてるんだドヤア)

自身満々に大胆カミングアウトされてもですね……。

で、その能力とは？てか僕も使えるの、その能力。

(いや、お前には使えないな。それで、能力の名前だが、俺の能力は《全ての物を倍にす

る能力》だキリツ)

自身満々に能力の名前を言われてもですね……。

全ての物を倍か……。ちよつと詳しく教えてくれ。

(詳しく教えてやろう。その名の通りだ)

……、詳しくないから。全然詳しくないから！

なんだよ、その名の通りだって！全ての物って何だよ、倍ってどういう事だよ。

(全ての物って言っても限度はあるが、大体は何でも倍にできるぞ。そしてこの倍って

意味は、その通りの意味の倍だ)

なあ。手が痺れそうだ。

刹那、西行妖が攻撃してきた。だが、枝は雷刃の放った雷によって焼き切られた。焼き切られた後を見ると、焦げていた。……たった一瞬？強すぎだろ。

バリバリと枝を焼き切っていく。だが、まったく枝は減らない。

しかし、クロは焦らず一枚のスペルカードを宣言した。

〈雷電 ライトニング・ボルト〉

「いけええええええ！」

雷刃が次第に巨大化していく。そしてそのまま、槍投げの要領で雷刃を思いつきり西行妖にぶん投げた。——レミアさんのグングニルみたいだなあ。

流石に西行妖の方も、この攻撃はヤバイことに気がついたのか、おびたらしい数の枝で雷刃を迎え撃つ。

だが、無意味だった。

どんなに枝が来ようとも、雷刃を止めることは出来ない。ましてや触れようとすれば、雷刃から放たれる雷により全て焼き切られていった。

西行妖に雷刃がぶつかった時には、あんなにあつた枝も今はかなり減っていた。だがそれでも脅威には変わりない。未だに近付けそうな感じではなかった。

しかし、クロは勝利を確信していた。

(次がトドメだな。あの西行妖の上に居る奴を封印してやるぜ)
どうやって? まだ近付けないぞあれじゃ。

(任せとけって)

「おい! 霊夢、ちよつと来てくれ!」

なんとクロは、霊夢を呼び戻した。ああそうか、封印といったら霊夢だもんな。なんだっけ、夢想封印だったっけ?

霊夢は「何よ」と若干お怒り気味でやってきた。

「俺が合図したら、あの西行妖の上に居る奴を封印してくれ」

「それだけ? 分かったわ」

あれ? 霊夢にはそれだけしか言わないのか?

(うん)

大丈夫か? 霊夢の力を借りなくて。

その時、クロがスペルカードを宣言した。

〈他符 フォーオブアカインド〉

そのスペルカードは、フランちゃんのスぺルカードだった。——お前いつの間になんなものを創った……。

(いやあ、オリジナルを創るより、他人のスぺルカードを創った方が簡単じゃん?)

こいつ……。

分身を出現させたのはいいのだが、問題は解決していない。どうやったらあの枝を回避しきって、あの幽霊みたいな幽々子を封印するのだ。……封印は霊夢がするんだけどね。多分。

てかさ、霊夢だけでいけるんじゃないの？

(いや、無理だな。あの巫女でもかなりきついだろうな)

そうなんだ。あの霊夢でもやっぱりきついのかー。

それはそうと、分身なんか出してどうすんのさ。もう魔力も残り少ないぞ？

(大丈夫、任せろ)

「霊夢！……身構えとけよ」

「言われなくとも、構えてるわよ」

「オーケー了解。——じゃあ、いくぞ」

三人の分身+僕(クロ)の四人が一気にスペルカードを宣言する。

〈光符 メテオールスパーク×4〉

四人の手元から光線が放たれる。その四つの光線は合わさり、巨大な流星のようになり、枝を消滅させていった。

ポツカリと西行妖の上に居る奴の所まで空間が出来る。

「今だ！」

「分かつてるわよ」

枝が空間を塞ぐより早く、霊夢が西行妖を操っている本体に札を突きつけスペルカードを宣言した。

〈霊符 夢想封印〉

目の前が眩く光目を閉じる。しかし、それは一瞬。目を開けるとそこには、ただの大きな木が佇んでいた。

どうやら封印に成功したらしい。ということはつまり……、

「やっとな終わったー！ー！」

（てなわけで、お前の体返すわ。お疲れちゃーん）

フツ、と意識が飛んだかと思っただけの瞬間、自分の体が返ってきた。——!?

全身を急激な筋肉痛が苛む。もはや立ち上がる事すら出来ずその場に大の字で倒れ込む。——何事だ!? めっちゃ痛いぞ……。ついでに魔力も空っぽだ。

（ああそうそう、俺がお前の体を使ったら代償として一時の間、体が筋肉痛に苛まれるから気をつけろよ）

あの野郎……。大事なことはもつと早く言えよ。

（慣れると痛くなくなるから大丈夫だって）

いやいや、そういう問題じゃないから。

何もできずただ単に寝転がっていると、そこに霊夢が近付いてきた。

「ああ、霊夢。お疲……………れ？」

霊夢の顔を見る。するとその顔は完全に血管が浮き出まくっていて、怒ってますオーラ全開だった。

「片倉、あんた私に邪魔って言ってくれたわよね？」

ニツコリと微笑む博麗の巫女さん（鬼神にしか見えない）

「いや……………あれはですね、僕では無いというか……………僕というか……………」

「問答無用！」

寝転がっている無抵抗の人間に針を投げつける巫女さんがそこにいた。——イギヤアアアアア！三十六計逃げるに敷かず！

さつきまでの筋肉痛は何処へやら、急いで起き上がり走って逃げる。その時後ろを見ながら走っていたせいで、何かにぶつかり尻餅をついてしまった。

「イテテ……………何だ？」

立ち上がりながら見てみると、居たのは霊夢に劣らずとも勝らない位に血管が浮き出していた幽々子だった。

「あらあら？…どうしたのかしら？…ウッフ……………」

ああ、終わった。短い人生だったなあ。

最後に見た光景は、大量の蝶に囲まれて御札と針を投げつけられた事だった。

「次したら容赦しないわよ」

もはや容赦もクソも無いけどさ。

「分かった？」

「は、はい！」

結局あの後、僕は正座をさせられながら、あの二人（主に霊夢）にこつてり一時間お説教された。

「さてと、これでようやく異変も解決したわね」

いや待つて霊夢、これでようやく最後の僕のもも異変ですか？それはおかしくないですか？僕は悪くないのに？

「おう、そうだな。なら早速あれの準備するか？」

「あれって何？」

「宴会よ」

「宴会？」

「そうよ、宴会よ。この幻想郷には、異変を解決したら宴会を開くつていうのがしきたりがあるのよ」

へえ〜そうなんだ〜。

「ちなみに、紅魔館の時はお前が解決しちまったせいで、宴会は無かつたけどな」

へえ〜そ、そうなんだ〜（汗）

「宴会なら白玉楼で行いましょうか。ちようど桜も綺麗ですし」

「そうね。それがいいわ」

「それなら早速準備するか！」

この3人のやりとりをぼうつと見ていたら、いつの間にか宴会の場所が決まっていた。……手馴れてるなあ。

「片倉、あんたは食材買ってきて」

「えー」

「ああ？」

「はい、喜んで！」

いやあ、パシられるのつて楽しいなあ（泣）

涙を流しながら食材を買いに行く僕であった。

終わらぬ冬と来ない春 第7話

(食材、買いすぎたかなあ……)

両手に大量の食材を抱えながら後悔する。

ちなみに食材は冥界にあるお店から買ってきた。意外と人里並に賑わっていたのに驚いたが、まさかこんなにも買ってしまおうとは。調子に乗らなければよかった……。やつのことで白玉楼に戻ってきた僕は、息を切らしていた。——あの階段はちよつと長すぎないか？

「ただいま戻りましたよ〜っつてうわっ」

白玉楼はまだ完璧とはいかないが宴会会場のようになっていた。料理や酒が並んでいないのが少し寂しい。

「あら、戻ってきたわね。それなら早速料理を作りましょうか」

「料理なら私が作ります」

料理当番に立候補したのは、まさかの妖夢だった。怪我の方は大丈夫なのかと心配したが、既に治っていた。——回復力高いなあ。羨ましいな……。

お手伝いしようと思ったがいかなせん僕は料理をした事はあまり無い。おそらく足

手まとい確定だ……うん、やっぱり料理は食べるに限るよ。

「ういゝ霊夢ゝ、お酒置いといたぞゝ」

突然、まったく知らない少女姿の妖怪が現れた。なぜ妖怪と判断したのかというと、頭に角が生えていたからだ。まあ別に妖精とかでもいいけどさ。

「ありがとう。後は好きにしていよいよ」

「はゝいヒック」

どうやら酒に酔っているらしく、フラフラと何処かへ去っていった。いったい誰なんだ、あの妖怪は？てか酒臭い。どんだけ呑んでるんだよ。

「あやや、宴会の準備中ですか！」

後ろから聞いたことのある声が聞こえた。振り向くとそこには烏天狗、射命丸さんが居た。相変わらず神出鬼没だ。

「どうも、射命丸さん」

「お久しぶりです片倉さん」

あれ？ところどころでんで射命丸さんがここに居るんだらうか。

「取材の為に来たんですが……忙しそうですねゝ」

ああなるほど、取材の為かゝ。流石は新聞記者だ。

「ちよつと文にお願いがあるんだけど」

「どうしたんです霊夢さん」

「来て早々悪いんだけど、この宴会に紅魔館の奴等呼んで来てくれない？他にもテキトーな奴を呼んでもいいわよ」

「えー嫌ですよ。面倒です」

「取材を好きにだけしていいわよ。……片倉の」

「おおおい!？」

「分かりました！喜んで行つてきます！」

「ちよつ、待つ」

呼び止める暇もなく射命丸さんはあつという間に行つてしまった。

「霊夢……」

なんてことを言ったんだ、と言わんばかりに霊夢を見る。——射命丸さんの取材は地獄なんだよ？いろいろな意味で。

「さーて、料理のお手伝いにも行こうかしら」

そそくさと逃げていった霊夢。……畜生め——！

……僕も何かお手伝いでもするか。

あれから三十分後、宴会会場が見事に出来上がった。まだ料理と酒は並んでないけど。

「お兄ちゃん————ん！」

ん!?この声は!

振り向くとそこには金髪の幼女……ではなく吸血鬼が手を振って走ってきた。

その奥では、レミリアさんと咲夜さんとパチュリーさんの姿もあった。——あれ?

美鈴は?

「ねえねえフランちゃん、美鈴はどうしたの?」

「美鈴はね!えーと、うーんと」

「美鈴はお留守番です」

答えが出てこないフランちゃんに変わって咲夜さんが答える。お留守番かあ……。

「そうなんですか」

「それよりお兄ちゃん、遊ぼう————!」

はしゃぎながら僕に弾幕を撃ち込もうとしてくるフランちゃん。うんうん、元気な事

はいい事だ。——いや、弾幕は駄目だから!?

「いや、今はちよつと……ね？」

「えー……！」

ああまずい、筋肉痛で体痛いから今遊んだら（弾幕ごっこ）確実に死ぬる。

「フラン、一緒に紅茶飲まないかしら。お菓子もあるわよ」

そんな中レミリアさんが助け舟を出してくれた。

「わーい！」

いやあ流石はカリスマ吸血鬼レミリアさん。助かりました。ただ、こつちをチラチラ見てドヤ顔はちよつとやめてもらえませんか？すぐく反応に困るので。

そういうえばパチュリーさんも珍しく外に出てきてるな。あの紫もやし……いや、考えるのはよそう。多分怒られる。

しかし、フランちゃんとレミリアさんは仲がいいよなあ。まさに仲良し吸血鬼姉妹、いや、幼女姉妹か？

「本当、あなた変態よね」

うんうん、確かにそう思う。なんだよ幼女姉妹つて……つて、

「あつ、アリスさんじゃないですか」

あれ？さっきの考え事バレてる？なんで？

もしかしてアリスは読心術でも会得してるの!?

「そんな訳ないでしょうが」

ほら見ろ、やっぱり読まれてる。

「ところで何でアリスさんがここに居るんですか？」

「なんでって、烏天狗が宴会するって言ってたから来たのよ」

ああ、そういうえげそうだった。すっかり忘れてた。ところで射命丸さんはまだ帰ってこないな。どこかで道草でも食ってるのか？

「おーアリスじゃんか」

「魔理沙！あなたどうしたのよその怪我は!？」

包帯まみれの魔理沙の姿を見て驚くアリス。確かに、普通の人が見たら驚くよな。だいたい包帯まみれになる人なんて普通は居ないでしょ。——いや、一人いたな。包帯まみれの奴が。誰かとは言わないけど、てか言いたくない。悲しくなるから。

「まあ、あれだ。色々と大変だったんだぜ」

「まったく……。死んだらどうすんのよ」

「いや、死んだぜ」

「はっ？」

「いやだから、死んだんだって。なあ片倉？」

いやいやそこで僕に振るなよ。返答に困るじゃないか。

「まあ、片倉が心肺蘇生したから大丈夫だったけど」

「はあ……」

アリスが頭を抑えながら溜息をつく。その溜息はまさに深海二万マイルよりも深い溜息。

「あなたのその無鉄砲さは、いつになったら無くなるのかしらね……」

「多分これからも無くならないぜ！」

笑いながらそう答える魔理沙を見て、もう一度溜息をつく。その溜息はまさに深海

(ry

「さてと、そろそろ席につこうぜ。宴会が始まるつてよ」

テーブルに並んだ沢山の料理と酒。何だか楽しい宴会になりそうだ。いや、楽しいに決まってる。

『楽しいに決まってる』そんなことを言った一時間前の僕を思いっきりビンタしたい。パンチでも可。

「聞いてるのー？ダーカーラーねーあんたはねー」

「はいはい聞いてます、聞いてますから」

確かに最初は楽しかったさ。でもこの状況は楽しくねえよ！

今僕は、酔っ払いに物凄く絡まれている状態だ。別段、酔っ払いは嫌いではない。だが、その酔っ払っている人がまずいのだ。

「あんた〜いつたい、人間なの〜？信じらんない〜」

「僕はれっきとした人間だから霊夢」

そう、酔っ払っているのは霊夢なのだ。非常にまずい。怒らせたなら何をされるかわからない。普段はただのグータラ親父、だが一度機嫌をそこねれば、すぐさま切れるジャックナイフへと変貌する博麗神社の麗しき巫女さんなのだ。めちやくちや怖い。

というか、霊夢って酒癖悪い人なんだね。初めて知ったよ。出来ることならもつと早くに知りたかったけど……。

「だいたい、あんたは〜」

「はいはいそうだね〜（棒）」

「真面目に聞きなさいよ！」

「は、はい……」

いかん、早くこの状況から抜け出さなければ。

辺りを見回し、助けを呼ぼうと試みる。

アリスは……駄目だ。魔理沙とパチュリーさんと一緒に、魔法使い談義の真っ最中で
気づきもしない。

紅魔館組、特に咲夜さんは……レミリアさんのお世話しながら鼻血出してる……。あ
れが紅魔館のメイド長だよ？僕は信じたくない。

よし、使いたくは無かったが最終手段だ。

「霊夢」

「何よ、ああ？」

ちよつと呼び掛けただけで胸ぐらを掴まれる。ああ、早くこのジャックナイフから逃
げなければ。

「トイレ行ってくる」

胸ぐらを掴む腕を振りほどき、席を離れる。もちろんダツシユで。

「あつ！ちよつと！」

なんか後ろから呼ばれているが気にしない。そのまま一気に駆け出し、宴会会場の裏
手へと逃げ込み一息つく。

（何とか逃げ出せたな。だけどまた戻らないと怒られるよな絶対）

息を整えて、とりあえずそこから辺りに座り込み、残り一本となってしまうている煙草を

取り出す。

まさか戦場から戻ってきてから吸おうとしていたこの一本が、こんなところで吸う羽目になるとは。

(じゃあ吸わなければいいだろ)

クロが心の中から喋りかけてきた。あれ？お前、また僕の体に乗っ取る気か？

(いや、無理。一度俺がお前の体を使ったら、最低でも三日間は乗っ取る事は出来ない。てか、乗っ取ってないから、借りただけだから)

そうですかい。そりゃ失礼しました。

煙草に火をつけて、一服する。……勿体無いなあ。

(なんで吸うんだよ。勿体無いなら吸わなけりゃいいじゃん)

吸わずにはいられないんだよ。あんなストレスマツハな状況にいたんだぞ？もう煙草ないと死んじゃうから。主に精神面が。

この世界に煙草売ってあるところないかなあ。無いよな多分……。あつても、香霖堂なら売ってあるかも。今度行ってみるか。

はあ、いつ戻ろうかなあ。あんまり長く居ると、霊夢が激おこプーチン丸いや、プリン丸になるぞ。

「あら？宴会を楽しんでないようね」

目の前から急に女性が現れた。だが、その現れ方は普通の現れ方ではない。空間が切り裂かれて出来た隙間のようなところから、その女性は現れたのだ。

今日の幻想郷は、心休まる時は無いのだろうか。ちよつと一人にして欲しいのだが……。

（気をつけろ。あの妖怪、かなりの力を持つてるぞ）

でも待てよ、あの人どっかで見ることあるような……。

（聞いているのか？あの妖怪は危険だぞ）

うーん……、どこだ、どこで僕はあの人を見たんだ……。

（オーイー！無視すんなゴルア!!）

うおつ、びっくりした。急に大声出すなよ。

（人の話を聞けよまったく……）

はいはい、私が悪うございました。

そんなことよりも、あの人本当に誰だっけ。

「紅魔館に続いて、この異変も解決しちゃうなんてね。正直驚いたわ」

紅魔館に続いて……、あつ！

「あなた、あの時お店に居た人ですよね」

「うふふ、その通りよ。思い出したかしら？」

いやあ、スッキリした。あの人はあの時店に居た人だよ。まあ、あんまり会話はしてなかったけど。

それより、あの人って妖怪だったんだ。人里って意外と妖怪多いのかな？ 幽香さんもよく居るし。人里なのに妖怪ばっかり、これはいかに。

「ところでこんな事を聞くのもあれなんですけど、なにか僕によいのですか？」

用が無いのなら一人にして欲しい。精神面を落ち着かせたいのだよ僕は。

「うーん、用は特に無いわ。ただ、片倉いや、仁だったかしら？」

『仁だったかしら？』と言った途端、僕は急いで立ち上がり戦闘態勢に入った。

「お前、何者だ。その名前を知ってる人は居ないはずだぞ」

「あーら、どうしてかしらね？」

「惚けるな、どうして僕の名前を知ってる」

「ふふ、惚けてるのはあなたの方じゃないかしら。いつまで片倉と名乗ってるのかしら。

そろそろ本当の名前を言ったらどう？」

「本当の名前？ 何を言ってる、僕の名前は片倉 仁だぞ」

「そう……。ちゃんと忘れてるようね」

最後の方の言葉はよく聞き取れなかったが、とにかく何かを納得したようだ。ひとりで頷いている。

「さて、そろそろお暇しましようかしら。またお会いできたらいいわね、仁さん」

「おい、待て！お前は何者だ、名前は！」

「いずれ分かるわ。それじゃあね」

「おい！」

姿を現した時と同じようにその謎の妖怪は、空間に出来た隙間の中に入り込み姿を消した。

つたく、いったい何なんだ。

煙草を蒸しながら考える。——いずれ分かるわ、か。本当に何者なんだ、あの妖怪。

その時、不意に人の気配を感じ、そちらの方を向いた。向いた方向の先には、魔理沙がいた。

「片倉……」

もしかして、あの妖怪とのやり取りを見ていたのか？

「ど、どうしたんだ魔理沙」

「いやあのな、お礼を言っただけでなかったから、お礼を言おうと思っただけ」

「なんだ、違うのか。」

「お礼？」

「そうだが、今日私を心肺蘇生だっけ？それで助けてくれたから……」

「いや、僕の方がお礼を言うべきだ。あの時、魔理沙が庇ってくれたから今僕が生きていられるんだよ。いりがとうな魔理沙」

「あ、ああ。どう致しましてだぜ」

何かやたらと魔理沙の歯切れが悪いな。どうしたんだ？顔も何だか赤い気がするし、もしかして酔っ払ってる？

「それともう一つ、片倉に言いたいことがあったんだぜ」

「ん？」

「ま、前々から思ってたんだけどな、私実は片倉の事が……」

何だか魔理沙の顔がさつきよりも赤いぞ。やっぱり酔っ払っているんじゃないのか？……ん？何だか大事な事を忘れてる気が……。

……………あ、思い出した。

「あ—————！」

「!？」

「やべえ、霊夢の事忘れてた！早く戻らないと殺される……。すまん、魔理沙！先に戻るわ」

「あつ、ちよつと……」

魔理沙が呼び止めようとしたが、既に片倉には聞こえなかった。

「……、また言えなかつたぜ」

哀しみを含んだ呟きは、桜の花びらと共に空へと消えていった。

あれから一時間くらい宴会は続き、無事何事もなくお開きとなった。霊夢は大丈夫だったかつて？ああ、急いで戻ったら眠っておられたでござる。命拾いしたわあ……。そんなこんなで今は紅魔館組と一緒に帰宅している。もちろん飛べないから、フランちゃんに掴まれながら飛んでもらってますよ。……なんだか恥ずかしい気持ちになつてきた。こんな年にもなつて、ねえ？

そろそろ本気で空を飛べる道具をにとりに造つてもらおう、そうしよう。

「着いたよお兄ちゃん」

「ありがとうフランちゃん。重くなかつた？」

「うん！全然平気だよ！」

うん、やっぱり吸血鬼は力が強いね凄いな。僕も空くらいは飛べるようになりたいなあ。

にとりに頼んでみるか。空を飛べる道具を造って下さい、って。
そんなことを考えながら部屋に戻った僕は、すぐさま深い眠りにつくのであった。

閑話 其の二

お値段以上の発明品

「くつくつくつ、ついに、ついに完成した！」

とある山の中にある、とある作業場とある河童妖怪が不気味に笑っていた。

「なに気持ち悪い笑い方してるのよ。怖いわよ」

そんな妖怪を見た烏天狗は、不気味に笑う妖怪を変な奴を見るような目で見ていた。

「ついに出来たのよ！」

「だから、何ができたのよ」

「これよ、これ！」

失敗作の山を掻き分け、白銀のプレスレットを引つ張り出し、烏天狗に見せつける。

一見するとそれはただのアクセサリー。そんなものを見せられた烏天狗は首をかしげた。

「何よこれ？」

「ふつつつつつ、これは私が造ってきた物の中でも、一番の最高傑作よ！」

「ふーん、そこまで自慢するからには、もちろん凄いのよね？」

「当たり前じゃない。ただ、男だけしか使えないのよね」

「なんで男専用にしちやったのよ」

「だって、片倉専用だもん」

「あゝ……、ところでその名前は？」

「吾輩は猫である、だよ」

「名前はまだ無いのね」

「うん、そう言う事。という訳で文、早急に片倉を連れて来て！無理矢理でいいから！」

「何で私が行かないと行けないのよ」

「いいじゃないじゃん。お願いだよ、親友の頼みだと思ってさ」

「……分かった。貸一つよ」

「はい」

そう言うとう、烏天狗はあっという間に空へと飛んでいった。

「ハックション！」

急に寒気がしたなあ……。誰か僕の事噂してる？

「もしかして風邪ひいたんですか？」

「いや、大丈夫大丈夫」

でも、もしかしたら風邪引いてるかも。このところよく咳き込むし。

「ゴホツゴホツ！」

「本当に大丈夫ですか？」

「大丈夫、大丈夫だから……」

やっぱり風邪かもな。ああ、この幻想郷には病院という建物がないのが辛いな。

「それでさっきの話の続きなんですけど、咲夜さんったら腹いせに私に向かってナイフを投げるんですよ？」

この前の宴会でお留守番をさせられたのが癪に触ったのか、今日はもっぱら美鈴の愚痴を聞く羽目になっている。

ああ、誰でもいいから来ないかなあ。すごい暇。……ん？

何か空からこつちに近づいて来るんだけど、何だあれ？

よく見るとそれは、黒い……。いや、烏天狗だった。

シユタツ、と着地する烏天狗もとい射命丸さん。珍しいな、紅魔館に射命丸さんが来るなんて。いや、これが初めてか？まあ、どうでもいいや。

「ムムツ！何者。もしや、侵入者!？」
違うと思うぞ、美鈴。

「これは失礼しました。私は射命丸文、片倉さんに用があつて来ました」
「僕に用ですか？」

「はい、突然ですがにとりの作業場に来てもらいます」

ほう、にとりの作業場か。これはまた珍しい。もしかして新しい道具でも出来たのかな。

「待つて下さい」

そこにストツプをかけたのは、ある時は居眠り、ある時はナイフまみれのハリネズミ、我らが紅魔館の門番、美鈴だった。

「急に片倉さんが連れて行かれたら、咲夜さんやお嬢様に怒られちゃいます。……主に私が」

その最後の『主に私が』つて言うのやめて！聞いているこつちが虚しくなつちゃうから。でも確かに、急に連れ出されるのも困るはずだよな、普通に考えたら。

「それなら問題ありませんよ」

目の前に突然、頼れるメイド長こと咲夜さんが現れた。この突然の登場も紅魔館に住み出してから最初こそは驚いていたものの、今はすっかり慣れた。というか、これがい

つもの光景になつてる。——慣れつて怖いね。悪魔の言葉だよ。

「大丈夫なんですか？」

「はい、先程お嬢様から了解を得ましたので」

ほお、流石はレミアアさんだ。この出来事もちゃんと予見していたのか。運命を操るのは伊達じゃないね。

「というわけなんで片倉さん、行きましょう！」

「あ、はい分かりました」

「行つてらっしゃい片倉さん」

「ところで美鈴、さっき私のことについて愚痴をこぼしていましたね。ちよつとその事について、深く話し合ひましょうか」

チャキツ、と両手にナイフを持って咲夜さんが美鈴に近寄る。美鈴の顔は真つ青だ。

「は、ハハ……」

ご愁傷様です美鈴。

「美鈴がハリネズミになる前にさつきと行きましょう、射命丸さん」

「分かりました。ちゃんと掴まって下さいよ」

「ま、待つてえ片倉さあん！見捨てないでえー！」

うん、巻き込まれたくないから嫌だ。幸運を祈るよ美鈴。君はいい奴だった。

美鈴の悲痛の叫びは、空へと飛んでいった僕に聞こえる事はなかった。

「にとりー、連れてきたよ」

「待つてました！」

にとりの作業場に入るなり、堂々とした出で立ちでにとりが仁王立ちで待ち構えていた。

「僕になんか用があるつて聞いたんですが……」

「うん、あるよ。おおいにあるよ。てなわけで、はい！これ着けて」

と言われて渡されたのは、白銀に輝く普通のブレスレットだった。——ナニコレ？

「早く着けて！早く早く」

まあそう焦りなさんな、にとりさんやい。焦りは禁物じゃぞ？

言われるがままに右手首にそのブレスレットを着けてみる。……これだけ？

「いいねえ〜」

いや、何が良いのかさっぱりわからないんですが。

「これ、なんですか？」

とにかく、何がなんだが分からないから質問してみる。

「これはね、着けると空が飛べるようになるという画期的なブレスレットなんだよ！」

へえ……ええ？

「な、なんだってー!?!」

来ました、遂に来ました。このわたくし片倉、幻想郷に迷い込んで早数ヶ月、ようやく空を飛べるようになりました！

やったー！もう何も言えねえ！——いかにいかに、とりあえず落ち着け僕。

(落ち着け、餅つけ、なんつってテヘツ)

うるせえ、心の中の住人は黙ってる。

(へいへーい)

「どうやったら空を飛べるんですか」

「まずは鎧を展開してみ？」

軽いドヤ顔に腹を立てつつ、言われたとおり鎧を展開する。

うむ、いつ見ても頑丈そうで綺麗な鎧だなあ。

「展開したなら次は、その右手首にはめてるブレスレットのボタンを押してみて」

ボタンボタンっと、おっこれか。ポチツとな。

「うおっ！」

ボタンを押した途端、鎧が変形した。背中に四つの羽みたいなのが着いている。形としては、某ガンダムのフィンファンネルみたいな形に近い。

羽が着いた代わりに心なしか鎧の防御力が失われている。というか、鎧じゃなくなってる。どっちかって言うと、鎧よりも防弾チョッキみたいだ。

「うん！我ながら完璧だよ」

あちらの河童さんは納得していらっしやる。——まさにお値段以上ニトリとはこのことか……いや、違うか。

「まさか、にとりさん発明のそのブレスレットの機能はそれだけだと思ってる？」

えっ？このブレスレットには、まだ何かあるの？

「ちつちつち甘いな片倉は。とりあえずこれ持って」

にとりに手渡されたのは、そこらへんに落ちていた工具。

「こんなもの持たせてどうしたんですか？」

「この工具が消えるようなイメージしてみて」

工具が消えるようなイメージ？なんじゃそりや。

まあ、にとりが言うのなら何かあるのだろう。とりあえずイメージしてみるか。

消える……消える……消える……。……難しいな。

あとちよつとでいけそうな気がするんだけどなあ、うーん。

イメージすること1分、不意に工具が手の中から消えた。

「あれ……?」

「お、出来た出来た」

「へっ? どういうこと?」

「次はさつき消した工具を出してみて。勿論イメージしてね」

消した次は出せか……。ぐぐぐ……。

さつき工具を消した時と同様、不意に工具の感触が手に戻ってきた。—— いったいどうなってるの?」

「そろそろ説明してください」

「これが二つ目の機能だよ」

「と言いますと?」

「実はこのプレスレット、物質を最大三つまで粒子に還元して格納する事が出来るんだよ。まあ、あんまり大きいのは流石に格納出来ないけどね」

「いやいや、それでも充分凄いですから」

粒子に還元する技術までも、河童は持っていたのか……。もしあつちの世界へにとりが行ったら、世界の軍事バランスが大変な事になるかもね。うん、絶対になるな。

「最後に三つ目の機能を紹介するよ」

「おいおい、まだあつたのかよ。」

「ちよつと外出ようか。じゃないと大変な事になるから」

外に出ないと大変な事になるの!?!何か凄く不安になってきた。爆発とかしないよな……いや、にとりに限ってそれは有り得ないか。

「そこにある岩の前に行つて」

にとりに言われたとおり、少し大きめの岩の前まで移動する。1つ気になることがあるんだが……。

「どうして二人とも僕から離れてるんですか?」

「あいや、だって近づいたら危険だもん」

「えっ?なんでですか」

「いいから、とにかく言う通りにしてよ」

「は、はあ……」

「それじゃ片倉、モードチェンジ形態変化つて言ってみて」

「形態変化」

すると、背中に着いていた四つの羽が取れて、僕の周りをぐるぐると回るように動き出した。

「おく、凄い」

「じゃあそのままあの岩をぶっ壊してみて」

「どうやって?」

「決まってるじゃん、その羽を飛ばすんだよ」

「どうやって飛ばせばいいんだよ……。うー……飛べ！」

「シユンシユンッ!と四つの羽が岩に向かって飛んでいき、見事にバラバラにぶっ壊した。——は?」

「ブラボー! 実にブラボー!」

「嬉しいのかわからないが、にとりが拍手しながら訳わからないこと言ってる。てか、この機能強くないですか? 下手したら本気のパンチ並いや、それ以上に強いよ?」

「でも気をつけてね、そのモードは機動力がかなり落ちちゃうから。それが嫌なら、一つや二つだけで飛ばす事も出来るよ」

「そんなことも出来るんですか。凄いですねこれ」

「そうだ! この際だからちよつと飛んでみて! ちなみに飛ぶ時に魔力を消費しながら飛ぶんだけど、そんなに消費しないように造ったから」

「分かりました」

モードを通常の状態に戻して、意識を集中させる。

よし、飛んでみるか……、どうやって飛ぶの？——飛べ！
ふわりと体が宙に浮いた。おお、案外簡単じゃないか。

「片倉さーん、ここまで飛んでみてくださーい」

上を見上げると、いつの間にか射命丸さんが居た。よっしや、いつちよ飛んでみますか。

一気に上方に加速して射命丸さんが居る所へと向かう。

「後少しでつきま、ブベツ!？」

何を血迷ったか誤って体を反転、そのまま近くの木に思いつきりぶつかった。

「イテテテテ……」

鎧があつたから無事ですが、生身だったら間違ひなく死んでた。

「あらら……」

「これは練習が必要だね」

「そうですね、イテテ……」

「大丈夫かい？かなり勢いよくぶつかって行つたけど」

「なんとか大丈夫です」

ぶつかつた所をさすりながら答える。帰ったら冷やしておこう。

「それじゃあ僕はそろそろ紅魔館に帰りますね。多分もうじきすると、夕飯が出来る」と

思うので」

「そっか分かった。気をつけてね」

「またさつきみたいに激突しないでくださいよ片倉さん」

「しませんよ。それじゃ!」

羽を展開して空へと飛ぶ。——このブレスレットの名前なんだろう。

「最後に一ついいですか?」

「ん?」

「このブレスレットの名前は何ですか?」

「吾輩は猫である、だよ」

「長い名前ですね」

「いや、そうじゃ無い……」

「え? 違うんですか?」

「いや、違うと言うか、そうでないと言うか……。ま、まあ、とにかく名前は片倉が勝手に決めていいよ。そのブレスレットは片倉の物なんだし」

「は、はあ……。分かりました。それでは」

なんかよく分からないが、とりあえず今度名前を決めておくか。そう言えば、未だにクワの名前を考えてなかったなあ。

(そうだぞ、考えてくれよ)

まあ、今はめんどいしまた今度な。

(えー！)

片倉が紅魔館へと戻っていった後、二人は作業場で寛ぎながら雑談していた。話題はもっぱら片倉のこと。

「いやあ、しかし片倉には分からなかったかあ」

「普通、吾輩は猫である、ときたら、名前はまだ無い、つてなるはずよねえ」

「だよね〜」

にとりが呑気に笑っていると、唐突に文が深刻そうな顔をした。

「どうしたんだい文、この世の終わりみたいな顔をして」

「あ、あ……あ」

にとりの質問に文は口をパクパクと動すだけで答えない。どうしたのかと不思議に

思ったその時、急に文は大声で叫んだ。

「取材するの忘れてたー！ー！ー！」

ガタタツ、にとりがずっこける。

「なんだそんなことか。心配して損したよ」

「そんなことじゃないです！大事なことです！」

「はいはい、そうですね」

「こうしては居られない、早く片倉さんの所に行つて取材しなければ。フッフ、最新アイ

テムの先取り独占取材、楽しみですねえ」

「ちよつと待て」

今にも外へと飛び出そうとする文の首根っこを掴み、それを阻止したにとり。

「ちよつ、何するんですか！」

「あんたこれから山の警備でしょうが」

「そんなもの知りません！スクープの方が大事です！」

「はいはい、お仕事に行きましようね」

「ちよ、いや、イヤアアアア！」

ズルズルと引きずられ、山の方へと連れて行かれる文。しかし、彼女に出来たのはただひたすらごねて足をばたつかせるだけであつた。

白玉楼の半人半霊

「~~~~~」

つい先日、にとりから貰ったブレスレットで僕は今、優雅な空の旅を楽しんでいる。

「違う〜違う〜そうじゃ無い〜♪」

空を飛ぶってこんなに楽しいもんなんですね。もうテンション上がりまくりで、鼻歌どころか普通に歌っちゃいましたよ。

ちなみに曲名は——— 忘れた。

「……………」

おや？ 下の方からなんか歌が聞こえてきたぞ。

下を見ると、森の中にちよこんとーつ、何かの建物だろうか屋根が見えた。さっきの歌はここからのようだ。

気になって降りてみると、いい匂いが漂ってきた。——— 蒲焼きの匂いだな。いい匂いだ。

どうやらさっきの屋根は建物ではなく移動式の屋台だったようだ。中からジュウと美味しそうな音が聞こえる。

「ヤツメ〜ヤツメ〜焼きますヤツメ〜」

蒲焼きを焼く音と共になんだか良く分からない歌が聞こえてくる。

とりあえず、中に入ってみよう。暖簾をくぐってみる。

「いらつしやい！おつ、人間さんかあ……。何食べる？まあ、あるのはヤツメの蒲焼きだけどね」

どうやらこの人がさっきのヤツメの歌を歌っていた張本人のようだ。ヤツメを焼いてるからヤツメの歌を歌ったのかな？

メニユー、と言つてもどうやらこの店にはヤツメウナギの蒲焼きぐらいしか無いようだ。あとは、お酒とキヤベツくらいか。白飯は……。無いのか。

「いやあ、後少し寒くなってきたら、おでんを作るんだけどね」

ふむ、今は無いがおでんもあるのか。美味しそうだ。

「とりあえず、一本下さい」

「かしこまり〜」

ああ、この蒲焼きを焼く音をBGMに酒をチヨコチヨコ呑むのも悪くないなあ。でも、今日はちよつと用事があるから止めとこう。今度来たら酒を呑もう。

「へいお待ち」

きたきた……。なるほどそう来ましたか。味付けをあえて濃ゆくし、酒を進ませるタイ

プの焼き方か——酒呑みたいなあ。

とりあえず一口……うん、濃いけど、全然ありだ。美味しい。焼き加減も絶妙で、身がとてもいい感じだ。うーむ、白飯が食べたくなってくるなあ。

美味しすぎてあつという間に食べてしまった。もつと食べたい。でも時間が時間だから、あとはお持ち帰りしておくか。

「すいません、これを5本お持ち帰りで」

「かしこまり、はいはいどうぞ」

パックに詰められたヤツメウナギの蒲焼き5本を右手に持つ。——また今度この店に来よう。

プレスレットの格納機能でヤツメウナギの蒲焼き5本を粒子に還元、そのままプレスレットに取り込んだ。

いやあ、やっぱりこの機能便利だな。……よし、そろそろ行こうかな。

(何処に行くんだ?)

おつ、出てきたなクロ。

(てかき、いい加減その名前どうにかしろよ。なんだかペットみたいじゃないか) そうそう、クロの名前考えてきたよ。

(マジで!?どんなの!)

「ブライク」とかどう？古英語では黒つて言う意味なんだけど。

(……クロのほうがいいです)

なんでや!?一応徹夜して考えたんだよ?レミアさんに聞いてみたら凄く評判良かったのにかつたのに?

(他の奴はどうだった?)

——みんななんか苦笑いしてた……。

(だろうな)

だろうなつてなんだよ!泣くぞ、今すぐにも僕泣くぞ!?

(ところでプレスレットの方の名前は決まったのか?)

ああこれね。これも一応考えてきたよ。

(ほう……、言ってみなさい)

え、嫌だよ。どうせまた馬鹿にするに決まってる。

(しないから、ほら早く言えよ)

「ブラウフェーダ」、ドイツ語で確か青い羽つて言う意味だった気がする。

(……まあ、悪くはないかな?)

何で疑問系なんだよ。余計に傷つくわ!——もういい、早く目的地に行こう。

(んで、何処に行くんだ?)

ああそれはね……。

目の前の大きな階段を見上げる。——でかいなあ……。

僕は今、冥界にある白玉楼の大階段のふもとに居る。なぜ白玉楼に来たのかと言うと、この前の宴会の時に幽々子さんに——

『今度暇な時に白玉楼に来ない？色々と馳走しちゃうわよ？』

なんてこと言われたからだ。あの宴会で意外と話が弾んじやってねえ……。なかなかいい人ですよ幽々子さんは。〃幽々子さんは〃

(何でそこだけ強調したんだよ)

色々とあるんだよ世の中にはね。

階段を登った先に、傍らに幽霊みたいなのを連れて庭の掃除をしている少女が居た。

——げえつ。

(どうした？関羽でも来たか？ドラの音はまだか)

ちげえよ。誰が三国時代の豪傑だ。

その少女は僕を見つけるやいなや、睨みつけてそそくさと何処かへと立ち去ってしまった。

(一体お前何したんだ?)

ナニモシテナイ……。

(じゃあどうしてあんな睨みつけたあと、そそくさとどっか行つたんだ?)

それはこつちが聞きたいよ。

白玉楼の異変以来からとにかくこんな感じなのである。何であんなに毛嫌いしてるんだらう。なにかしたつけ?

「あら、来てくれたのかしら?」

今までの行いを振り返っていると、後ろから声をかけられた。

「どうも、幽々子さん」

「そんなかしこまらなくてもいいのよ。ほら早く中に入って一緒にヤツメウナギ食べましょう」

そうですね。早くヤツメウナギを——なぜ僕がヤツメウナギの蒲焼きを持ってるのがバレた!?

「うふふ、私食べ物には凄く敏感なのよ」

そうですね……。見た目は凄くおしとやかな感じなのに、中身は意外と食いしん坊な

んだなあ。

「ほら早く食べましょう！」

返事する暇を与えずに、背中を押され無理やり中へと押し込まれていく。食いしん坊恐るべし……。

「それで？あの子がどうしたのかしら」

「いやなんだか僕、嫌われてるみたいで……」

客をもてなす為の部屋なのだろうか、少し広めの和式の部屋で幽々子さんとゆつくりお茶を飲みながら会話をしている。

ヤツメウナギの蒲焼き？ああ、あれなら幽々子さんが全部ペロリとたいらげたよ。もう呆れるどころか笑っちゃったね、うん……。

「そうなの……。そう言えば最近あの子、妙に気がたつてるわね」

「あらら……」

「どうしたの？って聞いても何でもないって言われちゃうし、困ったわ」

はあ、と深いため息をつく。やはり幽々子さんもあの子のことが気になっていよう
だ。

「どうしましょうか」

「どうするもこうするも、こればかりは本人に聞かないとねえ……」

するとその時ふすまが開き、先程から話していた問題のあの子、妖夢が現れた。――

――はて？なぜ僕を睨むのだろうか。怖いなあ。

「幽々子さま、庭の掃除が終わりました」

「はい、ご苦労様」

こうやって会話している今でも、あの子は僕に対して凄く殺気を放っている。まるで
鋭い剣先を喉に押し当てられているようだ。

「妖夢……」

「なんででしょうか」

見かねた幽々子さんが口を開いた。

「客人にそんな態度をとれと私は教えたかしら？」

「ツ~~~~~~~~!!」

その場の空気が一気に凍りついた。実際はなんの事はない言葉だが、何故だかその言
葉にとてつもない何かを感じた。強いて言うなら、死を感じる様な感じだ。とにかく恐

ろしかった。

「一体どうしたのよ妖夢？あなたらしくないわ」

冷徹な顔から一変、いつもの穏やかな顔へと戻った。だが相変わらず空気は凍ったまままだ。

「……………」

そのまま黙りこくって俯く。しかし、何かを決意したようで急に顔をあげ、喋った。
「私は、あの男が嫌いなのです」

オウ……………単刀直入に言ったなあ……………。まあ、薄々気づいてはいたけどさ。でもこう、面と向かって言われると結構ショックなものだ。

「どうして？片倉さんはいい人じゃない」

「性格が嫌いという事ではありません。私はあの男が師匠を超えたという事が気に食わないのです」

ん？どうしてそこで師匠が出てくるんだ？

「そうなの……………」

「は？」

しかし困った。これじゃこのままずっと未来永劫、僕はあの子に嫌われたまんまなのか？

まさに『嫌われ未来永劫斬』的な？

(……面白くねー)

うるせえ、自分でもそう思ってるよこの野郎。

「それなら妖夢、今から片倉さんと戦いなさい」

「勝負ですか」

「ええそうよ。あなたが勝つたら嫌いなままでいなさい。でもあなたが片倉さんに負けたなら、その時は片倉さんとこれから仲良くしなさい。これなら問題ないわ」

ふむふむなるほど——っておい!? 問題しかないわ!

何故そこで戦う事になるんだ? 幽々子さんも幽々子さんでこつちを見て「ナイス提案だわ!」みたいな事を表現したドヤ顔するの止めましょうか。

顔面殴りますよ? 殴りませんけど。

流石にこの提案は却下だろう。

「……分かりました」

おい——!? 嘘お、承諾しちゃった!?

「片倉さんもいいわよね、ね?」

ニツコリと笑いつつも威圧的に迫ってくる。クソお、これが警察の取り調べだったなら誰でもケロリと吐いちまうぞ。

だが僕は認めないぞ！絶対に！

「いいわよね？」

「……はい、喜んで……」

無理だ。逆らえつこないさ。逆らったら最後、多分生きてここからは出られない、そんな気がした。

「それじゃ二人とも表に出ましようか」

「はい」

「はい……」

いったい僕はこの後どうなってしまふんだ？

「ルールは簡単、相手をとにかく倒せばOKよ。あつ、スペルカードは極力無し」

何そのルール、物凄く適当な気がするんだけど。

「ん？何か文句あるかしら？」

「ありません！断じてありません！」

なんだか幽々子さんが幽香さんに見えてきた。——もしかしたら幽香さんと知り合いかもな。うん、ありえそうな気がしてきた。

「それじゃ、始め」

バツ、とお互い後ろに下がりますは間合いを取る。

さてさて、戦略の基本といえはなんだ？

（気合だ！）

それは流石に違うだろ。まずは相手と自分の戦力を確かめることさ。

相手の戦力、つまりあの子の手持ちの武器は刀、しかも二刀流のおまけ付き。

対して僕の戦力は、……手持ちの武器無し。泣けてくるねえ。

（銃はどうした）

ああ、銃なら紅魔館に置いてきたよ。だってこんな展開になるなんて想像すらしてなかったんだもん。仕方ないよね。

だが武器はなくても、僕には鎧とブラウフェーダがあるから何とかなるはず。

よし、次は作戦を立てよう。

（どんな作戦を立てるつもりだ）

そうだなあ、この場合だとまずは相手の力量を測る事が先だな。例えば攻撃方法や速度とか。ある程度分かってきたらその後——

(その後は?)

—— 気合だ!

(やつぱり気合じやねえか!)

仕方ないだろ、こんな装備でまともに作戦組めると思うか? 無理だろ。

考え事は程々にとりあえずこちらから仕掛けにかかる。さてどう出るか。

まずは挨拶がわりに一発派手にぶん殴ろう。と思つて近付いた瞬間、刀が目の前に迫っていた。

危ない! 某マトリックスみたいに体を後ろに仰け反らせて無理やり避ける。甘かった、やつぱり刀相手に素手は無謀すぎた。

「その程度ですか? ならば次はこちらから行きます!」

次はあちらの攻撃のようだ。ドンと来い! ……いや、やつぱり来ないで下さい。

脳天目掛けて振り下ろされる刀を何とか義手の左腕で凌ぐ。だが二本目の刀が、から空きの脇腹を狙つて来た。仕方ない、あれを使おう。

鎧を展開、ギリギリの所で鎧が刀をガードする。

鎧が出現した事で、相手は後ろに下がり鎧の様子を見ることにしたようだ。—— 意外と慎重に攻めてくるタイプだな。

(ブラウフェーダは使わないのか? 今なら遠距離からバシバシいけるぞ)

いや、まだブラウフェーダを使うわけにはいかない。あれは隠し玉としてとっておくつもりだ。

様子見にも飽きたのか知らないが、また妖夢が距離を詰めて攻撃を仕掛けてきた。おそらく少ししか無い鎧の隙間を狙って攻撃してくるだろう。あの子ならありえる。なんて言ったって、あの子も師匠の弟子なのだから刀の扱いは達人級だ。さつきそれを身を持って知ったよ。

ならばこちらとしても、正々堂々正面で出迎えるわけにはいかない。てかしたくない、死ぬもん。

刀が振り降ろされる刹那、右足に魔力を纏わせる。

(おりよりよ? お前、魔力を義手以外でも纏わせたり出来るようになったのか?)

ああ、何か白玉楼の異変以来から急に出来るようになった。

魔力を纏わせた右足でそのまま地面に大きく踏み込む。

すると地面に流し込まれた魔力は地面の形を変形させ、そして目の前に隆起した。まるで土の壁だ。

刀をガードされ、片倉の姿を一瞬見失った妖夢は少し動揺する。その瞬間が命取らだつた。

後ろをとつた僕はいつもお世話になっているあの刀を呼び出す。

「いでよ、風刃!……あれ?」

だが、いつまで待っても風刃が出てこない。

「ちよ、ちよつとタイム!」

あれえ?なんで出てこないの?魔力ならまだ残ってるのに。

ちよつと!どうなってるのクロ!

(あゝゝゝ、これは多分)

多分?

(風刃の所有権の問題だな)

所有権の問題いいい!?

(うん、所有権の問題。風刃は元はといえば俺の物だから、多分あの西行妖の時に使って以来そこから俺のになっちゃったんだと思う)

どうにかならないのか?風刃の機動力強化無しはきついんだが……。

(無理。ドンマイ)

……無理ゲーにしか見えなくなってきた。

(フアイト♪)

はあ……、諦めて他の作戦を考えよう。風刃無しとなると……うーむ……。

「そろそろいいですか?」

「ん？あつ、ごめんごめん、もういいよ」

そう言えばタイムしてたんだっけか。

うっかりしてたなあ、と自己反省している暇もなく襲いかかって来た。ヒエエ、慈悲も無い人だ——でも律儀に待ってくれたから慈悲は少しくらいあるか。

とりあえず後ろに下がり作戦を改めて組み直す。どうしたものか。

はつきりいうと負ける気しかない。避けるのは避けているのだが、このままだといずれは負ける。

せめて、風刃さえあればなあ……。あの子の速い攻撃にも対応出来るんだが。

(だったら逆に動きを止めたらどうだ?)

おっ？その考えは無かったな。でもどうやって止める？

(それはお前が考える事だろ)

そうですか……。うーん、何かいい作戦は無いものか……。あつ！

ふと僕は前にアリスが言っていた事を思い出した。あれは確か……。魔力と妖力とかの違いについて聞いた時だったな。

『いい？妖力はその妖怪のオーラみたいなモノよ。まあ、私は詳しくは知らないけど』

『それじゃあ魔力はどうなんですかアリス先生』

『アリス先生……。え、えーと、魔力はオーラに近いけど全然違うわ。妖力には出来ない

事が出来るのが魔力よ』

『例えば？』

『そうね……。妖力では魔法は使えないけど、魔力なら使えるわ。これは魔力が魔法の元素に変化するからよ。何故ならカクカクシカジカ——』

『——詳しくは良く分からないけど、とにかく変化するのは分かったよ。ところで他のものにも変化するの？』

『するわよ。形状変化の為の衝撃力にも変わるし、物質を硬くしたり柔らかくしたりする事も可能よ。あと、磁石みたいに引っ付いたり反発させたりも出来るわ』

『魔法ってかなり便利ですねえ……。』

『そうよ。あなたも少しは扱いに慣れば簡単に出来るはずよ』

——これだ。これならいける！

(おっ！何か思いついたか？)

ああ、完璧な作戦が今頭の中で組み上がったよ。ありがとうアリス。君のおかげで勝てそうな気がしてきましたよ。

それじゃあ行きますか！

「ブラウフェーダー！」

鎧が変形し四本の青色の羽が出現する。

(おいおい、防御力が落ちてるぞ。それじゃあの刀は防げないぞ?)

ああ大丈夫。防げなくても構わないさ。だって今からあの子の攻撃は全部当たらなくなるから”ね。

「まだ隠し玉を持っていましたか……」

「この隠し玉は危険だよ?」

「だとしても、私が叩き斬るだけです」

「ならほら、掛かって来なよ」

「言われるまでもありません!」

よしよし、上手く釣れたぞ。

羽をあの子に向けて飛ばす、しかし狙いがそれで見当違いな場所に突き刺さった。
「どうやらその扱いに慣れてないようですね!」

一気に距離を詰めて刀で斬りかかる。

だが突然、謎の白い煙が辺りを立ち込めて、彼女は斬りかかる動作を中断させた。

「この煙は?!」

「スモークグレネードってやつだよ」

「後ろか!」

スモークグレネードの煙で視界を遮り後ろをとったが、声で居場所を悟られてしま

う。

完全に僕の居場所を把握した彼女は一気に僕の懐へと詰め寄り、二本の刀で斬りかかろうとした。が、そこに斬ろうとした対象の姿は無かった。

「何処だ！」

「()だよ」

僕はあの子の後ろで余裕の表情で笑っていた。

若干の苛立ちを覚えつつ斬りかかろうとしてくる。刹那、僕は唐突にあの子の足元を指さした。

「足下を見てみなよ」

「足元……?」

見ると先程の狙いのそれた羽が彼女を囲うように律儀に正方形を描いて突き刺さっていた。

「!？」

ハメられた、そう思った時にはもう遅かった。

羽から地面へと魔力を注ぎ込み、土の壁が隆起する。

先程、僕がやった技と同じ原理だが今回は違う。四隅からの隆起だ。

隆起した地面はあの子を一気に閉じ込めた。——よし、完璧だ。

「冷静さを欠いた状態じゃ無かったら、こんな罫には掛からなかったはずだね」
「……そうですね」

完全に閉じ込められているというのに、あの子にはどこか余裕が感じられる。

「ふ、ふ、ふ、ふ」

「……………」

「私をこんな土ごとくときで閉じ込めたと思っただけですか？ 甘い、甘いですよ！」

ドコオン！ 凄まじい音と共に土の壁が吹き飛ばされる。——やっぱり閉じ込める事は無理だったか……。

吹き飛ばされた土であの子は土が服に付いたり、とても汚れていた。だが、お構いなしにあの子は隙だらけの僕に斬りかかる。

「その首貰ったあー！」

おいおい、そのセリフは色々とまずいような気がするぞ……。別に斎藤一の事を言っている訳じゃ無いけどさ。

完全に隙だらけの僕は、あの子の渾身の一撃を喰らった。はずだったのだが、その一撃は見事に外れた。

渾身の一撃を外した事に動揺する妖夢。しかし流星は剣術の達人、身体は自然と次の攻撃を繰り出していた。

頭、首、胴体、腕、足、と言った全身の部位に休む間もなく二本の刀が襲い掛かる。だが、その攻撃全ても一度も僕には当たらない。

「油断？これは余裕と言うもんだ」

一度は言ってみたかったこのセリフ。別に断じて誠シシオを意識した訳じゃ無いぞ。断じて無いぞ。

それはそうと、僕は刀を頑張つて避けている訳じゃない。ただ、刀が勝手に僕の身体に反発しているだけだ。

「この調子だと、妖夢の攻撃は当たらないわね。なかなかずる賢いことするわねあなた」
どうやら幽々子さんにはこの仕掛けが解っているようだ。

対してあの子の方はまだ解っていないらしい。未だに攻撃をしてきているが、全くかすりもしない。

そろそろ終わらせようかな。なんだか可哀想になってきた。

「ぜえ……ぜえ……」

「なんで当たらないんだ！って顔してるね」

「……」

「なんで君の攻撃が当たらないか教えてあげるよ。魔力って言うのはね便利なもので、色んな物に纏わせたり出来るんだ。例えばこの地面にも纏わせたり出来る。しかし、そ

の他にも魔力にはもつと凄い特性があるんだ。何か解るかい？」

「さあ……？」

「磁石だよ。魔力は磁石にもなるんだよ。魔力は魔力同士で反発したり、逆に引き寄せたり出来るんだ」

「それがどうしたんですか」

「そこで最初の話に戻るんだけど、その磁石の性質を持たせた魔力は、地面の土に纏わせることだって簡単に出来るんだよね。すると、その土が付着した物は他の魔力を纏った物に反発したりする。あれ？　そう言えば君、服とか刀が土まみれだね？」

「……まさか」

「うん、そのまさかだよ」

「私の攻撃が当たらなかつた理由はこの磁石の性質とやらでしたか……」

「そうだよ。でも、もう一つ大事な事を忘れてるよ」

「??」

「磁石は反発もすれば、〃引き寄せたりする事も出来る〃」

「!？」

何かを察知した妖夢は後ろに下がろうとする。だが、足が何かに固定されて動かない。

ちらりと見てみると、土や石の塊がすっかりと足を地面へと固定していた。振り払おうとしてもまったくとれる気配がない。

せめてもの反抗で刀を投げようとするも、両方の腕さえも固定された。そして妖夢は完全に身じろぎ一つも出来なくなつた。

「決着はついたわね」

幽々子がこの戦いを終わらせる一言を放つた。

「この勝負、片倉の勝ちよ」

「今までの御無礼、大変失礼致しました」

丁寧丁寧に重ねた謝罪をする妖夢。

「いやいや、良いんだよ」

これで「許さないぞ!」とか言う奴は人間じゃないな。だとしたらそいつは悪魔か花の妖怪か鬼だ。おっと、花の妖怪は余計だったかな。

「私はまだまだ半人前、やはり師匠を超える力には足

元にも到底及びませんでした」

何かあの勝負以来から凄い態度が変わってるんだけど。まあ、悪くはないか。むしろこっちの方が良いに決まってる。

「うんうん、仲直りでできて良かったわ〜」

何だかんだで幽々子さんの提案であの子と仲直りできた。本当は穏便な方法で仲直り出来たら良かったんだけどな……。

「これで心置きなく妖夢にご飯を作らせることが出来るわ。さあ妖夢、ご飯作って〜」
——もしかして仲直りでできて嬉しかったのって、それが理由とか言わないよな。

「あの子ならここにはもう居ませんよ」

「えっ?」

なんか「ちよつと修行して来ます!」って言って表に飛び出していったんだが……。
てか気づいてないのかよ、それでもあの子の主ですかあなたは。

「さてと、それじゃあ僕はそろそろ帰りますね」

「ちよ、ちよつと待って」

「へっ?」

「あなた、料理出来る?」

「ええ、まあそれなりに」

と言っても出来るのはカレーとか卵焼きとか、簡単な料理しか出来ないが。

でもどうして——あつ……。

「嫌です」

「まだ何も言っていないじゃない!」

「いやどうせ、お腹がすいたから料理作って、とか言うんでしょ?」

「うん、そうよ」

「やっぱりか——!だと思つたよ!」

「面倒なんで、お断りしま……」

「もしも作ってくれなかったら、このまま私とエンカウントバトルが始まるわよ」

「……は?」

「エンカウントバトル始まるわよ」

「何だそれは!?!ご飯作るの拒否したらバトルって、あんたは何処の花の妖怪だ!」

——仕方ない、いのちだいじに、バトルするくらいなら適当に料理作つた方が懸命

だな。トホホ……。

「分かりましたよ、今から何か作るんで待ってて下さい」

「ありがとう」

「はあ……。なんでこんな事になったんだろうか。」

「出来ましたよー」

「待ってました!」

子供みたいにはしゃぐなよ……。

ちなみに作ったのは卵焼きだ。簡単に作れるから楽でいいよね、卵焼き。

「頂きます」

もぐもぐ……。もぐもぐ……。

「あなた、料理上手なのね」

「そうですか?」

それはただあなたが空腹いてるだけのような気がするんですが。最高の調味料は空腹だ、って言うしね。

と言うかそろそろ帰りたいのだが。

「決めたわ」

「?!」

「今日からあなたを白玉楼専属料理人にするわ」

お花畑へ連れてって

「あく、だるい。ダルス」

自室に置いてある見るからに高級そうなベッドに寝転がりながら、滅びの呪文のような言葉を呟いてみる。

だるい、五月病か知らんが非常にだるい。

そう言えば今は五月だな。——やっぱり五月病だな。

こんな時は美鈴のどこにでも行こうかな、と思つたのだが、美鈴は今はいない事を思ひ出す。

美鈴がない理由は確か、有給休暇だったはず。門番居なくて大丈夫なのだろうか紅魔館。

まあこの紅魔館に訪れる人なんてほとんどいないが。

それじゃあ代わりにパチュリーさんの所には……やっぱり行かないでおこう。多分今頃新しい呪文の実験してるはずだから——行つたら確実に死ぬ。うん。

ああ、暇だしだるいし、どうにかならぬものか。

「そんな時は妹様とお遊びになられたら如何かと」

「うーん、それは……つてうわっ!？」

部屋の中に急にメイド長の咲夜さんが現れた。

突然現れるのはいつもの事で慣れっこだが、部屋のしかも自室で一人きりの時に、突然現れるのにはさすがに驚いた。

「あの～咲夜さん？普通に部屋のドアから入ってくれませんか？」

「それは失礼致しました。次からは気をつけますね」

ああアカン、完全に気を付けないパターンだわこれ。だって顔が微妙に笑ってるもん。

「ところで、お暇でしたら妹様とお遊びになられたらどうですか？」

フランちゃんと遊ぶ、か……。嫌だ絶対に嫌だ。

フランちゃんと遊ぶ＝弾幕ごっこ(デスマッチ)

の方程式が成り立つっちゃってるからなあ……。

実は前からちよこちよこことフランちゃんと美鈴とで遊んではいるのだが、これがとにかくえげつない。

僕は遠くからぼーっと二人の戦いを眺めているが、あれは人がやっていい戦いじゃ無かった。もうグロイグロイ。終わつてるときには二人とも毎回血だらけだし……。

まあという訳で、美鈴が居ないからフランちゃんと遊ぶは今日は無しでいこう。

「フランちゃんと遊ぶは今日は止めておきます」

「そうですか……。では、ちよつと一つお願いしてもいいですか？」

「何でしょう？」

「お願いとは、珍しい。いったいどんな事を頼まれるのかな？」

「私と一緒に人里に行きませんか」

「えっ？」

「頼まれた内容は、まさかの内容だった。」

「久々に来たが、相変わらず人里は活気に溢れていた。」

「道沿いに並ぶのは、沢山の——食材。」

「そう、咲夜さんから頼まれたあのお願いごとの内容は、今日の夕食の買い出しだったのだ。」

「今日は勢い余って買いすぎてしまいました」

「そ、そうですか……」

まあ当然だが食材の荷物持ちになる訳で、今は物凄料の食材を僕は運んでいる。

両手だけでは収まらず、背中のリュックにも食材をパンパンに入れている。——勢い余りすぎだろ……。

てか咲夜さんって、この量の食材を紅魔館まで運んでたのか？もしそうだったとしたら半端ないぞ。

「大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫、です」

見るからに大丈夫ではない。重い。

こんな重いを持って歩き続けたのは何時ぶりだろうか。

あつちの世界の時は、この重さの物を背負うなり抱えるなりして走っていた事を思い出す——懐かしいなあ……。

いや、今はノスタルジーに浸ってる場合じゃない。とにかくこの食材を運ばねば。

……やっぱり無理だわ。

半ば死にかけの目で、咲夜さんに助けを求める。男としては格好悪いが、この際恥は捨てて助けてもらおう。

こんな道端でくたばるよりはマシだ。

しかし、咲夜さんは僕、ではなく懐中時計の方を見ていた。

そう言えば、咲夜さんって何時もあの時計を持つてるよな……。何かしらの思い入れでもあるのか？

パタン、と時計を閉じ、ようやく僕の方を見た咲夜さんがある提案をした。

「片倉様、今の時刻は昼の12時ジャストです」

「は、はあ……。そうですか」

もうお昼なのか。時間は経つのが早いなあ。

「お腹空きませんか？」

「空きますけど」

空腹よりもっと大変な事があるような気がするんですけど咲夜さん。

そろそろ足と腕とその他諸々が限界を迎えそうなんですよ。

「何処か食べに行きましようか。この近くに私がよく通ってる食事処があるので」

うん。行きたいのは行きたい。けど多分無理な気がする。

「では行きましよう」

スタスタと先に歩いていった咲夜さん。あつ、ちよつ、助けて……。グハツ……。

よろよろと歩き続け、ようやく咲夜さんの言っていた食事処に着いた。

さつきまで持っていたあり得ないくらいの量の食材は、半分くらい咲夜さんに持ってもらっている。

何を食べようかとメニューとにらめっこしている時、ある事に気がつく。

「あのお咲夜さん」

「どうされましたか」

「レミリアさん達の昼食は大丈夫何ですか？」

基本的に紅魔館の朝食、昼食、夕飯は咲夜さんが作っている。もちろん今日も例外ではない。

しかし、今日は朝食を終えてからは人里に僕と来ているため、昼食は作れていないはずなのだ。

今頃レミリアさん達、お腹すいてお怒りなのでは、とふと思った。

だが即答で「大丈夫です」と言われた。えっ、マジすか？

「もう既に、本日の昼食は作って置いております。ですから、後は妖精メイドに運ばせるだけで大丈夫です」

い、いつの間に昼食を作ったんだ……。時間的に無理だと思っただが。

「私の能力を使えば、時間なんて関係ありません」

能力を使えば時間なんて関係ない？はて、どういう意味だ。

「私の能力、ご存知ありませんでしたか？」

「ええ、まあ」

と言うか、能力を持つてること自体考えた事無かった。

「私の能力は、時間を操る程度の能力、ですよ」

「へえ、——えっ？」

時間を操る程度!?いやいや、程度の領域を超えていますよ!?

もしかして、もしかしてなのだが、何時もいきなり現れるのってその能力を使つてた

からなのか？

「はい、そうです」

あー、これで紅魔館唯一の謎が解決したわ。なるほど、能力のお陰か。フムフム。――

——あつ……。

つまり、僕が部屋でゴロゴロしている時に、咲夜さんは時を止めて昼食をあらかじめ作っておいたのか。

流石メイド長、格が違ったわ。

にしても時を止めるって本当に便利そうだなあ……。

「その能力つて、何かしらの制限とかあるんですか？」

「ありません。無制限の使いたい放題です」

「そうなんですか」

「そのようだ。」

無制限か……。場合によつては悪い事にも使える力だなこれは——ん？

「ここである疑問が浮かぶ。いや、そんなはずはない。だが、いや、うん、聞いてみるか。」

恐る恐ると言つた感じで、ある一つの疑問を咲夜さんにぶつけてみる。

「二ついいですか？まさか有り得ないとは思いますが、もしかしてですよ？もしかして、その能力を使ってレミリアさんに何かしたりしてませんか？いや、有り得ないとは本当に思いますが……」

最近、レミリアさんから何者かの視線を感じる、と相談された事があつた。いや、まさかとは思うが……。

この質問に咲夜さんは冷静に「まさか、そんなことは致しませんよ」と言つた。

だが否定する直前、少しうろたえたのを僕は見逃さなかつた。

「本当に？」

「はこ」

「ほんつとうにですか?」

「——はい。本当です」

少し言葉を詰まらせながらもきっぱりと否定する。

ああ、やっぱりな。やはり何かしらのやっていることを確信する。

恐らく咲夜さんの脳内では、全力で否定したい気持ちと嘘をついてはいけないという忠誠心にも似た正義感がせめぎ合っているのだろう。

「……そうですよ。そんな訳ないですよね」

まあ、だからといって僕がどうこうするような権利はない。だから、この話は無かった事にしよう。うん、そうしよう。

ごめんなさいレミリアさん、多分害はないと思うので頑張ってください。

身も心も満腹に満たされ、店の前で大きく背伸びをする。

ちなみに食べたのは、ロースカツ定食だ。端っこの脂身が甘くて美味しかった。

さて——

「帰りますか」

「そうですね」

「昼食も済ませ、この大きな大きな荷物（本日の晩御飯の食材らしい）を持って帰ろうとしたその時――

「オーイー!!」

遠くで誰かが叫んでいた。

気のせいだろうか、その声には何故か聞き覚えがある。

まさかとは思いつつ、振り返ってみる。

声の主は魔理沙だった。

「おお、元気にし、てる……か」

「急激に体中から冷や汗が出始める。」

「な、なんで?」

まさか、まさかこんな時に一番会いたくなかった人ランキング一位に会ってしまうとは……。

「ゆ、幽香さん……」

「久しぶりね、片倉」

ちなみにどうでもいい事なのだが、幽香さんの登場曲（脳内BGM）は二種類ある。今

はターミネーターの音楽が流れている。もう一つの方の曲はダースベイダーの音楽だ。いや、今はそんなことはどうでもいい。

何故幽香さんが魔理沙の後ろから、スツと現れたのが気になって仕方がない。

「な、なんで魔理沙と幽香さんが一緒に?」

「あらあ? 見てわからないかしら?」

「わたし達は友達なんだぜ!」

そうなのか。つてそうじゃない!!

「片倉様、こちらの方は?」

「ここで咲夜さんが質問を投げかける。

あくそう言えば咲夜さんはこの二人は知らないんだっけ。

「えーと、こっちの金髪魔法使いっ子が友達の魔理沙」

「魔法使いの霧雨魔理沙だぜ! 宜しくだぜ」

「そしてこちらの傘を持っている人が、幽香さん」

「風見幽香よ、宜しく」

「紅魔館に勤めている、十六夜咲夜と申します。以後お見知りおきを」

よし、自己紹介も済んだしそろそろ――

「あらあ? ちよつと待ちなさい」

ガシッ！帰ろうとした刹那、物凄い握力で肩を掴まれた。……幽香さんに。「イテテテテ！」

「少し私と付き合いなさい？」

ギギギ、と錆びたロボットの如くゆつくりと振り向く。

そこには、笑ってはいるものの、明らかに修羅を宿った顔があった。

「は、はは、な、何のことですかねえ……」

「うふふ、久しぶりにちよつと遊ばないかしら？ということよ」

ちなみにこうしてる今も、幽香さんに掴まれている肩に力がかかっている。

痛い！痛いから！本当に折れるから！

「いや、でも、今日はもう帰らないと……。ねえ、咲夜さん？」

人生で一回だけのお願いと言わんばかりの勢いで、アイコンタクトを咲夜さんに送る。

「いえ、別に今すぐと言う訳でもないので大丈夫ですよ」

ぎやあああああああ！見捨てられたあああああ！

「そう。出来ることならこの子を今日一日借りたいのだけど、いいかしら？」

「はい、構いません。お嬢様には私から伝えておきます」

いやあああああ！

「そう、ありがとう。それじゃあ行くわよ片倉。魔理沙はついて来るかしら？」

「んー、いや止めておくれ」

「分かったわ」

「あつ、ちよつとまってくれだぜ」

何かを思い出したのか唐突に呼び止める魔理沙。

「片倉に頼みがあるんだ」

ほう、僕に頼み事とはいったい。

咲夜さんという魔理沙といい、今日はやたらと頼み事される気がする。

「頼み事とは？」

「前から言いたかった事なんだけど、今度紅魔館にお邪魔してもいいかな、と思つてな」
紅魔館にお邪魔したいとは。いったい何故だろう。——分かった！

多分パチュリーさん目当てだな。うん、そうに違いない。恐らく魔法使い同士で何かしらお話でもしたいんだろうな。

「パチュリーさんと話したいのか？」

「そうなんだぜ。この前の宴会で結構盛り上がりつてな。近々会いに行こうかと。本当は宴会の時に言おうと思つてたんだが、なんだか恥ずかしくて言えなかつたぜ」

なんで、恥ずかしくつちやうんだよ。

まあそれはよしとしてだ、それを僕に言われてもなあ。許可を出すような身分じゃないし。

そうだ、咲夜さんに聞いてみるか。

「来ても大丈夫ですか？ 咲夜さん」

「大丈夫だと思います。後でお嬢様に聞いてみますね」

まあ咲夜さんの事だから大丈夫だろう。よかつたな魔理沙。

「それじゃ私は家に帰るぜ。じゃあな」

ふわりと箒にまたがって空へと飛んでいった魔理沙。

「さてと、それじゃ僕たちもそろそろ……」

「うふふ、道が違うわよ」

ガシツ！と幽香さんに頭を鷲掴みされる。

痛い！痛いから！頭が割れてしまうから！

こうなつては仕方ない。もう死を覚悟で諦めて幽香さんの家に行こう。——さら

ば、愛しの紅魔館。

「それじゃあ咲夜さん、レミリアさんに明日帰ってくるかもしれないと伝えておいてく

ださい」

まあ下手すると、一生帰ってこない可能性もあるが。

「分かりました。では、お気を付けて片倉様」

うん。気を付けろと言われなくても気を付けるに決まっていますから。じゃないと死にますから。

「さあ行くわよ」

「……はい」

ズルズルと引きずられるようにして、幽香さんの家へと連れて行かれる僕。

これ傍からみたら絶対に誘拐にしか見えないだろうな。

周りの人からの痛い視線を浴びつつ僕達二人は、ひまわり畑にある家へと向かうのであった。

——よくよく考えたら、これ誘拐ですわ……。

花と命は散りゆくもの

人には時として大きな難題にぶち当たる時がある。

それが、いつ何処で訪れるのかは予測出来ない。

だがしかし僕は思う。その時というのは――

「うふふ、ひざしぶりにワクワクするわ」

――まさに今なんじゃないかと。

軽い準備運動のつもりなのか、はたまた威嚇なのか、それともワクワクし過ぎてテンションが高ぶっているのか、幽香さんは近くの木を殴ってへし折った。拳でだよ？ありえねー……。

もうこの時点で勝負が見えたのはきつと僕の弱気な気持ちのせいではないはず。もし、隣に魔理沙や咲夜さんが居たら、「ドンマイ、死なない程度で頑張れ」と声をかけただろう。

いや、勝負の行方どころかその後の己の末路も見えてきたぞ。もちろん死ぬという末路なのだが……。

「あのお、ちよつと作戦タイムとつても良いですか？」

「——いいわ。ただし、そんなに長くは待たないわよ」

よっしやあ！なんとかなる気が……しない。

と、とにかくだ、無計画で戦うよりは作戦を立てて戦った方が有利になるはずだ。

よし、そうと決まれば脳内作戦会議を開こうぞ。者共、存分に考えるのだ！

正面からの堂々とした戦闘——却下。力の差が違いすぎて死ぬ。

スピードで攪乱しながらの戦闘——却下。あの人の動体視力はいかれてるから死

ぬ。

背後からの奇襲戦法——却下。あの人の背後を取ることは、ゴルゴの背後を取るこ

とと同じ。故に死ぬ。

いつそのこと逃げる——却下。逃げれるのならとつくの昔に逃げとるわい。

だああああアアア！駄目だ！作戦なんてこれっぽっちも役に立たないじゃんか！

もう駄目だ、おしまいだ……。

誰か、誰かなんとかしてくれる奴は居ないのか！

（ふあーあ……よく寝たわー。おっ、おはよう。なんだか大変な事になっちゃってるな）

……居た。こんなところ（僕の心の中）になんとかしてくれそうな奴が居た。

そうだ！クロの力をもってすれば、皆殺しから半殺し程度にはなるはずだ！間違いな

い。

ねえねえクロ、一つ頼みがあるんだけど。

(嫌だ、断じて嫌だぞ)

まだ何も言つてねえじゃんか！泣くぞ？今すぐにも泣いちゃうぞ？

(冗談だ冗談。それで頼みたい事とは？)

いやあ、僕の代わりに幽香さんと戦つてくれない？

(やだ)

即答で断られたああああ!?

何故だ、何故拒むのだ!?

(だつて勝てる訳ないもん。あのひしひしと伝わる妖気で分かる。というか今すぐにも逃げる事をオススメするぞ)

いや、多分逃げても捕まる。てか絶対に捕まる。

(だろうな。ハハハ)

コイツ……、他人事みたいに……。

仕方ない。これは玉碎覚悟で頑張ろう。トホホ……。

遺書を書いておけば良かったかなあ？

そんな事を考えながら、意を決し幽香さんと合間見える。

「作戦会議は終わったかしら？」

「ええ、とりあえずは」

「で、作戦は立てたの？もちろん立てたわよね」

「いいえ。全く持って作戦が決まりませんでした」

キツパリと作戦が無いことを堂々と告げる。この潔さは、もはや清々しさを感ずる程だ。

「うふ、ふふふ……。やつぱりあなた、面白いわ」

「こちらとしては、まったくもって面白く無いのですよ幽香殿。」

「私相手に策も無しに立ち向かうなんて、そんな人間幻想郷にはいないわよ普通」

いや、好きで策も無しに立ち向かうとしてはいいんですけど……。まあどうでもいいか。

あくあ、クロガ代わってくれたらなあ〜！

（そう言うなって。代わりに少しお手伝いしてやるから）

そうですね。ありがとうございますクロ様。

はあ……。そろそろ真面目にやるか。何時までもイジイジしてはられないしな。

「準備はいいかしら？」

「いつでもどうぞ、と言いたいですが正直な所戦いたくないです」

「それはだめよ。さあ、観念してかかってきなさい」

ぐぬぬ……、ここまでできたら行くぞ。

日本男児の意地をみせちやるけんね〜！

「それじゃあいってきます！」

避ける事が出来ない果てしない激闘の予感に僕は、力強く拳を握り締めるのであった。

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

「本気の力の5割程度で約10分。結構もった方ね」

「はあ……はあ……」

「なかなかの成長ぶりね。褒めてあげるわ」

「はあ……ど、どうも……」

魔力で形成した刀を棒のように地面に着け肩で息をする僕とは対照的に、優雅に傘を振り回し余裕の笑みを見せる幽香さん。——やっぱりこの人バケモンだ。

全身が、擦り傷と切り傷でポロポロだがなんとか持ちこたえている。死んでないから

まだ大丈夫。

「さて、休憩は終わりよ」

ブンツ！顔面めがけて傘と思わしき物体が襲いかかる。それをなんとか躲す。

躲されて地面に衝突した傘は地面に大きな穴を残した。

もはやあれは傘ではないだろう。そう思わずにはいられない光景だ。

「くそっ！これなら——」

地面が穿たれた事で生まれたお手ごろサイズの土の塊複数を魔力の力、磁石の性質の応用で連結。

そして出来た土の鎖を幽香さんに巻き付け地面に釘付けにする。

この技は土壇場で思いついた割には結構使えるな。技名はそのまま、ストーンバインドと言ったところかな。

しかし土の鎖は幽香さんをほんの数秒拘束しておく程度が限界出たようで、見事にバラバラに断ち切られた。

「戦いの中で新しい技を考えつくなんて、なかなかやるわね」

「お褒めの言葉ありがとうございます。まあ、幽香さん相手には全然力不足でしたけどね」

「それもそうね。さあまだ戦いはこれからよ！」

嗚呼……まだ終わらないのかこの戦いは。早く終わって欲しいものだ。

渋々、全身に力を込めた刹那、とてつもない肺の痛みと咳が僕を襲った。

「ゲホッゲホッ！ゴホッ！ガハッゴホッ！」

幽香さんに殴られたのか？いや、そんなはずはない。

しかし、まったくもって咳が止まる気配がない。むしろ酷くなっていく一方だ。

「ゲホッ！ゴハッ！ガハッ！」

流石に何か様子がおかしいと思ったのか、幽香さんが急いで駆け寄ってきた。

「ちよつと、片倉。大丈夫？」

幽香さんに背中をさすられ、なんとか咳が治まった。

「え、ええ……」

大丈夫ですよと幽香さんに言おうとした時、口を覆っていた手にとんでもないものが付いていたのを見つけた。

「こ、これは……」

「あなた……」

血だ。手に血が付いていた。

何故？どこから？口からだよ……。てことは吐血した？咳き込んだごときで？

今の咳と肺の痛みといい、この吐血といい、流石に少しパニックを引き起こしそうに

なった。

「あ、ああ……!」

「落ち着きなさい片倉。とりあえず私の家に戻るわよ」

幽香さんに手を取られながら家へと急いで戻る。

握れたその手は、力強くそして暖かかった。

カップに注がれた紅茶をグビツと飲み、「ふう……」と深く溜息をつく。落ち着くなあ……。

「落ち着いたかしら?」

「はい……」

「それじゃあ、さっきの出来事について話しましょうか」

「そうですね……」

さっきの出来事、あの咳と吐血、これだけで己の身に何かしら宜しくない事が起こっているのは、嫌でも分かった。

「あなたも気づいてるようね。そう。恐らくあなたの体は今、芳しくない状態よ」「やっぱりそう思いますか?」

「当然よ。あんな尋常じやない咳き込み方、健康な人がする咳ではないわ」「僕の体、どうしたんですかね……」

「簡単に言うとおあれね、病魔と捉えるのが妥当じやないかしら。何か心当たりある?」

病魔、肺の痛み、咳き込み、これだけ来たら大体察しはつく。肺癌だろう恐らく。昔からタバコを吸ってたのが原因かな……。

「私としては早く医者に見せるべきだと思おうわよ」

「いや、この世界の医者じゃ治せない病気です。これは」

「そう……」

あつちの世界でもここまで来たら治すのはかなり難しいだろう。それほどのものを、この世界の医学力で治すなんてほぼ不可能だ。

「とにかく、この事を周りにどう伝えるかが問題ね」

周りに伝える、か……。

もう僕の命はそんなに長くはないって言ったら皆悲しむだろうな。

「言わない事にしておきます。皆を不安にさせたくはないので」

「そう。まあ、あなたがそれでいいのなら私は何も言わないわ。ただ……」

「ただ？」

「いつかは言わなくちゃいけない日が来ることは、しつかりと胸に刻んでおく事よ。いい？」

「はい。覚悟を決めたらいつか皆に話します」

そのいつかはいつの日になるのやら。少なくともまだ先の話だと信じたい。

「僕はあとどれくらい生きられるんでしょうかね……」

「さあ？ 私はそういう事は良く分からないわ。でも恐らく私としてはあと一年くらいだと推測するわ。あくまでも私の直感だけ」

一年、か……。まあ妥当なところだろう。

「はあ……」

紅茶を一口飲み、幽香さんが深い溜息をつく。

「なんだかすつかり冷めちゃったわねえ。せつかく楽しめる雰囲気だったのに」

「す、すいません」

「まったくよ。——そう言えば、あなた紅魔館で働いてたわよね？」

「はい、そうですが何か？」

「いいこと思いついたわ」

はて？ なんだろう、幽香さんのいい事が全然良くないことな気がしてままならない。

なんだろう、こう足元からぞわぞわとした何かを感じる。

「私を紅魔館に連れていきなさい」

……え？

紅魔館に連れてけと言われるなんて、考えてもなかったぞ。しかしまた、どうして紅魔館に？

紅魔館には面白いものなんて、美鈴の串刺しくらいしか思い当たらない。

大体、吸血鬼が居るって言われて、人里の人もあまり近寄りたがらない場所にどうしてわざわざ……。あそこにいる人はみんな鬼か悪魔の化身……つてもしや！

「駄目です。絶対につつ対に駄目です！」

「なんでよ。別にいいじゃない」

「どうせ紅魔館の人と戦おうかなと考えてるでしょ。幽香さん」

「うふふ、バレちゃったわ」

やっぱり……。そうとなると絶対に行かせるわけにはいかない。

幽香さんが紅魔館に来たら最後、レミリアさんやフランちゃんによる血にまみれた弾幕ごっこ（仮）が勃発する気がする。というか、もうその光景しか見えない。

よおし、ここは何がなんでも止めて——

「連れて行かないと、分かるわよね？」

瞬きする暇もなく、喉元に幽香さんの手刀が数ミリのところで止まっていた。速すぎだろ……。これが幽香さんの本気か？やべえ……。

「は、はい……」

ガタガタと震えながら、二つ返事で承諾する。というか承諾しないと死ぬ。絶対。さつき、何がなんでも止めてみせる、とか言わなかったかって？気のせいさ。

「ありがとう」

ニコツと笑顔で喉元の手刀をようやくやくどかす幽香さん。あー、窒息死するかと思つたわあ……。

「それじゃあ明日、紅魔館に行くことにするわ。宜しくね片倉」

はあ……、どうしていつも争いばかりの日々になるのだろうか。

深い深い溜息をつきながら、渋々「はい」と答えてしまう僕なのであった。

道場破りのフラワーマスター in 紅魔館

最近、というか前から思っていたのだが、僕は幽香さんの本気の戦いを見た事が無い。まあ、見たい気はあまりしないのだが……。

しかし仮に、仮にだ、本気で幽香さんが戦ったらどうなるのか、そのところは気になるところだ。

だが今日、もしかしたら幽香さんの本気が見れるかもしれないチャンスが訪れたのだ。

「ここが紅魔館ねえ……。なかなか大きいじゃない」

そう、この紅魔館の住人達なら、幽香さんの本気というのを引き出せるかもしれないのだ……。やっぱ引き出して欲しくないな。下手したら、巻き込まれそうでもない。

という訳で、幽香さんには出来るだけ自粛を促す注意を言ったのだが、当の本人は「心配しなくとも、程々にやるわ」と言っただけあまり聞いてくれない。——程々にやるんじゃないくて、やってほしくないのですよ幽香さん……。

正門には相変わらずの光景がそこにあった。美鈴が居眠りをしているのだ。

「おーい美鈴ー！」

「むにやむにや、だ、ダメですよ。私もう食べられませんが……むにやむにや」

お前はいつたいどんな夢を見てるんだ……。

それより、早く起きないとまずいと思うのだが。

刹那、サクツと美鈴の眉間にナイフがジャストミートした。

「ふにやあああああああ!?!」

頭を抑えながら地面にのたうち回る我らが紅魔館の番人。何と言うかコミカルな光景に見えてきたのは僕だけだろうか。

「まったく。今日はお客様が来るとお嬢様が言っておられたでしょ美鈴」

「あれ、そうでしたっけ?アハハ」

突如現れた咲夜さんに笑って返事する美鈴。まあ当然のことながら、咲夜さんの怒りを買うわけで、そのままナイフで刺された。

「うぐおとおおお!!」

「片倉様お帰りなさいませ」

「あつ、はい」

「そして隣に居られる方、幽香様ですね?」

「ええ。昨日少し自己紹介したわね」

ナイフで血だらけの人に目もくれず、淡々と話を進めていく僕等。

なんだろう、美鈴が可哀想に思えてきた。——後で治療してあげよう。いや、どうせすぐ治るか。タフが取り柄の人だから美鈴は。

「ところで、本日は紅魔館にどういったご用件で？」

「ちよつと暇だから戦いに来ただけよ」

ちよつ!?! 単刀直入にそんなことを言ったらマズイでしょ幽香さん!?!

「なるほど……。やはりお嬢様の言っていた事は当たっているようですね」

「レミリアさんが？ 何か言ってたんですか？」

「はい。今日、強い力を持った何者かが、この紅魔館に戦いをしに訪れると」

わあお。流石は運命を操るお方、こんな事になる運命を既に予測していたんですか

……。

というか普通そんな運命が見えたら、もっと対策とかとるのが基本じゃないの？ 現に門番は使い物にならないわけだし。

「じゃあここで私を追い返すのかしら？ それは困るわねえ。私、今とっても退屈してるのよ。」

やばいやばいやばい、幽香さんの目が笑ってない。戦闘モードの目をしてる……。

少しでも対応を誤れば、即殺されるパターンだぞこれ……。

「むしろ逆です。この紅魔館に貴方を招待させて頂く、とお嬢様が仰られておりました」

……へっ？招待するの？

これまた意外や意外、そそくさと追い返すのではなく、あえて紅魔館に招待するとは……。

「あらそうなの？ありがたいお誘いねフツ」

「どうやら争いは避けられそうだ。ホッと安堵の溜息をつく。が、しかし——
「ですがその前に、貴方が本当に実力者かどうかを、この私が試させて頂きます」

——あれ？

チャキツと何処から取り出したのかやら、たくさんのナイフを構え、戦闘態勢に入る
咲夜さん。

「まてまて、今の流れからすると普通はそんな話題にはならないはずでは……。」

「ね、ねえ幽香さん？」

「いいわよ。肩慣らしにはうってつけね。かかって来なさい」

「駄目だ……。この人やる気満々だよ……。この戦闘狂め！」

「こうなってしまうたら最後、どうあがいても止められないだろうと思ひ、諦めて傍観に徹することにした。」

「まあ、あのお二方の事だから大丈夫でしょう。多分……。」

「なんだか大変な事になってますねえ」

うんうんそうだねって、美鈴回復すんの速っ!?

「まあそれが私の取り柄ですから」

「そういやそうだったね。」

てかさ呑気に見てないで止めようよ!?!今まさに殺し合いが始まるかもしれないんだよ!?!

「そんなに心配しなくても、咲夜さんはかなり強いんですよ。なんて言っただって私を瞬殺する程なんですからね!」

美鈴を瞬殺!?それなら安心——な訳あるか!むしろ被害が悪化するのが目に見えるわ!

やばい、ここにいたら巻き込まれるのも時間の問題かも……。

そう思い、五メートル程度後ろに下がる。別に臆病と言われても構わない。だって死にたくないもん。

「そんなに下がらなくても大丈夫ですよ片倉さん」

「いやいや、大丈夫じゃないから。絶対危険だからそこ」

「そんな訳ないですって」

どんな事を言われても、僕は前には出ないからな!絶対出ないからな!!

一方その頃、咲夜さんと幽香さんは睨み合いを続けていた。

お互いに探り合いをしているのだろう。両者の眼差しは、真剣そのものだ。怖い……。

先に行動を起こしたのは咲夜さんだった。

右手にナイフを三本持つと、素早く一閃。目にも止まらぬ早さで、幽香さん目掛けてナイフを投げた。

三本一気に投げるとは大した技量だ。流星はメイド長、格がちがう。

しかし、幽香さんはこの攻撃を、躲す素振りを見せず堂々と受けにかかった。

傍からみたら躲す事が出来なかっただけに見えるだろうがそれは違う。

幽香さんにはこの行動は、相当の実力と度胸に裏打ちされた強者の余裕という行為なのだ。

目の前まで迫ってきた三本のナイフをあろう事か全て即座に打ち払った。一本目は傘で、二本目は振った傘の風圧で、三本目に至っては空いている右手で掴んでいる。しかも素手で。

この荒業に流星の咲夜さんも少し驚いていた。

ちなみに僕も驚いていた。というか呆れていた。なぜなら、

「な、ナイフがあああああ！」

幽香さんによつてはじき飛ばされたナイフが、二本とも美鈴の胴体に突き刺さる瞬間

を目の当たりにしたからだ。

ほら言わんこつちやない、やれやれと首を振る。——ちなみに気のせいかもしれないが、幽香さんがこつちを見てニヤニヤしていた気がする。もしかして狙ってた？ま、まっさか〜ハハハ……。

「流石のお手前です。さすがこれからですよ」

「いいわねえ、そそられるわ。さあどんどん来なさい」

アカン、幽香さんがだんだんとおかしい方向に走ってる気がする。まあ止めることはもはや不可能だが。

「イテテ……、やっぱりナイフは痛いですね」

当たり前な事を言いながら、美鈴が僕の居るところへと避難してきた。

「魔力のナイフなら痛くないかもよ？」

ブウン、と魔力でナイフを形成して美鈴に投げようとする。

「ハハハ、土下座するんで勘弁してください」

余裕の無い瞳で断る美鈴。よっぽどナイフが嫌いなんだなあ。嫌いになるほど刺されてるってことか……。

死んだ魚の目をした美鈴はとりあえず放っておく事にして、再びあの二人の戦いを見る。

「どうやら咲夜さんが近接勝負に持ち込んだようで、幽香さんがあの傘とかわしき何かを振り回しながら戦っている。」

「首を狙うと見せかけての胴体狙いのフェイント攻撃。ついでのナイフ投擲。その攻撃に対して傘でガードする。」

「何と言うか、ついていけません。はい。」

「速いし、重そうな一撃だし、投擲上手いし、目つき怖いし……。やっぱりあの二人は化物だよ絶対。」

「——接近戦はやはり不利ですか……。流石は幻想郷の中でも指折りの実力者とも言われているお方」

「あら？ そう言うあなただって、私のスピードについてこれてるじゃない。人間とは思えないわ」

「えっ!? 咲夜さんって人間なの!？」

「そうですよ。咲夜さんは元々人間ですよ。まあ身体能力は化物ですがね」

「嘘お!? そんなの初耳だよ! 聞いてないよ!」

「時を止めて尚且つナイフの扱いは達人級、果たしてこれを人と呼んでいいものなのか少し悩ましい……。」

「あつ、咲夜さんとうとう勝負に出るっぽいですよ!」

視線を移すと、咲夜さんの手元には一枚のカード、つまりスペルカードを使う気のようだ。

〈奇術 幻惑ミスディレクション〉

何処からともなく現れた大量のナイフが、幽香さんに目掛けてデタラメな軌道を描き飛んでいく。

デタラメに飛び、壁や地面に当たったナイフは、どういう原理か反射して余計に沢わらない軌道で飛んでいく。

おいおい、あんなのどうしようもないぞ。どうにかするとしたら対抗してスペルカードを使うぐらいしか……。

しかし幽香さんは笑顔を崩すことなくその場で仁王立ち状態で居る。——えっ？まさかスペルカード無しで攻略する気？

とうとうナイフの弾幕が幽香さんの目の前に迫った。いったいどうする気なのか。固唾をのんで見守る。

そして僕は、とてつもない光景を目にした。

幽香さんは真正面から来たナイフを持ち前の傘で一気にはじき飛ばしだした。それだけならまだしも、死角、つまり後ろから反射で飛んできたナイフをまさかの左腕を犠牲に、刺して対応していくという、なんとも脳筋荒業手段をしたのだ。

流石にこんな事されたら見ているこっちもたままったもんじやない。痛々しそうな感じで見える。

「うわあ……。あの人馬鹿なんですかね？ わざわざ望んで刺されに行ってるようなものでしょ」

うん、僕もそう思う。でも残念ながらあの人は馬鹿なだけじゃなくて、頭の中が戦いの事ではいっぱいな戦闘狂なんだ。

ようやくスペルカードが終わった頃には、幽香さんの左腕はハリネズミ状態、血まみれだった。——キヤアアアアア！ 良い子は見ちゃダメええええ！

「なぜわざわざ左腕を犠牲に？」

「こんなの怪我のうちにも入らないわ」

そういつた瞬間、沢山あった刺し傷が一瞬にして治った。

忘れていた。あの人の回復力は美鈴を遥かに上回る程あったことを。

「ほらね？」

そう言って、治った左腕を見せる幽香さん。しかし、血だらけなのがホラー過ぎてめっちゃ怖い。

「……降参です。スペルカードをこのような形で破られるとは、力の差が歴然ですね」

常人では考えがつかない方法で、あのスペルカードを攻略された咲夜さんは降参し

た。というか今の内に降参しておかないと、もつと大変な事が起きる気がしたんじやないか、と僕は思う。

「そう……。まあまあ楽しめたわ」

これだけの事をしといてまあまああって……。

と、とにかくだ、なんとかかこの戦いも無事に終わって良かった良かった。——精神は無事では済まないようなものを見たけどね……。

「さあ、あらためて紅魔館へと参りましょう」

「ああ……。次は誰と戦えるのかしらね」

幽香さんのこの一言で、僕の精神状況はより一層悪化した……。

「お嬢様、失礼致します。例の方を連れて参りました」

「おお、待っていたぞ」

重々しくそしてでかい扉を開けた先には、大きなテーブルと沢山の椅子が並ぶ部屋、いわゆる大広間にちよこんと一人の吸血鬼が居た。

「私がこの紅魔館の主、レミリア・スカーレットだ」

「風見幽香よ。まあ言わなくても分かるでしょうけどね」

「フツ、それもそうだな。とにかくまずは客人を丁重にもてなさねばな。どうぞ座つてくれ」

ウーーム、今日のレミリアさんは絶好調のようだ。カリスマが溢れてる。

各々が席に着いたところで、妖精メイド達が紅茶を運んできて、カップに注いでいく。ちなみにレミリアさんの紅茶を注ぐのは、もちろんのことだが咲夜さんだ。

ここの紅茶は幽香さん家の紅茶とはまた少し味が違うなあ。香りもこっちの方が高級感がある。

別に幽香さん家の紅茶が安物とか思つてませんよ？だからお願いですから、殺意を向けるの止めてください幽香さん。

「さてと、そろそろここに来た目的を果たそうかしら」

「まあ慌てる事はない風見幽香。その事について話がしたい」

「何かしら？今更戦うのは止めないわよ」

いや、止めましょうよ。落ち着いて紅茶飲みましょうよ。

「いやいや、戦うのは戦うさ。ただ、私ではないが」

「ふうん、じゃあ誰と私は戦えるのかしら？」

「私の妹の、フランと戦ってもらおう」

……へっ？フランちゃん？

「フラン！来てくれ」

えっ？という事は、幽香さんとフランちゃん戦うの？ヤバくないですか、それ。

「お兄ちゃあああああああん！」

んん？ドドドドドド！つと足音が段々と近付いてくる。——なんか嫌な予感がしてきた。

バンツ！と大広間の扉が勢いよく開けられる、もとい扉を思いつきり蹴破り一人の吸血鬼が入ってきた。

「久しぶり!!!」

ドゴスツ！フランちゃんの頭部が僕のお腹（完全に鳩尾狙い）にジャストミートした。

「へばぶっ!!」

そして勢いそのままに、壁へと叩きつけられた。

「ぐ、ぐはっ……」

こ、これさ……人、普通に死ぬよ……？

僕の場合、魔力を寸前に纏わせたから、ほんの少し威力を軽減させる事が出来たんですけどね。普通の人だったら、逝ってるよ？

「あつ！人里のフラワーマスターだ！」

「風見幽香よ。久しぶりね、可愛い吸血鬼さん？」

「ほう……、既に知り合いとは」

死にかけの僕を無視して、普通に会話し出したみんな。

何だか、美鈴の気持ち が理解出来た……気がする。

舞台は変わって紅魔館の広い庭園。正門付近はボロボロの状態だったから、ここにみんな移動したのだ。

「フラン。思いつきり暴れてきなさい」

「はーい、お姉さま！」

「それなら私も久々に本気だそうかしら」

「それだけは止めてください。ここら辺一帯が更地になりそうなんです」

まああくまで憶測なのだが。でもあながち間違っていないのだろうか。「分かったわ」と幽香さんは言った。——良かったア！良かったア！——良かったア！良かったア！

「それじゃあ、始め！」

美鈴のスタートによる合図で、フランちゃんVS幽香さんの弾幕ごっこ(デスマッチ)が始まった。

外の天気は幸いなのか生憎なのか曇りだ。晴れて欲しかった……。

ちなみに僕は三十メートル後ろに下がって傍観している。安全第一だよ安全第一。

美鈴は先ほどのナイフで教訓を得たようで、僕の隣で見ている。賢くなったね美鈴。やったね。

レミリアさんと言うと、さらに後ろの四十メートル付近で、椅子に座って観戦している。——ボソツと、流れ弾が怖いから私は後ろに行く、と聞こえたのは今でも幻聴であったと僕は信じていたい。

咲夜さんは無論当たり前だがレミリアの隣にいる。ただし、鼻にティッシュを詰め。——強がってるけど、本当は怖がりのお嬢様可愛い！と聞こえたのも幻聴だと僕は信じていたい。

合図と共に双方一気に詰め寄り、早速お得意の接近戦闘を始めた。——弾幕ごっこなのに弾幕一つ出ないのは如何なものか……。

幽香さんの武器は傘。対してフランちゃんの武器はと言うと、ご存知の通り炎の大剣

『レーヴァテイン』だ。

一振りでも刃りを焼き尽くすほどの威力を持つ大剣を、幽香さんは顔色変えずに躲し
り受け流したりしている。凄く熱そう……。てかここまで熱気が伝わってる。

「アハハッ！楽しいなあ！」

「うふふ、これからもっと面白くなるわよ！」

……こちらとしては、これ以上楽しくなられるのはとても困るのですが。

まあそんなことをあの二人に言おうものなら、即座に殺られるんで言いませんがね。
ハハハ……。

戦いが始まって十分は経っただろうか。未だにあの二人は弾幕一つすら飛ばさずに
格闘戦を楽しんでしている。

しかもこれが凶悪な事に、フランちゃんがスペルカードで分身した為に、四人のフラ
ンちゃん相手に幽香さんが戦っているという状態だ。

流石の幽香さんもこのジェットストリームアタックには耐えきれまい。——あれ
？あの技は三人組の技だったっけ？まあどうでもいいか。

この修羅場とも言える状況で幽香さんは……笑ってる。

どうしてそんな状況で笑えるのか不思議でならない。あの人の頭の中はどうなってるのだろうか。

「アハハ！タノシイナ！」

そしてフランちゃんに至っては、狂って笑い出す始末。もうあの二人をどうにかするなんて、神でも何でも不可能な気がする。

「なかなか楽しんでいるなフランのやつ」

「そうですね。妹様も久しぶりの弾幕ごっこで、はしゃいでおられるのですよきつと」

狂って笑っている光景を『楽しんでるな』と思えるあなた方の気持ちには分かりません。止めないんですか？

あと咲夜さん、あれは弾幕ごっこじゃなくて、殺し合いですよ誰がどう見ても。

とここで、フランちゃんがようやく大量の弾幕を飛ばし始めた。これに対抗し、幽香さんも緑色一色の弾幕の絨毯攻撃で対抗する。

ちよくちよく飛んでくる流れ玉をなんとか躲しつつ、二人の戦いを見守る僕ら二人。レミアさんは後ろで愉快地笑っていた。

「ハハハ、頑張つてよけているな」

誰のせいです、この戦いを仕向けたのは！

ああ！後ろに下がろう。痛い目にはあいたくない。

「下がるのか？」

「ええまあ……あつ」

「どうした？」

「そこ危ないですよ」

「なんだと？」

刹那、飛んできた赤色の弾幕がレミリアさんの顔面にヒットした。その姿はまるで昔の漫画のようだ。——赤色の弾幕だから、フランちゃんのだな多分。

「痛アアアアアア!?もう！何よ何よ何なのよ！」

しかしさすがは吸血鬼。あの威力の弾幕をくらっても平気のようだ。

「フランのバカ！バカ、バカ、バカアアアアア！」

「はう……、お嬢様……」

……訂正します。精神的には大ダメージのようです。

あと咲夜さん、鼻血止めましょうか。血だまり出来てますよ、出血多量で死にますよ？

何はともあれ、あの戦いがこれ以上ヒートアップしたら大変だぞ。特に幽香さんが心配だ。スペルカードを使ったらたまったもんじやない。

〈花符 幻想郷の開花〉

黄色と緑の色をした弾幕が煌びやかせながらフランちゃん目掛けて飛んでいく。その弾幕はまるで向日葵のようで美しく華やかだった。

だが、その光景に目を奪われていると痛い目に遭うのは確実。何故なら地面に衝突した弾幕は、人の頭の大きさの穴を穿ったからだ。

一つの弾幕の威力がこれなのだ。まともにくらえば、いくら吸血鬼といえどただでは済まされない。

その事を悟ったフランちゃんは、分身全員総出で弾き返したり逆に弾幕を放って相殺しだした。

まあ当たり前なのだが、弾かれた弾幕がこつちに飛んで来るわけで……

「ぎやあああああああ！」

「おつとつと、危ない危ない」

「咲夜アアアアアアア！助けてええ!!」

「お任せ下さいお嬢様……ブッ」

ちなみに言わなくても分かると思うが、美鈴、僕、レミリアさん、咲夜さんの順番だ。美鈴は見事に弾幕に襲われた。まあ持ち前のタフさで復活するから大丈夫だろう。

僕は前々からこの事は予見していたので、何とか避けられた。

問題はこの二人組だ。レミリアさんは咲夜さんの後ろで怯えている。——はて？
いつものカリスマは何処へ？

咲夜さんは、弾幕を全てナイフで相殺しているものの、鼻血の量がエライことになっている。——あつ、きつそう。恐らく貧血ですね。でも幸せそうな顔をしている辺り、まだ大丈夫だろう。

何とか飛んでくる流れ玉を躲しつつ、二人の方を見る。すると、幽香さんが一瞬消えた。かと思つたら、いつの間にかフランちゃんの後ろに移動していた。——「ただけ移動速度速いんだよ……。僕全然見えなかったぞ……。」

スペルカードに気を取られていたフランちゃんの間隙を突いた幽香さんは、思いつきでフランちゃんを殴った。が、しかし、逆に幽香さんの方が殴られた。

「っ!？」

「オソイヨ、アハハ！」

突然殴られ体制を崩した幽香さんに、フランちゃんが、追いつきを掛ける。レーヴァテインで斬りかかったのだ。

流石にその攻撃はバツチり決まらなかったものの、幽香さんの左腕に深い火傷を負わせることは成功したようだ。軽く顔を歪めている。

「チツ、読まれてたわけね」

どうやら不意を突く攻撃は読まれていたようで、おかげで返り討ちにあったらしい。やはり、フランちゃんも強いなあ……。

しかし、これが不味かった。そう、幽香さんが……

「やってくれたわね……。来なさいよ、吸血鬼。フラワーマスターの本気を見せてやるわ」

本気を出し始めた!? やばい! ここ一面が焦土と化すぞ!?

だが、時すでに遅し。幽香さんが莫大な妖力を開放した。

「ぎやああああああ!!!」

「ちよっ! 危なっ!」

「咲夜アアアア! いやああああ!」

「お嬢様! ブフツ、パンツが……」

風圧と衝撃で吹き飛ばされていく僕ら四人組。

美鈴は土まみれでぐったりと気絶中。僕に至っては、咄嗟に出した魔法鎧が粉々に……死ぬかと思つた。

レミリアさんは、半泣き。咲夜さんは、貧血ですね。地面に倒れている。しかし、顔は幸せ（ry

幽香さんを中心に、大きな穴が地面に出来ている。——あなたは何処の戦闘民族で

すか？こんな事、普通は出来ませんよ？

しかしあれほどの衝撃でも、フランちゃんは相変わらず狂って笑っている。が、油断は一切していない。

〈禁忌 クランベリートラップ〉

周囲に漂う固定弾幕と、幽香さんを狙う追尾弾幕が一気に展開された。それも、大量に。

固定弾幕のせいで回避が困難な状態。故に幽香さんはスペルカードを取り出した。傘を正面に構えたポーズで。

んっ、あの構えどっかで……。ハッ!?まさか!?

「まずい！みんな退避してください！」

「「えっ?」」

何故急に退避しろと言われたのか分からず、首をかしげる皆。ああ、間に合わない……。

〈元祖 マスタースパーク〉

何もかもを飲み込み破壊し尽くさんとする勢いで、とてつもなく大きな光線が傘の先端からフランちゃん目掛けて飛ばされる。

光線はただ目標に向かって飛ぶだけでは飽き足らず、衝撃波を辺りにまき散らしなが

ら飛んでいく。そのせいで、僕らはさらに吹き飛ばされていった。——もう、めっちゃくちや過ぎるでしょこれ……。

フランちゃんは光線に飲み込まれる寸前で何とかレーヴァティンを使い拮抗していたが、あまりの力に一瞬で飲み込まれた。

だがそこに最悪な展開というのが待っていた。

フランちゃんの背後にあつたのは、まさかの紅魔館。

……そう、あの膨大な大きさの光線が紅魔館を見事に半壊させたのだ。これには、みんな啞然としていた。

うわあ……えげつない光景だあ……。

「ふう……。吸血鬼には少々派手すぎたかしら？」

派手も何もやりすぎです……。コブラですかあなたは。

この日僕は思い知った。「フラワーマスター」にはこれ以降戦わせてはいけない事を。半壊の館を前に僕らは立ち尽くしかないのであった。——あれ？今日の寝床どう

しよっ。

永遠亭編

偽りの月と永遠の夜 第1話

ここは、とある竹林に建っている和風の屋敷。

この屋敷の名は永遠亭。

その永林亭の一室に、一人の女性が座つて黙々と何か薬らしきものを調合していた。

「師匠、失礼します」

突然、沈黙を破るかのごとく魅が開き、一人のうさ耳の少女が部屋に入ってきた。

「あら？何か用かしら鈴仙」

「例の件ですが、準備が出来ました」

「そう、分かったわ」

端的に事を伝えた鈴仙と呼ばれる少女はすぐに部屋から退出した。

「——そろそろ始めようかしらね。姫の為にも、これだけは……」

先程までしていた薬の調合作業をサツと中断した女性は月を見上げ呟いた。

「一日、果たして守りきれるかしら。……いや、守ってみせるのよ」

その顔は、とても固い決意が現れているようだった。

せわしなく響く包丁の音、そして……そして……、

「片倉さん！まだ〜？」

そして、食いしん坊の質問もとい叫び声。これで五回目の叫びだ。

「後少しですから待ってて下さい!!」

「は〜い」

ただいま僕は白玉楼の料理人として絶賛働き中だ。なぜかって？全てはあの悪魔のせいさ。

昨日のあの戦いで半壊した紅魔館は今修復中なのだ。その間、寝泊りができないから何処かに行っておけ、とレミアアさんに言われたので白玉楼に住み込みで居る。

幽香さんがあの時あんな技を打ち込まなければこんな事には……。ちなみに幽香さん、紅魔館の修復の手伝いしてるよ。自業自得だね、ハハハ！

「片倉さん焦げますよ」

「やべっ！」

危うく焦げそうになった鮭を裏返す。危ない危ない。

「まったく、しっかりして下さい」

「申し訳ない……」

そんなやりとりをしている内に鮭が焼けあがった。いい狐色だ、美味しそう。

「お皿用意してくれ妖夢」

「分かりました」

しかし未だにこの呼び方は慣れないなあ……。

あの妖夢に嫌われ事件以来から、本人に呼び捨てで呼んでくれと言われたので妖夢と呼んでいるのだが、まったくもって慣れない。

本当は妖夢よりも魂魄さんって呼ぶのが僕的にはいいのだが、いかんせんそんな呼び方したら怒られてしまう気がしてままならない。

「用意しましたよ」

「んっ？あつ、ありがとう」

うん。呼び方については深くは考えないどころ。あつちがそう呼んでくれて言ってるしね。

「ご馳走様でした。美味しくかったわ」

「それはどうも」

「やっぱりあなたの作る料理は最高ね」

「アハハ、そうですね？」

それは多分気のせいだろう、と心の中で軽く突っ込んでみる。

でもあれだな、この人今更だけど凄いわ。さつきまであった四人前の料理を全部一人でペろりとたいらげるんだもん。化物級だよ胃袋が。鮭の塩焼き、鶏の唐揚げ、野菜炒め、その他諸々、挙げだしたらキリがないほどの量を……。おそるべし食いしん坊。

それよりももつとすごいのが、この人の食事関係を一人でこなしちゃう妖夢だ。もうこれは家事の度合いではなくなってるぞ。ちよつとした食事処だろ。

もちろん僕も住み込みで居る手前、ここで色んな妖夢の家事をお手伝いしている。

掃除、洗濯、料理、とにかく色々だ色々。その中でも一番大変な仕事がある。それは、暇ね〜。片倉さん遊ばない?」

この人の世話係と言う仕事だ。

嫌です。お断りします。遠慮します」

「ちえつ、ケチな人」

「食いしん坊の幽々子さんには言われたくありません」

「食いしん坊で〜す!」

まったく疲れる。この人とのやり取りは。

別に嫌いとかではないのだが、ああ言ったらこう言う人だから正直面倒くさい。いや、嫌いではないよ？

あく早く妖夢帰ってこないかなあ。この人の世話係はどんな仕事よりも過酷だよお……。

「幽々子さまー！ー！」

おっ！帰ってきた！助かった！

しかし何故妖夢はダツシユでこつちに来てるんだ？そんなに急ぐ事は無かろうに。

「幽々子様！幽々子様！幽々子様！」

「なぐに、妖夢？どうしたの」

「大変です！大変な事に！」

「何が大変なの？」

「月が！月が違うんです」

月が違う？どういう事？

幽々子さんと一緒に外へ出て月を見てみる。

「何も無い普通の満月じゃん。そう思いませんか？幽々子さん」

笑いながら幽々子さんの方を見てみると、幽々子さんは今までには見たことが無いほどの真剣な顔になっていた。

「幽々子、さん？」

「これはまずいわね。非常に良くないわ」

え〜？どういう事なの〜？妖夢といい幽々子さんといい、あの月がどうかしたのか？

その時「片倉様」と聞きなれた声が出た。この声は……

「咲夜さん!?!どうしてここに?」

「あつ、そう言えば片倉さんにお客様が来てる事を言うのを忘れてました」

いや、忘れるなよ……。というか、どうしてここに?」

「片倉様大変です。お嬢様と妹様が倒れました」

「倒れた!?!なんで!?!」

「お気づきではないのですか?全てはあの月のせいでございます」

ぬう……、咲夜さんも月の事を言いますか。もう訳わかんないよ。我、誰かの説明を

求む。

頭の上にはてなが沢山浮かんでいる僕に咲夜さんが説明をしてくれた。

「どうやら月の役割というのをご存知無いようですね」

「ええ、まったく分かりません」

「月というのは実は妖怪には無くてはならない存在なのです」

へえ、そうなんだ……。なんで?

すると次は幽々子さんが説明を始めた。

「月にはある種の力が放出されてるのよ」

「ある種の力……。それはどう言ったものですか幽々子さん？」

「うーん……。強いて言うなら妖力やら生命力みたいなものかしら？ まあ、私にはよくは分からないわ」

分からないのかよ!? でもある程度は分かってきたぞ。

要するに月は妖怪に必要な力が放たれていて、その力を妖怪が取り入れることで日々を生きている。そういう解釈でいいのかな？

「だとしたら、幽々子さんと妖夢は不味いんじゃないの？ 月からの力が無いんだし……」

「いえ、私の場合は半人半霊なので問題はないです」

あつ、そうなの？ よかったよかった。

じゃあ幽々子さんの方は？ あの人は半人半霊じゃないから駄目でしょ。

「私は力を蓄えてるから問題ないわ。今はまだ、だけどね」

「と言うことは、このままいくと倒れてしまうということですか？」

「そうなるわね」

呑気にそう答えながら、何処から持ってきたのやら饅頭を口の中に放り込む幽々子さん。

うーむ、これはまいったなあ……。このままだと幻想郷中の妖怪が死ぬかもしれないな。どうしたものか。

「まあ、これだけの騒動になったからにはあの二人が何とかするでしょうし、大丈夫よ多分」

あの二人と言うと、霊夢と魔理沙の事か。確かにあの二人なら問題ないだろう。うん。

でもなあ……。レミリアさんとフランちゃんが倒れたのを聞いたからには、僕としては何かしら動かないと気が済まない。

「どうしたの？ 紅魔館の吸血鬼姉妹が気になるのかしら？」

「ええまあ気になりますね」

「なら行くといいわ。夕食の時間には帰ってくれば私としては問題ないし」

「そう言う事ではなくて、僕も何かしら動きたいなと思ひまして……」

「自ら問題ごとに首を突っ込むなんて、あなた中々の度胸ね。大したものだわ」

「いやいや、ただあの二人が倒れて苦しんでると考えているとなんだか……。あれなもんで」

あれなもんでって言うのもあれだが、いい感じに言えそうもなかったのでこの表現にしておこう。

すると、幽々子さんが何かを思いついたらしく、手元の扇子をバツと開いて、ある提案をした。

「それなら解決してきなさいな。悩んだなら即行動よ！」

「は、はあ……。でもいいんですか？」

「いいのいいの。それと妖夢も連れていつてあげて。あの子の成長つぷりを確かめるいい機会だし。いいわよね妖夢？」

「はい、分かりました幽々子様」

それだと余計にまずい気もするが……。まあいいか。——よし、早速準備するか。

「それならば私もお供致しますが」

「あー……。咲夜さんは倒れた二人の看病をしてあげて下さい。その方があの二人にとってもいいと思うんで」

「……分かりました。くれぐれもお気をつけくださいね」

そう言い残すと、サツと消えた咲夜さんは。恐らく時間停止能力だろう。

だがあの時、若干咲夜さんの顔に笑顔があったのを僕は見逃さなかった。——レミアさんのそばにいるのがあの人にとっての幸せなのかもしれない。

そろそろ行こうかなと思ったその時、幽々子さんが近づいて来た。んっ？どうしたのかな？

「一つだけ忠告よ。無理はしない事ね」

「は、はあ……」

「あなた、気づいてるかもしれないけど、死期が近いわ、それもとつてもなっ!? バレた!?!」

「その様子だと気づいてたわね」

「は、はい……。でもどうして分かったんですか? 誰にもバレないようにしてたのに」
「私の能力は死を操る能力よ。人様の死期くらいすぐに分かるわ」

ひえええ……怖すぎでしょそれ。

「心配しなくても、誰にも言わないわよ。ただいつかは皆には言う羽目になるでしょうが」

「ですよね〜」

「まあ、あなたがもし死んだら、ここで匿ってあげるから安心しなさいな」
「ハハハ、そりやどうも」

そうはなりたくないけど、多分そうなるんだろうな……。

「片倉さん! 行きますよー!」

遠くで妖夢が呼ぶ声が聞こえてきた。はいはい、今行きますよーつと。

「それじゃ、解決しに行ってくださいませね」

「行つてきます幽々子様！」

「はい、気をつけてー。夕飯までには帰ってきてね〜」

それは無理だろ!?! 思いつきりツツコミを入れる。——心の中でね。

「ところで解決と言つても、どうするんですか?」

そうか。妖夢は異変解決は初めてか。この場合は魔理沙に乗っ取つて……

「うーん……最初は情報集めからだね」

「なるほど。でも、何処に行くんですか? 幻想郷は広いですよ?」

フツフツフツ……安心したまえ妖夢君。こんな時にこそあの人の元へ行くのがいいのだよ!

不敵な笑みを浮かべつつ、僕と妖夢の二人組はあの人の元へと向かったのであった。

「あの人が誰ですか?」

それは次の回のお楽しみですよ? 妖夢さん?

偽りの月と永遠の夜 第2話

片倉と妖夢がまだ月の異変に気づく前、博麗神社で霊夢と魔理沙は縁側でのんびりとお茶をすすっていた。

「平和だな」

「何言ってるのよ、平和が一番に決まってるじゃない」

「はっ、ジジイみたいな事言うなよ霊夢」

「悪かったわねジジイみたいで」

「霊夢がジジイなら私はババアか、ハハハ嫌だなあ」

「そう？ あんたのババア姿、意外とお似合だと思っわよ」

「失礼だな!？」

このところ異変や妖怪退治の依頼も無く、とても呑気なこの二人組。しかしこの二人こそが、幻想郷の異変解決人だとは知る由もないだろう。

そんなのんびりでゆったりだったりまったりな空気の中で、霊夢が唐突に大きなため息をついた。

ため息にも二種類ある。一つが、幸せなため息。もう一つが、嫌な出来事に対する嫌

悪なため息。霊夢のため息は後者のため息であった。

「はあ……。まったく嫌になってくるわ。よりによってこのタイミング……」

「ん〜？どうしたんだ霊夢？」

嫌悪感に心満たされた不機嫌な霊夢に、何のこっちや分からない魔理沙が質問する。

「月を見なさい」

「つき〜」

言われるがままに空を見上げ輝く月を見る。雲が一切無く今宵の月は美しかった。

「綺麗だなあ……。これは満月か？」

作り物のように綺麗な月を見て感動する魔理沙。その魔理沙の反応に対して、霊夢の

不機嫌度はより高まっていく。

「あんたねえ……。あの月見て何か感じないの？足りないでしょ、どっからどう見ても」

「足りない……。足りない……。あつ！」

「分かった？」

「兎が餅をついてない!!」

ガタタツ！と縁側からずっこける霊夢。その滑稽な光景はまるで何処ぞの新喜劇の

よう。それを見て魔理沙は腹を抱えて笑った。

「あ、あんた……。殴っていい？」

「ワハハハハ！悪かった、悪かったから怒るなって」

「で、本当のところはどうなのよ？」

「勿論気づいてるぜ。ありや偽物だな、力を感じない」

「よりによつて月をすり替えるなんて、何処のどいつよ。おかげでこっちは大変な事になつちやうじゃない」

「なんで大変な事になるんだ？」

「本物の月がないと幻想郷中の妖怪が死ぬのよ？これはれっきとした異変ね……ツチ、めんどくさい……」

イライラして舌打ちをしながらも、ときばきと外へ出るための身支度を始める。ここら辺の手際の良さは、流星は数々の異変を解決してきた巫女である、と魔理沙は感心していた。

「ほら、あんたもボサツとしてないで早く準備しなさい」

霊夢に言われ、魔理沙もせつせと準備を始める。とは言つても残つた茶菓子とお茶を口に放り込むだけなのだ。

「よっしゃ！行くか……でも何処に行けばいいんだ？」

「そんなもん勘で突き進むに決まつてるでしょうが。さあ行くわよ」

相変わらず、勘だけを頼りにする困つた巫女だ、と心の中で首を振る魔理沙だが、こ

の勘こそが彼女の強さでもある。

こうして二人は、夜の幻想郷へと飛び立っていった。

「片倉さん、本当にこの道であつてるんですか?」

「あー、うん、多分あつてると思う。多分」

「そうですか……。 (絶対あつてないな……)」

鬱蒼と茂る木々が広がる森の中に僕と妖夢は居た。例のあの人の元へ訪ねるためだ。てかこの道だっただけか? さっぱり分からん。どうしてこの森の中に家を建てたかなああの人は。

「片倉さん……あつてるんですか?」

何回目の質問だろうか。ため息をつきながら妖夢が聞いてくる。もう覚えてないって言おうかな? いや、それだと僕としては格好がつかない……。

「大丈夫、多分……おっ!」

「どうしたんですか?」

「キターーーーーー!!!」

森の中には似つかわしくない、色鮮やかな一軒家を見つけた僕は思わず叫んでしまっ

た。

突然発狂しだした僕を訝しげな表情で妖夢が見つめる。

そんな視線を気に求めず、意気揚々とステップしながらその家のドアに向かってノックをする。

コンコン、しばらく待っているとガチャリとドアが開き、この家の住人が姿を現した。

「はい、どちら様って、片倉じゃない」

「どうもアリスさん」

そう、例のあの人とはアリスのことだ。

どうやらもうすぐ寢床につく予定だったのか、いつもの服装ではなく寢間着であった。

「それと……、あなたは白玉楼の……」

「はい、白玉楼で庭師をしている、魂魄妖夢です」

「そうそう、宴会の時に見たわね。で、どうして私の家に来たのかしら？」

「ちよつと尋ねたいことがあります……」

「そう……、とりあえず家に上がりなさい。紅茶くらいなら出すわよ」

「それではお言葉に甘えて」

家に入ると、急な来客にも関わらず既に三人分の紅茶と菓子が用意されていた。――

「恐らく人形が準備してくれたのだろう。流石はアリスだ。

眠気を押し込みながらアリスが椅子に座る。「どうぞ」と言われたので、僕らも続いて腰を落ち着けた。

「さて、尋ねたいことは何かしら?」

紅茶を飲んで喉を潤した僕は、ここに来た理由を答えた。ちなみに妖夢は勝手に動く人形が気になる様子。ずっと人形とにらめっこしている。

「今、異変が起こってるのは知ってます?」

「ええまあ、あの月のことよね。さつき知ったんだけど」

「ご存知でしたか。それじゃ単刀直入に聞きます。この異変について何か知りませんか? 例えば犯人とか原因とか……」

紅魔館や白玉楼の異変で色々と情報を提供してくれたはずだから、何かしら知っているだろうと思った。が、期待とは裏腹に、アリスから返ってきた言葉は残念な返事だった。

「ああ……、残念だけど今回の異変については何もわからないわ」

「そうですか……」

むう……、何もわからないか……。また振り出しからか。

少し残念な気持ちになりながら、紅茶を飲み干す。妖夢は、にらめっここの次はじゃん

けんしてる。どんだけ人形が気になるんだよ……。

何も情報がないと知るや否や、ここに居ても時間の無駄だと悟り、外へと出ようとする。そんな僕に、アリスが気になる一言を喋った。

「人里に行きなさい。そこに居る、上白沢慧音と言う人に事の情報を聞くといいと思うわ」

「その人なら何か知ってるんですか？」

「断定は出来ないけど、恐らくは何かしらの情報を知ってるはずだわ。少なからず私よりは物知りな妖怪よ」

妖怪なのか……。とにかく行って訪ねてみるか。

「分かりました。ありがとうございます」

「気をつけるのよ。あんたはただでさえトラブルに巻き込まれやすい奴なんだから」

「ハハハご冗談を」

「そうかしら？ 紅魔館といい、白玉楼といい、全部の異変に首を突っ込んでるじゃないのあなた」

ぐぬぬ……。確かに言われてみればそうだった。

でも、好きで首を突っ込んでるわけじゃないんですよ？ 好きでね？

「まあ……。死なない程度で頑張ります」

「そう、まあ頑張りなさい。死なれたら目覚めが悪いわ」

フツ、と微笑んだアリス。そんなアリスに見送られ外へと出る。勿論、人形と遊んでいた妖夢と一緒に。

「あつ！そうそう、アリスさん今何時くらいですか？」

「今？そうね……、もう12時過ぎてるわね」

「もうそんな時間ですか……」

アリスに時間を聞いて深く考え込み出した僕に、妖夢とアリスはどうしたのかと首をかしげていた。

「どうしたのよあなた。何か気になることでも？」

「ええ。一つだけ……」

「それは何ですか？気になります！」

「いや、さつきから月が……」

「月が？」

「いっこうに動いてない気がするんだよね……」

「えっ？」

二人の驚きにも似たやや気の抜けた声が夜の森に響いた。

「なあー霊夢ー！」

「なによう？」

偽物の月とはいえど月本来の輝きは本物同様のようで、その光に照らされ幻想的な夜の森の上空を魔理沙と霊夢の二人は駆け抜けるように飛んでいた。

「さつきから思ってたんだけど、月動いてないよな？」

「はあ？」

あるはずのない事を言い出した魔理沙を訝しげな表情で見ながらも、とりあえず月の位置を確認する。

月を見た霊夢は眉をひそめた。どうやら魔理沙の言った事は本当だったらしい。

そして、何故月が動いていないのかを悟り、それでもつていつたい誰がそうしたのか霊夢は勘づいた。

「……紫がやったわね」

「紫が？ いったいどうして——」

「簡単よ。時間が経てば月は消えて太陽が出てくる、それを止めたのよ。私達が異変を解決するのが遅くてもいいようにね」

霊夢の憶測に魔理沙は両手をポンツと叩き、満足げな表情で閃いた。

「おおつまり、月が無いと本物と偽物が交換できないからそうしたわけだ。これならいくら時間をかけてもすぐに月を交換出来る」

「まあ恐らくはそう言う事ね」

月が動かない理由を説明させた二人は、それ以後雑談などをすることなく飛ぶ速度を速めていった。

「紫様、月の件ですが無事に終わりました」

「ご苦労さま藍」

淡い光に包まれた暗闇に二人の女性がそこに居た。そこは誰も知らないごく限られたものが入る事が出来る、いわゆる隙間と呼ばれる空間。

そんな空間に、紫と藍と言う女性が暗闇に浮かぶ無数の目のような隙間を見ていた。まるで、幻想郷全体を見渡し監視するかの如く。

「しかし良かったのですか？」

「いいのよ。保険のつもりで時の流れを止めただけだから。この異変が終わったら元に戻すわ」

「かしこまりました。紫様の仰せの通りに」

「ところで藍、あの二人以外に変わった奴とか動きはないかしら？まあ、無いと思うけど——」

「あります」

あまりの即答に少し驚きつつも笑みを崩さずに「あらそう？」と口元に扇子を持つていった紫。

その姿を見ながら、藍は淡々と説明を始めた。

「例の外来人が白玉楼の庭師と共に異変の調査をしているようです。今は人形使いの家に居るようです」

「そう……」

「どうされますか？」

「そうね……、特に何もしなくてもいいわ。二人の邪魔さえしなければいいんだし」

パシッと扇子を閉じる紫。

一応の報告が終わった藍はまた情報収集の仕事に戻るらしく「それでは」と言い残し、すぐに何処かへと消えていった。

そうして残された紫は改めて、暗闇に浮かぶ一つの隙間を覗き込む。そこに移されていたのは、片倉と妖夢の姿だった。

「さて、今回はどう動くのかしら？期待してるわよ、八雲の名を継ぐものとして……」

アリスの家からだいぶ離れた所、僕と妖夢は人里へと向かう道歩いていた。すると、唐突に背中に寒気が走った。あとついでにくしやみもでた。

「ハックション!!……誰か噂してる?」

「誰もしてないと思いますよ」

「そうですか……。」

少ししよんぼりしつつ、人里へと向かうのであった。

偽りの月と永遠の夜 第3話

夜の時間帯であるせいか、人里には人の姿は全く無かった。あるとしたら見張りの姿くらいか。

まあ、その見張りの人も若干、というかがつつり寝てたけど。

なんだろう、何処その門番を思い出したのは気のせいかな。

「上白沢慧音って人、何処に居るか分かる妖夢？」

「いや、私に聞かれても……」

「ですよね〜」

うん、だと思つたよ。

「ですが夜は人里の見回りをしている事は知ってます」

「知ってるじゃん!？」

「今頃は、そうですね……竹林の近くに居ると思います」

「何でそんなに詳しいのかい？」

「あくまでも話を聞いただけです。信頼するにはあまり値しないと思いましたが、何も情報がないよりはマシだと思ひまして」

「さいですか、それは有難い」

とにかく、妖夢の言うその竹林の近くに行ってみようじゃないの。

でも待てよ。竹林って何処にあるんだ……？

だ、誰か地図下さい。

「竹林はこっちですよ。早く行きましょう」

「あつ、はい」

これは大人しく妖夢に従った方がいいだろう。そう思った僕は、妖夢の後について行って竹林へと向かった。

てか、妖夢って結構人里の事詳しいのね。僕、びつくりしちやったよ。

竹林と堂々と書かれていた看板を通り過ぎ、人里の南門の近くまで来た。

ここまで来るとあるのは民家ではなく、物置小屋や貧相な小屋くらいだ。やったね片倉ちゃん、人里についての知識が増えたよ！

「おい馬鹿やめろ！」

「はい?!」

「いや、気にしないで……」

「そうですか。それよりも、竹林の入口に着きましたよ」

いや、言われなくとも分かるから。看板に書いてあったから堂々と。

「さてと、何処に居るかな」

正直人探しは苦手なんだよなあ……んっ？

「妖夢!!」

「はい?」

突然の僕の怒号に少し驚く妖夢。

しかし、すぐさまなぜ僕が怒号を飛ばしたのか、その意図を知ることとなった。

僕と妖夢の目の前に、巨大な火の鳥が迫ってきていた。

紅魔館では倒れたレミリアとフランのお世話の為に、咲夜は頑張っていた。

「お嬢様、気分はよろしいですか?」

「さくや……」

きつそうに身体を起こそうとする主人を、慌てて止める咲夜。

「あまり無理をされては……」

「いや、大丈夫。それより片倉は何処?」

「片倉様なら、お嬢様達を助けるために異変の解決へ行かれました」
「……しまったわ。まずいわね」

苦虫を潰したような表情をするレミリア。

「どうされたのですか？」

「いや、ちよつと片倉の事で一つ気がかりな事があるのよ」

「気がかりな事？」

「ええ、もしかしたらこのまま行くと、片倉は死ぬかもしれないわ」

「片倉様が死ぬのですか!？」

「まだ死ぬとは決まってるわ。未来というのは不確定なものだからなんとも言えないけど、可能性が高いわ」

「そんな……」

心配そうな顔をする咲夜にレミリアはフツと微笑んだ。

「まあ、そんなに心配しなくても、片倉ならきつと大丈夫よ。意外とタフな男だし」

「そうですね……」

「それじゃあ私はまた寝るわ」

「はい」

また眠りについたレミリアを見ながら、咲夜は片倉の無事を祈るのであった。

「チョツ、何だよあれえええ!」

迫り来る大きな火で創られた鳥、火の鳥を見て驚く僕。

「ここは私に任せてください」

「すまん、頼んだ!」

そそくさとその場から離れて妖夢に後を任せる。格好悪い? ハハツ、今に始まったことじゃないさ。

妖夢は背中に携えてある二本の刀のうちの一本を抜いて、中段で構える。

刹那、燃え盛る火の鳥が縦方向に真つ二つに一刀両断され、霧のように蒸発して消えた。

「なんだったんだ? 妖怪の攻撃か?」

「いえ、どうやら違うようですよ」

まだ霧の余韻が残る中、竹林の奥の方から誰かが近づいてきた。

その誰かは、どうやら女のようにだ。

来ている服は……モンペ……かな? よくは知らん。

髪の色は透き通るような銀髪。

しかし、その目や表情はキリリとしており、とても力強い印象を抱かせた。

「こんな時にほつつき歩いてるから、どこの妖怪かと思つて攻撃したんだが、人間かよ」
「何者ですかあなた？」

「お前からこそ誰だよ。あんな攻撃を軽々しく打ち消した人間なんて、そこらには居ねえぞ」

「これは失礼、僕は片倉と言います。そしてこつちは妖夢。ところで、さっきの攻撃はあなたか？」

「ああそうだ。私がやった。ちなみに私は藤原妹紅だ。妹紅でいいぞ」

「では妹紅さん、何故そのような事をしたのですか？」

チャキツ、と右手に握られた刀をちらつかせつつ、威圧的な感じで問う妖夢。――
怖いんですけど……。特に目が。

「何故？ 妖怪かなつて思っただけだよ。ところでお前ら、こんな時にこんな所で何してるんだ？ 早く帰った方がいいぞ」

「いや、僕たちは今、上白沢慧音っていう人を探してまして……」

「慧音？ なんで慧音を探してるんだ？」

「今起こってる月の異変について聞きたくて……」

「なるほどな」

どうやら妹紅と言う人は、その上白沢慧音って人を知っているようだ。よしよし、これでまた一步異変解決に近づいたぞ。

「そんなら尚更こっから立ち去ってくれ」

「ふえ？ど、どうして？」

「今、慧音はとつても忙しいんだよ。大事な仕事の真つ最中だ。だからとつとと帰りな」

「少しだけ！少しだけでいいですから!!」

「駄目なものは駄目だ！早く帰れ！」

「お願いします妹紅さん！どうしても聞きたいんです！」

「だああああああ！あんまりしつこいなら、力づくでも帰らせるぞ！」

「構いませんよ、そんなことで引き下がる気は到底ないので」

「そうだ、レミリアさんやフランちゃんの為にも、こんな所で諦めるわけにはいかないのだ。」

「つたく、面倒くさい奴だな。ほらよっ！」

妹紅が手を横に一閃する。途端に妹紅の背後から先程の火の鳥が2体現れ、僕らに向かって突撃してきた。

「片倉さん、右はお任せします」

「分かった」

腰に着けているホルスターから、FN57ハンドガンを抜いて構え、迫り来る火の鳥に向けて撃ちこむ。

FN57から放たれた5.7mmの小口径高速弾が火の鳥の右翼を穿つ。

右翼を失いバランスを崩した火の鳥、その隙を逃さず続けざまに3発撃ちこむ。

右翼に引き続き左翼も失い最終的には頭さえも失った火の鳥は、音もなくパツと霧になり蒸発した。

妖夢の方も当たり前だが倒した様だ。

「どうやら腕はそこそこあるようだ、な、つて……え？」

「あっ……」

戦場で毎日のように戦って、尚且つこの世界で嫌と言うほど強い人達にしごかれていたせいで、戦闘モードに頭が切り替わると味方以外で動くモノは全て敵だと認識してしまふ。僕の身体はそう出来ている。てか、出来てしまった。

火の鳥を倒してすっかり戦闘モードになった僕は、次なる手を打とうと動こうとした妹紅を、反射的に撃ってしまった。

つまり、あれだ……殺つちやつたぜ☆

「ギヤアアアアアア！ やつちまつたああアあ！」

「ちよつ、何をしてるんですか片倉さん！ せっかくの手がかりを……」

「いやこれはだね、条件反射というか、不可抗力というか」

「はあ……、まったく……」

「テヘツ☆」

「斬りますよ?」

「すいません調子乗りました反省します」

「しかしどうするんですか?このままだと私達、人殺しですよ?」

「だ、大丈夫だ。この場合は証拠を隠滅してしまえばバレない……多分」

「いいか妖夢。人殺しで一番大変なのは死体の処理だ。」

「簡単に言うと、水の詰まった60kgの袋を運ぶんだ、これはきついよな?」

「そこで考えつくのが解体だ。小分けにして運べば誰でも簡単に運べる。」

「だけどそこには大きな問題がある。腐敗だ。人体で腐りやすい部位はどこ分かる

か?骨なんだよ骨。」

「そうは思わないだろ?だからみんな焦っちまうんだ。」

「だけど安心してくれ、ここで登場するのが冷蔵庫だ。この冷蔵庫を使うことによつて

「だな、腐敗を……」

「あー、痛かった」

「片倉さん、片倉さん」

「妖夢、幻想郷には冷蔵庫無いよな？」

「何言ってるんですか。それよりあれ」

「んっ、あれ？」

妖夢の視線をたどってみると、そこには信じられない光景が。

「さっきの攻撃はなんだったんだ？」

「な、な、い、生きてるううう!!」

「ああ？生きてて悪いか？」

先程、眉間を撃ち抜かれ死んだはずの妹紅が生きていた。しかも元気そうだ。

「な、なんで？確実に死んでた筈なのに？」

「ああ、生き返ったのさ。いい忘れてたが私は死なないからな」

「そうすか……。よかった……。」

「なんで安心してるんですか」

「いや、だつて人殺しの罪も無くなったから——」

「逆に考えると、あの妹紅と言う人はどんな攻撃も効かないってことになるんですよ？」

「……何それチートじゃん」

「ほら、私は死なないんだから、諦めてとつと帰ってくれ」

「それはお断りします」

「そ、そうかい……。意外と頑固だなお前さん」
しかし、どうしたものか。

死なない身体なんてそんなのありかよ。勝てるわけないじゃん。

いや待てよ。死なないだけで、痛みとかは感じてるよな？ 現にさっき「痛かったー」とか言ってたし。

それなら弱点の一つくらいあるんじゃないのか？ 例えば……

「はい！ 妹紅さんに一つ質問！」

「ああ、何だ？ 慧音の居場所は教えねえからな」

「あ、それも聞きたかったんですが、それより妹紅さん、疲労は溜まりますか？」

「ああ、溜まるぞ。だって人間だもの」

誰のフレーズだよ誰の。てか、そんなことはどうでもいい。

「生き返っても、その疲労は残りますか？」

「あー……残るな。何故か疲れはとれなくてなあ……って、あ——」

よし来た。これなら何とかいける。

「成程。疲れきるまで、何度でも殺ればいいんですね」

「そう言う事。妖夢」

「しまったあああ！ ついうっかり喋っちゃったア！」

「それじゃあ」

「いきますか!」

「……こうなったら、無理矢理でも追い返す!」

「妹紅!!」

これからだ! って瞬間、誰かの怒鳴り声のような声で三人ともピタツと止まった。

妹紅はどうやらこの声の主が誰か分かったようで、若干冷や汗をかいている。

「ど、どうしたんだ、け、慧音……」

「慧音!」

「お前は、あれ程人里の近くでは妖術を使うなど言ったのに」

「いや、これはその……」

「言い訳無用!」

ゴスつ! と妹紅の額に慧音と言う人が、プロレスラーがするような思い切りのいい頭突きをかました。

頭突きされた妹紅は、痛さのあまり地面をのたうち回っている。

「さて、その二人はどなたかな」

「あの……あなたが上白沢慧音さんですか?」

「人に名前を尋ねるよりまず先に自分から名乗るのが筋ではないか?」

鋭い視線に物怖じしつつ、「失礼しました！」と背筋を伸ばし自己紹介する。

「僕は、片倉と言います。隣は白玉楼の妖夢です」

「うむ、私は君の言った通り、上白沢慧音だ。しかし何故、私の名を？」

「あなたに尋ねたいことがあって、この人里に来たのです」

「ふむ成程。しかしどうしてここに妹紅が？」

「慧音が忙しいのに、こいつらが会わせろってしつこいから、追い返そうとして……」

「ここで、痛みから立ち直り復活した妹紅が代弁する。

流石は死なない身体。不死鳥の様な復活っぷりだ。

「そうか……」

「あの少しだけでもいいので、お話を聞いてください！大変な事が起こってるんです！」

「だーかーらーな、慧音は忙しいんだよ！」

「分かった。話を聞いてみよう」

「え？お、おい慧音……」

「ありがとうございます!!」

「大丈夫だ妹紅。仕事はとっくに終わらせている。何も問題はないさ」

「そ、そうなのか……」

いやあ、よかった。これでもうにか異変の元凶に近付けろぞ。

「それでは早速ですが、一つお尋ねして宜しいですか？」

「ああ、構わないぞ。私にわかる範囲でならなんでも答えるぞ」

「今回の異変、ご存知ですよね？」

「ああ、存じているぞ」

「単刀直入に、犯人が誰か分かりますか？」

「いや流石にこれは単刀直入過ぎたか？」

「分かるぞ」

「おっと、まさかの回答。」

ふと、慧音は竹林の奥の方を指さし、僕の目を見た。

「この奥の竹林の先、迷いの竹林の中にある永林亭に居る者達が、今回の月の騒動の元凶だ」

「迷いの竹林……」

「えっ？なに妖夢、知ってるの？」

「ええ。噂では迷い込むと二度とは出られない、人里の者は近づかない場所だそうで」

成程、まさに迷いの竹林ってわけだ。—— 凄く行きたくない。

「お前に覚悟はあるか？」

慧音の瞳は僕の目の奥の覚悟を覗いていた。

僕はその眼差しに対し、強い意思で答えた。

「死にたくは無いですけど、行かなくちゃならないんで行きます」

「そうか……。それなら、気をつけて行けよ」

「はい。気をつけます」

「また今度、話せる機会があれば話そう。君は結構興味深い」

「そうですか。それならまた今度お会いしに伺いますね」

「うむ。楽しみだ」

「それでは失礼します。それじゃあ行きますか妖夢」

「はい、片倉さん」

別れの挨拶も程々に、足早に竹林の先、迷いの竹林へと向かった僕達。

迷いの竹林かあ、どんな感じなんだろうか……。

そんなことを呑気に考えつつ、若干走って進むのであった。

「行っただか……」

迷いの竹林に向かった片倉達を見て、慧音はボソツと呟いた。

その言い方は、懐かしき人物に会った時の嬉しきの混じった言い方に似ていた。

「仁、遅しくなったな」

「ん？慧音、なんか言ったか？」

「いや、何も言っていないさ」

「そうか」

竹林の闇に、片倉が消えるまで慧音はずっと片倉達を見続けているのであった。

偽りの月と永遠の夜 第4話

鬱蒼と茂る竹。

そんな竹林の中を霊夢と魔理沙は呑気に歩いていった。

既に異変解決に二人が動き出してから三時間は経っていた。

「なーなー霊夢よー」

「なに？」

「本当にこんな所に異変の犯人なんか居るのか？竹しか無いぞ竹しか」

「うっさいわね。居るに決まってるでしょ」

「ほう、その根拠は」

「勘一択」

「やっぱりな。けどどな、いくらお前の勘が神がかっててもな、流石に今回ののはハズレだろ」

ケラケラと笑う魔理沙に少しムツとした顔を見せる霊夢。

「私の勘は100%当たるのよ」

「へえー凄いですねー」

「刺すわよ針で」

「マジ勘弁なそれ」

魔理沙の顔面スレスレに投げられた鋭い針は、背後ににあった竹にサクサクつと子気味の良い音を奏でて見事に刺さった。

その一瞬の出来事に魔理沙は、若干の冷や汗を流しながら笑った。が、笑みはとつてもぎこちなかった。

「は、はは……」

「次は本当に狙うから」

「お、おう……」

それからはお互い喋らずに、ただひたすら黙々と歩き続けた二人。

ある程度進んだだろうか。ふと、霊夢がある不可思議な点に気がついた。

「……おかしいわね」

「んーどうした？」

「魔理沙、これを見て」

そう言つて見せたのは、竹に突き刺さった二本の針。

それを見た魔理沙は驚いた。

「こいつはさつき霊夢が投げた針じゃないか」

「そう。これは私しか持っていない特性の針よ」

霊夢の使う針は一般的に見られる針とは全く違う。

一本一本に魔を封じる力を込めた、妖怪などの魔に対し極めて強力な魔封針と呼ばれるお手製の針なのだ。

その針が二本、この竹に刺さっている。

それはつまり、霊夢が魔理沙に向かって先程投げた物だということになる。

しかし、もしもそうだったとしたらとんでもない事だと魔理沙は気づいた。

「おいおい、これはさっき霊夢が投げたやつだよな？」

「そうとしか言いようがないわね」

「だったら、私達はぐるっと回ってここに戻ってきたってことだよな？」

「そうね」

「でもありえないぜ。道はまっすぐだし、分かれ道も無かった。どういう事だ？」

何が起こっているか分からず、混乱している魔理沙に対し霊夢はひどく落ち着いていた。

周りに視線を写し状況を確認した霊夢は、冷静な状況分析を始めた。

「なるほど……。そう言う事ね」

「何か分かったのか？」

「ええ。これはいわゆる結界の一つね」

「結界?」

「とても複雑で分かりにくい結界ね。私はこれを迷宮結果と呼んでるわ。でもこれ、貼るには相当の力が居るわ。——例えばそうね……月を偽物とすり替えられる程の力とか」

「まさか!?!」

「やっぱり私の勘は正しかったわね。ほら行くわよ」

比較的、結界の薄い部分を探し出した霊夢は、懐から出した札を投げつける、等の特殊なことをせず、そのまま思いつきり殴って結界を打ち壊した。

「脳筋すぎだろお前……」

「うっさいわね。こっちの方が手っ取り早いのに」

魔理沙は何処ぞのフラワーマスターを思い出しつつも、急いで霊夢の後を追いかけるのであった。

静けさが支配した暗闇の中、僕は苦痛と息が出来ないくらいの激しい咳に見舞われていた。

「ゴホツゴホツゴホツ!!……はあ……はあ……ゴホツ、ゴホツ!!」

「ちよつと、片倉さん!?大丈夫ですか!」

「だ、だいじよう、ゴホツゴホツゴホツ!!」

「大丈夫つて……」

あまりにも苦しそうだったようで、背中をさすろうとして近付いてきた妖夢は、僕の手を見て固まった。

「そ、それ……」

「あ、ああこれ?トマトケチャップ……」

「トマトケチャップ……つてそんな事ある訳ないじゃないですか!血ですよねどう見ても!」

血がついて、紅く染まった僕の手。以前にも幽香さんの時にも同じ状況があった。

しかし、気のせいか付いている血の量が以前よりも多くなっている気がする。

恐らく妹紅の時に無理をしたのが祟ったのだろう。

今は深く考えずに、そういう事にしておく。

妖夢はというと、どうやら僕の状態があまり芳しくない事に気付いたのか、とても険しい表情になっていた。

「いったい何時から……」

「ん〜つい最近かな?」

とは言うものの、かなり進行してから気づいたからなく。

しかし「手遅れかも」と言うのは流石に止めた。多分妖夢の事だから、今すぐ引き返して安静にしましょう、と言うに違いない。

「とにかく、急いで白玉楼に戻りましょう。安静にしないと……」

あゝ手遅れじゃなくても引き返さないと駄目なようです。

「いや、それだけはちよつと……」

「それでは紅魔館に行つて……」

「いや、そう言う事じゃないから!?!このまま引き返すのが嫌なんだけど!?!」

「駄目です!そんなことしたら、余計に悪化しちゃいますよ!」

「でも、レミリアさんやフランちゃんを助けないと……」

「それは、博麗の巫女や白黒の魔法使いが何とかするはずですよ!」

そう言われて、僕は返す言葉を詰まらせた。

確かにこのまま引き返した方が自分の体にとっては正しい選択だ。

それに僕よりも圧倒的に腕の立つ霊夢や魔理沙が異変を解決してくれる。

引き返すべきなのだ。だが、僕は絶対にそうはしたくなかった。なぜなら、

「どうせ僕は手遅れだから……。せめて、自分の残された時間を無駄に過ぎすくらいな

ら、誰かの為に使いたいんだよ。そう、今まさに苦しんでいるレミリアさんやフランちゃんの為にもね」

「だとしても、この異変は博麗の巫女達に任せるべきです。ここで残りの時間を使うなら、ほかの時にでも……」

「いや、そうもいかないんだよ」

「どうして」

「なんだか凄く……凄く嫌な予感がするんだ」

「その根拠は？」

「ん、勘……かな？」

ハハハ、と苦笑いする僕に妖夢は軽くため息をついた。

だが、少し笑っていた。

「はあ……。まるで博麗の巫女と同じような事言いますね。——分かりました。この

まま進みましょう」

「ありがとう……。妖夢」

「ただし、絶対に無理はしないで下さいよ」

「分かった。心がけるよ」

お互いに笑いながら進んでいた時、妖夢が何かを見つけた。

「おや？これは何でしょう？」

妖夢の視線の先にあったのは、竹に刺さった二本の針。——何だこれ？

「さ、さあ？見たくれは針のようだけど……」

「誰かが目印として刺したのでしょいか？だとしたら、この針は普通の針とは違いますね。普通の針は竹に刺さらない」

「そうだよな。……いったいこれは何があつてこうなつたんだ？」

「深く考えるのはよしましょう。さあ、進みますよ」

「了解」

針のことが気になりつつ、妖夢に置いて行かれまいとその場を後にし、またまっすぐと歩き出した。

歩く、歩く、ひたすら歩き続け、そろそろ何かがあつても良さそうな気がしてきた。だが、何も無い。

あるのは竹と道。遠いな……。

引き返したくなる気持ちを抑えていた時、ふと目の前に生えている竹に目が止まった。

「あれ？この感じどこかで……」

「どうしました？」

「いや、なんかこの風景見たことあるような気がする。もしかしてデジャブ?」

「デジャブ??詳しくは分かりませんが、多分気のせいでしょう」

「うーん、そうか……あ!」

「どうしました?」

「これを見てくれ妖夢」

「これは!」

そこにあつたのは、竹に突き刺さった二本の針。先程、気になりつつも置いていったあの針だ。

「これ、完全にさっきの針だね?」

「そうとしか考えようが無いですね。刺さってる位置もさっきのと同じですし……」

「となると、これは……いや、でも……」

「どうやら片倉さんが考えている事と私の考えは同じのようですね」

「そうだね。試しに言ってみる?セーのっ!」

「さっきと同じ道に戻った」「特別製の針だ!」

「……は?」

あ、あれえ?何で妖夢さんはそんな馬鹿を見るような目で首をかしげてるのかなあ?

「この状況で、針のことを言いますか?言いませんよね?」

「いや、だって、ずっと疑問に思ってたんだよ。なんであの針が竹にぐっさり刺さってるのか」

「それも気にはなりますが、もっと大事な事があるでしょう！」

「と言いますと？」

「さつきと同じ道に戻ってるんですよ！」

「……あら、本当だ」

言われてみれば確かにそうだ。

そんなことにも気付けなかったとは、不覚だった。

「でも、なんで戻ってるんだ？真っ直ぐ進んでたよ？」

「それが問題なんですよ。そこが分からない」

うーん、と腕を組み考える妖夢。

辺りを見回す。……特に変化はない。

いや、おかしい、あれは……？

「妖夢、あれを見てくれ」

「何です？」

指をさした先には、人が一人分くらいの大きさでぐにやりと変化している空間があった。

「これは……」

「多分これ、結界じゃないかなあ。前にパチュリーさんに見せてもらったことある」

「だとすると、私達はこの結界の空間をぐるぐると回ってたという事ですか」

「そう言う事だね」

念の為に警戒しながら変化している空間へと近付く。

隅々までみると、どうやら誰かが割ったような跡があった。恐らく、霊夢か魔理沙の仕業だろう。

しかしまあよくあの二人は結界に気づけたな。流石だ。

結界が割られた部分をくぐり抜けると、空気が変わった。

新鮮な空気ではない。強い妖気だ。

「この妖気……まさか」

「ああ、間違いない。異変の犯人はここに居る」

「それなら早く急ぎましょう」

「分かった」

歩きから早歩きにスピードを変え、急いで異変の犯人の元へと向かった。

永遠亭では、兎の妖怪たちが忙しなく働いていた。

そんな兎達の中を優曇華はバタバタと走っていた。周りの兎達は何事かと首をかしげる。

そして、目的の部屋に着くやいなや、魅を開け永琳に事の次第を報告した。

「師匠、何者かが結界を破りました。恐らく博麗の巫女かと」

「意外と早いわね。流石は異変の解決人ね」

「いかがなさいませうか」

「そうですね……。とりあえず打ち合わせ通りに、罫を張り巡らせておきましょうか」

「了解しました。それと師匠、大変言いにくいのですが、てゐが行方不明になりました」

「また行方不明？ まったく、こんな時に」

「連れ戻しますか？」

「そうして頂戴。そろそろ私も準備しようかしらね。てゐのこと頼んだわよ鈴仙」

「はい」

魅が締めり廊下を走る慌ただしい音が遠ざかるのを聞きながら、永琳はすつと立ち上がり戦いに向けての準備を始めた。

「来なさい、博麗の巫女。絶対に返り討ちにしてあげるわ」

そう呟いて永琳はうつすらと笑みを浮かべるのであった。

偽りの月と永遠の夜 第5話

「てゐー！何処に居るのー！」

永遠亭付近の道で鈴仙は行方不明の兔妖怪を探していた。

「はっ！——まさかあの子いつもの散歩道の方に!?……まったく、今日は遠くまで行くなつて言ったのに！」

てゐと呼ばれる兔妖怪の居場所に検討がついた鈴仙は、急いでその場所へと向かった。

「ねえ、妖夢」

「どうかしましたか片倉さん？」

異変の元凶が居ると思われる場所へと続く道を少し急ぎ目に歩いていた僕は、さつきからとっても気になっていた事を妖夢にぶつけてみた。

「さつきからさ……つけられてるんだよね」

そう、あの壊れた結界をくぐった辺りから誰かにつけられているのだ。巧妙に隠れて

はいるのだが、時折気配が漏れている。隠れるのは得意だが追跡は苦手なのだろう。

「えっ!? 本当ですか?」

「ああ、気づいてなかったんだ」

「はい。まったくもって。よく片倉さん気がつきましたね」

「まあ外の世界では当たり前の事だったから、身体が勝手に……ね?」

「へえー外の世界とやらは危険がいつばいな所なんですネ」

「いや、違うんだけど。本当は安全……でもないか」

日本やらなんやらみたいになりに治安の良い国は安全なんだけどねえ……。赤道付近の国々は紛争とかで治安悪いんだよな。傭兵してると紛争地域によく派遣されるされる。

「それで、どうしますか?」

「んっ? 何が? 紛争地域に行きたいの?」

「いや、違います。というか紛争地域って何ですか?」

「気にしないでくれ。こつちの話だ」

「そうですか……。それで、その例の追跡者の事なんですが」

「うーん……このまま放っておくのも危険かもしれないし、正体を暴こうか」

「どうやって?」

「それは僕に任せて。すぐに暴くから」

左手の義手をカシヤカシヤと動かし調子を確認する。うん、大丈夫そうだな。特に問題は無いことを確認した僕は、義手に魔力を纏わせて思いつきり地面を叩いた。

「ボゴオ!と地面に少し大きめの穴が開いたと同時に、先程義手に纏わせた魔力は僕を中心とし半径10メートル程広がってそのまま消失した。

「何をしたんです?急に地面を叩きましたが……」

「これはね、ちよつとしたレーダーみたいなものだよ」

「レーダー?」

「うん、レーダー。簡単に言うると相手の位置を把握する事かな」

魔力とはいかなるものにも変えることが出来る。とは言っても限度というのは存在するが。

前に使った磁力やら衝撃波やら、魔力はそういう性質に変わる。このレーダーもその性質を利用した技の一つだ。

魔力は地面と空気を衝撃波として伝わり、周りの地形に沿って進んでいく。これにより、周りの詳しい構造や隠れた敵の位置などが分かるというわけだ。まさにレーダー、便利だね。

しかし残念な事に欠点もある。魔力の消費量が多い事と衝撃波により相手にバレる

という点だ。後者は仕方が無いとして、魔力の消費量はもう少し改善したいところだ。この技、何と言う名前にしよう……。アースクエイクとか駄目かな？意味が若干ずれてる気もするが、この名前でもいい。直訳だと地震だけど気にしないぞ。僕はまったく気にしないぞ。

「それで、そのリーダーとやらで追跡者の位置分かったんですか？」

「うん。凄く分かりにくかったけど、分かった」

「……なんだか微妙な技ですね」

止めてよ！これでも昨日徹夜して考えた技なんだからね！

結局の所、衝撃波がどのような動きをしたのかは自分の感覚のみで察知するしかないのだから、確かに微妙なところでもある。意外とこの技凄く難しい。

まあ、なんだかんだで追跡者の位置は詳しくわかったから問題は無いだろう、うん。

「で、何処に居るんですか？」

「それはね……」

右手に魔力を集中させ、小さめのナイフをいくつか形成する。

そして、2時の方向ある茂みに向け、シュツ！となんの躊躇も無く投げた。投げる瞬間「えっ？」と聞こえたのは幻聴だろう。

サクサクツ！投げたナイフが竹や地面に刺さる。「ギャー！」と聞こえたのも恐らく

幻聴だろう。

「次は外さないよ。当てられたくないなら、3秒数えるうちに出て来た方がいい」

……、何の反応も無いがそこに居るのはわかつている。もう気配がバレバレだ。おまけに隠れている茂みが揺れている。

「3……………2……………1……………」

「ストップ！ストップ！！」

追加のナイフを投げようと腕を大きく横に振りかぶった瞬間、勢い良く小さな少女が現れた。……………って兎の耳がついてる!?

背丈はにとりくらいで如何にも幼女なのだが、一番気になるのは頭から生えている耳、兎の耳であった。

どうやら妖夢も少女の耳が気になっているようで、不思議そうな顔をしていた。

「いったい君は何者かな？さつきから僕達をつけていたようだけど」

「私は因幡、因幡てる。兎妖怪だよ」

「兎妖怪……………じゃあその頭についてる耳はやっぱり……………」

「もちろん兎の耳だよ！混じりつけないしの純正物さ！」

いや、耳に混じりつけないとかあるのか？

いかんいかん、そんなどうでもいい事は置いといて、肝心の事を聞かないと。

「ところで君はどうして僕達の跡をつけてたのかな？」

「そ、それは——」

「あ——！！てゐ、あんたねえ!!!」

「!？」

突如、大きな声をあげながら、見知らぬ少女が茂みの中から勢い良く現れた。

その少女を見た時、僕と妖夢は一目で兎妖怪であると判断した。何故か？それは、頭にあの兎の耳混じりつけなしの純正物の耳が付いていたからだ。

だが、それよりももつと気になることが一つ、なんでこの子はブレザーを着てるんだ？学生なのかな？

「た、助けてください！実はこの人から追われてて、逃げていたんです！」

「えっ？？どういうこと？」

「んなっ?!?あんた何言ってるのよ!!」

ササツと僕の背中に隠れたてゐは、目の前の少女に怯えていた。

その様子を見た少女は、てゐを引っ張りだそうと近づいて掴みかかろうとした。が、すぐに妖夢に妨害されてしまった。

「ちよっ?!?なんで邪魔するのよ!」

「あの子の言うことは事実ですか？」

「そんなわけないじゃない。大体、あなた達は分からないでしょうけど、あいつは相当の嘘つきよ！信じない方がいいわ」

「そうなのかい？」

「違うよ！私は嘘なんか言わないもん！」

うーむ困った……。どっちを信用していいものか。

でも状況証拠だけで判断すると、あの少女はさつきこの子を引つ張りだそうとしたからなあ。難しいなあ……。

「てゐ、あなたはいつまで猫を被るつもり？早くこっちに来なさい！今、永遠亭が大変なのは分かってるでしょ？」

「永遠亭？」

「ゴホン……。とにかく、早くこっちに来なさい」

「や、やめてよ！離してよ！」

嫌がるてるの腕を掴み、無理やり連れていこうとする少女。恐らく、何かしらの関係者なのだろうが、傍からみたらただの誘拐にしか見えない。

そんな光景を見た正義感あふるる妖夢は、黙って見過ごすわけがなかった。

「待ちなさい！この子が嫌がってるじゃないですか!!」

「だーかーらー、こいつは嘘つき兎なのよ？私は追っかけて誘拐をしようとしてるん

じゃなくて、ただサボってたから連れ戻しに来ただけなの！変な勘違いはよしてくれ
る？」

「だとしても、このような状況見過ごすわけにはいきません」

「ふーん、じゃあどうするの？」

「あなたに勝負を申込みます」

おいおい、なんだこの展開は。

一人の兔ちゃんを巡ったバトルが始まるうとしているぞ。いいのかこれで？いや、駄
目だろ。

無駄な争いは良くないだろ、常識的に考えて。……しまった、この世界に常識は無
かった。

だとしても、ここは穩便に話を進めないと……！

スラリと抜かれた2本の刀。鋭く鍛え上げられたその刀を妖夢は両手に持ち、身構え
る。

対して少女の方は、手を鈍みたいな形にして身構えていた。——何だありや？小学
生の真似事か？それとも某幽○白書のあれか？

双方とも睨み合う一触即発の状態。

刹那、俺は勇氣を持って二人の間に立った。

「はいストーリーツツプ!!」

「!?」

「無駄な争いは良くない。ここは一つ、穏便な方法で解決しましょうかお二人さん」

「例えば何よ」

「じゃんけんだ!!」

「えー……」

予想外の言葉に、てるはやや拍子抜けした声を出した。

「……いいわよ」

「分かりました。片倉さんがそう仰るのなら」

「よしよし、計画通り」

まあ計画なんてこれっぽっちも無かつたんですけどね!

それでも、血まみれ待ったなしの戦いが始まるよりかは、断然こっちの方がいいに決まってる。

「それじゃあルールは、5回勝負でいきましよう。因みに決着がつくまで、てるちゃんは僕が確保しておくんでそこはご了承を」

どさくさに紛れて連れて行かれたら困るからね。仕方ないね。

「はいはい、てるちゃんこっちに来てね。はーいーい」

何だろう、むしろ自分の方が危ない誘拐犯の気がしてままならない。……涙が出てきた。

「それじゃあ、第一回戦始め!!」

夜の竹林に、何処ぞの某アイドルグループのじゃんけん選抜よろしく、熱いじゃんけん5本勝負の火花が切って落とされたのであった。

あれ？　そういえば、僕達ここにをしに来たんだっけ？

偽りの月と永遠の夜 第6話

「なあ霊夢、これどう思う？」

「どうって言われてもね……。まあ、ここが異変の元凶で間違いはないわね」

「だよな」

茂みに身を潜める二つの影、その影は魔理沙と霊夢だった。二人は永遠亭の入口付近の茂観察する。

永遠亭には沢山の武装した鬼妖怪達がいた。別にそれ自体はこの二人にとってはなんの障害にもならないのだが、ある物がこの二人をとて苦戦させていた。

「しかし——なんでこの屋敷はこんなにも鬼が多いのよ……」

「同感だぜ」

後ろを振り向くと、幾多の鬼の残骸がたくさんあった。これらの鬼一つ一つを二人は壊して進んでいたのだ。

鬼の種類は様々で、術式で発動するタイプのものから古典的な鬼までよりどりみどりである。

「特にあの落とし穴は焦ったぜ。正直、死を覚悟したくらいだぞ」

「あんたが警戒せずにガンガン先に進むからでしょ。もう少し警戒しなさいよ」

「へいへい、心得ときますよーだ。それよりも、こつから先はどうするんだ？あの数は少々厄介だぜ？」

「……だとしても正面突破しかなさそうね。周りは罠だらけだろうし、下手に回り込むと罠にかかりそうだし、それが一番良さそうかも」

「了解」

懐から大量の札を取り出す霊夢。魔理沙もミニ八卦炉を取り出す。

「準備はいい？」

「いつでもいいぜ」

「それじゃあ……」

「夢想封印！」

「マスタースパーク！」

放たれる巨大な弾幕と光線。

その二つは共に交わりそのまま兎妖怪達を吹き飛ばし、とんでもない爆音を竹林中に轟かせるのであった。

「じゃーんけーんぽん！」

グーとパー。

物に例えるなら、新聞紙と石ころ。

いつも思うのだが、なぜ新聞紙と石ころだと新聞紙が勝ったと言うのだろうか。もしかしたら石ころが勝つかもしれないだろうに。

そうだ人に例えよう。

人に例えるなら、包容力のある女性と頭の硬いおっさん。……パーが勝つ。誰が何と言おうが勝つ。

なるほど、これからジャンケンの例えは物より人がいいのかもしれない。分かり易い。……まあ例えるものにもよるけど。

ちなみにチヨキは——思いつかん。

「よしっ」

「くっ、まさかこんな……」

グッと小さなガッツポーズを決める妖夢と苦虫をかみつぶしたかのような険しい表情を見せる鈴仙。

パーで勝った人がグーで喜ぶのこれはいかに。

今更だが、彼女の名前は鈴仙と言うらしい。b.y. 兎妖怪のてる情報。

「さあ、ラストゲームですよ」

今の二人の状況は2対2の同点。どちらかが勝てば勝敗は決まる。

なんだかテキトーに始めた割には白熱してるぞ。いいねジャンケン。これからは開幕ごっこよりもジャンケンで勝敗を決めた方が平和でいいかも。

ふと、隣にいるてゐを見ると、とても落ち着かない様子だった。

「どうかしたの？」

「い、いや、なんでもないよ」

ふーむ、なんでもなかったか。どう見ても何か訳ありな態度だが、まあいい。

それより、このジャンケンの決着をつけようか。

「それじゃあ両者構えて」

その合図と共に妖夢と鈴仙はじっとお互いを睨み合う。

バチバチと二人の間で火花が散るのが僕には見えた。

見よ！東方は紅く萌えている！……なんか色々間違えてる気がする。

「じゃーんけーん——」

ズドオオオオオオン!!

「!?!」

ポンッ！と口に出そうとした刹那、とんでもない爆音が辺りに轟いた。誰だよ！近所

迷惑だぞ！いや、ジャンケン迷惑だぞ！

この場の全員が何事かと辺りを見回す。

「な、なんだ今の音……」

「さあ？分かりません。が、何かしらとんでもない事が起こったのは確かでしょう」
「いったい何が起こったんだ？」

もしかして、何処かの河童がトンデモ爆弾造つて誤つて起爆させちゃった？まさかハハハ……。

その時、鈴仙が何か呟いた。

「今の音の方角……もしかして永遠亭の……大変だわ!?」

ある事に気がついたらしく、冷や汗をかき出した鈴仙は急に音のした方角へと走り出した。

こらこら、鈴仙君。何処へ行こうと言うのかね。

「あつ！ちよつと！」

「すいません、急用ができたので失礼します！そこに居る嘘つき兎は煮るなり焼くなり好きにしてください！それでは！」

いや、煮るなり焼くなり……。

それだけを言い残すと、彼女はあつと言う間に走り去っていつてしまった。

残された僕と妖夢とてゐる。すると次はてゐるが動いた。

「それじゃあ、あの女が居なくなつたんで私もそろそろ失礼……」

「おっと待った！」

「げっ!？」

てゐるは逃げた!

が、すぐに回り込まれてしまつた!

泥棒よろしくソロソと逃げようとしたてゐに先回りして目の前に立つ。

てゐの顔は酷く焦っていた。汗が滴り落ちるのも見える。

「何処に行くのかなあ?」

「え、えつと……そのつ……あの〜」

ニコニコ顔でジリジリと詰め寄る。だがあちらにはニコニコよりも恐ろしい修羅のような何かが見えている事でしょう。

「ちよつと……その……」

「ん〜?聞こえないな〜?」

威圧をかけるがそれでも真実を言おうとはしない。

ほらほら、諦めて吐いちゃえば楽になれるよ〜?

仕方ない……。少し強引に聞き出そうかな。

「ちよつとごめんね〜」

「えつ、ちよつつ、まつ!？」

いつも持ち歩くバッグの中から麻の縄を取り出す。

そして手馴れた手つきでてるの両腕を縛る。あまりにも素早く縛ったおかげで、てるは逃げる暇もなかった。

これから何をする気だ？フツフツフツ……それは今から分かるさ。

「さて、観念して吐きなさい。君が嘘をついてるのは既にバレバレだよ？」

「い、いやだ……」

「そう言うと思った。だから……」

「な、何を!？」

ワキワキと手を動かしながらてるにより近付く。

今の状況を一言で表すならまさしく、乱暴する気でしょ！薄い本みたいに！だ。

さあ、いつくよー！

「きや、きやあああああああ!!」

爆音の次は悲鳴が辺りに響き渡った。

「はい、というわけでその永遠亭とやらまで道案内しくね〜」

「は、はい……」

シヨンボリとしながら歩いてゐるの後に続いて歩く僕と妖夢。心なしかてゐるの自慢のうさ耳も若干シヨンボリしている。

もしかして、耳はその時の気分反映して変わるのかな？だとしたら面白いな。

「もしわざと遠回りしたりしたら、その時は分かるよね？」

「は、はい……」

ニンマリとスマイル。それにシヨンボリとスマイルで返される。

さつきからてゐる身に何が起こったか気になるかつて？

いいでしょう、教えてあげましょう。

簡単さ、こちよこちよをしたのさ。

あつ、もしかして拷問的な事を想像した？しないんだよなあ。

流石にそこまでやっちゃったら色々とまずそうだからね。仕方ないね。

「あとどれくらいかかりますか？」

「そろそろだよ」

ひたすら歩いて10分、遠くに大きな日本屋敷が見えてきた。あれが永遠亭かく。でかいなあ。

外見は白玉楼のように大きな和風屋敷。しかし、周りの竹林と相まってかこつちの方が白玉楼よりも和の趣がある……気がする。

正直建物の感じなんてどうでもよくないですか？住めればそれでいいじゃん。なんでも考えるのは僕だけじゃないはず。

でもそんなこと言っちゃったら色んな人から怒られそうな気がしてままならない。特にレミリアさんから。

レミリアさん……大丈夫かな。早く助けないと！

「はい、到着だよ」

「大きなお屋敷ですね……。私の所よりも少し大きいかも……」

「そうなの!？」

そうかく、ここの方が少し大きいのか。

ってそんなことに感心してる場合じゃなくてだな……ん？

入口玄関……らしき所で僕達はとてつもなく光景を目にする事になった。

玄関らしきというのも、どうやら何者かによつて玄関は吹き飛ばされていた。つまりあれだ、うん、入口は大きな穴が空いてるって状態。

もしや、さっきの大きな爆発音はここからか？うわあ、ここの家の人かわいそう。修理大変だな絶対。

「うわあ……これはひどい」

「誰がやったんだろう？」

まったく、人の家に穴を開けるとは何処ぞのフラワーマスターですか？

そう言えば、ここの壊れ方ってなんだか幽香さんが紅魔館を壊した時の感じと似てるな。

もしかして……いや、それはないよな、多分。

「あれ？あの兔妖怪が居ない」

「へっ？」

辺りを見回すが、先ほどまで居たてゐの姿はもうどこにもなかった。

おそらく玄関の大きな穴を見ていた時にササツと逃げ出したのだろう。

何と言う逃げ足の速さ。おそるべし兔妖怪。

「どうしましょう……。探しますか？」

「いや、どのみちここらで解放する予定だったからいいよ。それよりも早く先に行こうか」

「そうですね、そうしましょう」

さあさあ、あんな兔妖怪なんて忘れて先に行きましようかね。

「ちよつと待って下さい……。前方から人が来ます」

「えっ? マジ?」

「マジです」

まだ心の準備が出来てないんですけど。

こんな状況で登場する奴なんて、どう考えても中ボス級の強さに決まってる。いざとなったら逃げよう。土下座したあとに速攻で逃げよう。

すっかり弱気になってしまった僕の前に現れたのは、まさかの人物だった。

「あれ? あなた達、さっきの……」

「あつ……」

現れたのは、ブレザーを着たうさ耳の少女。鈴仙だった。

「何しに来たの。早く引き返しなさい。ここはあなたたちが来たい所じゃないのよ?」

「えっ、なんでですか?」

「いいから早く引き返しなさい!」

「えーいいじゃないかー。みんなでジャンケン大会した仲じゃないか」

「もう! しつこいわね!」

しつこくてすいませんね。それが取り柄なもんで。

「一つ! 一つだけ聞いていいかな?」

「……何？」

「ここは永遠亭の入口で、この異変をその永遠亭が起こした、で間違いないかな？」

「……」

沈黙……が答えか。

なるほど、それはイエスとして捉えても良いってことかな。

「これが最後の警告よ。早急にこの場から立ち去りなさい」

「お断りします。ここが異変の原因ならば、僕は引き下がるわけにはいかない」

「……そう。それなら仕方ないわね。死んでも文句は言わないで頂戴よ」

一瞬にして彼女の周りの空気が変わった。これは間違いなく戦闘モードに入ってるな。

弾幕ごっこか……嫌だな。かと言ってジャンケンで解決はもう無理そうだ。

仕方ない。やるか！

身体に魔法鎧を纏い、鈴仙と対峙する。

彼女は手で鉄砲の形を作ってこちらに向けてきた。

何あれ？ 某アニメの真似事か？ もしかして弾丸とか飛ばす気とかか？ いや、ね。まさ

か……。

刹那、僕の右肩は目に見えない何かに撃ち抜かれた。

「死んでも文句は言わないで頂戴よ」

衝撃で倒れる間際、僕の脳裏には先ほどの彼女の言葉が蘇っていたのだった。

偽りの月と永遠の夜 第7話

「ちよつ、片倉さん大丈夫ですか!？」

「あ、ああうん、一応大丈夫っぽい」

いやあ、鎧展開して正解だった。無傷だ。

しかし……あの攻撃は想定外だな。弾幕つてあんな飛ばし方も出来るのか。

どうやらまだまだ僕には知らない弾幕ごつこの世界が幻想郷にあるようだ。

ちらりと撃ち抜かれた部分を見てみる。

あちやあ……いい感じに砕かれてる。こりや大変だ。

とにかく起き上がろうかな。よいしょつと。

「あれ?意外と効いてない……。あなた人間なの?」

「まあとりあえずは人間ですが」

「ふーんそう……」

いやいや、聞いておいてそんなどうでもいいみたいな態度するかね?

そんな態度ばつかりとつてると、いつか人から嫌われちゃうぞ? いいのかそれで。

「私、人間そんなに好きじゃないのよね」

あつ、そうなんですか。

なんか……その、ごめんなさい。

って何故僕は今謝ったんだ？

「まあいいか。人間なら心置きなくあなた達を撃てるから」

「いや、私は半分幽霊なんですけど。人間じゃなくて半人半霊なんですけど」

待って待って、さりげなく自分だけ逃げようとするんじゃない。

怒るぞ？怒っちゃうぞ？

「別に人間じゃなかったとしても、邪魔する人なら誰でも撃つんだけどね」

結局撃つ気満々じゃないか。

「……お喋りの時間もお終いよ」

うおつ?! また某アニメの主人公みたいに、銃の形をした指をこっちに向けてきた!?

やばいやばい、何とかしないと……。

「次こそは決める!」

くそお! こうなれば……

「おつとつと、危ないですよ」

ここで突如目の前に現れた妖夢が、鈴仙の放った弾を見事に刀で叩き斬った。

「おおおお!」 っと思わず拍手してしまう。

凄いな。やっぱり剣術を極める人は。

「流石の腕前だな」

「いやいや、私はまだまだ半人前です」

半人前でそんなに凄いなら、達人はどうなるのだろうか。

「まったく……厄介な人達ですね」

「それでもない気がするけど……」

現に僕はまだ何もしてないし。

強いて言うならば、鎧を展開した事ぐらいか。

「あまり使いたくは無かったけど……」

「??」

「能力を使うしかないわね」

へっ? 能力持つてるの? 嘘お。

流石は幻想郷。こんな学生みたいな妖怪鬼さんでさえも能力を持てるんだ。

って感心してる場合ではない。彼女の能力を早く確かめて対策を練らないと。

下手に対策を練れば最悪……死ぬ。なんかそんな気がした。

「……」

あれ? 何も起きない。何故だ?

唯一何かが起きたとしたら、彼女の瞳の色が赤色に変わった事ぐらいか。どうしたのかな？カラコンでもしてるのかい？

しかし彼女の瞳……なんだか吸い込まれそうな赤色してるなあ。

このまま見てるとなんか駄目な気がしてきた。

そう思った刹那、目の前の世界が歪みだした。

「うわっ!?なんじゃこりゃ!?!」

「い、これは……!」

「これが私の能力【物の波長を操る能力】よ」

物の波長を操るだって？

意味が理解できない。つまり……どういう事？

「物には必ず何かしらの波があるわ。空気や光はもちろん人間の精神にもね。そんな波を私は自在に操れるの」

うーむ……。まあ要するに、色んな物の状態を操る事が出来るってことかな？

さっきの視界の歪みはつまり、光の波長を歪ませた事が原因で間違いないかな？

……うん、よし。もう考えるのはよそう。余計にこんがらがってきた。

「さあ、いくわよー!」

やばい、来る!!どうにかしないとやられるぞ……!」

ん？でもちよつと待てよ……。

あの能力、もしかしたら防げるかもしれない。

よし、試してガッテンだ！

「よいしょおおお！」

足に魔力を伝わせ、地面に大きく踏み込む。

刹那、土で出来た無数の柱が地面から勢いよく隆起した。

その数はとても多く、さらに僕と鈴仙の間に見事な遮蔽物となった。

これで視界は遮った。どうだ？

「……チツ」

どうやら僕の試みは成功したらしい。やったぜ。

恐らくあの能力は彼女の視界を通じて発動しているらしく、視界を遮れば能力の影響

を受けないようだ。

「姑息な手段ね」

土の柱に鈴仙が迷わず弾幕を撃ち込む。

すると、柱の材質が材質だけにその弾幕を撃ち込まれた柱は無残にも崩れて、元の地

面に還った。

あちやあ……。確かに姑息過ぎたな。時間稼ぎにしかならない。

だが、ここで終わらないのが片倉マジック。
既に次の策は考えてあるのだよ。

「ブラウフェーダー！」

4つの青い羽が背中に現れる。

その羽を全て鈴仙に向かって飛ばす。

しかしただ飛ばすのではなく、柱に隠れさせながら飛ばした。

これなら見つからない。……はず。

そうして左右に配置し終えた羽達を、柱崩しに夢中になっている鈴仙に向けて飛ばす。

これで当たれば、一気にダメージを与えられるはずだ。

だが残念ながら世の中、いや、幻想郷は甘くなかった。ハーゲンダッツアイスのように甘くなかった。

4つの羽はなんと見事に撃ち落とされた。

嘘だろ、なんだよその常人離れの高等テクニック。

高速移動する物体を瞬時に撃ち落とすとか、しかも不意打ちを受けたのにも関わらず？化物だよあの子。

「残念だったわね。私にそんな小手先の攻撃が効くとも？」

くっ……。コイツ、プロだ！知らんが。

さてさて、早くも八方塞がりになっちゃったぞ。どうしたものか……。

この場合は逃げるが勝ち戦法でいきたいんだけど、それはそれでダメだし。そもそも異変解決しにきたのに逃げるのはおかしいか。

ここは一つ……

「妖夢……」

「なんででしょう？まあ言わなくても大体の察しはついてますが」

「あ、そうなの？それなら話が早いな。ちよつと前線で戦ってくれない？」「無理ですね。あの能力が厄介すぎます」

「ですよー！そつなりますよー！」

「ですが、片倉さんがきちんと私の援護をして頂けるのなら話は別ですね」

「と、いうと？」

「なんとかして彼女の視線を逸らしてさえくれれば戦えます」

視線を逸らすか……。

出来るか分からないがやるしか無い。よし、やろう。

「分かった。じゃあ頑張つて援護するよ」

「頼みましたよ。では、参ります！」

「次は二人がかり？ いいわ、かかってきなさい！」

距離を詰める為に鈴仙に向かって突き進む妖夢は、鈴仙から放たれる弾幕を刀2本でスイスイと弾いていく。

やっぱり妖夢は凄いなあ……。つといかんいかん、ちゃんと援護しないと。

でも具体的に何をどうすればいいんだろうか？

んー……。とりあえず僕も弾幕くらい撃つておくべきか？

でもそれだと邪魔になるんじゃない……。それならいつそ視線を遮るのに専念して……。うーむ……。

「片倉さん、早く援護を！」

「あ、はい」

結論。妖夢だから弾幕飛ばすくらい平気だよな。

てなわけで早速記念すべき1枚目いきまーす。

〈雨符 メテオールレーゲン〉

「その君たちは、ハイパーメガバズーカランチャーもといメテオールレーゲンの射線から離脱せよ！」

「……………はい？」

キュイイーン。次第に手元の光が強くなっていく。

ほらほら、早く逃げないと知らないよ？

これから何が始まるのかを未だ分かっていない様子の2人。

仕方ない、警告はしたぞ。……南無三!!

空へ向けて一筋の閃光が撃ち上がる。

ある程度の高度まで達したその閃光は空中でパツと無数の光に分岐し、そのまま妖夢と鈴仙の頭上目掛けて降り注いだ。

簡単に言うとは、小さなメテオールスパークが雨のように降り注ぐのだ。

「ちよっ!」

まさか光線の雨が降るとは思いもよらなかった2人は、一目散にその場から離れる。

だが残念な事にこの技の範囲は広がった。

てなわけで、強制的に2人は降り注ぐ光線を各々で処理しなければならなくなったよ
うだ。

必死の形相で弾くなりグレイズするなりしている。

ようやく地獄の雨が止んだとみるや、敵味方関係無しに、両者が僕に抗議を始めた。

ちよっと待て、弾幕ごっこは何処にいったんだ。

「ちよっと片倉さん、なんで注意してくれなかったんですか!」

「あちゃー……すんません」

いやこれでも警告はしたんですよ？

そんなに睨まないでください。怖くてたまらないんで……。

「あなた、無茶苦茶よこれ!?!人間業とは思えないわよ!?!」

「あちゃー、サーセン」

「心がこもってないんだけど!」

いや、如何せんあなたは敵ですしお寿司……。

敵にそれ相応の攻撃をするのは当たり前のことかと。

と言うかそんなに睨まないでください。怖くて（ry

「分かった。そっちがそうするなら、私だつて!」

「!?!」

〈波符 赤眼催眠マインドシェイカー〉

唐突のスペルカード宣言。

いったいどんな弾幕が飛び出してくるのやら。

というかさ、僕悪くないはずなのにさり気なく悪者扱いされてませんか？酷くないですか？

か？

鈴仙を基点に全方位に向けて弾丸型の弾幕が飛ばされる。

速度はそれ程速くないものの、弾幕密度がかなり高い。というか高すぎる。

しかし、だ。速度はさっきの幽遊白書弾丸（勝手に命名）に比べれば何ともない速さだし、何とかなるだろう。

が、すぐにその考えは甘かったと思い知らされる事になるとは……。

「来ますよ。……準備を」

「了解」

段々と近づいてくる弾幕の波。

果たして2人はこのスペルカードをどう攻略するのか。

次回へ続く！

偽りの月と永遠の夜 第8話

前回のあらすじ。

永遠亭の玄関先で僕と握手！うさぎさんもやって来るよ！

……と言うのは嘘でして、ただいま僕は迫り来る弾幕の荒波をどう攻略するかで悩んでいます。

グレイズ？無理。絶対に当たるもん。

弾く？嫌だ。絶対にぜえええつたいに当たるもん。

じゃあ打ち消そう。銃の弾丸で打ち消そう。銃は偉大なり。……絶対に（ry
おっとそろそろ来るぞ。来て欲しくないものだけど。

目の前に弾幕が来たと同時に体をぐっと踏ん張り身構える。刹那、世界が一気に変わった。

いや変わったんじゃない、変えられたんだ。

弾幕に覆われた視界と言う名の僕だけの世界は、彼女、鈴仙の能力により、弾幕が跡形もなくなつて消えた世界へと変えられた。

つまり、さつきまであつた弾幕らが瞬時に消えたわけだ。

「ん?き、消えた!?!」

「1つ思うところがある。」

「弾幕消しちゃう意味無いっすよね?」

「と、思うでしょ?」

「ほえ?」

瞬間、鼻先数センチ程の超至近距離に先ほど消えたはずの弾幕が現れた。――はあ
?

「うわったつちよっ!?!」

「ちよつと!ちよつと待って!予兆無しにいきなり出てきたんですが!?!」

「突然の出来事過ぎて頭がパニックです。」

「もう頭の中がポルナレフだよ。」

「い、今起こったことをありのまま話すぜ!」

「片倉さん集中してください!」

「あ、はい」

「とりあえず今の僕に出来ることはその場から後ろへと飛び下がる事だけだった。」

「というかそれくらいしか出来ません、勘弁してください。」

「グレイズ?何度も言わせないでよ、無理だつて。」

あつ、でもこのまま下がりがくれば何とか攻撃に転じるチャンスがあるのでは？
そう思った矢先、またしても弾幕が消えた。

「また消えた……」

と、眩いたその時、先ほどと同様弾幕がいきなり現れた。

……ウザイ。単にウザ過ぎるこのスペカ。

ウサギのウザさ恐るべし。うわつ、なんかこの文章読みづらい。

なんだよ、ウサギのウザさって。ウサギのウサさと間違えそうだな。

てかゲシユタルト崩壊してきた。もう考えるのは止めよう……。

〈人符 現世斬〉

凛々しい声と共に掲げられる一枚のカード。

これは僕の声ではない。そう、妖夢だ。

どうやら妖夢も僕と同じくこのスペカにウサさ……ウザさを感じていたらしい。

とてつもない速さで弾幕の波を打ち消しながら押し返している。

いやあ、凄いですなあ。

と、感心していたら、両者のスペカは時間切れでブレイクとなった。

「ふう……少し疲れましたね」

「凄いな、あの弾幕の量に負けないなんて」

「まあ私が本気を出せばこんなの楽勝ですよ」

チャキン！と刀を鞘に収める妖夢。凄く……カッコいいです。

一方、鈴仙は

「……」

凄くお顔が歪んでいました。怖っ!?

何と言うか……苛立ちと悔しさとかを一気に表現したみたいな表情をしてる。
なんだかムキー！とか言って今にも怒りだしそうだな。

「……もう！あなた達しごとすぎよー」

ムキー！じゃなくて普通にもう！と言いました。残念片倉選手、不正解。

しごとすぎて言われてもなあ……。

そちらが諦めてくれれば、僕らは僕らで手を引くんですがね。

「……決めたわ」

おお何か分からないが、何かを決めたようだ。

「本気でいくわよ……覚悟しなさい」

……本気？嘘でしょ……。

まだ本気じゃなかったのかよ。

覚悟しなさい？そりゃあもちろん……

「お断りします」

「いや、覚悟しなさいよ。断らないでよ、なんだか私が恥ずかしい人みたいじゃない」
「だって……ねえ妖夢？」

「私に振らないでくださいよ片倉さん」

「申し訳ない……」

何だろうね毎度毎度のこの感じのやり取りは。

なんと言うか、とても戦ってるとは思えない。

「ゴホン、それでは改めて……」

「あー、やっぱり本気でやるんですか？」

「当たり前よ。一応あなた達と私は敵なんだから」

とうとう一応と言う曖昧な表現に……。

そこまで言うのならもはや戦わずにいきたいところだ。

「それじゃあ、たつぷりと味わうといいわ……この『狂気』の力を！」

狂気？はて、それはいつたい……

「まずは、あなたからよ」

「!？」

指を刺された妖夢。刹那、頭を押さえ悶え始めた。

「な、なんですか……この感じは……!」

「妖夢!? どうした!」

「流石の半人半霊のあなたでも、これは相当きついんじゃないかしら?」

「ぐ……う……」

おいおい、一体全体妖夢はどうしたんだ。

さつきからすつごく辛そうに……まさか、これが狂気の力?

「妖夢に何をしたんだ!」

「狂気の力を使ったのよ」

ふと鈴仙の顔を見ると、目がこれまでに無いくらいに真っ赤に染まっていた。

すると急に妖夢が僕を突き倒した。

「いけません! あの瞳を見たら……」

そうだった。あの瞳を見ると能力にかかってしまうんだった。

「さあて、次はあなたね」

ああやばい、非常にやばい。

妖夢があの能力によって離脱したとなると、必然的に1対1だ。

しかも厄介なことに、接近戦はあの瞳のせいでもじやないが出来ない。遠距離に至っては、高速の弾幕と大量の弾幕の2つがあつて、到底一人じゃ捌ききれない。

ぐおおおおお！ど、どうすれば……。

まさに八方塞がり四面楚歌。逃げ場なしの大ピンチ。

落ち着け、落ち着くんだ僕。今までの人生の中で、いくらだって似たような状況があつたじゃないか。

大丈夫、いけるさ。出来る、出来る、僕なら出来る。

瞬間、鈴仙が大量の弾丸の形をした弾幕を飛ばしてきた。

その数は先程のスペルカードより少し少なめ。だが、それでも一人じゃ捌けそうもない。

……前言撤回。

どうやっても無理です。本当にありがとうございました。

「チクシヨーーー!!」

そんなこんなであーだこーだと弾幕を捌こうとしたが、悲しきかな我が人生、全くどうにも出来なかった。

時には肩に当たりその衝撃の強さに顔を歪め、時には足に当たり痛さに悶えそうになり、拳句には顔を掠め……いずれ僕死ぬんじゃないの？

そう確信した僕は、とっさにスペルカードを宣言した。

〈光符 メテオールスパーク〉

巨大な光線が目前の弾幕達を塵のように打ち消していく。

しかし、このスペルカードを選択したのが大きな間違いだった。

「……あつ、しまった」

このスペルカード、使えば必ず辺りは土煙に覆われてしまう。

いつもならカツコイイし、雰囲気もそれなりに出るから構わないのだが、今回はかりはそれが要らなかつた。

つまり、僕は鈴仙を見失つたのだ。ヤバイ……。

「迂闊ね。後ろががら空きよ」

「!？」

振り向くが時既に遅し。

目を真っ赤にした鈴仙に僕は思わず目を合わせてしまった。

「終わりね」

突如、目の前の世界が紅く染まり、歪み出す。

自分が自分じゃなくなってくる。何だこれ……。気が狂いそうだ。

そうか、これが狂気の力か。って関心してる場合じゃ……ない。

頭が割るような痛みが走り出す。それに伴う自我の喪失。

改めて知つた。幻想郷、まじハンパねえつす。こんな能力があるなんて……。

「トドメね」

その頃には既に僕は正気を失いかけていた。

声は聞こえど返事は返せず。と言うか、僕は誰？此処はどこ？

鋭い弾幕が僕を撃ち抜く。痛い、痛い、痛い。

もう、駄目だ。ここで終わりか。

そして、世界が暗闇に閉ざされた。

う、うーむ……。

(おい、起きろ)

うーむ、むにやむにや……。無理ですってレミリアさん、人間業じゃ……。むにやむにや。

(どんな夢だよ。ほら早く起きやがれ)

はっ!? (こゝ、こゝは……?)

見渡せばそこは無限の暗闇。どこだ？

いや、待てよ。よく考えれば見覚えがある。ここは確か……。僕の心の中だ。

てことは、またあいつか。

(その通り、俺だよ)

ニヤニヤした僕の姿が映し出される。何という腹立つ顔でしょう。殴りたい。……僕の顔だけどね。

てかき、今度こそ本当に死んだの？それともこれは走馬灯？

(いや違うぞ。あの時みたいになちよつくら話したい事があつたから、時間を止めてこうした)

へえそれはそれは……え？時間止めれるのか!?凄いな!

(その話はとりあえず置いてだな……、率直に言うが、お前バカだろ)

うん、馬鹿だよ。てか今に始まったことじゃ無いから。

(否定ぐらいしろよ)

僕は馬鹿じゃないぞ!

(おせーよ!)

まったく小煩い奴だ。で、なんで僕は馬鹿なのさ。

(なんで俺と交代しなかった。交代さえしておきや、今頃倒せてたのに)

あゝ……うん、そうだね。

(やけに軽いな!?)

だつて本音言うのと、クロの存在自体忘れてたから。

それに何より、交代した後の反動がきついし。筋肉痛、マジ勘弁。

(……なんか悲しくなってきた)

泣きたい時は泣いても良いんだよ？ほら、泣けよ。

(いや、泣かないぞ!!?)

知ってる。てか泣かれても困る。

(うわ〜なんだこの人、自分の生みの親だとは思いたくないんですけど)

しかしさあ、なんで代わったらあの鈴仙を倒せるって自信満々に言えるんだ？

確かに身体能力やら弾幕やらはクロが強いのは分かるけどさ、何よりもあの眼が厄介すぎてまともには戦えないんだよ？狂気の力だぞ？やばいんだぞ？

誰だと思ってるんだ……鈴仙さん da ——

(だーかーらー俺の出番ってわけなんだよ。分かるか?)

うん、ゴメン。全く分からない。なんで？

(こ、こいつ……忘れてるようだが、俺はお前の心の中にあつた黒い部分つまり闇の力から生まれた存在だ。あのうさ耳野郎の狂気の力も闇の力に似ている。これで分かるだろ、俺が何を言いたいか)

ああ成程！

ポンツと手を打ち答える。

クロって中二病の具現化的存在なんだな！

(……)

えっ!?なぜ睨む!?

だって闇の力とか言ってる時点で中二病全開じゃない?

こう言ってはあれだけどき、闇の力とか言ってる僕自身鳥肌が今ヤバイからね?

(1回お前、どついたらるか!)

冗談、冗談だから!

あ、謝るからその風刃を仕舞って!

(つたく……で、俺が言いたいのは分かっただか?)

うーん、話がまだ少しややこしいな……。

もつと単純に言ってくれないと分かんない。

(まああれだ、単純に言うとかあの能力を無効化出来るって感じだな!)

ドヤアって感じに言うのは止めようか。すごいムカつく。

自分の分身にムカつくってのもなんだか複雑だなあ……。

しかし、クロと交代すればあの能力を防げるってのは凄い事だ。

実質、鈴仙の力を殆ど抑えたと言っても過言じゃないだろう。

(おっと、残り時間がやべえな。で、交代すんのしないの?まあどうせ交代するだろうけど)

な。じゃないと勝てないし)

残り時間とかあったのか。

もちろん答えはイエスだ。頼んだぞクロ。

(任せとけ、瞬殺してやるからよ)

いやいや、殺すのは避けてくれよ？

この世界の妖怪とかは生命力高いけど、一応死ぬのは死ぬから。不死身は……例外だ
けど。

それとあんまり力を使いすぎないでくれよ。——僕自身の残り時間が短くなるか
らさ。

(了解。心がけとくわ)

意識が次第に切り替わっていく。

それと共に、周りに広がる真つ暗な世界が次第に明るくなっていく。

そして、僕は僕ではなくなり、クロとなった。

偽りの月と永遠の夜 第9話

「……気絶したのかしら？」

ぐったりと倒れている姿をじっと見ながら鈴仙は思う。

ようやくこの面倒な人間を倒した！私は勝ったのよ、鈴仙！

心の中で歓喜した矢先、すぐさま鈴仙の顔は青ざめた。

ものすごく顔が真っ青。もうこの世の終わりを悟ったみたいに真っ青……は言い過ぎか。

何故こんなにも真っ青なのか。それは――

「ん〜！なんか体がだりいな……」

ムクツと何事も無かったかのように起き上がった僕（クロ）の姿を見た鈴仙は目の当たりにしたからだ。

最初何が起こったのか分からず、ボーツと放心状態で見ていた鈴仙だったが、すぐに

ハッ！と我に帰った。

「は……？え、えっ!？」

「なんだよ、うるせえなあ」

「あ、あなた……さつきまで狂気で……あれ!？」

ひどく狼狽するのも無理はないだろう。

何故なら、彼女の能力を受けておいて、こんなに平然としている者は今までに一人として居なかった。

「ああ、能力ねえ。はいはい。そんなものもあつたな」

「はいはいって、そんなに軽く受け流すほどのものじゃ無かつたはずなんだけど!？」

「狂気の瞳だっけ? あんなもの俺には効かん。ドンマイ」

「あなた、何だか性格変わった? それに鎧みたいなのも色が真っ黒になつてるし……。というか能力が効かないって冗談でしょ!？」

「いや、本当だぞ。ほら、この通り、全然平気」

ニツコリと笑いながら手を広げて、全く異常が無いことを示す。

ついでにぴよんぴよんとその場で跳ねてみたり。

「で、でも、さつきまであんなに……」

「あれは演技だ。うん、演技」

こ、こいつ、いけしやあしやあと嘘をつきやがった……。

演技なわけ無いだろ。あんなに苦しうにしてだろうに。

それがもし演技だったとしたら、相当凄いぞ、てか役者になれるレベルだから。

「んなっ!?演技!？」

「まてまて、そのウサギよ。何故普通に信じる。」

「一般市民にあんな演技は常識的に無理だろうに。」

「だとしても、まだ私は負けてないわ!!能力が効かなくなつて——」

「あのさ、一言言つていいか?」

「なに?」

「能力無しじゃ、お前は一生俺には勝てねえよ?いいの?」

「!？」

その一言で彼女は固まった。まるでそれは氷の如くカチンコチンに固まった。

「お、お前、そこまでストレートに言うか?せめてもう少しオブラートにしてくれ……。」

ともあれ、表情、身体共にフリーズした鈴仙は次第にワナワナと体を震わせ、そして

……怒った。はい、お怒りになりました。

「カッチーン!一生勝てない?冗談じゃないわよ。人間如きには遅れはとらないんだか

ら!」

「ははは、カッチーンって自分で言ってるよコイツ」

「オイオイ、そんなに挑発したら……。」

〈幻朧月睨 ルナティックレッドアイズ〉

案の定、鈴仙は怒りながらスペルカードを宣言した。

「覚悟しなさい！私が持ちうる中でも最強のスペルカードよ！」

どうやら『最強』のスペルカードの付録付き。

要らない特典に僕は涙が出てくるよ。まあ、実際このスペルカードを受けるのは僕じゃ無いけど。

目の前に放射状の弾幕が放たれる。その速度は恐ろしく速く、そして的確にこちらを狙っている。

それだけではなく、その後方にも大量の弾幕が所狭しと並び、次々に飛んで来ようとしていた。

見ているだけで狂いそうだ。流石は狂気の力と言ったところか。

「ほお〜！これは……やばいかも」

「今更泣いたって遅いわ。私自身、このスペルカードを制御しきれないから、どうなっても知らないわよ」

「まじかよ。こりや参った。想像以上だ」

えっ?!クロでもお手上げ!?

だとしたら、このままだと……死?

嫌だ、それだけはゴメンだ。

明日の朝刊に僕の死んだ記事が載るのはとっても嫌だ。

「まるでミンチのようでした」

「踏み潰された何かに見えました」

「破裂したペ○シの缶みたいでした」

こんな事書かれてたまるか。絶対にお断りだ。

どうにかならないのか!?

「しゃーなしだ。すまん、少しお前の体に無理させるわ」

そう言うと、スツと取り出した一枚のカード。

そのスペルカードをクロは宣言する。

見たことないカード。まさか新スペルか!

〈闇符 アビスブレード〉

カードが眩く光ったと思ったら、次の瞬間にはクロの右手には風刃の形に酷似した、漆黒の刃が握られていた。

刹那、横一閃に刃が空間を切り裂いた。

すると刃の先から禍々しい闇のような煙が目の前に現れ、迫り来る鈴仙の弾幕を飲み込んだ。

少しの間の両者の沈黙。鈴仙は何が起こるのか分からないらしい。

僕もさっぱり分からないのだが……。

いったいこのスペルカードは何なんだ？ 攻撃出来てないけど？

「攻撃するのがスペルカードの役割だと思っただら大間違いだぜお前さん」

ニヤリと突然クロが笑った。それに続いて連動するかの如く目の前の闇は一気に爆発した。

爆発後の視界はまっさらだった。弾幕が何一つとして見当たらない。消えたのだ。ま、まさか、嘘だろ……。

「な、何よ今の」

「さっきのスペルは、実は俺の中の『最強』のスペルカードだったのさ」

「さ、最強ですって？ 今の爆発した煙が？」

「そうだ。最強だ。だってこのスペル、あらゆる弾幕を打ち消す専用スペルだからな」

「は、はあ!？」

なんだと!?! までまで、そんなスペルカードあったらもはや最強じゃん。無敵じゃん。あらゆる弾幕を打ち消す? 何それ。必殺技以上の必殺技だぞ。

つまり、あの刃を片手に幻想郷を支配する日が来たわけですねクロ先生! 凄いじゃん!

「だが、制約があつてだな……。……。1日1回限定だ。あと魔力がごっそり持つてかれ

ちまう。それと、絶対に相手には爆発でのダメージは与えられない」

……わお。幻想郷支配は無理みたいです。お疲れ様でした。

だがしかし、そのスペルカード使いどころが肝心だけど強すぎる。魔力の事は聞かなかったことにしよう……うん。

「てなわけで、恨みはないがとどめ刺すぞ」

「へっ?」

突然クロが鈴仙の背後に回り込む。

啞然としていた鈴仙は勿論反応出来るわけもなく。そのまま見事に首筋に手刀を喰らった。イタソ……。

プツリと糸の切れた操り人形の如く倒れ込んだ鈴仙。

倒れ際に「覚えておきなさいよあなた……」と聞こえたのは気のせいだと信じたい。

「これにて、あつ、1件落……」

いや終ってないから。まだまだ先があるから。

「んだよ、勘定奉行のモノマネくらいさせろやい」

駄目だ。さつ、ほら先に行く!

「さて、その前にあいつはどーすんのよ」

んっ? あつ……。

よろよろとした動きでこちらに付いてきた妖夢。

先程までの狂気のせいで身体はおろか精神にも結構な負荷がかかっているようだ。

「おいおい無理すんな。死ぬぞ」

「だ、大丈夫……です。半人半霊はこの程度では……し、死にません……から」

とは言うものの、見ているこつちが辛くなりそうな状態だ。

仕方ない。少し強引にでも言う事を聞かせておこう。妖夢は頑固な性格だから。

クロ、頼んだ。

「えっ!?俺かよ!?ったく……。あゝ妖夢、ちよつと休憩した方がいいと俺は思うぞ」

「だ、大丈夫です」

「……はあ。分からないか?今のままだとお前さんお荷物だ。それならまだいいんだ。

お荷物程度なら俺がどうにかする事が出来る。だけどな、そのまま無理して死なれても

こつちが困るんだよ。分かるな?」

「……そ、その通りですが……」

「もしお前さんが死んだら幽々子はどうするよ。悲しむぞ。だからさほら、休んどけつ

て。充分に回復したら付いてきていいからさ」

「分かりました……。では、休ませて貰います」

おお、見事に言いくるめたな。カツコイイじゃん?

「止めろ。恥ずかしくてこっちが死にそうだ。ところで身体は返さなくてもいいの
か？」

返さなくていい。だって返ってきてもどうせ筋肉痛地獄が待ってるだろうし。今は
それは避けたいかな〜って。

「分かった。それじゃ行くか」

よく考えたら、まだここ玄関なんだよな……。うへえ……。きつそうだな。まあ、僕は
関係ないんですけどね！

緊張感漂う屋敷の中にとどうとう踏み入った僕とクロ。

先はまだまだ長そうだ。

偽りの月と永遠の夜 第10話

永遠亭最深部。

そこには3人の女性の姿があった。

1人は紅白の巫女服を着ており、もう1人は白黒のエプロンのような服を着ている。

そしてもう1人は、青と赤の配色が施された服を着た美しき女性。しかし、その妖艶で美しい姿とは裏腹に彼女の手には大きすぎる弓が握られていた。

一見して木で作られた簡素な大きいだけの弓に見えるが、その弓からはとても恐ろしい程の妖気が溢れているのを霊夢は感じた。

「なかなか早かったわね、お二方さん？少々警備が緩かったかしら？」

弓を持った女性は不敵に笑う。

対して、霊夢と魔理沙の顔は真剣その物だった。

「霊夢……」

「ええ。分かっているわよ……」

弓もさる事ながらあの女性本人の妖気も凄まじい。

霊夢と魔理沙はこれ程の力は目の当たりにしたことは無かった。

この時既に2人は悟っていた。もしかしたら勝てないかも、と。

だが2人は引き返しはしない。これまでもこんな状況は乗り越えてきたからである。

「あらあら、引き返す気は満更ないようね?」

「あたりまえよ。あんたをさっさと倒してこの異変を解決させるために私たちは来たんだから」

「そう……それなら」

「っ!?」

突如部屋中を支配する圧倒的妖気と威圧。

想像以上の力に驚きながらも、2人は一斉に動き出した。

「!?」

静けさが支配した屋敷の廊下をゆっくりと歩いていた時、不意にクロが立ち止まった。

「いったいどうした?」

「………(っ)いつは相当やばそうだ」

「何がやばいんだ?」

「一瞬だが3つの力を感じた。霊夢と魔理沙と何かの力だな」

という事は、2人は既にここの親玉の元まで行っているって事か。だけど、どうしてそんなに焦ってるんだ？

「問題は、その何か、親玉らしき奴の力が2人の力を上回ってるって事だ」
つまり……!?!?

「そう。下手すると、いや、下手しなくとも2人は負ける。ここの親玉にな」
それなら、なおのこと急がないと！

「ああ、分かっているさ」

クロは静かで無人の廊下を一気に駆け出した。

「はあ……退屈ね〜」

永遠亭のどこでもない何処かの部屋の中。

そこには1人の姫が退屈そうに足をバタバタさせながら座っていた。

彼女の正体、それはあのおとぎ話の登場人物、かぐや姫。

そんなかぐや姫は、ふと自らの美しい髪をなびかせながら立ち上がった。

「そうだ。誰かこのお部屋に招待しちやえ」

永琳から何もするなと言われていた事などすっかり忘れ、彼女は部屋を出た。
向かう先は何処なのか……。

まいった。これは予想してなかった。

「この親玉……名前は永琳って言ったかしら。とにかくその永琳とやらを私は甘く見すぎていた。」

「もう終わりかしら？」

確かに弾幕を何度か当てた。近接攻撃もやった。スペルカードも何度も使った。

相当な体力を消費しているはず……なのに何故？

何故あいつは息一つ切らしてないのだろうか？

チラリと魔理沙を見る。どうやら私と同じく相当疲れてる。

ここまでしているのに、何故あんなにも余裕そうに笑えるのだろうか？

私は沢山の疑問を消化出来ずに焦っていた。

このままでは……負ける。負けてしまう。

その時、永琳が動いた。

手に何かを……スペルカード!?

ここに来て初めてのスペル宣言。まずいわね……。

「ターン交代ね」

そして、絶望的な時間が幕を開けてしまった。

「着いた!!」

走り出してから10分。ようやく最深部らしき所にたどり着いた。

てかこの屋敷迷路すぎる。ここに住んでる人って相当記憶力がいいのかも……。

1枚の魅の奥には、禍々しい程の妖気が漏れていた。

「おいおい……こりや花の妖怪並だぞ」

幽香さん並の実力者……。果たして勝てるのかも不安なってきた。

だが退く訳にはいかない。早くこの異変を解決しないと。

勢いよく魅を蹴破る。……!?!

そこには信じられない光景。

「か、片倉!?!」

ポロポロな姿の霊夢と奥に気絶しているであろう魔理沙の姿があった。

そして、手に大きな弓を持った女性。この人がこのボスで間違いないだろう。半端

じゃない妖気を感じる。

……ここまでボロボロの霊夢は初めて見た。これはつまりあの女性が相当な強さを有していることを表しているに違いない。

「なるほど。第二の侵入者はあなたね。初めまして、私は八意永琳」

「丁寧な挨拶どーも。だけど今は自己紹介なんてして暇はねえ。単刀直入に聞くが、異変の犯人はお前らだな？」

「あなたにはもう分かっているはずでしょ？ その通りよ。私たちがこの異変の犯人よ」

「何故起こした？ 理由を聞きたい」

「……それについては話す気は無いわ」

「そうかい……。それなら仕方ない」

軽く目を閉じそしてまた開く。その目は今までにない本気の日だった。

「気乗りはしないが、お前をぶっ倒す」

「面白いわね。抗ってみなさい、この月の頭脳に！」

永琳の言葉が終わる直前、クロは地面を蹴った。

魔力による補正で速度を上げ、更には能力で2倍したクロの動きを見切れる者はここには居なかった。

完全なる疾風迅雷の不意打ち。懐に入られてもなお反応すら出来なかった永琳は、次

に繰り出されるクロの左拳を防ぐ事は出来なかった。

ドゴオ!!と鈍い音と共に永琳は吹っ飛ぶ。常人なら死んでもおかしくないだろう。

「……ほんの挨拶替わりだ」

狂気と恐怖。今のクロにはそれが相応しかった。

いや、これが本来のクロの姿なのかもしれない。

霊夢がふと隣にきた。恐らく加勢するつもりだろう。

「私も加勢するわよ」

「いや、休んでろ。足でまといだ」

「……そう。それなら任せたわよ。正直限界だったし……」

やけにあっさり引き下がったな。まあそれほどダメージを負っていたのだろう。

視線を戻すと、永琳は立ち上がりこちらを見ていた。

「なるほど。あなた……」

何かに気づいたかのような面持ちでこちらを見ている。

しかしそんな事はどうでもいい。今は戦いに専念せねば。

さて、次はどう攻めるおつもりで？

「決まってるだろ……」

ダッ!と勢いよく駆け出し、再び接近戦へと持ち込もうと試みるクロ。

だが、その試みは一筋の光によって中断せざるおえなくなつた。

「おおつと危ね」

「よく避けたわね。不意をついたと思つただけど」

ふと見ると、永琳は大きな弓の弦を大きく引いてこちらを射抜こうと構えている。

なるほど。妖気を矢として放っているわけか。道理で弓だけを手に持つてゐる訳だ。

矢筒要らずか……。

パシユン！と弦が勢いよく一筋の妖気の矢を撃ち出す。

少し先へと進んだその矢は、まるで散弾のように突如分裂した。数は……10本!? 10倍かよ！

しかも厄介なことに、あちらこちらへと飛んでいった10本の矢はスーパボールよろしく壁や床を反射した。

しかし焦ることは無い。クロならなんとか躲すはず。

「チツ……」

スパツ。1本の矢が頬を掠めた。……あれ？

すかさず、1枚のカードをクロは宣言する。

〈舞閻 ダンシング・ナイト〉

真つ黒で小さい菱形の弾幕たちが、渦巻きながら無数の矢を打ち消す。

弾幕はまるで、踊っているかのように全ての矢を鮮やかに打ち消していた。全ての矢を消した。だが、何かおかしい。とてつもない違和感が僕の心の底から離れない。

「……」

じつと見つめてくる永琳。その顔は少し笑みを含んでいるようにも見えた。

「そろそろ辛いんじゃないかしら？」

「何がだ？」

「フフ……。あなた自身よ」

余裕そうな永琳に再びクロは素早く接近する。

背後を完全にとった。

大きく振り上げられる拳。しかし、その拳は永琳に繰り出されはしなかった。

「!？」

永琳はいち早く反応し、クロの右腕を掴んでいた。

「あら、まだ気付いてないのかしら？あなたさつきより……格段に動きが鈍くなってるわよ？」

「チツ……。この野郎……」

バツ！と腕を振りほどき下がるクロ。

その額には一筋の汗が流れていた。

ま、まさか……。

「はあ……ばれちまったか。結構上手く誤魔化したつもりなんだがな」

もしかしてお前……。

「そうだ。最初は良かったんだがな。そろそろ辛いんだわこの身体。俺でも症状を抑えるのは難しくなってきたな」

原因は言われなくとも分かりきってる。身体が無理をしすぎたんだ。それ以外考えられない。

「私と思うに、早く医者に見せた方がいいと思うわよ。とてつもなく辛そうなもの」

「そうだな……それが懸命かもな」

おい!?!クロ!?!

諦めるのか?ここまで来て、ようやく目の前にラスボスがいるというのに……。

レミアアさんやフランちゃん達はどうするんだよ!

「だが……」

僅かばかりの間目を閉じ、クロは沈黙した。

そして、目をゆつくりと大きく開き、こう続けた。

「生憎、諦めが悪い性分だな。お前さんには悪いが、ここからは冗談抜きの本気で行かせ

てもらうぜ」

「ここまできても尚諦めないのね……。分かったわ、私も本気で行くこうかしら？」
永琳が手元から一枚のカードを取り出す。

見たところによると、切り札らしい。相当ヤバイ代物だと直感する。
となると、だ。こちらもそれ相応のスベルで挑まないとな。

手持ちは……うーむ、やつぱりコイツしかないか。

風刃と雷刃のカードを手取る。

だがこれだけだと確実に力不足だな。

そうだ、フオーアブカインドがあるか！

「止めとく。それはもう使わない」

へ？なんで？

「他人のスベルカードつてのはな、模倣してあるだけに性能が低い。それにコスパも悪いし身体への負担も激しいんだよ」

そうなのか……。こりゃ詰みだな。

「かくなる上は自爆するしかねーな」

いやいやいや、それは本当に止めてくれよ？

一応まだ死ぬ気は無いから。

「だがどうするよ？もはや使えるスペルは限られてるんだぞ」

……そうだ！いい事思いついたぞ！

クロ、スペルとスペルって合体とか出来るか？

「理論的には可能だろ。まあ物によつては無理な場合もあるかもしれんが。それがどうした？」

風刃と雷刃を合体させるんだよ！それにお前の能力を足せば……。

「ふむ、成程な。だが何が出来るか分からんぞ。そもそも風刃はお前が主に完成させたスペルカードで雷刃は俺が創ったスペルカード。そこに2倍の能力という物を足す。つまり不安定な物により不安定な物を足すんだぞ？何が出来て何が起こるかは検討もつかん」

でもこれしかないんだし、それでいこう！

時間はもう無い。迷ってる暇など無いんだから。

「分かった。こりゃ本当に自爆するかもな」

その時は笑って自爆しようぜ？

「そうだな」

ああそうだそうだ。

霊夢と魔理沙は避難させておこう。

もしかしたら、いや、もしかしなくとも巻き込むからね。安全第一さ。

「おい霊夢、魔理沙を連れてこつから離れとけ。死ぬかもしれない」

「ちよつとそれどういう意味よ。て言うかさつきからあんた達の会話を聞いてる限りじゃ、あんた病気みたいだけど……なにか隠してるの？」

……あ、バレてるわ。そう言えばずっとそこに居たか。

「とにかくそれは後で話すから、急いで離れろ」

「分かったわよ。絶対に話しなさいよ？あと、それと……」

「??」

「死なないでよ」

「あつたり前だ」

さてさて、霊夢も避難したし……

目を閉じ、全ての神経をスペルカード創造に集中させる。

風刃、雷刃、そして能力。

複雑に絡み合うこれらを何とかして組み合わせさせていく。

刹那、頭の中に一筋の光が見えた。

ゆつくりと目を開き、右手に握りしめるカードを確認した。

感じた事の無い圧倒的な力がカードから溢れ出ていた。

そう、成功したのだ。見事、スペルカード同士を合わせる事に成功したのだ。

「こいつは……スゲエ……」

「なんという圧倒的な力を持ったスペルカード……。あの子、天才かしら？」

「さて、そろそろ決着つけようぜ？」

「いいわよ。全力で来なさい」

「言われなくても全力で行くさ」

言葉を言い終えるよりも先に、一気に手に持つカードを天高く上げ、声高らかに宣言する。

作戦なんて知ったこっちゃやない。今はこのカードを信じるだけだ。

〈始焉 エンド・バイ・スターティング〉

眩い光と漆黒のような闇が同時に現れる。

右の方に光が。左の方には闇があった。

二つの対となる物が現れた、ただそれだけ。

ただ、それだけのはずなのに、何故か圧倒的威圧感が場を支配した。

何かが起こる。この場の2人、片倉と永琳は直感した。

その圧倒的威圧を退けるかのごとく、永琳も負けじとスペルカードを唱えた。

〈禁薬 蓬萊の薬〉

永琳を中心に赤の弾幕が目の前を埋め尽くすように飛ばされた。尽きることのない真正正銘の弾幕。しかし、これだけでは留まらない。

青白いレーザーの様なものが、部屋中を生き物のように駆け巡り始めた。

当たれば無事では済まさないことを裏付けるかのごとく、壁を天井を易々と破壊していく。

両者共に、最強の技を繰り出していった。

そして、弾幕と弾幕同士がぶつかり合うまさにその時、一つの影が間に突如として現れた。

「……………あれ?！」

前触れもなく突如として現れた影の正体は、蓬萊山輝夜であった。

偽りの月と永遠の夜 第11話

「!？」

突然の出来事に僕は一瞬だけ混乱した。

この状況での思考の停止はあまりに命取りであるだろうが仕方ない。

何故なら目の前に見知らぬ女性がフラリと現れたのだから。

いったい何者なのか？そもそもどうやって現れた？と言うか以外に美人……。

違う、そういう事は今はどうでもいい。それよりも今はもつと大事な事がある。

この人が弾幕に巻き込まれる事だ。

幸い僕のスペルはまだ発動はしていない。しかし、あちらのスペルは既に展開されて

いて、消そうにも消せない。

つまり、このままだとあの弾幕の波にこの謎の女性が抵抗出来ずに飲まれる事になる。それは即ち……死ぬことすら有り得る。

だが、ここは幻想郷。もしかしたらあの女性は妖怪か何かであつて、死ぬ事は無いかもしれない。

つまりここで自らのリスクを背負つてあの人を助けるのは流石に……。

頭ではそう考えてはいたが、僕の身体はそうでは無かった。

「おい片倉! お前死ぬ気か!？」

無意識の内に僕はあの女性を助けるために、真つ向から弾幕の波に突っ込んでいった。

本来ならまだ身体をコントロールしているのはクロであったが、何故か身体は僕の意思通りに動いていた。

それ程に、この無意識の行動には強い意志があったのかもしれない。

しかし、助けるために飛び出したのは良いけど……。

眼前の迫り来る弾幕の波。

……どうやってあれを止めよう。全くもって考えてなかった。

落ち着け落ち着くんだ……。と、とりあえず素数を数えつつ、この状況を打破する手立てを考えるんだ。

「ねえちよつと、ちよつと!」

ふと、そばに居た謎の女性が叫んでいることに気がついた。

ええい! 今は考え事の真つ最中だというのに……。これじゃ集中出来な……。

「何で私を助けるのよ? あなた見た見た所人間だし、早く逃げた方がいいんじゃないの?」

「助けるも何も、そりゃあ美人な人が危なかったら助けるのは当然だと思っただけだ」

「んなっ!?び……美人……」

それはともかく、さてこれはどうしたものか。というか、もうすぐ目の前に弾幕来るんですけど。

そうだ、こうなればあれだ。ヤケになってスペルを撃ち込もう。

まあこれぐらいしか出来ることは無いのだけど……。

さつき作ったスペルは……駄目だ。威力と範囲が未知数なこれを使えば、この人を巻き込む可能性がある。却下だな。

そうこうしている内に、弾幕はもう目と鼻の先まで迫ってきた。

とりあえず右腕で女の人を引き寄せる。

「後ろに下がりますんで、しっかり捕まっけて下さい」

「えっ?捕まっけて何処を」

「どこでもいいですから……いきみますよ!」

「ちよっ!」

足に力を溜め一気に後方へと飛び下がる。よかった、なんとか右腕の袖に捕まってる。

女性の安否を確認した所で間髪入れずに一枚のカードを宣言する。

〈光符 メテオールスパーク〉

一筋の光線が弾幕の塊を穿ち、ポツカリと大きな穴を開ける。

とりあえずこれで時間は稼げる。今のうちにこの人を外へ出そう。

その時、身体に酷い激痛が走った。

「っ!?!」

息ができない程の激しい胸の痛み。しまった……無理しすぎたか。

「ちよ、ちよつと!?!大丈夫!?!」

「あ、あなただけでも……逃げ……」

まずい……もう弾幕がそこまで来てる……。

と、とにかくこの人だけでも……。

「ちよつと!?!しつかりしなさいよ!」

ああ、僕の方に気を取られて弾幕の事に意識が向いてないか……。

もう駄目だ。諦めかけたその時、彼女は急に手元から何かを取り出した。……あれは

スペルカード?

そしてそれを宣言した。

〈神宝 サラマンダーシールド〉

巨大な炎がまるで盾のような形となって、目の前に現れた。

全てを燃やさんとするその炎は不思議と熱くなく、むしろ暖かく感じる。

そんな盾はぶつかった全ての弾幕を打ち消していく。

おいおい……もしかしてこの人……。

圧倒的な力を持つスペルカードを目にし、確信した。

この人は相当の実力者だ。

「絶対に死なな……で！」

薄れゆく意識の中で彼女の言葉が聞こえる。だが、最後の方はなんと言ったのか聞き取れない。そして僕はとうとう気を失った。

「はっ!？」

目を覚ました僕は、ガバツと起き上がる。

どうやら誰かが運んでくれたらしく、布団が敷いてある。

ここは……まだあの建物の中か？ だけど場所が違うな。

「あら、起きたのかしら？ 駄目よ。まだ寝てないと」

声のした方に目を向けると、そこには先程まで戦っていた八意永琳の姿があった。

「!？」

すぐさま戦闘態勢に入ろうとするが、痛みがそれを拒否した。

「止めておきなさい。まだ治ってないのよ？それに、殺す気なら、とうの昔に殺してるわよ」

それもそうか。

そう言えば霊夢と妖夢はどうなったのかな。はっ!?月は?月はどうなったんだ!?

「月はどうなったんだ!?!」

「ああ、あの月なら元に戻したわ」

えっ?まじで?よかったあ、無事に解決したのか。

イタタ、安心したせいかな身体が痛むな……。

「あつ、そう言えばあの女の人はどうなったんですか?それに霊夢と妖夢は?」

「ああその事なんだけど……実はね……」

「ねえ永琳アイツ起きた?」

元気のいい声と共に、ガラガラと勢いよく襖が開けられた。

誰が入ってきたのだろうか……って

「あつ……」

「あら?起きてるじゃない」

あの時の女性だった。

その女性は僕に近寄るとバシバシと背中をたたき出した。

「アタツ!？」

「すっかり元氣じゃない。良かった良かった」

健康状態の確認として怪我人を叩くとは、なんという人だ……。

というかこの人は本当に何者なんだ？一応この関係者だとは思うけど。

「やめなさい輝夜。まだ完治してないんだから」

「どうやらこの女性の名前は輝夜と言うらしい。」

「あの、この人何者なんですか？」

「私は蓬莱山輝夜。こここの主よ」

「そうなんですか……え？主？」

「そう主。この永遠亭で一番偉いのよ」

「これにはびっくり。てっきり僕はこの永琳と言う人が主かと……。」

「というか一つ聞きたかったんだけど、なんでわざわざ私を助けようとしたのよ？」

「いや、戦いに巻き込んで死なれたら……ねえ？」

「私も永琳と同じで死なないから別に助けなくても良かったのに……」

「……は？死なない？」

「ええ。死なないわよ。不死身の体なよ。私も」

「何じゃそりゃ!？」

と言うことは僕のあの決死の行為は……。

ガツクリと項垂れた僕を見た輝夜はケラケラと笑いながら背中を叩いてこう言った。
「アハハ！まあまあそんな事もあるわよ」

何なんだこのポジティブ精神は……。というか背中痛いから。さつきから叩きすぎだから！

ところで色々はこの人のせいで話題がそれまくったけど、月を隠す必要ってあったの
だろうか。

そもそも月を隠していったい何がしたかったのか……。

駄目だ、考え出したら気になってきた。こういう時は直接聞いてみよう。

「どうかしたかしら？」

「いえ、どうして月を隠したのかと思っただけですよ」

「あの時は言わなかったけど、今更隠しても意味は無いし、教えてあげるわ。全ては輝夜
のためにした事なのよ」

「全ては輝夜のため？」

「竹取物語って知ってるかしら？」

「ええ。学生時代に習いました。竹から生まれた人が云々って話ですよね」

「そう。童話ではそれはかぐや姫とも言われるわ」

「まさか……」

「そのまさか。私はあのかぐや姫よ」

唐突に話の間に入り込み、えっへん！と自慢げにする輝夜。

そんな彼女をとりあえず無視して永琳は話の続きを再開した。

「竹取物語は空想のおとぎ話ではなく、本当にあつた出来事。月には都があり、輝夜はその月の都の姫だったのよ。ああ見えてもね」

「ああ見えては余計よ！」

「でもある時、輝夜は月の都における、ある一つの禁忌を犯したのよ」

「禁忌？」

「地上の穢れに晒されること。つまり、この世界の地面に降り立ったのよ」

「え？でも前にも地上の世界にいたんだから別にいいんじゃないんですか？」

「あれは月の都における恒例儀式みたいなもの。都の上層部に公認されての事よ。けど2回目の地上への来訪は違う。誰にも認可されてない都における最大級の犯罪行為よ」

そうだったのか。月にも月なりに色々と規約やら何やらがあるのか。

上層部が……とか言っていたが、月の人々はもしかしたら組織的な人種なのか？

「そしてある時、そんな輝夜の事情を知った私と鈴仙は、この永遠亭に匿うことにした

の

「あれ？永琳さんと輝夜さんは一緒に行動してた訳じゃないんですか？」

「ええ。私と鈴仙はもつと前から月の都から逃れた逃亡者ね」

「いったい何故都から逃亡を？」

「鈴仙は元は月の都の優秀なエリート戦闘兵だったらしいんだけど、戦争に赴くのが嫌になって逃げ出したの。私の場合は、本来は手をつけてはいけない蓬莱の薬を自分に使い、さらにそれを外部へと持ち出したわ」

「蓬莱の薬？」

「飲んだ者を不死身とさせる薬よ。月の都の姫以外には使用を許されてはいなかった薬だったわ」

「ちなみに飲んだ人はどういう処罰が？」

「ん？永久に幽閉されるわ」

ニツコリと満面の笑みで答える。いや怖いから!?!余計にその笑みが怖く見えるから!?

「こうして、私と鈴仙、輝夜の3人は仲良く隠居生活をしてたんだけど、ある時良くない情報が舞い込んできたの」

「……追手ですか？」

「そう。輝夜の逃走事件の事態を重く見た上層部らが、地上の世界全域に月の使者を送ることにしたの。そしてその月の使者がやって来る日が」

「満月の日の今日……だったと?」

「その通りよ。彼らは満月の時にしか地上にはやって来れないわ。何故なら、満月の灯りを頼りにここへと来るから。だから、月を永遠に偽物にすり替えて、絶対にここには来させないようにした。これが今回の私たちが起こした異変の理由よ」

「そうだったのか。これが今回の異変の原因……。」

僕がレミリアさん達を必死に助ける事と同じで、永琳さんたちも輝夜さん又は己の身を守る為に必死だったわけか。

「何だかそんな事言われてしまうと、問い詰めたり避難したりは出来ないかなあ……。」

結局は誰かを守りたいがための行動なのだから。ただそれが、この住人の命を脅かしかねない行動ではあったのだが……。」

「けれど、どうして戻す気になつたんですか?」

「あなたが輝夜を助けようとして気絶した後、輝夜に怒られたのよ。月の使者から逃れるために、私に内緒でこんな大事起こすなんて!」って」

「内緒にしてたんですか?」

「ええ。輝夜の事だから、なんだか状況を悪化させるだろうと思って」

「そんな事ないわよ！」

いや、意外と状況を悪化させた気がするのだが……。

あの時フラリと現れなかったら、僕は死にかけることも無かつただろうに。

「そんな口論をあつ紅白の巫女が聞いてたよう、急に間に割りいつてこう言われたのよ。そんなことしても意味無いから、つて」

「意味がない？」

「この幻想郷にはどうやら博麗大結界と言われるいかなる物も外部からは干渉できない巨大な結界が貼つてあるらしいわ。その結界の力で月からの使者は絶対にここにはたどり着けないのよ」

そう言えば前に霊夢が博麗大結界云々みたいな事を言つていた様な気がする……。

外部からは一切の干渉を受け付けない博麗大結界……凄いな。

でも待てよ……そんな結界があるのにどうして僕は幻想郷に入つて来れたんだ？

「という訳で、永琳がそれからすぐに月を元に戻して一件落着。紅白の巫女も満足して帰つていったわけね」

「ああ、霊夢はもう帰つたんですね」

「お前はいつたたい何を言つているんだ？と言わんばかりの不思議そうな顔で輝夜がこう答えた。」

「……? 当たり前じゃない。だって異変が解決したの、もう2日も前なんだから」
「……へ? 2日も前?」

と言うことは、つまり……

「そういえば言っただけじゃなかったわね。あなた、あれから2日間も寝てたのよ? まあ、あの程度の怪我なら上等なんじゃないかしら」

マジすかアアアアア!?

ちよつ、急いで紅魔館に帰らないと皆が心配してる!

「駄目よ。まだあなたはここに居ないと。怪我が治るまではここに居てもらわうわ」

「ええええ!?! 何ですか!?! オンドウルラギツタンデイスカ!?!」

「私はこれでも一応れっきとした医者よ。医者として怪我人をそのまま危険な外に出すわけにはいかないわ。いいわね?」

「いや、でもっ!」

「い・い・わ・ね?」

「はい……分かりました」

「分かればよろしい」

あれじゃ医者というより、マッドサイエンティスト……は違うか。

とにかく紅魔館の皆様、僕はまだ帰れなさそうなんで、どうか安心してお待ちください

い。僕は一応無事なんで……。

閑話 其の三

永遠を生きる者

片倉が目を覚ます少し前の時刻。

異変が解決したことにより、紅魔館は相変わらずの平常な日常を取り戻した。

「おはようございます、お嬢様。気分の方はいかがですか？」

「おはよう咲夜。気分は悪くないわ、少しずつ力が戻ってきているわね」

「それは良かったです。パチュリー様の方も魔力が元通りにまで回復したそうです」

「そう。それは良かった。ただ……」

レミリアが大きなため息をつく。その理由は誰もが思っているある一つの不安な事。

「あれ以来、片倉様をお見かけしませんね……。美鈴には帰ってきたら即報告するようにはしていますが……」

「あいつが帰ってこないおかげで、フランも少し引きこもりがちになっちゃったわ」

「もしや異変の解決の際に……」

「咲夜」

いつもの声よりも厳しい声。

その声の意味を察した咲夜は咳払いをする。

「ゴホン……。失礼いたしました……」

重々しい空気がレミリアの寝室を支配する。

そんな空気を消すかのように、唐突にレミリアが元気な声をあげた。

「まあ、片倉の事よ。きつと無事に解決してどこかで道草でも食べてるのよ。いずれ帰ってくるわ。さあ咲夜、私はお腹がすいたから朝食を早く作ってちょうだい」

「はい、かしこまりましたお嬢様」

パタン。と寝室のドアを閉め、いつも通りの仕事へと戻る咲夜。

長年レミリアの従者として連れ添った彼女にはハッキリと分かっていた。

あんなに気丈にレミリアは振舞ってはいるが、本当は心配で仕方が無いことを。

場所は変わり永遠亭。

僕の隣には何故か輝夜が居た。

「ねえねえ、遊びましょ」

「いいですけど、何をするんです?」

「ん、弾幕勝負でもいかが?」

「お断りします。僕は怪我人ですよ？」

「分かった。じゃあ私と婚約でもしない？」

「どうしてそこで婚約の話が出た!？」

「アツハハハ！冗談よ冗談」

あれからかれこれ3時間が経った。

その内のなんと3時間、3時間もこの隣にグイグイと執拗な嫌がらせを仕掛けてくる、この麗しきかぐや姫の相手をしている。

正直に言つて疲れます。はい。

この人の厄介な所は、自分の見た目をよく理解した上でわざと誘惑をかけてくる所だというのが、この3時間でよく分かった。

正直こんな美人からグイツと迫られたら、否が応でも気になってしまう。

ああ、早く紅魔館に戻りたい。これならまだ純粹無垢な吸血鬼を相手にしていた方が精神的に落ち着けるのだけど。肉体的には死ぬけど。

「ね〜遊びましょ?」

耳元で囁かれ、少し心臓が高鳴る。……だ、駄目だ、本当に精神が持たん。

その時、急に襖が開いた。

「失礼するわ」

入ってきたのは永琳さんでした。

ああ、助かった。この空気からようやく脱せられる。ありがたやーありがたやー。

「どうして私を拜んでるのかしら?」

「命の恩人だからです」

心と身体の両方の命の恩人ですあなたは。本当に感謝。

「それはそうと輝夜、少し席を外してもらってもいいかしら?」

「なんでよ? 私はこいつをもっと弄びたいんだけど」

「片倉くん健康確認の為よ。それが終わったらいくらでも弄ぶなりなんなりしていいから」

おい待てその医者。なんなりしたら駄目だろ。怪我人に無理をさせる気か!?

「分かったわく♪早く終わらせてね」

いやいや、君も君で何をルンルン気分で承諾してるのかね? 遠慮したまえ少しは。

そんな僕の気持ちなど知らず、早々に部屋から退出した輝夜。

「はあ……しんどい」

「あなた、どうやら輝夜に気に入られてるようね。良かったじゃない」

「嫌われるよりかマシですが、良くは無いですね。弄ばれる方は結構しんどいですよ?」

「まあまあ、輝夜も遊び相手が居ないからそこは我慢してあげて?」

「なんだか輝夜さんの母親みたいですね」

「んー、長らく輝夜の世話役として生きてきたから」

あの人の世話役か。……それは大変ですな。

「さてと、早くやる事やらないと輝夜に怒られちゃうわね」

「健康診断ですよね？」

「まあそれもあるけど、本当の目的は違うわ。実は片倉くんに伝えたいことがあるのよ」
「なんです？まさかとは思いますが、輝夜さんの世話役頼むんじや無いでしょうね？
嫌ですよ？」

「いいえ、違うわ」

良かったああああ。てつきり紅魔館と同じパターンかと思つて警戒した。

「片倉くん、今の身体の状態に問題は無いかしら？」

「ええまあ。あの時の怪我もだいぶ良くなりましたし……」

「嘘は良くないわね。時折発作が起こつてるのは分かつてるわよ？」

うぐつ……やっぱり誤魔化せないか。

「……バレてましたか。そうです、僕は病氣です。しかもそう長くは生きられないと思
います」

「そうね。確かにあなたは長くは生きられない。けどそれは病氣のせいではないわ」

「どういう事です?」

「あなた以前に誰かから呪いをかけられた覚えはないかしら?」

「呪い? いやいやいや、かけられた覚えなんか微塵もないですよ」

病氣じゃなくて呪いだって?

半ば信じ難い話に僕は啞然としていた。呪いなんてこれっぽっちも考えてなかった。

というか本当にこの発作の原因は呪いなのかすら怪しいところだが……。

「信じてないって顔ね」

「そりや常人の考え方でいけば普通は有り得ない事ですからね」

「そうね。でも残念ながら呪いは事実よ。あなたが意識を失っている時に、私が身体を

隅々まで検査したから。内蔵の状態だってちゃんと確認したのよ?」

「へえくそうなんですか……って、は?」

「ん? どうかしたかしら?」

「すいません。今、なんと言いました? 内蔵?」

「ええ。内蔵の状態もしっかりと確認したわ。健康そのもの。凄く正常だったわ」

「……どうやって診たんですか?」

「それはもちろん解剖よ♪」

ニコツツと笑いながら、とつてもクレイジーな事を仰られるマッドサイエンティストが

「ここに居た。」

「すみません。やつぱり僕帰ります」

「まあまあ落ち着いて落ち着いて」

「嫌だああああ！だ、誰かこのマッドサイエンティストから僕を助けてえええ！」

しかし怪我人がどう足掻こうとも、この悪魔に逃げる事は出来ず。

すぐさま取り押さえられ無理やりベッドへと引き戻されるのであった。

「やめろー！死にたくないーい！死にたくないあああーい！」

「とにかく落ち着きなさい。ほら、自分の体を見てみなさい」

「ん？自分の体……」

服をめくり、体の隅々をじっくりと見たが、驚く事に縫合はおろか体を切った痕すらも微塵も無かった。

「ここ、これは？切った痕が無い？」

「そう。私の技術をもつてすればこのくらいは簡単よ。大丈夫、解剖はしたけど支障をきたさないように、しっかりと元に戻しておいたから。だから安心しなさい」

安心出来るかともかく、どうやら永琳さんの外科技術は凄いらしい。

まあ今更不安がっても仕方ない。大人しくこの人の言うこと聞いて怪我を急いで治そう。——そして早くここから逃げよ……。

あれから3日経ち、僕の怪我は永琳さんのお陰で完治した。外の世界だったら1ヶ月以上はかかるんだが……。

まあという訳で、僕はなんとかこの魔の巣窟もとい永遠亭を出ることが出来る訳だが……

「それじゃ永琳さんありがとうございました。それと輝夜さんもお元気で」

「えー、もう帰るの？もう少しここに居なさいよ」

「いや結構です。こちとら、もう精神が持たないんで」

何度あなたを襲おうとした事か……。まあ戦場で鍛えてきた不屈の精神で乗り越えてきましたかね。

しかしそんな事を言いながらも、去り際に少し寂しそうな表情を見せられるとなんかこう……また来てもいいかも、なんて気持ちが出てきた。

「まあもしも、またここに来たら遊んでもいいですよ……」

「本当？じゃあまた明日来なさいよ！絶対に来なさいよ！」

いや、明日は流石に早すぎはしないですか？

そんなこんなでそろそろ出発しようと思ったその時、永琳さんからある小さな布袋を

手渡された。

「これを持っていきなさい」

「これは……薬ですか？」

「ええ。発作が出た時に飲みなさい。呪術は完全に私の専門外だけど、症状を緩和させる事くらいは出来るわ」

「ありがとうございます」

「それと、もしあなたが呪いを解くのに失敗したらここに来なさい」

「どうしてです？」

「あなたの意思に委ねはするけど、蓬莱の薬をあなたに飲ませるからよ」

「蓬莱の薬……ですか。あの時に話した不死身になると言われる……」

「そう。あなたは輝夜に好かれているし、正直私としても死なせたくは無いのよ。だからね？」

「そうですか……」

確かに不死身になれば、その呪いとやらで死ぬ事は無くなるのだろう。

だが、永遠を生きるということは想像以上の覚悟が必要なのもまた事実。

死ぬという人としての運命から逃れ、永遠の時を過ごすのは到底自分には無理だ。

だからこそ、ここはキツパリと断らなければならない。

自分には不死者として生きていく覚悟はないとハッキリと伝えなくてはならない。

「すいません。それはお断りします。自分にはその薬を飲む覚悟はありません。それに、ここで死ぬのも何かの縁、いや運命なのかも知れませんが、僕はそれに身を任せようと思います。まあ出来るだけ抗ってはみませうけどね」

「そう……。あなたがそう言うのなら仕方ないわね。だけでもし、気が変わったのならここへ来なさい。私たちはいつでもあなたを歓迎するわ」

「ありがとうございます。では」

挨拶も程々に、僕は永遠亭を発った。

残された時間は余りにも少ない。だが、僕はその運命には絶望はしない。

必ず呪いをかけた術者を探し出し、呪いを解く。

たとえそれが不可能に近いことであろうも、僕は決して諦めない。

まだ、己の人生は終わってはいないのだから。

禍福はあぎなえる縄のごとし

いやゝ帰ってきました、紅魔館！

久しぶりの紅魔館に少し僕は安堵した。なんというか、我が家に帰ってきた感じ？
まあ、本当の自分の家では無いのだが……。

「うくん……むにゃむにゃ……」

「ん？」

正門では相変わらずの光景がそこにあつた。

我らが紅魔館の居眠り門番、紅美鈴だ。

恐らくそのまま眠り続けていれば、間違ひなく咲夜さんにナイフで刺されるだろう。

そこで親切な僕は、優しく美鈴を……ナイフで刺した。

「イッタアアイ!?ね、寝てないですよ咲夜さん!だ、断じて寝ては……つてあれ?」

「居眠りは駄目だよ美鈴……つてどうした?」

「か、片倉さん!?生きてたんですね!」

「う、うん。きゅ、急にどうした?」

いつもとは違う反応に戸惑ってしまふ。

まあそれも仕方がないか。一応1週間位は音沙汰無しで行方不明みたいなもんだつたし。

「お嬢様が待つてます。急いで行ってあげてください」

どうやらこの主の可愛い吸血鬼様がお待ちのようだ。

それはいけない、すぐに行かなければ。別にロリコンとかそんなのでは無い。断じて無い。

「分かった。そういえば僕が居ない間、何か変わった事あった？」

「そうですね……特にはないです。あえて言うなら妹様が少し引きこもりがちになってますね……」

「フランちゃん引きこもりがちに……。今度遊ばないといけないな」

「そんなことよりも早くお嬢様の元へ。1番心配されてたんですよ？」

「えっ、そうなの？ちよつと意外……。分かった、それじゃすぐにレミリアさんの所に行くよ」

「あつ、それと！」

「ん？」

急な呼び止めにビックリしつつ振り向く。

すると美鈴がとても真剣な顔でこう言った。

「私が居眠りしてたのは内緒にしてください」

「了解」

手を合わせ命乞いをするかの様な美鈴の必至な姿にちよつと笑つてしまった。

仕方ない、今回ばかりは見逃してあげよう。

そう思いながら、僕は足早にレミリアさんの元へと向かった。

コンコン、とある赤い豪華な装飾が施された扉をノックする。

この部屋はレミリアさんの部屋だ。赤を基調としてる辺りがなんとも吸血鬼っぽさを醸し出している。

「誰かしら?」

部屋の中から声が聞こえた。どうやら起きているらしい。

ゴホゴホと軽く喉の調子を整える。

「あく……片倉です。ただいま戻りました」

「片倉!早く入りなさい」

部屋に入ると椅子に座った小さな吸血鬼が居た。その顔は思わずこちらがにやけそうになるような可愛らしい笑顔をしている。

良かった、どうやら御機嫌が良いらしい。

流石に無いとは思ってはいたけど、会った瞬間怒られやしないかと少し冷や冷やしてました。早く帰ってこいよテメエ！みたいな感じで。

一応こんな見た目でも吸血鬼。怒りの弾幕を喰らおうものなら人間なんてすぐにもあの世にポンツだ。幻想郷って怖いね、周りはどこもかしこも化物ばかりですよホント……。

「無事で良かった。少し心配してたのよ？」

「あはは……すいません。色々あったもので」

「そう。まあ、詳しくは聞かないわ。あなたが戻ってきただけで私は満足よ」

「そうですか。……ところでさつき美鈴から聞いたんですけど、フランちゃんが少し引きこもりがちになっているとかなんとか」

「ええ。遊ぶ相手が居なくて寂しいらしいの。でもあなたが帰ってきたから、また外に出てくると思うわ。フランの事よろしく頼むわよ」

正直フランちゃんの相手をするのは命の危険が伴う可能性が高いから余り気乗りはしない。先程も言った通り、吸血鬼の弾幕を人間が喰ら（ry

まあどこぞの月の姫よりかは純粹無垢で遊んでくれる幾分マシだと思う。

あっちの遊びはなんというか……遊ぶの方だから精神が持たない。

「でも今日のところは自室に戻ってゆつくりとしなさい。フランと遊ぶのは明日でも遅くないわ」

「そうさせてもらいます」

レミリアさんとの会話を終え、部屋を出た僕は久しぶりの自室へと戻った。

何も変わらない自室。だが妙に懐かしい。

暫く居なかつたはずなのに塵一つ見当たらない。恐らくメイドさんが掃除をしてくれていたのだろう。

とりあえず着替えようと上着を脱ごうとした時、不意に後ろから気配を感じた。

「だ、だれ!？」

服を脱ごうと油断していたせいで声が裏返ってしまった。

すぐさま振り向くとそこには紅魔館のメイド長が居た。まあそうだろうとは思っていましたよ。べ、別にビビってはいない。

「咲夜さん、せめてノックしてから入ってください」

「それは失礼しました。久しぶりにお会いしましたので少し悪戯をしようかと思ひまして」

「少しどころかかなりの悪戯ですけどね。あゝびつくりした」

「それは失礼しました」

そう言いながらも、全く悪びれもせず軽く微笑む咲夜さん。

普段ならばこんな事はあまりしないし笑うこともないが、いったいどうしたのだろうか。今日は何かいい事でもあったのか？

「それはそうと、食事はお済みですか？もしまだお済みになられていなかったのなら、簡単な食事くらいはお作りしますけど……」

「ああ大丈夫大丈夫。今はお腹が空いてないから」

「そうですか。かしこまりました」

「そうそう、一つ聞いてもいいかな？」

「何でしょう？」

「さつきこの部屋に来る時思っただけど、メイドさん増えてない？なんか見慣れない妖精さんが多いんだけど……」

「はい。新規にメイドを雇いました。なにやらお嬢様が近々何かしら大きな事をしようとお考えのようで、人手が欲しいらしく新たに雇ったわけです」

「へえ。いったい何するんだろうレミリアさん」

「さあ？私にも教えてくださらなかつたですね」

「そうですか……」

「では私からも一つ良いですか？」

「んっ? いいよいいよ、なんでも聞いて」

「紅魔館に来た時に美鈴は居眠りしていませんでしたか?」

ああ……、やつぱり聞かれるよねそりゃあ。

だが流石に今回は美鈴の為に嘘を言っておかないと……。

「い、いや……寝てなかつたね」

「本当ですか?」

表面上では穏やかにしているものの、今の彼女の心の奥には間違ひなくナイフのように鋭い何かがある。

だが僕はそんな殺気では臆す事はしない。ここは意地でも美鈴との約束を果たす。

「う、うん。本当ホントウ……」

「……分かりました。まあ今回だけは片倉様に免じて許してあげましょう」

どうやら嘘は完全に見抜かれていたようだ。

いやあ……やつぱりメイド長は凄いなあ。こんな嘘なんか易々と見抜くんだもん。尊敬しちゃうね。

「では失礼します。何かありましたらお申し付け下さい。それと……」

「んっ?」

「もう少し上手に嘘をつかないといけませんよ?」

そう言い残し音もなく消えた咲夜さん。恐らく入ってきた時と同様、時間を止めて移動したのだろう。相変わらず凄い能力だ。

というか僕ってそんなに嘘が下手くそなのだろうか？

「うーむ……」

ベッドに寝転がりながら僕は悩んでいた。

呪いをかけたのは一体誰なのか。また、何時どこで呪いをかけられたのか。

さつきから僕の頭の中はその事でいっぱいだった。

だが、考えれば考える程謎が深まるばかりで……。

「だあああああ!!」

威勢の良いボンバイエな声をあげ、勢いよくベッドを起き上がる。

うだうだとこんな所で考え事しても意味は無い。

よし、まずは動こう。こんな時にだからこそ動こう。

まずは情報を集める事からだな。情報……というところやっぱりあの人しか思いつかないな。

そう、幻想郷の自称人気新聞記者である射命丸さんだ。

そうとなれば早速行くか。

外出する為の準備をパパッと整え、いざ扉を開いたその時……

「……………!？」

いつもの見慣れた赤い絨毯の廊下の代わりに、何故かお花畑が広がっていた。白や赤といった美しい花々がそよ風に吹かれ揺れている。

その光景はまさに幻想的であった。

はて?ここは何処なのだろうか。もしや天国なのではないのだろうか……。

とりあえず入ってきたであろう、紅魔館の赤い扉を確認しようと振り返ってみる。

だがそこには扉はなく、無限に続く美しい花畑しか無かった。

その時ふと、隣から何かの気配を察した。

気配のした方を見つめる。そこには1人の女性が立っていた。

その女性は微笑む口元を手に持っている扇子で隠しながら、こちらに語りかけてきた。
た。

「ウフフ、ご機嫌いかがかしら?」

「あなた……あの時の……」

僕はあの女性を知っている。あの人は白玉楼の宴会の時に会った謎の女性だ。

この人はここに来てまだ誰にも明かしていない僕の「仁」という名前を知っていた。

警戒せずにはいられない。

しかし、こちらが敵意を露わにしているにも関わらず、あの女性は変わらず笑顔のままだった。

「そんなに身構わないで頂戴。私はあなたに直接話がしたいだけなの」

「話？」

「そう。あなたには重大な事を言わなくちゃいけないの」

「とうか一つ聞きたい。ここは何処なんだ？」

「ここは私が作った異次元な空間よ。幻想郷でも外の世界でもないわ。ちなみにここに居るのはあなたと私の2人だけよ」

どうやらこの人はよっぽど僕と話がしたいらしい。

逃げる事は恐らく不可能だろう。わざわざ異次元空間を作るくらいだ。簡単に脱出出来るはずが無い。

仕方なく僕はこの女性の話を聞くことにした。

「あなたにはこれから重要な決断をしてもらおうわ」

「決断……」

重要な決断。その内容は僕の予想を超えた衝撃の内容だった。

「この幻想郷から出て行ってもらいます」

「……!? な、なんで……」

「あなたは本来外の世界から来た人間。この幻想郷にとつて外の世界の影響を受けるのはあまりにも好ましくない。だから、この世界の管理人としてあなたをこの幻想郷から追放する事に決定したのよ」

「そ、そんな事言われても……」

「もちろん断ることも出来るわよ?」

「ここに来て間もない僕ならば間違いなく喜んで外の世界に帰ろうとするだろう。実際、一時期は帰ろうと必死になっていた時もあつたし。

だけど今は違う。僕はまだこの世界に居たい。いや、居なければならぬ。

この呪いが解けるまでは絶対にこの世界から離れるわけにはいかない。

だが本当にそれで良いのか?

生まれ育つた本当の世界を捨ててまで、この世界に居ていいのか?

僕が世界中を巡っていた目的を棄ててもいいのか?

分らない。考えれば考える程分からなくなっていく。

「……………」

「決断出来ないようね」

「もしも断つたら……?」

「その時は私が力づくでああなたの存在をこの世界から消すことになるわね。出来るならそれだけは避けたいのだけど」

「……」

「1週間だけ待つてあげるわ。1週間後、またあなたに会いに来るからその時に決めて頂戴。ただ、一つだけ言っておくわ」

「なんだ？」

「あなたが信じた道を進みなさい。それこそがあなたに出来る最良の未来への決断よ」

そう言ううと女性は何処から現れたか分からない謎の隙間へと入っていき、そのまま消えた。

それと同時に世界が次第に白くなっていく。どうやらこの空間が崩壊しているようだ。

「はっ!?!」

気が付いたら僕は自室でぼうっと突っ立っていた。

「……………」この世界から出ていけか」

あの女性から言われた言葉が胸につつかえる。

妙にスツキリしない気分のまま僕は部屋を出て門まで向かった。

「あつ、片倉さんどうしたんですか？」

「んっ? ああ……少し用事が出来たから山の方まで行ってくるよ」

「ええ!? また居なくなるんですか?」

「大丈夫。夜までには帰ってくるから」

「そうですか。ところで片倉さん、なにかありました? さつきから元気があんまり無いですけど……」

「ん? そ、そんな事は無いよ! ただ……」

「?」

「もし僕が幻想郷から居なくなったら紅魔館の皆はどう思うんだろうかなって……」

その瞬間、いつも温厚で優しい美鈴が珍しく厳しめの口調で声を出した。

「それはもちろん皆寂しいに決まってるじゃないですか! お嬢様とかすっごく悲しむと思いますよ! 私だって寂しいし、咲夜さんだって普段は冷静ですけど絶対に悲しい顔すると思います」

「そうかなあ……?」

「そうですね! だから片倉さん、絶対に幻想郷からいなくならないで下さいね!」

美鈴の話聞いて僕は少し心が軽くなった。

「そうだ、この世界にも僕を大事に思っている人がいるんじゃないか!」

「うん……そうだね。ありがとう美鈴、それじゃ行ってくるよ」

「はい！道中はくれぐれも気をつけてくださいいよ〜」

美鈴に手をふって見送られながら僕は森の中へと足を進める。

とりあえず射命丸さんの居そうな所……にとりの工房に行くとしよう。そこしかあの人の居そうな場所知らないし……。

しかし、この時の僕はまだ知らなかった。この体に纏わり付く呪いの本当の正体を……。

色の世の中、苦の世界

静けさと暗闇が支配したどこかわからない森。

そこに一人の男がゆらゆらと歩いていった。

ポロポロのフードを身にまといその下には西洋の服を着ていた。その身なりは傍から見ても完全に放浪者そのものである。

そんな男は笑っていた。ただ、笑っていた。

「ハハハ……。懐かしいですね、この空気」

ゆっくりと悠然とした足取りでその男はより深い闇の中へと進んでいく。

「いやはや、長い事離れていたものです……さて」

急に笑うのを止め、ゆっくりと伏せていた顔を上へあげる。

その顔には怒り、喜び、妬み、屈辱、様々な感情が入り混じっていた。

「返してもらいましょうか。私の大切なモノ……」

そう呟くと男は闇に溶け込むようにふらりと消えた。

幻想郷にまたしても何かが起ころうとしていた。

にとりの工房に来るのはいつぶりだっただろう。確か……うん、忘れた。覚えてないや。

だが相変わらずの風景だ。小屋に小川に……ん？

周りを見ていた僕はふと違和感を漂わせる謎の機械？のような物を見つけた。

見た目はまさしく某シユワちゃん映画に出てくる人型ロボット。

はっ!?もしかして幻想郷にスカイ○ットがやって来たのか!?

「……ってそんな訳あるかい」

と軽く一人ノリツツコミをした所で小屋の扉の前に立ちコンコンとノックする。

「はいはい」

ガラガラと扉が開き、頭に皿を載せていない自称河童が現れた。本人曰く皿なんかた

だの飾りらしい。

「お久しぶりです、にとりさん」

「おお!誰かと思つたら片倉か!元気にしてるかい?」

「ええ、まあそれなりに元気にしてました」

「そうかいそうかい。そりや良かったよ。で、どうしたんだい?義手の修理かな?」

「いえいえ。射命丸さんが何処にいるのか聞きたくて」

「ああ文なら丁度ここで山の見張りをサボりに来てるとこだよ」

おお、良かった。僕の予想は当たっていたらしい。

「ほら上がりなよ。ここで話すのもあれだしさ」

「お邪魔します」

相変わらず凄い家だ。どこもかしこも機械の部品だらけだ。

狭い廊下を進み、居間へ入ると新聞記者がぐつたりとした様子でご自慢のメモ帳と睨めっこしていた。

どうせまた深刻なネタ不足に陥っているのだろう。今の射命丸さんの顔は締切間近の漫画家と同じような絶望した顔をしている。

正直見ていると面白い。本人には怒られるだろうが……。

「文、片倉が来たよ」

「へえーそうなんですか……」

「こんにちは射命丸さん」

「へえーそうなんですか……」

「またネタ不足ですか？」

「へえーそうなんですか……」

「にとりさん、いったいこれは……」

「さつきからコイツこの調子なんだよ。なんか『もう駄目だ、おしまいだ……』とか言つてさ」

いったい彼女に何があつたのかは知らないが（というか知りたくない）まずはこの人のやる気を引き起こすことから始めないと。

「射命丸さん？」

「へえーそんなんですか……」

「射命丸さんにとつておきのネタを持つてきましたよー？もうそれはそれはビッグなネタですよー？」

「へえーそんな……何ですと!？」

「うお!?!急に元氣取り戻しましたよこの人!?!」

「あつ、片倉さん。お久しぶりですね。そんな事をよりも、早く私にそのビッグなネタとやらを下さい!というか渡せ!渡してください!渡しやがれえええ!」

血に飢えた獣よろしくネタに飢えた新聞記者が、血走つた眼をこちらに向けながら迫り来る。

その光景、まさに修羅のよう。怖すぎて泣きそう何ですけど……。

というか挨拶よりもネタ優先つて……。清く正しい射命丸の看板はどこへ行つたどこへ。

「まーまー落ち着け文。片倉がひいてるよ?」

ネタはおろか危うく命をも奪われそうになる寸前で、にとりが暴走した彼女を止めてくれた。ナイスインターセプト! 助かった〜……。

「はっ!?! 私はいったい何を……」

「あつ、やつと正気に戻った」

「すいません片倉さん。私とした事がつい取り乱してしまいました」

「いやいや、大丈夫……」

「それはそれとして、早くそのネタを教えてください!お願いします、なんでもしますからー!」

やっぱりネタが優先なんだね……。

素面でこれなのだから僕はもはや何も言えない。

というか、今なんでもしますって言ったよね?

「えっ!?!何でもしてくれるんですか!?!」

「いえ、なんでもするとは言ってません」

「あつ、ハイ」

ですよね〜。

そろそろ本題に入ると言わんばかりに、わざとらしく「ゴホン」と咳き込む射命丸。

「さて、おふぎはこの辺で……」

「そうだね。それでネタの事なんだけど、最近この幻想郷に怪しい奴が潜んでいるらしい」

ネタの内容は明らかな嘘だ。いや、正しくは嘘というよりは僕の個人的な考えによるデマだ。

「怪しい奴……と言いますと？ 具体的にどんな？」

「うーん、あんまり分からないけど、なんでも呪いを人にかけるとかなんとか……」

「はあ……呪いですか」

うんうんと頷きながら射命丸はいつも愛用しているメモ帳にその情報を素早く書き込んでいく。

「現れる場所や時間とかは分かりますか？」

「場所は分からないけど、少し前から幻想郷に現れたのは確かだね」

なぜわざわざ射命丸にこんなデマを流すのか。答えは簡単。射命丸がこの幻想郷で僕に呪いをかけた犯人を見つけただせる可能性が高いと踏んだからだ。

射命丸は新聞記者であり、この世界の地理や人間（この場合は妖怪か？）関係に詳しい。

恐らく新規の妖怪がこの世界に現れたらすぐさま把握するだろう。

それに、情報収集能力は誰よりも高いし、信頼もできる。

だがそんな彼女にも、僕が呪いにかかっています、助けてください。なんて事は言えないし、言いたくない。

誰にも心配はかけないと心に決めているからだ。

「ふむふむ……。まあ少し難解な人もとい妖怪探しですね。これは面倒です」

「そうだよね……」

「しかし、逆にその方が私的には燃えてくるというものです！片倉さん、貴重なネタをありがとございます！この射命丸、その怪しい奴とやら必ず見つけだしますね！」

意気揚々と自信ありげに胸を張る射命丸。これは期待できそうだ。

やはりこの人に頼んで正解だったな。

「見つけたら僕にも教えてください」

「本当は企業秘密やらプライバシー云々やらでお断りしたい所ですが、何よりも片倉さんの頼みです。分かりました！風よりも早く教えに行きますね！」

さらりと清く正しいという看板を投げ捨てる辺り、相変わらずの射命丸さんだ、と思う。まあ今に始まったことではないか……。

「それじゃ私はこの辺で。ああ、素晴らしいスクープが私を待っています！」

「いや待て文、山の見張り番はどうするのか」

「いざ、出陣！」

「人の話を聞けええええ！」

しかし、いまの射命丸にはにとりの言葉なぞ耳に届くわけもなく、瞬く間に空の彼方遠い方へと飛んでいった。まさに風のように。

「まっ、いつか」

いいのかよ!?と突っ込みたくなる気持ちを抑えつつ、僕もそろそろお暇することにした。

「じゃあ僕も行きますね。お邪魔しました」

「はいはい、また来てねー。文も片倉みたいに礼儀正しくしてほしいものだよ」

呆れた顔で周りを見渡すにとり。そこには文が飛び立つ際に起こった突風で散らばったであろう、たくさんの部品やら何やらの数々。

それを見た僕も思わず苦々しく笑う。

「そ、そうですね……アハハ……」

後片付けを手伝ったのは言うまでもなかった。

ああ、疲れた。というか肩が痛いし腰も痛い。

時刻は昼過ぎ。この時間の人里は特に賑やかで、あちらこちらから色んな声が聞こえる。

子供のはしゃぐ声、近所同士の楽しい会話、客を呼ぶ店主の大声など様々だ。

「腹減ったな……」

ふと思いついた瞬間に、猛烈に空腹が襲いかかってきた。

何か食べようと懐を漁る……が、財布らしき物がない。どうやら紅魔館に忘れてきたらしい。

「ぐあ、マジか……。笑えん……」

このまま帰るのも何だか物足りない気がして嫌だ。かといってこのままだと腹が減りすぎて死にそう（我慢は出来るのだが、気分的に死ぬ）

どうするべきか。

1人葛藤している最中、1人の知り合いが目の前に現れた。

「あら？片倉じゃない。何してるのよこんな所で」

「おお。アリスさん」

人形大好き魔法使いのアリスだった。

と手に持つ籠に目が向いた。……どうやら食材を調達した帰りらしい。

ネギのような物が籠から飛び出ている。

……そうだ!

そこでフツといい考えが思い浮かんだ。

「……何か悪い事考えてない?」

「ほえ? いやいや、そんな事は無いですよ?」

「……」

じーつとこちらを見つめるアリス。恐らく何かを察したのだろう。いやはや、察しのよろしいようで。

暫く沈黙が続く。しかしこれでは埒が明かないし時間の無駄なので、そろそろ言い出すことにする。

「お腹すきました。ご飯作ってください」

「……は?」

呆れた顔と共に呆れた声が彼女の口から零れた。

そう、無銭飲食だ。店で食べられないなら、知り合いに作ってもらえばいいじゃない。これが僕の思いついた最良の考え。

だがもちろん、そんな我が儘通るはずも無く……。

「ん〜まあいいわ。軽い食事くらいならご馳走するわよ」

「ですよね〜。そう簡単に作ってくれるわけ……ってはい!」

そんな我が儘が通りました。

あまりにもあつさりと許可してくれたもんだから、声が裏返ってしまった。

「な、なによ……。そんなに驚く必要ないじゃない」

「いやいやいや、いつものアリスさんなら蔑むような目で『は？嫌よ』って言うはずですよん」

「私はそんな冷血な女じゃ無いわよ！」

「おお怖い怖い。華奢な腕を振り上げてお怒りになるアリス。」

「ええ〜？本当ですか〜？前に来た時は門前払いしたような気が……」

「う、うるさい！あの時は色々と忙しかっただけよ！」

そろそろ怒られそうなのでからかうのはこれ位にしておこう。人形に殴られると痛いからね。

「まあせっかくなんで喜んでお邪魔します」

「せっかくも何もお邪魔する気満々だったくせに……」

やや呆れた口調のその言葉をあえて聞き流しながら、僕は意気揚々とアリスの自宅へと向かったのだった。

「はいどうぞ」

そう言われてテーブルの上に一皿、豪快に煮込みハンバーグが置かれる。籠から飛び出ていたネギはどうしたんだ……まあいいか。

見るからにコクのありそうなソース、ふつくらジューシーハンバーグ。ああ、早く食べたい。

料理を運んでいるのはアリスではなく、アリスが操る人形達である。

時には雑用、時には戦闘と、様々な用途に使われるこの人形。果たしてどうやって作ってるのだろうか？ふと謎に思った。

が、目の前の美味しそうな料理を見た瞬間、そんな事などどうでもよくなった。

「いただきますー！」

迷いなく美味しそうな匂いを漂わせる煮込みハンバーグを攻略する。

ナイフとフォークを紳士らしく、丁寧に使い、そして……

「そんなにがつつかなくても、誰も食べないわよ」

「おいひくて、ほまりませんー！」

「食べるか喋るかどっちかにしなさいよ……」

紳士らしくとは程遠い、大食い選手権の如く、ひたすら食べる食べる食べる。

デミグラスソースのコクとハンバーグのジューシーさをひたすら噛み締めていたら、

ぺろりと平らげてしまった。

少し物足りない気もするが、時間的にお腹いっぱい食べると夜ご飯に影響してきそうなので、おかわりはやめておいた。

「ふう……。ご馳走様でしたアリスさん」

「はい、どうもありがとうございます。いい食べっぷりだったわ」

人形に皿を片付けさせながらニツコリと微笑むアリス。

その素敵な笑顔に思わず顔がにやけてしまう。いかんいかん……落ち着け、下手したら追い出されるぞ。

「ん？どうかした？」

「い、いやいや、何でもありませんよ？大丈夫ですよ？ハンバーグ美味しかったですよ？」

「そう、それは良かったわ。ありがとうございます」

あらかた一段落した胃袋に満足している僕の目の前に、すつとコーヒーが置かれる。

「食後のコーヒーもどうぞ」

「おお……」

普段では有り得ないアリスの優しい気遣いに思わず感動。いやあ、幻想郷最高。幻想

郷万歳！

「あつ……でも幻想郷から居なくなるんだ……」

「幻想郷がなに?どうしたの?」

しまった。思わず口が滑った。

幸い、ボソツと言ったので全容は聞かれてはいない。が、上手く話を反らせるほど僕の話術は高い訳では無い。

「いや、もしもですよ?僕が幻想郷に出ていたらどうなるのかなって。アリスさんはどう思います?」

なので、このように美鈴の時と同様、はぐらかして話すしかない。

しかし、アリスの反応は美鈴とは全く逆の反応であった。

「んゝまあ、私は出ていってもいいと思うわよ」

「へっ?」

「そもそもあなたは外の世界の住人。外へ帰るのを拒む理由なんて無いもの」

「そ、そうですか……」

少し重い沈黙が場を支配する。

その空気に耐えかねてアリスが目を伏せ、手元にある人形の整備を始めた。

そして、ボソボソと声を発した。

「……ま、まあ、私的には居て欲しいのだけど……。あなたと居ると楽しいし、外の世界の話は貴重だか……ら?」

ふと顔を上げたアリス。

そこには既に片倉の姿は無い。

一瞬思考が止まる。ふとテーブルの上に紙切れが1枚置いてあった。

『ご馳走様でした。美味しかったです』

内容を見たアリスは苦い顔をして呟いた。

「……もしかして私、余計な事言っちゃったかしら？」

アリスは余計な事を言ってしまったのであった。

沐猴にして冠す

アリスの家を出た僕は、この先の予定が全くないので、のんびりと紅魔館に帰っていった。

無計画ここに極まれりである。

ボーツと歩きながらも、頭の中は未だにアリスの言った言葉でいっぱいだった。

「……………出ていってもいい、か……………」

確かにアリスからしたら僕はなんて事無い外の世界から来た人間。

魔女として生きる彼女は人間の事に構う必要はない。

もちろんそれは分かっているつもりなのだが、いざ言われると少し……………虚しい。

僕にとつては命の恩人でもあり、幻想郷で最初に出来た知り合いだ。

別に恋心を抱いてはいない。ただ、良き友人として、この言葉は虚しかった。

そうこうしている内に、気がつけば紅魔館に辿り着いていた。

あれから3日経った。残りの期限はあと4日。

未だに僕の心は揺らいでいた。

「失礼します」

居室のドアの向かいから、透き通る声が聞こえた。

「どうぞ」

ガチャツとドアが開かれ、メイド長こと咲夜さんが入ってきた。

珍しい。いつもなら時間を止めて急に現れるのに……。

「どうしたんです？」

「お手紙が届いておりましたので、お届けに」

「ああ、これはどうも。どれどれ……」

手渡された手紙の送り主は……文さんだった。

「では失礼します」

「わざわざありがとうございます」

「いえそれほどでも。ところで片倉様」

「ん？どうしたの？」

「最近、元気がありませんが……」

「そ、そう？自分では元気なつもりなんだけど……」

「そうでしたか。どうやら私の勘違いのようでしたね。それでは失礼します」

優雅な動きでくるりと背を向け退出するメイド長。

如何にも男ウケしそうなフリフリなメイド服を身に付けつつ、威厳を損なわないその雰囲気にはいつもながら感心する。

その姿に何を感じたのか、僕は何故か彼女を呼び止めた。

「あつ、ちよつと待って」

「どうかなされましたか？」

「もし、もしも僕がこの世界から出ていくって言ったらどうしますか？」

咲夜さんに真剣な話を持ちかけたのは、今までここで過ごしてきて初めてかもしれない。

それ程までに僕は切羽詰まっており、かつ、紅魔館のメイド長である彼女を信頼していたのかもしれない。

唐突な話に少し困惑しつつも、いつもの冷静沈着な面持ちで咲夜さんは答えた。

「そうですね……。私には何も答えることが出来ない質問ですね。この世界に留まるか否かは片倉様が決めるべき事であり、紅魔館のメイドでしかない私にはどうこう言えません。貴方様の人生を保証する力もありませんし」

「そうだよね……。やっぱり他人の答えで考えるとかじゃなくて、自分で決めなきゃね……。うん、ありがとう」

「お役に立てず申し訳ありません。それでは失礼します」

ドアノブに手をかけたその時、珍しく咲夜さんが咳払いをした。

「それとこれは独り言ですが、私、十六夜咲夜という人間の個人的な答えとしては、片倉様には是非ともこの紅魔館に居続けて頂きたいと思っております。妹様をなだめることが出来るのは貴方とお嬢様だけですし、何より貴方が居るだけで紅魔館は非常に賑やかです……」

少しばかり長い独り言を呟くと、彼女はすぐさま部屋を後にした。

ほんの少しの間、部屋の中には静寂が訪れ、すぐさまその静寂は僕の控えめの笑い声でかき消された。

「ハハッ……そう言われると、ますます決められないじゃん」

何だかどうでもいい気分になった僕は、思い切りベッドに大の字で倒れ込む。

……。

……………。

気持ちのいい眠気が襲ってきたその時、

「あっ!?!手紙!」

すつかり大事な事を忘れていた。というか寝ようとするあたり呑気すぎるだろ僕

……。

残された時間は短いのだ。こんなものんびりしている暇など無い。

飛び跳ねるようにベッドから起き上がり、テーブルの上に置かれた手紙を手取る。

裏には「射命丸文」と達筆に書かれてあった。

「どれどれ」

手紙の内容に目を通す。

……ふむふむ、どうやら先日頼んだ以来の結果報告のようだ。

「……!?」

どうやら不審な人物に関する噂を手に入れたらしい。

まさか本当にそんな奴が居たとは……。

しかし手紙にはもっと驚く事が書かれていた。

『姿を現し出した時期については、紅魔館が異変を起こした時期とほぼ同時期である。また出現地域は、魔法の森近くがもつとも多いとの事。以上が依頼された妖怪探しの報告です』

紅魔館が異変を起こした時期、つまり僕がこの世界に来て少し経ったくらいだ。

魔法の森に関しては、アリスの家が思い当たる。

つまり……コイツだ。コイツこそが犯人だ。

——いや、決めつけるにはまだ早い……か。現にそんな奴を僕は見た事は無いし、面

識すらない。

だが、貴重な手がかりには違いない。とりあえずその不審な人物に接触するのが一番だ。……ん？

ふと、手紙の中にもう一枚小さな紙が入っていることに気がついた。

「……………これは？」

それは手書きの地図だった。しかもごく丁寧に分かりやすく描いてある。

地図の真ん中には黒く丸印が付けられてある。恐らくここが件の人物の潜伏予想場所だろう。

印の場所は人里と魔法の森の間に位置していた。森の中はまだしも、人里近くとはよくもまあ、こんな所に隠れていたものだ。

「やっ……………」

ちらり、と壁に掛けてある振り子時計に目をやる。

時刻は午後の3時を少し過ぎたあたり。

目的の場所に着く頃には夕方になるだろう。と言うことは帰る頃には日が落ちる。

夜の森は恐ろしい。それは言わずもがな承知している。

だが、今は時間が惜しい。僕自身の時間も刻一刻と近づいているのだから。

クローゼットを開け、いそいそと着替え始めた。

森の中なのだから、甚平姿のままという訳にもいかない。それに、戦いが無い訳ではないし。

という訳で、最近すっかりご無沙汰であった装備一式を装着する事にした。

魔力が使えるようになってから最近使ってなかったプレートキャリアを付ける。

ズシリとした重みを感じながら、どこか懐かしい気分を感じた。

ほとんど重量の無い魔力の鎧もいいが、やはり僕はこつちの方がしように合っている。

右手に付けた魔法のリング（ブラウ・フェーダ）から、カラシニコフを具現化させ取り出す。

……でも、これはこれで魔法の力も悪くないな。武器がかさばらないし。

「……か、片倉さん、その格好どうしたんですか？」

「ん？」

門で珍しく居眠りせず見張っていた美鈴に苦笑いで聞かれた。

ああ、そうか。この格好（傭兵時代のフル装備）を見たことあるのはアリスだけだったか？野良の妖怪に襲われたあと、全然付けずに置いてたし。

多分美鈴からしたら、今の僕の格好はなかなか奇天烈なものに見えるだろう。体格に似合わないほどの沢山の重量物をこれでもかと付けているのだから。

歩く度にガチャガチャ装備の当たる音が聞こえるし、もしかしたらロボットに見えて
いるかも。

「ちよつと野暮用で……テヘッ」

「いや、野暮用でこんな格好する人は居ないでしょ……。と言うか野暮用ってなんですか？」

「いやなに、森の方でちよつと人に会いに行くだけだよ。森の中物騒だし、武装してた方が安全かなと」

「そ、そうですか。まあ深くは聞きませんが……。ところで、それ重くないんですか？」
「大丈夫大丈夫。15kg位しかないから」

「いや、その体格で15kgはキツイですよ、普通は……」

実際これよりもつと重いもの背負って歩く事もあったし、余裕なんだけどなあ。

「まあ、片倉さんですから大丈夫だとは思いますが。けど、気をつけてお出かけしてくださいね」

「はいはい」

元氣よく手を振りながらお見送りする美鈴を尻目に、目的の場所目指し森へ入って

く。

ガチャガチャと小さく響く音を鳴らしながら。……ちよつとうるさすぎたか？まあいいか。

最終之章 悪魔邂逅

紅魔館を出発して2時間は経つただろうか？

僕は森の中をひたすら歩いていった。

普段は飛んで移動していたからか、少し疲れてきた。うーむ……装備を少し減らすべきだったか？

できるだけ軽くするために、カラシニコフとバックパックだけはリングに収納しているものの、装具の重さは15kg。

休憩という休憩無しに2時間ぶっ続けで歩くのは、少し無謀すぎたか？

「そろそろ休憩するか」と考えていたら、ふと緑ばかりの視界が一気に開けた。

森の中の開けた場所には、1件の寂れた洋風の家が建っていた。

大きさはアリスの家とさほど変わらない。が、誰かが住んでいる気配は無い。

というかなんだらう。この場所前に来たことがあるような……。気のせいか？

とりあえず地図を取り出し確認。コンパスを使い今いる場所を特定する。

どうやら印の場所はここらしい。というか、こんなに怪しい場所以外考えられない。

リングからカラシニコフを取り出し、マガジンを装填。槓杆を引きつつ、恐る恐る警戒しながらゆっくりと家に近づく。

朽ち果てた木のドアに手を当てゆっくりと音がならないように開ける。しかし、本来の動きをすることは無く、朽ち果てたドアは前にバタンと大きな音を立てて倒れてしまった。……蝶番が錆びて壊れてたか。

音を立てないように周りに気を配りながら、家を調査する。

床には食器等が散乱していた。なにか争いでも起こったのか？それに血痕もある。

妖怪の仕業なのか、はたまた人間の仕業なのか。こればかりは分からなかった。

ただ、なにか良くない出来事があったことは分かる。

ふと、棚の上に置いてあった写真立てが目に入った。

なんとなく吸い込まれるように、その写真を見る。

写っていたのは、美しい女性と、その女性と手を繋ぐ小さな子供だった。親子の写真なのだろう。

しかし、その写真に妙な違和感を僕は感じた。……この子供って僕自身!?

そう。写真の子供と僕の子供の頃の顔が酷似している。いやもはや、一致していると言っても過言ではない。

だがそんなはずはない。第一、僕はこの女性を知らないし、この世界に住んでいた記

憶なんてこれっぽっちも無い。有り得ないのだ。

信じられない事象に困惑していたその時、ふと後ろから鋭い殺気のようなものを感じ、思わず横に飛び跳ねるように移動し背後に拳銃を突き立てた。

その刹那、先程まで立っていた場所に刃物のような傷が深く刻み込まれた。

「誰だ!？」

「おやおや……。今のを避けるとは、なんと鋭い人間でしょうか」

突き立てた銃口の先には、薄気味悪い笑みを浮かべ一人の男が立っていた。——右手には黒く大きな鎌を握って。

どうやら穏便に話し合うつもりは端から無いらしい。

睨みつけながら、もう一度問いかける。

「お前は誰だ?」

「私ですか? ああ、そうですねえ……」

相変わらずずい味の悪い笑い顔をしながら、ゆらりと動き出し——唐突に持っていた鎌で切りつけてきた。

すぐさま後ろに退いたが、緩急のある動きに少し対応が遅れ、左頬を鋭い刃が掠めた。

「悪魔? と言うべきですかね? あなた方からしたら」

「悪魔だつて?」

この男曰く、正体は悪魔らしい。しかし、僕の想像した悪魔はもつとこう、紫色で羽が生えて尻尾があるイメージなのだが……。

だが、男はタキシードのような紳士的な服を身につけ、右手に格好とは不釣り合いな鎌を持っている。顔はいかにも人間だ。どちらかと言うと、死神と言われた方がまだ納得いく。

そんな死神もどきな悪魔は、笑うのを止め、無表情でこう言った。

「ま、知ったところで、あなたはここで死んでもらいますがね」

「面白いこと言うね。だけど、それはお断りだ」

そう言いながら、僕は手にしていたFN57の引き金を立て続けに3回引く。

乾いた大きな爆発音と共に弾丸が奴の体に痛々しい穴を穿つ……ことは無かった。

「!？」

「無駄ですよ無駄。そんなものでは魔力の壁は破れない」

弾丸は奴の目の前でペシャンコに潰れ、地面に落ちていた。

魔力の壁だと？この悪魔、魔法を使えるのか!？」

だからなんだと言うのだ。僕はリングからカラシニコフを取り出し、槓杆を引き照準を合わせる。

「ほう……。なかなか面白い道具を沢山お持ちのようで」

「そりやどうも」

安全装置を解除しフルオートにセット。そのまま引き金を引く。

先程よりも沢山の弾丸が奴の身体に向かって飛んでいく。だが、1発たりとも命中する事は無かった。

「マジですかい……」

驚く間も無く、気がつけば奴が目の前まで距離を詰めていた。右手の黒く鋭い鎌を光らせて。

「ヤバッ!？」

何とか鎌による攻撃は避けたものの、後続に放たれた蹴りは防げず、もろに喰らう。

朽ちて脆くなった家の壁を突き破り、外まで吹き飛び地面を転がる。

何とか受け身をしてダメージを最小限に留めつつ、すぐさま起き上がる。……プレートあつて良かった。それ程痛くない。

しかしこれは困った。頼みの綱の銃が全く意味をなさないと……。

それにアイツ、鎌の扱いはもちろん、体術の方もかなりの使い手だ。ナイフを使うとしても、これじゃ圧倒的に不利なのは明確だ。

『お困りのようだな?』

出たよ。最近もつぱら出てこないと思つたら今出てきたか。

『俺と交代するかい？アイツの魔力の壁だったら、俺の魔力ですぐ突破出来る』
確かにその通りだ。

眼には眼を歯には歯を、魔力には魔力を。これならばいけるだろう。

だが……それは駄目だ。

『な、何でだよ!?このままだとお前、いつかはやられちまうぞー!』

それは分かっている。だけど、今ここでクロを呼び出すわけにはいかない。なぜなら

……

「おや?この感じ……そうかそういう事か」

なにかに気づいた奴は、何故か突然笑い出した。

「お前、あの時の奴か。なるほどなるほど」

「いったい何の話をしている?」

「何も知らないとは……これまた。だが、流石に私がかけた術くらい知ってはいるで

しょう?」

「んなつ?!……やっぱりお前の仕業か!」

「なるほど。魔力を使わないあたり、薄々気づいてはいましたか」

そう、僕はあの永遠亭以来、この呪いによる発作が起こる原因に気づいていた。その

原因とは――

「魔力を使えば使うほど死に近づいていく……」
そういう事だ。